ISBN978-4-909866-01-1

岩國大佐ハノイ日記

1944年12月29日－1946年5月3日

岩國泰彦

高崎禎夫・菊池陽子 編

SEPTO NAUTIQUE
JARDIN
BOTANIQUE
CITADELLE
Avenue Honoré Tissot
Avenue Paul Doumer
Boulevard Gambetta
Boulevard Carnot
Boulevard Bouddha
Avenue Giovaninetti
Rue Pasquier
Rue Jambert
Rue Emile Nolly
Rue Leblanc
Rue du Cuivre
Rue des Fonderies
Rue des Tissus
Rue des Fourrures
Rue des Cordonniers
Rue des Chaudronniers
Rue des Ferblantiers
Rue des Pipes
Rue des Paniers
Rue des Nattes
Rue des Voiles
Rue des Cercles
Rue des Ventilateurs
Rue des Vieux Marchés
Rue des Tasses
Rue des Etoffes
Rue des Papiers
Rue des Poissons
Rue des Forgerons
Rue des Vermicelles
Rue des Hôpitaux
Rue des Ecoles
Rue des Grains
Rue des Bambous
Rue des Bouteilles
Rue des Bambous
Rue des Cercles
Rue des Ventilateurs
Rue des Vieux Marchés
Rue des Tasses
Rue des Etoffes
Rue des Papiers
Rue des Poissons
Rue des Forgerons
Rue des Vermicelles
Rue des Hôpitaux
Rue des Ecoles
Rue des Grains
Rue des Bambous
Rue des Bouteilles
Rue des Fourrures
Rue des Cordonniers
Rue des Chaudronniers
Rue des Ferblantiers
Rue des Pipes
Rue des Paniers
Rue des Nattes
Rue des Voiles

岩國泰彦 著
高崎禎夫・菊池陽子 編

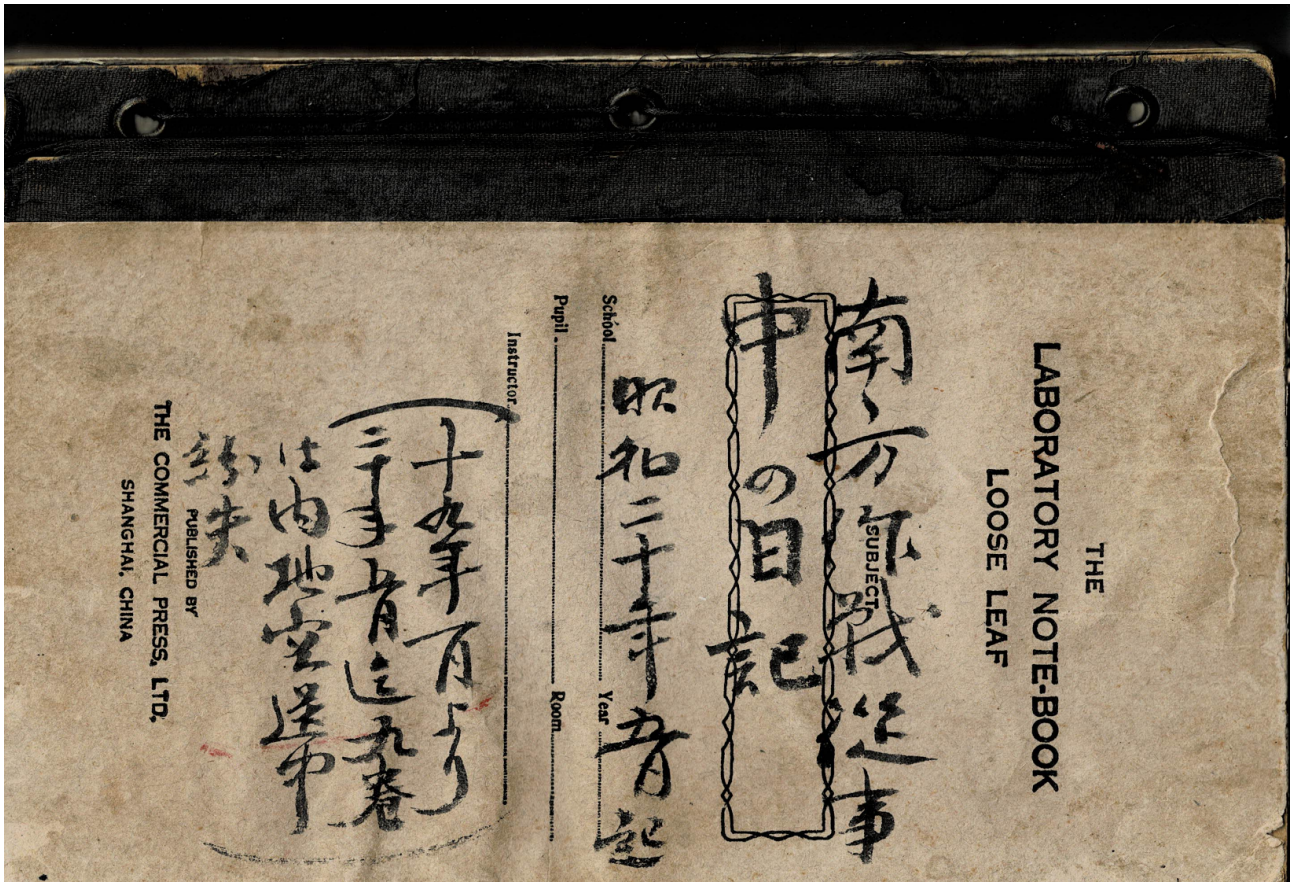
岩國大佐ハノイ日記

1944年12月29日～1946年5月3日

IGAS

東京外国語大学海外事情研究所
2021年

岩國泰彦氏　1941年7月7日撮影
（岩國敬子氏提供）



「南方作戦従事中の日記」表紙

目　次

岩國泰彦氏写真 …… 2

日記表紙 …… 3

関連地図 …… 7

はじめに …… 9

凡例 …… 11

1944年 …… 13

1945年 …… 15

1946年 …… 191

参考文献 …… 235

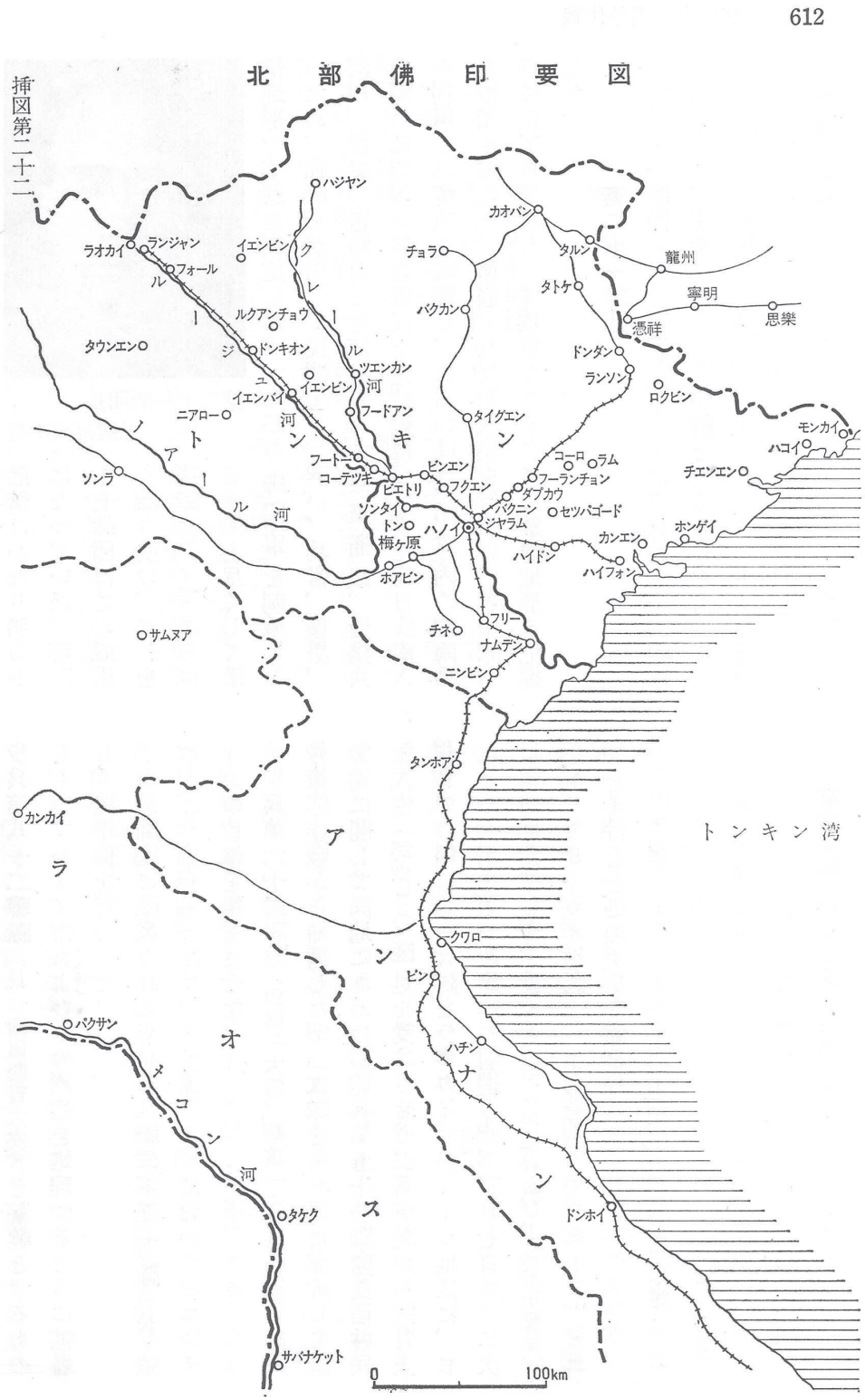
索引 …… 237

編者紹介 …… 245

仏領インドシナ（1945 年）

戦史叢書『シッタン・明号作戦』（p. 605）より作成
（地名は本日記で使用されている表記とした）

仏領インドシナ北部（1945 年）



出典：戦史叢書『シッタン・明号作戦』挿図第二十二（p.612）

はじめに

岩國泰彦氏（1902～49年）は兵庫県に生まれ、1920年、名古屋陸軍幼年学校を卒業（第21期）、1924年、陸軍士官学校を卒業（第36期）、1932年、陸軍大学校に入学（第47期）し、1935年に卒業、1944年1月21日に、当時仏印（仏領インドシナ）と呼ばれていた現在のベトナム、サイゴンに着任した。1944年12月20日、印度支那駐屯軍が第38軍に改編されると、第38軍高級参謀として1945年2月1日にハノイに移った。

岩國氏は名古屋幼年学校時代から日記をつけており、その日記はダンボール箱数箱に及ぶ。現在、ご遺族の岩國敬子氏が保管している。サイゴンに着任した1944年1月以降、『日記　其一』『日記　其二』……と、1945年5月までに日記は9冊に及んだ。しかし、そのうちの8冊は、日本に送った際に紛失してしまい、現在、『日記　其九』のみが保管されている。『日記　其九』は、1944年12月29日の途中から始まり、1945年5月13日で終わっている。その後、1945年5月13日から1946年4月13日までが1冊にまとめられており、岩國氏本人によって、『南方作戦従事中の日記』と題名がつけられている。戦後、日本に復員してから、この時期の日記をまとめて、本人が題名をつけたと考えられる。1946年4月10日から同年9月15日の日記は『日記－復員生活　第一号』と題名がつけられ、まとめられている。

本書は、岩國氏が書き記した日記のうち、仏印にいた1944年12月29日から日本に復員した1946年5月3日までの日記を採録した。主として、第38軍高級参謀としてハノイで勤務をしていた時期であるため、編者の高崎禎夫が本書を『岩國大佐ハノイ日記』と題することに決めた。岩國氏は、日本に復員後、日記を読み返したようで、赤線を引いたり、戦後の所感を書き加えたりしている箇所がある。本書においては、戦後に書き加えたと思われる赤線を引いてある箇所には赤線を引き、線を引いて削除してある箇所には、見え消し線を引いた。戦後に書き加えたと思われる箇所は、そのことがわかるように採録した。

岩國氏は、この日記を子孫へ残すことのできる財産と考えて書き記していたようであり、後世の子孫に読まれ、何を考え、どのように生きてきた人物であるのかを理解してもらうことを意識して書いていたと思われる。したがって、岩國氏の個人的な見解、感想、自己洞察などが随所で語られている。それと同時に、岩國氏が生きていた時と場所、アジア太平洋戦争末期の仏印（ハノイ）における日本軍の状況、日本軍人から見た仏印の状況等をうかがい知ることができる。明号作戦、連合軍によるハノイ空襲の様子、軍人の眼から見た「1945年ベトナム大飢饉」の様相、敗戦後の中国軍や米軍との関係、復員の状況、他の史資料でほとんど言及されていないラオスの道路建設視察等である。読者の関心によって、様々な視点、角度から読むことができる。岩國氏の個人的な見解や表現に関しては読者によって賛否両論あるであろうが、史料が極めて限られているこの時期の仏印に関する同時代史料としての価値は高いと考える。

原文のかなり難解な手書き文字を判読して入力したのは高崎である。高崎は、岩國氏ご長男の故辰彦氏と広島陸軍幼年学校の同窓生で、この日記の存在を知り、判読、入力作業をはじめた。原文との相違がないかどうかの確認作業は菊池が担当した。脚注は高崎と菊池で担当した。原文との一致には注意を払い、脚注にも誤りがないように努めたが、まだ不十分な点、不備や誤りが散見されるであろうと思う。その責任は菊池にある。

本書が公開の運びとなったのは、東京外国語大学海外事情研究所のご協力による。香坂直樹さんをはじめとする教務補佐の方々の丁寧なお仕事がなければ、こうした形での公開は無理であった。防衛省防衛研究所の立川京一先生、北海道大学の湯山英子先生にはベトナムの地名や当時の軍の状況についてご教示をいただいた。東京外国語大学の野平宗弘先生にはベトナム語に関してご教示をいただいた。東京外国語大学非常勤講師の山崎美保先生には、編集作業を手伝っていただいた。ここに感謝申し上げます。

最後になりましたが、本書の公開を快く了承し多大なご協力を賜った岩國敬子氏（故辰彦氏夫人）、岩國貞彦氏、岩國信彦氏をはじめ、ご遺族の皆様方に心よりお礼申し上げます。

2021年6月

編者　高崎　禎夫

菊池　陽子

凡　例

- 著者岩國泰彦氏の1944年12月29日（途中）〜1946年5月3日までの日記を採録した。
  （日記の書かれていない日、天候の記載のない日がある）
- 原文は縦書であるが、編集の都合上、横書きにした。
- 仮名遣い、送り仮名は原文のままとした。
- 漢字は、著者岩國氏の國を除き、常用漢字に統一した。
- 読みにくい漢字、当時の地名の漢字表記には適宜、ひらがなでルビを振った。カタカナで振られているルビは原文で振られているルビである。
- 地名や人名の表記は原文のままとした。ただし、わかりにくい箇所には［　］で、現在一般的に使用されている表記や地名を入れた。
- 誤記と思われる熟語や漢字もあるが、原文のままとした。原文のままであることがわかりにくい箇所には〔ママ〕と入れた。
- ［　］に入れた箇所は編者が補った部分である。
- 読者の便宜を図り、人物や事項に適宜、脚注を加えた。
- 個人情報がそのまま書かれている部分は□□とした。
- 判読不能な文字は■とした。
- 原文には句読点がないが、読みやすさのため、適宜、句読点を入れ、また、改行もした。
- 記述の一部に今日の視点や社会通念からすれば差別的な表現があるが、当時の社会的環境の下で記された一次史料であることに鑑み、原文のままとした。

1944年（昭和19年）

十二月

十二月二十九日

は把握し得ないのだ。何時かも感じた通り国家の風教世論にも大影響ある大物の尋問検挙の経験ある林憲兵中佐[1]が毎日勅諭を奉読する心境も之れだ。判断処決を国体的に謬らず中正の道を踏まんとする意慾は勅諭の奉読に依り大御心と一体化し処置を謬らざらんとするのである。

次に物の観察真相の把握は観察点の選定を適切にせよと云ふ事だ。途中の水の流れを見ても水量の測定は六つかしく、或る堰に於て測定せねばならぬと同様、政治の良否を研究するのに内閣の方針や施政要綱や声明を見ても駄目だ。国民の日常の生活状態が如何になってゐるかが政治の良否を判定する最も簡単明瞭な観察点である。軍隊の指揮官隊長の統率方針や教育計画や状況報告を見た所で、真の統率や軍隊が把握出来るものでない。個々の兵卒の起居生活挙措が如何になってゐるか、事実に於て之を観察すべきである。兵の残飯の多い所や患者の多い所に健兵施策が十分行はれて居ると云ふ事は出来ない。仏印を把握せんとすれば安南人個々の生活そのものを現実

[1] 林秀澄（1902-1992）1944年12月、印度支那駐屯軍が第38軍に改編されると、第38軍司令部、1945年6月、憲兵大佐、第38軍参謀（『日本陸海軍総合事典』pp.128-129）。

に握る事が根本であって、逆に此の如き現状であるのは何故かを遡って研究する事に依り、仏印が研究出来るのである。土橋軍司令官[2]が軍隊を視察せらるる時に将校と兵隊とを直接観察せらるるのは、あながち軍司令官の顔を見せると云ふ見地でないであらう。矢張り将校の態度、兵の顔色態度健康に依って軍隊の全部、隊長の統率訓練の程度がわかるものである。

林中佐は大谷句仏氏や中野正剛氏、佐藤鉄馬氏等名士とか相当社会的地位ある人を取調べたが、皆信頼して中には涙を流し生き仏の様に感謝した者もあると云ふ。其の「コツ」は真実性であると林中佐は聴取書を自ら書き、本人に之を見せ加筆修正を許し本人に得心せしめる。此の相手を信頼する態度相手の心情を汲まんとする真実なる林中佐の態度に、相手は全幅の信頼性を発揮するのであらう。

十二月三十日　晴

大本営満足［彰］少佐来り。総軍に於て予等作戦の研究を行ふ。仏印多事と云ふべし。本夕、軍司令官、司令部将校の招宴あり。日本ホテルに古本大佐（同期）を尋ねて帰り寝ぬ。

十二月三十一日　晴

午後、満足少佐等と共に総軍に於て作戦に関する研究。

夕刻、軍司令官邸に於て参謀連相寄り会食す。軍司令官の教訓事項実に面白し。気づかざりし事甚だ多し。教示事項を書きつつ、昭和二十年元旦来る。

[2] 土橋勇逸（つちはしゆういち）（1891-1972）中将　1944年11月、印度支那駐屯軍司令官、同年12月、印度支那駐屯軍が第38軍に改編されると、敗戦まで同司令官（『日本陸海軍総合事典』p.104）。

1945年（昭和20年）

一月

一月一日

我が戦局は決して有利とは云へない。併し昨夜は作戦計画を考へながら寝た。軍人として是程幸福な事があらうか。予は、本年は軍人として御奉公する時だと思って、身の幸運を感謝する。

はかりごと　運(めぐ)らしつ寝る　大晦日

小事は大事なり。小事の集積は大事なる事は人克く之を知る。然れども大事は小事なり。大事は分析して小事に分解し、た易く行ひ之を綜合する事を為す人は少し。

年取って、部下や下僚が寄って来て呉れる嬉しさがわかりかけた気がする。之も年寄りの特異なる心境だ。

「酒は量なし乱に及ばず」と孔子は曰ったが、酒は魔薬だ。之を有利に利用すべきである。正月に酔余の人が色々の逸話を残すのを見て全く斯く感じるのである。

昼食は軍司令官官邸にて行ふ。長岡軍医部長酔う。参謀長官舎に至る。飲む。

夕刻、軍司令官官邸にて飲む。更に参謀長官舎に至る。兵器部長上田少将の官舎を歴訪す。

一月二日

概ね事なし。軍司令官、我等の宿舎に来る。

一月三日

夕刻、軍司令官官邸にて仏軍参謀部招宴。エーメ[3]、ラルシュック、サンジュール、クレール、カスタン、等来る。

一月四日

軍司令官に随行し聖岬[4]に至る。車中二時間半。予の睡眠は全然なく軍司令官の予の教育せらるるを謹で拝聴す。土橋勇逸と云ふ人は味のある人なり。細部事項は予の統帥指揮の参考の巻に記述する事とせり。何れにせよ二時間に亘り談論風発予を鉗鎚(けんつい)せらるる点感謝に堪へざる所なり。

土橋将軍、名を覚える事の早きと地名の覚える事の上手なる。素より記憶力の優良は疑ひ得ざる所なるも、単に記憶力のみに非ず。着眼もよきなり。地名など予め図上にて研究し必要の部分のみに着眼せらる。故に注意力は集中して散漫に事を行はず。予め方針重点を定めて計画的に行はる。例へば秋季演習に於て行動中地図を使用せし事なしと。是、予め宿舎に於て状況を判断し、必要なる地名のみを覚えある為なり。其の範囲は制限せらるる故覚えらるるなり。記憶力と頭の働きとなり。将軍曰く単に語学のみ出来たとて外交使臣になり得るもの［に］あらず。頭と腹と語学の才三拍子揃はざるべからず。語学のみを以て外交の上手に出来ると思ふは間違ひなり。云々。

一月五日　晴

予の本年度末大戦争の作戦行動が終末に達する事の予想は、現実に於ても変化はない。比島方面の決戦は遂にルソン島に波及せんとしてゐる。米の比島奪回作戦は急速である。日本は歯を食ひしばって長期持久戦を遂行するのみ。勝目は何もない。敵の抗戦意識を挫折せしめる辛抱に在るのみだ。

航空地区諸部隊の軍司令官の巡視に立会した。椙山中佐が大本営から来たので話す。勝目がないと云ふ。併し欧州方面、米ソ英仏間の提携はマチマチだ。勝利に酔ふ時に足並みが乱れ出してゐる。第一次世界大戦では危急に際会した時、始めて英米仏は歩調を一にした。今や反対に形勢が有利となれば各国自我を発揮するから歩調が乱れる。非常に苦しい時は神頼みの例とやらで凡有事を我慢するから、兎も角も協同一致の実を発揮するが、形勢が有利となると謙虚になり得ないから、大国は勝手な要求自我的行動に走り易い。今後、英ソ米仏間に真剣の協力歩調の統一を

[3] 戦史叢書では、「軍司令官エメ中将」と記載されている（『戦史叢書　シッタン・明号作戦』pp.627-629）。

[4] カプサンジャック（現在のブンタウ）の漢字表記、フランスの植民地時代にこのように呼ばれた。南シナ海に面した町、サイゴンより約125キロ、保養地として有名（南洋経済研究所 p.34）。

発揮し難き事、火を見るより明かだ。日独は時間を友とし連合国側の歩調の乱れを待つ事、之が今後の作戦、否戦争遂行方針でなくてはならない。七年戦争のプロシャと同一の戦争指導方針だ。面白いものだ。英米ソ間の連合の熱意は、独逸が縮んで後は下火になった。却て独逸を生存せしめお互に勢力の牽制を図らんとする気配が見える。連合国の悩みは亦此の辺に伏在する。本年度、日本の戦争遂行方針を一言にして云はしむれば、決戦的持久作戦を行ひ、連合国政戦両略の乱れを待ち、且之に乗ずると云ふ事にならう。英の極東に於ける作戦は米の比島奪回の如く真剣なるを得ないであらう。少くも独逸の存在する限り然りと云へよう。それ故に南方軍の持久戦方針も東正面に在る事は明かだ。

一月六日　晴

土橋軍司令官が「大東亜戦戦後経営に於ては陸軍は偉大なる人材を要す。陸軍大学校の如き大いに持続し人材を養成すべきである」との説に予は共鳴するものである。本夜、聖岬 B-29 六機の空襲を受けた。被害はないが、命中精度の良好なのは驚くの外はない。我兵舎、中破した。

一月七日　晴

近頃、連日の如く軍司令官の鉗鎚を受く。作戦時に頭を切りかへよと。

夕食、兵器部長、緒方経理部長、林憲兵中佐と第二回の会合を兵器部長の宿舎にて設く。華僑は何故に成功するやの問題に対し、研究の結果、我等は左の結論を得たり。即ち、彼等の勤勉にして生活程度低き事が前提なり。又、彼等は理財に関し先天的に訓練されたる頭を持ちあり。斯くて「薄利多売」するなり。一例にて云はんか、日本のビールを原価にて売るなり。其の利益はビール箱のみなり。彼等は斯くの如く薄利多売する故、到底日本人など太刀打出来ざるなり。水の低きにつく如く顧客は繁昌するも宜なる哉。

一月八日　晴

夕刻、日本ホテルに於て、総軍第二課参謀の招待を受く。海軍佐々木、松平参謀、大使府河野[5]、渡辺総領事[6]、予、山本及佐藤司政官[7]なり。佐藤司政官曰く「予の直接仕へたる上官中、佐藤［尚武］駐ソ大使と有田［八郎］外相が最も出色す。佐藤大使は何時でも死んでよいと云ふ。古武士的心情にて、軍人の死生観の最高峯に達したる人と同格なり。全く至人の域に脱しあり。無欲恬淡の人なり。而も外国三十年の生活続けにて一躍外相となれり。最初はバタ臭いと云ふ風評あ

[5] おそらく河野達一　最終官歴はサイゴン総領事（『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』p.440）。
[6] 渡辺耐三　最終官歴はハノイ領事（『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』p.440）。
[7] おそらく佐藤舜　出典によれば、1945年3月30日より第38軍司令部付司政官（『南方軍政の機構・幹部軍政官一覧』p.163）。

り。しかし外相を休める頃、皆一様に豪い人だと感心せり。有田氏に至っては、其の深遠該博なる常識は最高峯に達し、先の見通しの利く点、実に驚く程なりと。尚外交官は素質最優秀に拘らず勉強心なく競争心なく凡庸化すと称せり。外交官にて妻君配偶者の為力の出る人は千人中一人のみ。多くは配偶者の為失脚せるが現状なりと。尚、見通しは天賦に依るの外、訓練に関する事大なりとの意見一致せり。

一月九日　晴

夜、聖岬を爆撃せらるるも被害なし。最近殆ど毎日敵機の神経戦あり。

華僑の国民政府、参戦第二周年に方り、予は華僑倶楽部の紀念祭に一席の講演を行ふ。

穐田[8]、石田、内田[9]の同期生、小西[10]参謀の来西［西貢（さいごん）］の機に会食す。予は華僑の関係あり、出席出来ず。日本ホテルの主人湯浅、大本営近藤伝八中佐の搭乗機海口にて墜落す。近時、高等司令部の職員にて墜死するもの多し。原因は必ず無理なる飛行を為しあり。

三船司［第三船舶輸送司令官］稲田少将[11]のお話に依れば、比島方面の戦局の不如意に就て寺内閣下[12]なげかる。稲田少将曰く「それは閣下が比島などにお出になった事が間違ひだ。比島は総軍が行ってかきまわした結果、何もよい効果を奏せず、責任の所在が不明になったばかりだ。それよりも総軍は昭南（しんがぽーる）に於て全般の事を考へて先の手を打ち、比島には強力な方面軍司令部を設置し、比島防衛に専念せしむるを可とした。それに今の思想は、最高指揮官が第一線に前進せねば陣頭指揮でない、能率があがらぬ様に思ってゐる。そしてゴチャゴチャを生じて比島をさわがせたに過ぎない。全く閣下の失敗です」と報酬せり。寺内元帥は全く自分が悪かったと涙を出して悔まれたと云ふ話を聞けり。是、実に国軍の現状。否、日本人の欠陥を表明したるものにて、日本人の潔癖性は何か少しでもいぢらないと気がすまず、重箱の底をほじくる様な気質なり。之が為、朝令暮改主義になり、條規は煩瑣となり、干渉に失し、イライラせしむるのみにて能率却て挙らざる傾向あり。物は万己むを得ずして修正し、万己むを得ずして手を入るるべき主義なるべきに、好んで干渉し好んで小刀細工する傾向が日本人にあるなり。之れを以て仕事が出来ると認められ易きなり。東條［英機］統帥は陣頭指揮のよき反面物をいぢりすぎる傾向ありしや。然り。彼の総軍の比島前進も東條式の先の見えざる陣頭指揮精神の発露にて総軍は之れに屈服したるなり。

今日は仏印駐屯軍参謀転補発令より丸一年だ。総軍の作戦会同に傍聴しつつ左の事を思った。日本軍人として最も幸福なのは大東亜戦に参加した事である。そして此の大東亜戦の為、最大限

---

[8] 穐田弘志　大佐　第16方面軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.587）。

[9] 内田厚生　大佐　南方軍特報部長（『日本陸海軍総合事典』p.588）。

[10] 小西健雄　大佐　第18方面軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.588）。

[11] 稲田正純（1896-1986）中将（1945年1月時点では少将）1944年10月～第3船舶輸送司令官、1945年5月～第16方面軍参謀長（『日本陸海軍総合事典』p.21）。

[12] 寺内寿一（1879-1946）元帥　1941年11月から南方軍総司令官（『日本陸海軍総合事典』p.105）。

の貢献を為し得る事である。ペリリュー島の勇士や拉孟(らもう)の金光少佐[13]、或は特攻隊で敵船を撃沈した勇士は、是程武運芽出度いものはない。如何に後世国民に感謝され歴史に残る事であらう。同じ戦士でも空中事故や傷害事故で死ぬ人は武運誠に拙(つたな)い人である。生きながらへて大東亜戦終了後、軍人として生活する人は、何故自分は戦争中に死んでもう少し働かなかった、或は死所を得なかったかとなげくであらう。日本軍人が皆無事凱旋したいと云ふ様な気分はないと認める。此の点は日清日露の役よりも戦争が苛烈であるだけ軍人の覚悟も違ってゐる。唯死所を得ない人は不幸な人であるが、斯くの如き人も心に死所を得んと念じつつ、事志と違ったのであるから一層同情を表すべき人である。

戦略戦術は形態であり統率は勢であり質である。両者兼有せねば未だ全うしたとは云へぬのである。

一月十一日

軍司令官より再び頭の切り更へ真剣味に就て強き鉗鎚を受く。云はるる事理あり。辱(かたじけな)く拝聴す。

一月十二日

西貢(さいごん)は朝より空襲を受く。敵は機動部隊の艦載機にして二百機ばかりなり。午前午后二回にして一回は数波の攻撃にして終日空襲事務に没頭す。大空襲も震災の被害の大なるに如かず。本日、航空燃料と船をやられ仏側には殆ど損害なし。此の調子にては対仏印処理も急がねばならぬ也。

本日感歎すべき事があった。総軍の厚東［隆男］参謀が、上京直前の人事連絡として我軍司令部の各部長をかへて呉れと云ふ。総軍各部長の意見であるが軍はどう思ふかと云ふ。それは仏印の将兵の運命を考へると、到底今の能力なり部長にては堪へきれぬと云ふに在り。此の点、参謀長不在の為、軍司令官に厚東が直接会って話したら、軍司令官は非常な立腹だ、何と失礼な事を云ふ、寧ろ人を更へるなら総軍の部長幕僚をかへよ、仏印の特種状況を認識せずして仏印駐屯軍が働かぬと云ふ様な事が云へるか、金があれば仕事は出来る、金を出さずして仕事をせよと云ふか、予は部下を栄転さした事はあるが下遷したり馘(くびき)った事はない。悪い部下があれば之を直すのが予の特色だ。万一予が矯正指導し得ぬ部下があれば、其の時は予から人事異動を申出すべし。然らざれば入らぬお節介なり。尚、総軍の各部長は人情はあるのか、仁義がわかるのか、隷下部隊而も膝元の部長が働きがなければ何故指導を加へ一人前にせぬか、そんな世話をせずして陰でこそこそと首をすげかえる意見を出すなど人情のすたれた根性でよく総軍の部長がつとまるか、そんな事を総参謀長が意見を聞いて来いと云ったか、厚東参謀はホーホーの体にて帰りたり。其の夜、軍司令官

[13] 拉孟守備隊長の金光恵次郎少佐。1944年9月、雲南省拉孟での中国軍との戦いで戦死（『戦史叢書　イラワジ会戦』p.283）。

が総軍の各部長各課参謀を呼ぶ事になってゐて、空襲警報下に会食した。其の席上、軍司令官はアバレルワ、アバレルワ、総軍の各部長をこき下ろし指名的に罵倒した。予は宴半ばにして之に列席し、十年の溜飲が下った気がした。土橋司令官の部下庇蔭は感激に堪へない。予は各部長に、軍司令官、本日の厚東参謀に応酬された事を紹介して、お互に此の軍司令官の名誉にもかけて努力せねばならぬと述べた次第である。

一月十四日

総軍にて予が作戦準備説明後、総軍の重大決心を示され、軍司令官に報告処理す。予も軍人として死場所をかざる時期が来てこんな嬉しい事はなし。軍司令官は親切な人であるのみならず之を腕を以て実行に現はす事が出来る人だ。昨夜、塚本［毅］総領事が遊びに来て大使府のガソリンの無い事、野菜のない事を聞く。翌日は直ちにガソリン四缶と野菜三籠を送り、且ガソリン四缶は毎月之を続ける事にされた。

一月十五日

プノンペンより馬木原氏及スミ子来る。本日予の部屋に於て鋤焼す。

一月十六日

近頃作戦準備にて忙し。

一月十八日

軍司令官プノンペンに出張。予は官邸をかりて大本営恒石[14]参謀を招宴す。軍司令官の云ひつけなり。石田中佐曰く、総軍の幹部は今少しく粗食し飽食せず、且、酒色に遠ざかり会食の機会を少くして思索するの余裕を与へざるべからずと。全然同感也。

宍戸清次郎中佐、討(うつ)[15]兵団参謀長として来る。久闊喜ぶべし。

一月十九日　晴

過般の空襲に於ても、撃墜俘虜の所持品から見ても、日本の製品よりも一段工夫もせられ手もかかり材料も豊富に使ってゐる事がわかる。地図、ゴムボート等に於て之を見る。兎に角、物質文明の方では尚ほ日本は米国に頭があがらない。此度の戦争も日本の物質文明の水準を引上ぐる神意であらう。

---

[14] 恒石重嗣　中佐　最終職は第55軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.594）。
[15] 第21師団の通称（『日本陸海軍総合事典』p.533）。

一月二十日　曇

土橋軍司令官と町尻軍司令官[16]と対比すると其の積極性に於て大きな開きのあるのは健康に関係する事が大であると信ずる。那翁（なぽれおん）のイエナの追撃作戦当時の那翁の意気軒昂が思ひ出され、又モスコー侵入当時の奈翁の不健康が想像されて、健康と将帥の業績とに関し深い暗示を与へる。

一月二十一日　曇

家郷（中富）より通信来る。苦痛を訴ふ。不愉快なり。早乙女少佐来る。近頃の隊附将校は真剣にして、読物など深きものを求む。禅書等を読むもの多し。取物帳は読まず。寧ろ上級者は反省すべきなり。特攻精神に依りてのみ解決する此の大戦は、若き者の働く場面、日本を救ふ者は若き者なる也。

予の仏印着任一周年紀念日なるも反省の余裕もなく忙し。

一月二十三日

昨今、反省の遑（いとま）なき程作戦準備にて多忙。本日の午前三時迄参謀と議論し作戦を研究す。皇国の前途真に累卵の如き心地す。

一月二十七日　雨　曇　晴

軍司令官に随行。河内（はのい）出張の途に登る。予は当分河内に滞在する積りにて、総ての荷物を引払ふ。ベンカット［ベンカト］、ツードモ［トゥザーモット］を経て安南山脈を横切りバンメツオ［バンメトート］に泊る。行程三四〇粁（きろめーとる）。軍司令官より懇々戦局に対する決意を促さる。皇国の前途深憂に堪へざるも努力せんのみ。此の努力も足らず。

戦局のテンポと我等の生活乃至思想と一致せず。我等は依然大東亜共栄圏の全盛時代の安易なる観念を物の見方となしあり。仏印其のものの環境が急転直下すべき情勢と余りにもかけ離れある故、吻合せざるものあり。軍司令官の国家国軍の前途を憂ふる深憂は、我等追随し得ざるの感深し。我等の思索は尚ほ安価なり。平和なるバンメツオ平地、月は丸く風は清し。汝は永久に此の平和境を維持し得るや。バンメツオの住民よ、可憐なる小供よ、汝の平穏なる生活を誰が突如破壊せずと保障し得るや。汝等はそれを知るや。今回の旅行程胸の重苦しきものなし。

一月二十八日　晴

バンメツオ発。大高原をプレーク［プレイク］を経、キニヨン［クイニョン］に向ふ。昨日は孔雀を二、

---

[16] 町尻量基（1888-1945）中将、1942年11月から1944年11月まで。印度支那駐屯軍司令官。土橋勇逸軍司令官の前任者（『日本陸海軍総合事典』p.146）。

三回見たりしも、本日は雄（ヲス）のみ　両日雄（ヲス）を二回見る。拳銃にて射撃せんとして路傍一発を離せば、虎が驚きて頭をもちあぐるを運転手は発見せり。プレークは真に仲々感じのよい町なり。内地では一寸想像がつかず。軽井沢に匹敵せんか。プレークより九十九曲を経てキニヨンに達す。昨日と本日、同様行程三四〇粁。一時間平均五〇粁なり。キニヨンにて我歩兵部隊の一部の進駐を見、グランドホテルに泊る。按摩を取る。犬童[17]と同室に宿泊す。

一月二十九日　晴

キニヨン九時出発。同地警備隊竹崎少尉の指揮する部隊を視察後、ツーラン［ダナン］に向ふ。途中、カンガイ［クアンガイ］のバンガローにて昼食。ツーラン着十六時。兵站旅館に泊る。稲井参謀と連絡す。本日行程三四〇粁。

一月三十日　晴

歩兵大隊に於て作戦研究。午后三時半出発。ユエ［フエ］に向ふ。行程一〇〇粁。ユエのモーラルホテルに泊る。旅行中チョイチョイ土橋司令官からよい事を習った。之は別に認めて置いた。

一月三十一日　曇

ユエ発。「カントリー」の部隊を視察し、十八時ヴィン着。行程三四〇粁。ベンツイ［ホイアン］の渡河点の処理は今後重大なる問題とならう。ヴィン－グランドホテルに泊る。

和田大尉、滑川中尉の出迎を受く。

此の旅行を通じて感ずるのは人生の（努力の分析は人の境遇でも違ふが大衆は）七割は食の為に労作してゐる。三割は其他の事であって、中一割は居住、一割は性行為、他の一割が外の文化的の事に力を費してゐると見る事が出来る。食を離れた高踏的の事は実際的でない。用兵の根本を茲に置かないと現実と遊離する。

[17] 犬童（いんどう）己来男　大尉　軍司令官の副官。（ご本人のご教示による、1945年12月26日参照）

二月

二月一日

ヴィン出発　途中一宮大佐[18]と面接し二八〇粁を踏破し、河内（ハノイ）に着く。河内はクラシャン[19]の気節だ。寒い大使府官邸に軍司令官は泊られ、予は協和会館に泊る。大使府官邸に泊る理由は、仏側に対し軍部と大使府とが一体になってゐると云ふ事を示さんが為だ。此の土橋将軍の遠慮のない所は学ぶべきものがある。料理を要求し、酒を要求し、宿舎を要求し、其の反面与へる事も多い。酒を与へガソリンを与ふ。取引きが大きい。町尻将軍は万事他人に迷惑をかけぬ様に交際の範囲、交際の波動を少くする遠慮勝ちの流義だ。之に反し、土橋将軍は交際を強く広く行ふ。遠慮せざると共に相手にも大いに便を与ふと云ふ流義だ。之を要するに気の置けないやり方だ。活動半径も大きいのだ。遠慮する事が常に相手に好感を与へ、迷惑を感ぜしめないものとは限らぬ。土橋将軍の様なやり方は処世に於て得なやり方だ。「克己」一点張りのやり方も違ふ。「克己」も自我を殺すのみの消極的だけでは不可ない。

ヴィンにて横山老人にお世話になる。彼は外務省や官吏のやり方の漫々的なるにゴーを煮して居った。

二月二日

作戦の研究が討師団司令部に於てあり、兵団長官立会はれる。仲々六つかしい事ばかりだ。真剣に考へれば考へる程物に困難性がある。

二月三日

パクニン[20]に光[21]兵団司令部を訪ふ。土橋司令官の言はれた面白い話題二つ。

・正力読売新聞社長は大東亜戦が始まると同時に静岡に大きな家を買った。人々は其の故を問ふ。正力社長曰く大東亜戦となれば東京の空襲は必至である。故に社が破壊されても新聞の発行の出来る静岡に家を準備するのだと。昭和二十年一月二十七日、読売新聞は空爆に会ふ。正力の先見の明は実証された。

・一時内地を風靡した富久娘と云ふ酒がある。酒は最初、人から嫌はれて仲々販路が広まらなかっ

---

[18] 一宮基　大佐　1943年11月1日より、歩兵第83連隊長（『日本陸海軍総合事典』p.389）。

[19] Crachin　フランス語で「霧雨」「小糠雨」の意味（野平宗弘氏のご教示による）。

[20] バクニン、ハノイの北東約20キロメートルに位置し、北部仏印進駐後、フランス軍が使用していた兵営を日本軍が譲り受けて使用していた（立川 p.25）。

[21] 第37師団の通称。第37師団の通称は「冬」であるが（『日本陸海軍総合事典』p.533）、第38軍に編入されていた間、「光」の通称で呼ばれた。

た。それで醸造主は一策を案じた。大正元年の事である。関西で三千円の金を造って醸造主は東京へ乗り込んで一流の料亭を此の三千円で飲み廻った。そのやり方は先づ酒の廻る頃、君の家は福娘と云ふ酒を持ってゐるか。今、関西では此の酒でなくては宴が出来ない程の人気だ。此の酒を使はないと云ふ様な野呂間では駄目だ。東京の……と云ふ。酒店にあるさうだから早速取り寄せ給へとこう云ふ流義で各料亭を説き廻った。かくて東京で俄然福娘が流行する様になった。そんな調子で全国に広め渡ったのであると。宣伝の呼吸を解してゐるではないか。

湯浅[22]嘱託（渉外部勤務）は安南婦人と結婚して二人の子迄ある。軍司令官にお伴して一日湯浅の邸宅に招かれ安南料理の御馳走になる。朝鮮料理を偲ばしめる。支那料理に比し一層低級なものだ。それでも十五皿位出て安南料理としては最高級なものだ。細君は安南の高官の孫で仲々上品な人であった。軍司令官の目的は異人娘と結婚した湯浅とその細君を喜こばすに在った。両人は相思の関係に於て結婚した。

安南人の骨格の貧弱な理由の一つとして、地に燐が少なく餌に燐が少ないに依ると。牛の骨格の小さいのもそれに依ると云ふが之は疑はしい。

二月四日

軍司令官、各兵団の幕僚を大使府官邸にて招宴せらる。集まるもの南方軍野鉄［野戦鉄道］司令部中村参謀、討、小山、伊藤[23]、三好参謀、光、吉村参謀、威[24]、高橋参謀なり。例に依り軍司令官吹きまくらる。処罰に関し大物を愛護し疵つけぬと云ふ司令官の意図を知る。後、二次会を「河内」料亭に於て、宍戸参謀長[25]の名に於て行ふ。美人揃ひにて非常に愉快なり。純情の乙女の出征兵士を送る歌の躍りを見て感激す。

聞く一例話あり。強姦の民心把握に悪影響ある実証、即ち南京の我大使府に二十年間雇傭せし忠実なる支那人ボーイあり。此の「ボーイ」が毒薬を盛りて書記官以下数人を殺したる事件あり。其の原因は自己の女房を日本兵に強姦されたる腹いせなりと。強姦の人心を険悪ならしむること斯くの如し。

土橋軍司令官に学ぶ所は思ふ事を具体化する能力に秀でられある事なり。単なる思案感情に止まらず、其の手腕を以て具体化する所に其の豪さあり。常人は先づ先づと云ひて思ひても為さず。之を必ず為し遂げらるる所に力量手腕ありと称すべし。

---

[22] 湯浅保則（中野 p.35）。
[23] 伊藤知可士　第21師団参謀（『日本陸海軍総合事典』p.602）。
[24] 南方軍の通称（『日本陸海軍総合事典』p.530）。
[25] 宍戸清次郎　大佐　第21師団参謀長（『戦史叢書　シッタン・明号作戦』p.627）。

二月五日

軍司令官帰還せらる。此の河内滞在間、松本大使[26]官邸に泊り、大使と同居せらる。随分厚顔しく感ずるも、実は仏蘭西側に対し日本の大使府と軍部とは密接に協力してゐる事を示し、大使の対仏印交渉を支援する為なりとの狙ひなり。是亦土橋流の着眼と云ふべし。而も自ら大使府の洋酒を十分呑み、一挙両得の結果を招来す。予等も屢(しばしば)大使と会食す。本日より討司令部に信[27]連絡所を設置す。本日地図にて陣地を研究す。軍司令官課題のものなり。明日、梅原[28]にて築城研究会に列席する事とし急に忙しくなる。

二月六日

宍戸参謀長と同行し、梅原に至る。上司の方針に即応せざる下級部隊の行為は如何に無駄が多いか。討の決定し実行せんとする築城は全く全般の関係を考慮せざるものなり。上司の早く方針を示さざる事も悪いが下級部隊として之れ程の大袈裟なる築城、而も費用の入るのを何故に上司（軍）に報告せざりしかが疑問なり。上司に導通せざる事は無駄が多い。

二月七日

チホボ、スユイ方面[29]視察す。山岳重畳す。

二月八日

「バヒ」山[30]、「トン」[31]附近偵察す。仏印軍優勢なり。来るべき作戦は如何なる結果を招くや。バヒ山は仏人の避暑地なり。

二月九日

下痢す。ビールと冷えなる為ならん。

天才には法則なし。

---

[26] 松本俊一（1897-1987） 1944年12月より仏領インドシナ大使府特命全権大使。1945年5月7日、引揚げ（外務省外交史料館 p.956、付録 p.79）。

[27] 第38軍の通称（『日本陸海軍総合事典』p.532）。

[28] 「梅ヶ原」のこと。ハノイの西方に位置する草原の丘陵地帯に、1943年春以降、日本軍が兵営を築いた。1944年4月以降、そこに駐留した歩兵第82連隊の連隊長・岡田梅吉の一字を取って、日本側が独自に命名した（立川 pp.28-30）。

[29] 「チホボ」はホアビン西方の「チヨボ」、「スユイ」は「チヨボ」西方の「シユー」の可能性有。（立川京一氏のご教示による）

[30] バビ（Bavi）山、ハノイより西方約45キロにある山。標高1,250メートル。気温が平地より4、5度低く、保養地として有名（南洋経済研究所 p.193）。

[31] ハノイの北西約30キロ、ソンタイ（ハノイの西）の西方5キロに位置する村。飛行場があった（『戦史叢書 シッタン・明号作戦』p.531、南洋経済研究所 p.200）。

二月十日

ヴィンエン[32]附近地形偵察。精良なる地図の図上研究は現地偵察と変らず。

二月十一日

神谷[33]参謀と語る。

二月十二日

堀田参謀長到着。

二月十三日

ヴイ方面迂回路偵察。三〇〇粁。ヴィンのハラロ[34]。一宮支隊本部に泊る。

二月十四日

帰還途中、車輌故障。午前二時に神戸旅館に帰着。

二月十五日

堀田参謀長と三国閣下[35]に招宴さる。

文章は現実の実感に依り名文を生ず。形容詞に非ず。

新方法の徹底には非常の努力を要す。仲々徹底せず。

敵、機動部隊を以て関東地方を空襲すると共に硫黄島上陸を試む。

離島は何れにせよ結局補給力――即ち空軍力――の優勢なるものの手中に期すべし。

日本は苦しみ抜くべし。凡そ最後に勝つ事が判って居れば、陸大の受審、再審試験に落第する如く人物が練れるなり。日本人はもっともっと苦しまねば、従来の罪業が消滅し真正の皇道の体顕者とはならぬなり。

二月十六日　曇

恒吉大佐は三笠宮殿下の御附武官たりし人なり。皇族殿下一般の特色を述べて曰く。

---

[32] ヴィンエンはハノイ西方の地方都市で、1943年4月に日本軍が新たに築いた兵営が完成し、歩兵第62連隊が入営した（立川 pp.28-29　1945年6月2日参照）。

[33] 神谷憲三　中佐　フランス語の語学将校。東京外国語学校陸軍委託学生としてフランス語を専攻。第38軍参謀（渉外担当）（『日本陸海軍総合事典』p.620、『戦史叢書　シッタン・明号作戦』p.551）。

[34] おそらくクワロだと思われる。クワロはヴィン北東方約4キロに位置し、歩兵第83連隊本部等の所在地であった（立川京一氏のご教示による『戦史叢書　シッタン・明号作戦』p.613）。

[35] 三国直福　中将　1943年3月1日より第21師団長（『日本陸海軍総合事典』p.375）。

大いに叱られる人、甘える人が欲しきは、皇族殿下の御共通の気分なり。

二月十七日　曇

「パクニン」に至る。堀田第二十二師団参謀長と同行。第三十七師団団隊長会議に列席。同日、「パクニン」恒吉参謀長の宿舎に泊る。同地に安南富豪にて日本好きの二姉妹あり。有名の由。

二月十八日　曇

前日と同様の会同あり。夕刻河内に帰還。明日早朝出発。ツーランに向かふべき故、報告事項を認め午前三時となる。

近頃はソワソワして何事も落ち着かず。自彊術も出来ず。

二月十九日　曇

第二十一師団宍戸参謀長、三十七師団吉村参謀と共に自動車にて軍参謀長とツーランにて会合の為出発。本日、ヴィン泊り。

吉村参謀より色々の面白き経験談を聞く。凡そ何事にせよ、重点成形努力に依らば其の道の達人になる事難し。卑近なる例にても俗謡を覚ゆる事も、旅館の女中を取りつける事も然り。西尾大将[36]が新操典、或は改正理由書を六遍も七遍も読みたりとの事を聞き、我等は何事にも努力足らずして成果を望みすぐるを恥ず。

二月二十日　曇

午前六時ヴィン出発。四箇所の渡場を経て、雲と峠の険を暗夜霧に悩まされ、午后十一時ツーラン着。長沢旅館に泊る。

二月二十一日　曇

軍参謀長、新作戦計画及総軍参謀長会同事項を伝達す。遂に仏印処理の新案下る。

河村参謀長閣下[37]の予に対する配慮深厚感謝の外なし。ツーラン、一昨夜爆撃せられ人三十名、馬十頭、トラック十台を失ふ。

---

[36] 西尾寿造（1881-1960）大将　1939年9月12日より1941年3月1日まで支那派遣軍総司令官（『日本陸海軍総合事典』pp.119, 351）。

[37] 河村参郎（1896-1947）少将　1942年12月5日より印度支那駐屯軍参謀長、1944年12月20日より1945年6月2日まで第38軍参謀長、1946年、逮捕され、翌年死刑判決、6月、シンガポールで刑死（『日本陸海軍総合事典』pp.52, 366）。

二月二十二日

順化(ふえ)発。自動車にてヴィンに帰着す。

二月二十三日　曇

「ヴィン」発。河内に帰還。総軍酒井[38]参謀、河内に於て［第三十八］軍の連絡所に勤務す。

二月二十四日　曇

討に於て軍参謀長会同、及、新作戦計画伝達に立会す。

二月二十五日　曇

パクニンにて第三十七師団の軍参謀長会同の伝達事項と新作戦計画開示を行ふ。討及光の両兵団にて伝達事項大いに異なり。意図は伝達者にて次第に歪曲せらる。以て正当の意図の徹底困難なるを知る。

二月二十六日　快晴

第二十一師団の自動車にて原[39]兵団に連絡に向ふ。

栴檀の樹根の回虫駆除薬に適する由にて、之を採集の為に貨車を出せしに便乗せるものなり。久方振りに敵機の爆音を聞く。ケップ飛行場[40]東方の二橋梁に対し六機六発の爆弾を投下し去る。幸(さいわい)、橋には中らざりしも道路に大穴一つあく。其の爆撃直後なる為、予は貨車を通過せしむる為一時間の作業を要したり。尚、ケップの東の橋は河水浅く副渡河点として河床に車輛通過を可能ならしむる如く敷石しあり。学ぶべし。ランソン着は午后十時なり。鎮目連隊長、河野■■連隊長と会し、同地攻撃計画の説明を受け、午前一時となる。

二月二十七日　曇

九時出発。支那領に入れば道路甚だ悪し。一号策応作戦に於ける一宮支隊の努力目に見ゆ。即ち、工兵隊の橋梁は無事現存せり。其の数三十を数ふべし。一宮支隊の駐屯時、民心把握可にして住民村落に居住せしも、今や第三十七師団の通過に遭ひ、同兵団の部隊は支那流の徴発強姦を行ひしを以てか、沿道住民離散し、廃墟を行くが如し。唯、部隊の駐屯する所は、宣撫次第に行はれ住民逐次復帰す。依りて予は考ふ。日本人は神ながらの道の皇室を戴きつつも、其の行ふ所、覇道極悪多し。現戦局の困難は、日本人過去の罪劫に対する天罰なり。支那事変の如き其の永び

[38] 酒井干城　第38軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.591）。
[39] 第22師団の通称（『日本陸海軍総合事典』p.533）。
[40] バクザン省にある軍用飛行場。

く理由、又、支那事変の起りし理由は、日本人の不義不正に基く点甚だ多し。現在の苦難はそのみそぎの意義を有す。かくて日本人は其の従来の悪を洗滌し真正の皇道の体験体現者となりつつあるなり。

午后六時、明江第二十二師団司令所に着く。旧知平田師団長[41]は砲兵の夜間斬込の検閲中にて、午后十一時半迄会へず。此の師団の対米夜間決戦戦法の訓練は相当徹底せり。堀田参謀長と語る。此の兵団に於ては陣中新聞を発行し、よく教育の目的を達成しあり。

河村正保中佐と会ふ。二十年振りなり。

二月二十八日　曇

正午出発。第二十二師団、井上参謀[42]と同行。午后五時、憑祥（ひょうしょう）に到着。午后六時半、ランソンに到着。鎮目連隊本部に宿泊す。支那領の給養は可良なり。仏印の平常態勢部隊程給養不良なり。帰路は往路に比し自動車二台を用ひたる為、相互扶助可能にて時間短縮す。見るべし。一人にて出来ざる仕事は、二人寄れば其の三分の一、四分の一の時間にて成就可能なること多し。「組の仕事」の味を体験せり。仏印側の警戒愈々至厳なり。

[41] 平田正判　中将　1944年1月7日～第22師団長（『日本陸海軍総合事典』p.375）。
[42] 井上善高　少佐　第22師団参謀（『日本陸海軍総合事典』p.599）。

三月

三月一日　曇

ランソンより発し乗用車にて帰る。予の修理せし道路は、住民の手に依り更に補修を続けられあり。一昨日は敵は爆撃すると共に宣伝ビラを蒔き、日本の敗戦を指摘し、安南人に日本人に近寄るなと説きたり。為に、爆撃直後、日本軍人に対し何となくオズオズして道路作業にも積極的に協力せざりき。宣伝は意思薄弱定見なき者に対し有効なる事斯くの如し。午后二時、パクニンにて第三十七師団司令部を訪ひ、連絡の上、井上参謀と共に午后五時河内に帰る。

我は既に敵の交通遮断戦にかかれり。二十七日も鉄道及道路（縦貫路）の爆破を受けたり。

仏印処理も結果は一部の人の予想する如く決してよきものに非ざる事は明瞭にて、日本軍の自存の為に現在よりも非常なる苦難を嘗むるのみならず、簡単且綺麗には片づかず、蜂の巣を潰したる如く治安上に於ても当惑する事態生ずべきや必定なり。而も現態勢を維持せんか更に困難なる條件に於て、仏側と衝突せざるべからざるべし。之れなどは人間たる以上、即ち神でなく先が見えぬ以上、肯定も否定も出来ず。結局、予は独逸の対ソ戦の如くやらざるを得ざりしも、結果は思ひしよりも悪くなるべしと予想す。唯よき事一つは、本皇土方面に対すべき米軍を或る程度牽制し、其の戦力を吸収し得る事のみが何よりの取り柄にて、南方軍自体としては現在よりも困難なる事態を招来すべきや必せり。

三月二日　曇

二月初旬、寒くて室に薪火と炭火を要したる北部仏印も、現今に於ては之を要せざるに至りぬ。

払暁目醒めの瞬間、思へらく、日本人のやり方は欧米人に比し「ウスッペラだ。体■区分がない」と、然り。正しく此の通り。何事にも日本は此の傾向あり。帰する所は国力国民性の相違に帰因すべきも此の傾向顕著なり。

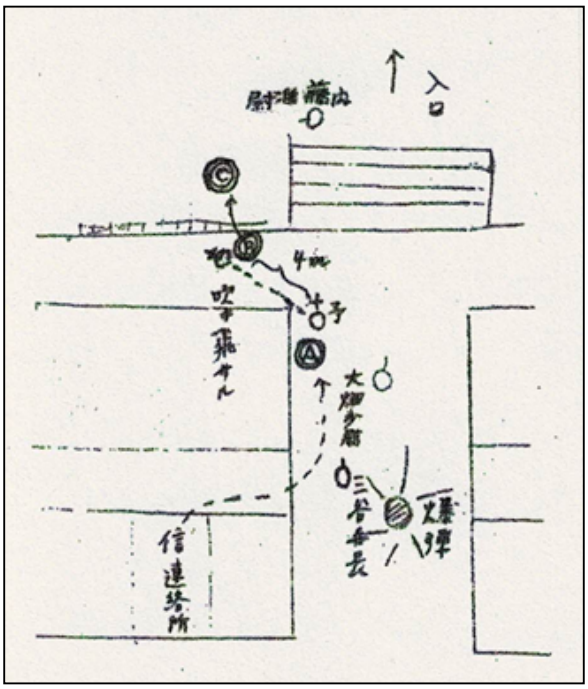
三月三日　晴

総軍酒井参謀は流石目のつけ所が大所高所且先の事を考ふる傾向あり。現業に慣熟したる予輩の頭は現場に固着し先見と大所との着眼を欠き易し。

本日は快晴にて、信連絡所用の乗用車も整備完了せるを以て、予は午后五時を期し酒井参謀及大畑少尉[43]とともにグランラック［ホータイ］周辺をドライブせんことを約し、午后五時頃業務を終へ

[43] 大畑徳種　1945年4月17日参照。

んとす。折柄司令部に空襲退避喇叭鳴りたり。予は机上の地図を折り畳む。三谷兵長[44]は予の此の作業を助く。やや時間を要し之を終れば、三谷は予に鉄帽を捧げければ、予は鉄帽を持ちカバンを携へ廊下に出づ。酒井参謀、内藤准尉は既に避難しあり。予は一人にて、他には玄関の方誰も見えず。よくも早く避難したる哉との感想を抱き歩行し、Aの位置に来るや、右後方、屋上に飛行音と爆発音とを同時に聞く。予は「早、来やがったか」と思ふ瞬間、爆風に吹き飛ばされ、Bの附近と覚しき所に押し仆さる。全くアッと云ふ瞬間なりし。予は両手と両膝を廊下地面につき、腹ばひながら四囲を見るに暗黒なり。耳はガンガン鳴れり。予はこれは二階が落ち崩れ、予は圧死を免れたるも、壁の下敷となり、堀開せずば予は外に出る能はずなりぬと直感せり。然る所、軈(まもな)くしてあたりはほの明るくなりぬ。先刻壁の下、地下と思ひしは、土埃に閉され真黒になりたるなるに気づきぬ。尚、飛行音は聞え、予は更に爆撃せられん事を惧れ、Bの位置より前の鉄の手すりを跳り越え、一間あまりも下の地面に跳び下りぬ。尚、あたりは土埃にて足元も見えざる状況なり。此の跳び下りし瞬間、右足先がガクリと云ひて捻挫せる模様。十歩程歩行したるも歩行不能となり坐り込めば、屋外の機関銃小隊長、参謀殿「やられましたな」とて予を背負ひ、機関銃座に収容し呉れぬ。敵機は尚姑く司令部上空に在りしものの如きも、十分経緯し敵機の危険なくなり、予は医務室外に運ばれ、右脚に繃帯を受けぬ。全身土埃にまびれたり。負傷者戦死者は逐次運ばれたり。其の戦死将校の一人に大畑少尉あり。



［岩國氏が描いた状況図　文字が薄い箇所は編者が手を加えた］

[44] 三谷信三　1945年4月17日参照。

鉄兜を被り出血もなく既に死せるを見れば多分心臓麻痺の為ならん。内藤准尉、予を探（モト）め三谷兵長がどうしても見えぬと云ふ。後にて判明せると、三谷は頭が飛び身体と離れ手脚も胴と離れ、すぐには判明せざりしものの如し。前後の関係上、爆撃を受けたる瞬間の三谷、大畑、予の関係は要図の如し。爆弾は戦斗機一機にて投下され、二百瓩級一発なりしも、命中率よく、三〇〇米の低空にて本庁舎の中央に投下し、廊下を破壊し更に地下室の情報室の上天井を破り情報室にも損害を与へたり。本庁舎は全壊使用不可能にて、本日戦死五名負傷八名なり。考へ見れば三谷及大畑は全く予に引づられ、避難をおくれ且自ら犠牲となりしなり。予は真に奇蹟的に少しの疵もなく、僅か口辺に裂傷のみ。予は何と云はん。此の二人に対しては申訳なきのみ。

直に河内の患者療養所に入院す。（植木隊）

夜間右脚全体が凝りて転々反側。午前三時に至るも眠られず。遂に「モヒ」注射を受く。

三月四日

微熱。局部稍傷む。昨夜は眠られぬまま色々の事断片的に浮ぶ。曰く、予は一回死せり。余生は真に奉仕生活に没頭すべし。予は万年大佐を以て満足すべし。曰く、大畑と三谷との遺族に対し、予は或種の責任を感ず。必ずや内地に帰る事あらば、遺族に会はざるべからず。遺族の面倒を見ざるべからず。曰く、爆撃程無常迅速なる事はなし。今笑ひし人が瞬内に幽明を異にするに至る。人生無常迅速の現状を体験せり。予もあの時参って居れば此の世はさぞ「あっけなかりし」と思ふならん。靖国神社に祭らるるは可なるも此の世が「あっけなかりし」との悔ありしならん。大畑、三谷も同様の感想を抱きあるべし。兎に角爆撃は決心する隙もなく覚悟をきめる隙もなく万歳を唱ふる隙もなし。等々。午前三時に至るも転々反側を重ね、モヒの注射により纔（わず）かに眠る。局部の疼痛よりも寧ろ右脚全体の凝りにて一瞬も同姿勢を保持すること難し。斯くの如き戦場の急速なる負傷は多く局部の疼痛は数刻経過後現はるものの如し。

三月五日　晴

三十七度五分程度の微熱と局部に若干の疼痛を感ず。昨夜眠れざりし故本日よく眠る。岡田連隊長[45]、三国師団長、宍戸参謀長、神谷中佐、野地大尉、酒井参謀等の見舞を受け恐縮す。入院生活は生れて始めてなり。両便の仕末には大いに厄介なり。空襲警報に退避厄介なるを以て断然退避せざる事に決す。

三月六日　曇

大畑や三谷の如き死者に対しすまぬ事ながら、予は一か八かの瀬戸際にてよく神仏の加護がある

[45] 岡田梅吉　歩兵第82連隊長（1945年2月5日の「梅原」の注28を参照）。

様に思へるなり。其の記憶の著しきもの左の如し。

1、陸大入試当時教官に対し不明予科生徒の予の入学を嘆願せる事実。

2、陸大馬術練習中落馬し馬に蹴られて微傷も負はず。見る人は予は死せりと思へりと。

3、柳原事件の件。

4、辰彦[46]の幼年学校入校及其知らせの瑞夢。

5、今回の奇蹟的生存。

何れにせよ予の善根よりも母の信仰に依る事を痛感するなり。

本日のみ空襲なし。平静なり。

病院雑感の一、入院者の看護兵は旅館の女中と同様。室の専属が可。所謂廻し主義にすれば云ひし事が途中消えて無くなること多し。

〇時計にても万能はなし。場所場所に適するものあり。同じ時を知らすものも用ひ所あり。

〇防空壕の退避等は上司に於て率先範を示すを要す。然らざれば部下が困る。消極的に解釈せらる。決心は責任を上に於て取るを要す。

◎過去の形式にこだはる者程今度の戦争にて犠牲が多い。

三月七日　曇

畏れ多きこと乍ら北白川宮能久王殿下、張家口の御危禍と予の今回の遭難とを対比し、何だか冥々の力の偉大なるものあるを感ず。人間は或る程度以上の力はなきものなり。それ以上は天命天運に任さざるを得ず。大いなる力が人間をあやつりある感あり。

神戸旅館の女主人、予の入院以来、毎日の様に何か食物を持ち来り呉れる。かかる人情は入院中特に感ずるなり。おかみ曰く、貴方の助かりなされしは全く神業なりと内藤准尉さんと語れりと。予も全く然りと答へぬ。午睡する時、夢に予の従兄、岩國包大郎、耕二、それに前岩國の義澄氏と予とが仲よく春の野辺を歩行せり。予は軍人なりしも、三人は日本服の袴様のものをつけたり。義澄氏の生存はいざしらず、包大郎、耕二両氏は死せる人なり。然るに包大郎氏は予の五原作戦出発前夜に夢現つに現はれしが、又当地に於て第二回の夢を見るも何らかの奇縁なり。予は包大郎氏が常に予を寡々の裡に助け呉れある事を感謝し且信ぜざるを得ず。

臥床中の所感。人間も捨身となれば自然他が助くるものなり。最も低き所に水の聚まるが如し。集めやう集めやうとしても低からざれば集まらず。高かれば却て散ず。故に集めんとすれば低きに如かず。而して、此処に云ふ高低は自己本意の慾念の意を云ふ。

人間危急存亡の秋は純一無雑になるものなり。但し此の瞬間を去るに従ひ夾雑物が自然に加はる。即ち「見え坊」となるなり。

---

[46] 岩國泰彦氏長男（1930-1999）1944年4月、広島陸軍幼年学校入校（岩國 pp.1-2）。

三月八日　晴

平常に於て、絶えて無き陣中に於て、家郷の夢を見る事は五原作戦、貴陂駐屯時代の経験なりしも又田隅井口で伯母達と団欒中なる夢を明瞭に見たり。此種夢は鮮明なるを特色とす。昨日に引続き不思議なる事なり。

今回の爆撃遭難事故にて、予等の持物は連絡所に在りしものは殆んど完全なるものなくなり、予は軍刀と双眼鏡のみ完全にて、手持の眼鏡二つは何れに飛びしや如何に探索を命ずるも駄目なり。内藤准尉は軍刀迄爆撃痕をつけられたり。室内に居れば素より命はなきなり。眼鏡の損害のみ事務にこたへ傷手なり。

昨日を以て愈々〇〇の決行時機決定し、本日も重ねて其の伝命に接す。飛行機の配属、其の他人員は逐次に増加し、予の連絡所は繁昌すれども、肝腎の予の入院は痒き所に手の止かざる感あり。

◎所感　現実は万事を解決す。切実なる要求（生存より発する）の前には何物も屈せざるを得ない。昨年の今頃、マ号々々[47]と称しながら果して実行する意思ありしや。之、現実が切実に要求せざるに由れり。

◎絵にも書かざる所ある故に絵の価値あり。然らざれば、写真の真実なるに如かず。省くが故に絵の価値あり。言葉に於ても然り。云はざる所ある故に言の華あるなり。

〇病院の如き患者の多くは食慾を有せず。之れに対しては、如何に物を食はせる事が問題にて、カロリーの如き問題ならず。此の点、健康人と異なれり。然るに病院の米は悪し。予は此の四分の三を余す。時々神戸旅館の飯を貰ひ来て食ふ。殆んど菜を要せずして完全に杯を平ぐ。以て「美味に食はしむ」事の必要を痛感す。

三月九日

林憲兵中佐河内に来る。軍政事項の連絡なり。本日一日平静なり。仏蘭西の仏印統治七十年を一朝に転覆する当日とは知る人ぞ知る。

午后五時頃の市街は平穏なり。尤も近頃は夜に至れば市中陰鬱なる空気に閉され、猫の子一匹も通らぬ状況なり。

本日午后「ギプス」を嵌め、予も受傷中なるも出陣態勢を整へたり。「ギプス」と云ふものは始めて其の効能を知りたる次第なるも、此の創始以来幾何の負傷者が救かりたるや。一寸したる思ひつきなり。而も人世に裨益する事大なり。

本日予は退院す。入院中の医官、植木大尉、柏本中尉を始め、多くの衛生部将校以下の一方ならぬお世話になりしのみならず、神戸旅館の女主人、其他の諸上官に心からなる御土産と親切とを

[47]「マ」は前軍司令官町尻量基中将の頭文字を採ったもの。仏印武力処理の秘匿名（『戦史叢書　シッタン・明号作戦』p.579）。

感受す。病んで始めて人の心を知るなり。

— - — - — - —

予は患者療養所にて更衣し、午后八時三十分出発。第二十一師団司令部に至り待機す。作戦計画に依れば、午后八時、大使はドクー総督[48]と会見し最後通牒を申入れ、午后十時諾否の回答を求め武力行使に移る予定なりき。

午后九時に至れば、歩八二連隊は西貢放送を誤聞し、連隊長の責任に於て武力行使を決行するの報に接す。司令部は大いに狼狽す。師団通信隊は未だ否の受信なし。三国師団長は攻撃中止を命令せらるるも矢は既に放たる。エーメ軍司令官逮捕の報あり。砲声又轟く。クヮンエン[49]に於て日仏軍は衝突し、仏軍司令部はプロレア少将[50]を三国閣下の許に派遣し、停戦を希望し来る。かれこれする間に午后十時になるも尚西貢よりの諾否の放送なし。焦慮の情大なり。シタデル兵営に侵入せる我軍は三国師団長の命令に依り一部兵舎に侵入せるも、大部は営門外に停止す。此の中途半端の作戦行動が非常なる爾後の支障を来せり。二段攻撃となり、敵に準備を与へ、我損害百五十名を生ぜり。他地区に於ては損害僅少なり。午后十時二十五分、遂に拒否の放送来る。第二十一師団及第三十七師団は直に武力発動を開始す。然るに、シタデル兵営は敵のお膳立する所となり攻撃難渋す。午前三時四時に至るも砲声断続し、我攻撃意の如くならず。司令部大いに焦る。報告は我等より軍司令部へ盛んに打電すれども、第一線よりも隣接部隊よりも報告通報は仲々来らず。報告通報の戦闘間僅少となり或は遅るるは常に云ふ所なるも、如実に之を経験せり。是は当面の最も刺戟の強きものに吸収せられ、他を考ふる余裕もなくなるなり。此の刺戟が強ければ強きだけ其の傾向あり。故に、報告通報を十分にするには求めんとする部隊より人を常置せざるべからず。

仏人の拒否は仏人の名誉の為慶する事なり。彼等又一等国民の矜持を有しあればなり。戦訓として教へらるるは強襲か奇襲かの問題なれども、奇襲の希望ある以上、万全を期して奇襲に努むべく奇襲主義を放棄するの理由なし。今回は敵情判断上奇襲困難なりしも、矢張敵に対応の準備を与へずして奇襲の成果を収め得たり。但し最後は強襲となりしもの多し。一度頭をつっ込んだることは立直しが仲々困難なり。心気転換が仲々困難なり。就中(なかんずく)突撃部署の変更の如き熱中したるものに於て然り。状況不明裡に於ては司令部の空気は不安焦燥を感ずるものなり。

---

[48] ジャン・ドクー、1940年から1945年3月9日の日本軍による仏印武力処理（明号作戦）まで仏領インドシナ総督を務めた（Duval pp.46-47）。

[49] カンエン（1945年9月13日参照）のことであると思われる。ハイフォンの北東、フランス軍の兵営や港があった（立川京一氏のご教示による『戦史叢書　シッタン・明号作戦』pp.532, 625）。

[50] 戦史叢書では、「ブロアシア少将」と記載されている（『戦史叢書　シッタン・明号作戦』p.627）。

三月十日及[51]十一日　曇

十日[52]第二十一師団の戦斗司令所は、司令部庁舎より翼賛旅館に移る。

十日午后四時シタデル兵営降伏。予は松葉杖にて現地を見る。市街戦の惨状を呈す。[53]

十一日午前、予は司令部に気嫌し旁ら、第三十七師団司令部の情況不明なる為、パクニンに至らんとし、午前九時出発二分隊の掩護兵にトラック二台に分乗しドーメル橋[54]に向ひしが、砲声がシタデル兵営方面及河岸に聞えたるを以て、西方より迂回せんとして将校集会所附近に至るや、前方に尚銃声す。依って更に左に廻れば保安所らしきものあり。予は何でもないものと思ひ其の歩哨線前を通過す。俄然営門の掩体より機関銃の射撃を受く。自動車と敵手との距離二十米なり。敵の射撃する姿を見る。運転手は停止す。依って予は突破を命ず。此の時、約十発の軽機関銃弾は予の後方に飛べり。敵の歩哨線を突破し、数百米にして停止し、車を点検するに、警戒の小隊長は頭部貫通銃創にて重傷、他の兵一は骨折（二足共）の損害を出しあり。直に兵器勤務隊に至り看護す。予は道中尚危険なるを信じ、パクニン行きを中止し、迂路を経て帰還する事とせり。此の際後方車輛を見失なひ、後捜索の結果は、車を射撃せられ、発電機の故障を生じ、予等に追及困難なりしと。予等の通過の後、他部隊数回此の歩哨より射撃を受け、七名の戦死、三名の負傷を生じたる由なり。

本日も予は危機一発にて生命を助かりしも臨時部下に二名の損傷を招けり。予は今後、軽挙妄動する事なからん事を期したり。部下に迷惑を感ぜしむればなり。

十日、シタデル兵営は午后三時半より歩兵四大隊の総攻撃を行ひ、午后四時敵は遂に降伏せり。其他、討正面の状況も次第に判明し、大体午后六時には第二十一師団担任区域に於てはラオカイのコクリウ兵営のみを残す事となれり。又第三十七師団正面にてはランソン、ドンダンの保塁は尚夕刻に至るも頑固に抗戦を継続す。其他は割合に損害が少くて第一期作戦の目的を達成せり。十一日、予がドーメル橋に至る途中進路を研究せざりし事、最大の不覚なれ。十日午后四時十六分、シタデル兵営の敵は降伏を申込み来る。仏人一流の面目論にて停戦協定と称し、且、武勲ある降伏式に日本軍は立会し、降参軍は武器を以て兵営外に出て、そこで日本軍に武器を渡し日本軍は敬礼すると云ふ案を提出し来れるも、三国将軍に一蹴せらる。仏人は飽く迄も面子を重んずる老大国民なり。然らば何故に全滅する迄抵抗せざりしか。予は足の不自由なるに拘らず松葉杖にてシタデル兵営を見、市街戦の惨烈なる一端を見学せり。並木は折れ、家は破壊し、彼我の死体は散在し、敵の兵器は散乱す。我将兵は死傷者を探し求めて担架にて運べり。多くは上体部の損害なり。狙撃に依るもの多く、是、市街戦の一特徴なり。腕の飛散せるあり。機関砲の全弾命中にて五臓

[51]「十日及」は後で挿入されている。

[52]「十日」は後で挿入されている。

[53]「十日午后四時」から「惨状を呈す」までの文章は、日付の下の余白に後から書き込まれている。

[54] 現在のロンビエン橋。紅河にかかる全長1,862メートルの鉄橋（桜井 1989 p.26）。

の破裂せる我兵あり。是を愴悽とや云はん。

午后八時頃に至り、第三十七師団吉村参謀より「ハコイ」[55]の我守備隊（一中）は同地仏軍を攻撃（一大）したるも、敵は西方より増援を受け、夕刻此の増援は到着し苦戦なり。飛行機の協力を頼む旨、要請し来る。ドンダン、ランソンの保塁は尚落ちず。ラオカイにては南岸の保塁は接取したるも、黒龍兵営は尚抵抗しあり。然れども第二日にして大勢は仏印軍主力を投降せしめ、第一期作戦の目的を達成するに至れり。

~~三月十一日 快晴~~

「ランソン」は三月十一日、夜間陥落せりとの報あり。「モルダン」中将は、軍医中将の居宅にて捕捉せり。一般仏人には日本人に対する憎悪心と云ふものは全くなし。日本人に於ても同様なるも、日本人が仏人の立場に在る時、かかる淡然たる気持にはなれざるべし。仏人に於ては軍隊は軍隊、一般民衆は一般民衆とて何等関連なきものの如く、一般仏人は日仏の衝突を見て大なる感傷を生じあらざるものの如し。従って、仏軍人が安南人或は仏人を指揮して山地に立籠り、日本人に対し「ゲリラ」戦を展開する様な事は先づ少なかるべし。

午后、逮捕仏人処理と防空情報組織再建に関する連絡会議を行ふ。総軍戸村参謀[56]来り、酒井参謀帰還する事となる。~~予は軍の戦斗司令所を偵察す~~　安南民衆安堵喜悦の色あり。

一昨日、予の警備小隊長、第八五連隊第三中隊、都筑中尉[57]は遂に戦死し、兵一（宍戸一等兵[58]）は骨折の為左脚切断せりと。

軍隊の精粗は命令一下水火も辞せず一糸紊れざる統制力に在り。五時間膠着せるシタデル兵営の攻撃隊は、突撃喇叭（三人の喇叭手）にて四大隊が一斉に立ちて突撃に移り、さしもの敵も遂に手を挙げたり。此の状を見たる師団参謀三好大尉は感激し、第二十一師団は精鋭なりと感嘆せり。

三月十二日　曇

河内市中の流民の強盗群の狼藉驚くべきものあり。銃口を天空に向け射撃なしたる程度にては制示出来ず。厳烈手段を採用せざるを得ず。本日、軍司令部の戦闘司令所を再偵察す。砲声一旦轟き、平時的秩序破壊せらるるや人間は本来の野獣性を発揮し放縦とならんとす。渉外部は仏人の相談所として多忙を極む。

昨日、戸村参謀総軍より来り。酒井参謀帰還す。

---

[55] トンキン湾に面した都市。トンキン湾岸北部における最も人口が稠密な都市で、フランスの植民地時代、第1軍管区とされていた（南洋経済研究所 p.68）。

[56] 戸村盛雄　中佐　南方軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.592）。

[57] 都筑尚　シタデル兵営内で戦死（平野 p.17）。

[58] 宍戸信夫　1945年4月17日参照。

第三十七師団地区のドンダンも本日朝陥落し、「ハコイ」の敵も東方に潰走す。本日強盗群襲撃の跡の倉庫を見たるも、一物を残さざるのみか煉瓦迄破壊され家屋裏迄はがれ、恰も爆撃跡の如し。本日大商店開店す。

三月十三日　快晴

戸村参謀と共に十時半出発。「パクニン」の第三十七師団司令部を訪ふ。途中「ドーメル」橋に於て、仏婦人三人歩哨とがやがや云ひあり。証明書を見ればダップコー[59]に帰還する者なり。自動車に三人乗せて呉れと云ふ。此のシャーシャーしたる態度に一驚す。日本婦人なれば敵国人の軍人には寄りつかざるべし。此の辺も日本人と外人とは異なり、外人は個人主義なり。軍人は軍人、我々は我等、戦争は戦争、個人生活は個人生活として案外平気なり。米軍の硫黄島の損害も米人に取っては左迄響かざるべし。此の女は軍人の家族なりしが如し。第三十七師団司令部に至れば左の如き教訓を得たり。

・奇襲は全正面時間の統制を要す。然れども強襲の統制は不可なり。却て各個に機を利用するが良し。（大体の統制を要す）

・報告通報は完備せるものを行はんとして時機遅るを一般とす。又、報告に信務の監督点検を伴はざれば速達善送は出来ず。

・此の師団は実に怪しからぬ師団なり。軍にてあれだけやかましく云ひしZ時（突入開始時刻）を全然厳守せず。師団司令部の統制は全然行はれず。各部隊長各個に行はしめあるが如きは非常なる悪弊なり。

「シタデル」兵営或はランソンの攻撃に於て、神の如く忠誠勇敢に働きたる日本兵にして、此の明号作戦以来、河内市内に於て仏人婦女を強姦したるもの数件ありと。神の如き日本兵も、指導監督不良の時は野獣の如くなるなり。生かすも殺すも指揮官の指導一つに在り。

三月十四日　曇

敵機の爆撃は予想の如く大ならず。心配したるドーメル橋は尚大丈夫なり。本日、戦闘司令所を再偵察し大体の位置を決定せり。

三月三日、爆撃当時の予等の所時品を今日点検す。予の水筒は弾痕数多あり。内藤准尉の外套は寸断に引きさかれあり。室内に居れば到底命なき事必然なり。廊下に居るも、もう二、三秒早くも遅くもあらんか予は既に此の世の人に非ざるなり。天佑神助を信ずると共に人間の運命の不可思議なるを嘆ぜずんばあらず。

---

[59] ダップコウ、バクニンのやや北に位置する都市で、フランス軍の外人部隊が駐留していた（立川 p.28）。

三月十五日　曇

仏蘭西人は粘りなし。又、個人主義なり。「エーメ」軍司令官の如きニコニコして宍戸参謀長に会ひたりと云ふ。又、家内より手紙を呉れる様、再々通訳に云ひし由。一旦自己の国家社会に対する面子が保てなば、後は個人生活に没頭すと云ふ外人の心理にして、日本人には一寸想像が出来ざる事なり。

事変決行後重慶軍の進攻、敵の空爆、米軍の上陸等矢つぎ早に起る位を覚悟せしもそれ程急速のテンポにては来らず。人間の思考は現実より急テンポに走るものなり。独逸の屈服の如きも想像より遥かに遅れあり。

三月十六日　曇

個人的勇敢なるも統制に服せざる勇敢は害ある事あり。各兵団に於ても、勇猛なるも大同団結内の協同動作に則せざる勇猛は却て害あり。今次、明号作戦開始のZ時は第三十七師団に於ては毫も遵奉されず。更に第三十七師団に於ては、ランソン地区に於て仏人高級将校を招宴中逮捕せりと。皇軍としては嘆はしき事なり。

本日は貨物廠出張所と自動車廠出張所とを視察す。東京に於ては年産米百十万屯ありて、内十万屯は広東へ移出し、巨利を博し不足十万屯を南部印度支那より補給しある故、自給自足の域に達しあり。然るに米の不足なりと云ふは、仏印軍の貯蔵によるものにして明号作戦と共に米価は一挙に下落せり。参謀要務の基礎は数字に在り。数の梯尺を忘るる勿れ。

三月十七日　曇

「ランソン」に連絡に赴き、後「シタデル」兵営を視察す。仏人千五百名と安南人千名の俘虜を収容す。彼等は何時戦闘が行はれたるやを察知する事困難なる程、落ちつき洒然としあり。外人は一般に戦争に関し、一種スポーツ式に軽く考へありて、日本人の如く深刻なる意識を有せざるものの如し。彼等は勇敢ならずと云ふべからず。彼等は戦ふ時にはよく戦ふも、一旦降伏し、或は一旦和議を結びたる上は、執着心なく生を楽しむものなり。此の辺は日本人の想像のつかざる恬淡さを有す。故に彼等の平素を見て、直に戦争に弱しなど判断は出来ざるなり。

人情に国境なし。予が先日、仏婦人三人をドーメル橋よりダップコー迄送り届けたるが、之れが仏人間の評判となり、感謝しある由。之をランソンの鎮目部隊のダマシ討と対比せば如何。大東亜の聖業は日本人の真面目化、則ち皇道精神の体顕に俟たざるべからざるべし。皇道精神の具現なくして大東亜戦の意義なし。戦って敵に尊敬せらるる武人になるべし。仏人中にても、ブロジャー大将の如き、今尚日本軍間の尊敬の的となりあり。同じ将軍にても、石田栄熊中将[60]の如き真に私

[60] 石田栄熊　中将　南方軍野戦鉄道司令官。1945年6月1日～1945年8月27日まで第303師団長（『日本陸海軍総合

を離れたる立派なる人なり。予の如き二度最近死線を越えたるも、一向人間的に向上したるを覚えず。時間の経過と共に元の木阿彌の如くなるを覚ゆるなり。

仏人俘虜を尋問せし所、異口同音に安南人の盗癖の深きを云ふ。実に便所施設と盗癖とは一国文化のバロメーターとも目すべし。又、仏人の言に、安南兵は七割は信頼し使用し得べしと。

日本人も道義的に国際的に大東亜を経綸するの素養を貯積涵養せずして、此の大戦を惹起するに至れり。支那に於て、比島に於て、マレーに於て、仏印に於て、日本人の信用の厚薄が治安及爾後の作戦に至大なる影響を及ぼすに至れり。此の戦争の教訓こそ、日本人の国際的教養を向上せしむる最大の資料なり。

三月十八日　曇

憎き敵を討つ事は易し。友好の友を裏切る事は情に於て忍びず。明号作戦などで論功を賞せらるるが如き片腹痛き事也。友に裏切らるるは尚ほ可。我友を裏ぎらざるを得ざるに至りては人生の悲惨也。かかる心情に於てモルダン、エーメの取扱は、日本人に対し日本人ながら心外の至りなり。日本人も今少しく人道的に覚醒せざれば、世界の人心を得ざるべし。東洋の君主国は明治以後堕落せり。

本日北部各兵団（第二十一、第二十二、第三十七師団）の参謀を会同し連絡を実施せり。兎も角も顔を会し見れば和ごやかになるなり。

総軍戸村参謀、其他新進の幕僚に接しての所感は、若い者は仕事はよくやるが統率心理、即ち義理人情の方面に於て到らざる所あるを感ずるなり。此の辺は年の功とも云ふべきか。

三月十九日　曇

P-38、第二十一師団司令部上空を偵察す。近く大規模の爆撃あるべし。予は之を目撃し、先般の爆撃もかくやと想像す。

本日「トン」を視察し、稲井連隊長に会ふ。砲兵隊長は戦争は下手なり。仏人のゲリラ戦は自国領にて行ふわけにてもなく、安南人は排日思想を有せざる為、支那に於けるゲリラ戦、或は仏本国のゲリラ戦の如き執拗さは考へられず。対日感情も左迄先鋭化したる結果にあらざるを以てゲリラ戦は我民心把握さへ良ろしければ、早期に終息し得る見込あり。「トン」を通過する時、仏軍人の婦人家族が幼児を抱き引越しせる姿、荷車を押す上品なる仏人婦人を見て憐れを催したり。彼等の夫は恐らく戦死せるか逃亡せるかなるべし。

本日、三国将軍、軍よりの電報に痛く心傷を害し、予に憤慨せらる。電文は簡単なるだけ、余程相手の受け取る気持を汲んで起案せざるべからざるなり。

事典』p.382、1945年3月20日参照）。

三月二十日　晴

軍司令官、幸道参謀[61]、榊原[62]参謀到着。

石田栄熊中将（野鉄司令官）の仕事に対する熱心さと其の誠意には人が引きつけらるるなり。将軍曰く、仕事をするには自ら気狂にならねば他の者も共鳴して来れぬ。予は仕事の気狂を以て任じあるなりと申さる。仕事に関しては、上下の階級の区別なく誠意を以て当らる。誠に敬仰に堪へず。

上官となりて忠諫の道を自ら塞ぐは不可なり。将の失徳なり。

神谷中佐の話に今度の事件に於て感じたるは、母子の情が人情に於て一番強烈なる事なりと。そは仏人にして子と母を分離して此度の事変に遭ひたる人にて、母親は如何なる危険に遭っても子供を放って置くわけには行かぬとて危険を毫も意に解せざるなり。此の点、母親の子の為の行為は男性よりも勇敢なり。仏人に於て然り。古今東西母子の情の深刻なる、母の子の為に強きは同一なり。

三月二十一日　曇

近頃は、毎日三、四回は空襲にて待避せしめられ、仕事は麻痺状態を呈す。

午前、光兵団長の戦況報告あり。

午后、軍司令部予定地を軍司令官視察せらる。各種の方面に意慾の旺盛なる土橋軍司令官を満足せしむる事、仲々容易ならず。軍司令官の討兵団の討伐作戦に干渉指導せらるる事急にして、これにては隷下兵団もたまらぬならん。早くも幕僚間には河内（ハノイ）を去り田舎に引越す案、抬頭し来れり。各兵団協同連繋も同情心と無私の心あればうまく行くなり。本日、第二十二師団に対し第二十一師団、第三十七師団より鹵獲（ろかく）自動車を貸渡する事を連絡所のキモイリにて成立せしめたり。

夕刻幸道大佐、神谷中佐、林憲兵中佐、榊少佐と予と河内に於て会食す。

硫黄島守備隊は一昨日最後の総反抗に出でたり。

三月二十二日　曇

「パクニン」に至る。

其他、本日の特記すべき件は、大使官邸に於ける大使府筋と軍司令官筋との会食及中川正金支店長[63]と予との会談なり。中川支店長は熱血男児にして鈴木京大佐[64]を支持し、大東亜戦直前に於て帝国の仏印に於ける作戦準備に大なる貢献を為したる人なり。氏の言より、銀行員も支店長位になれば政治的手腕を備へあり。法令規則を越へたる腹が必要なり。氏は規則に合ふや否やを考へる内は銀行事務員にして、必要か否かを考へるが支店長以上の考へ方なりと。正金の支店長を

---

[61] 幸道貞治　大佐　1945年6月2日より、河村参郎中将に代って第38軍参謀長。（『日本陸海軍総合事典』p.366.）
[62] 榊原正次　中佐　第38軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.594）。
[63] 中川武雄　横浜正金銀行ハノイ支店長（中野 p.33）。
[64] 鈴木京（たかし）（1901-1976）1941年11月より1942年6月まで南方軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.87）。

やる様な人は年配も経験も経歴も相当なるものなり。人物思想も指導階級なり。氏の為せる事は全く銀行事務より見たる法令規則を超越し違法ばかりなり。然れども、国家の為、日本の為、必要なりと考へたる事は思ひきって為せり。之が為、帝国陸海軍の作戦準備に一進展を来せり。

三月二十三日　曇

「ランソン」の攻撃後、敵愾心の余り鎮目部隊は佛人捕虜を殺したる事件あり。戦場に於ける感情の迸(ほとばし)りは兎かく激越なるものなり。

「人は己れを知る者の為に死す」「己れを知って呉れる者の為に働く」の心理は、人間の生長と共に旺盛となるものなり。

本日海防(はいふぉん)の皆藤連隊の慰霊祭に軍司令官臨席せらる。橋梁破壊二箇所の為、二時間を要す。

三月二十四日　曇

平田師団長、河内に招致せられ、本日到着。予は予の警備小隊長として戦死せし都筑中尉の件、お詫び申し上ぐ。（尚、此の際同時に負傷せし宍戸信夫一等兵の負傷の経過は良好なり）

夕刻、河内にて、第二十一師団参謀小山、伊藤、三好等と会食。幸道、予、榊原、神谷、今井海軍中佐列席す。

予の如き九死一生を経過したる者は、「生」の有り難味をつくづく感ずるなり。一時間にても一刻にても生きる事は感謝なり（苦痛の生活は別として）。他の個人を満足せしむる事項は贅沢の部類なり。

本日、爾後の作戦計画を佐伯[65]と研究す。

印度支那に対する米軍の上陸は、予は無きものと判断す。蓋し、戦場の焦点は日本本土に接近せる地点に行はれあるに対し、印度支那は迂遠の地なればなり。

本日、大使官邸に於て三国、平田両兵団長と軍司令官の会食ありて陪食す。席上、精神の極度の緊張の際は、自己の危惧する事が幻覚として現はるる種々の例話あり。

予の見解に依れば、米軍戦法は希望と可能とを調和する必勝型の戦法なり。即ち、敵の最も痛き事、或は配備の弱点を衝かんとして、此れを可能ならしむる如く技術的準備を整へ、此の準備完了迄は絶対に動かざるなり。

三月二十五日　雨

兵団長会同を三国閣下の官邸に於て行ふ。軍司令官の思想は現実に立脚し寸分の隙なし。観念の遊戯に陥らず最も現実に立脚す。一面、計画性と思想に物足らぬ感なしとせざるも、現実と遊離

[65] 佐伯語作　中佐（当時は少佐）、第38軍参謀（作戦）（『戦史叢書　シッタン・明号作戦』p.551）。

せざる所に特色あり。

夕食の会食はメトロポールに於て兵団長随行幕僚の会食。仏人の顔を見る時、我等をうらめしそうに眺める様に見ゆ。仏人に於ても、成年男子一匹は尚ほ生活力あり。子供を擁したる夫なき女性の如き、今後如何なる生活の道を辿るならん。彼等の心情身辺に思ひを馳すれば、断腸の感なき能はず。兵は生死存亡の道察せずんばあるべからざるの理を痛感す。日本陸軍も満州事変以来、武田勝頼流に流れたるは［徳富］蘇峰翁の指摘したる所なり。調子に乗れば遂には木から堕ちる事を覚悟せざるべからず。

本夕、予の自動車は安隊[66]の自動車と衝突す。幸い人間に事故なし。予は二月自動車疾走中車輛を飛ばしたる事あり。西貢より出張以来、弾丸の死線を越ゆる事二回、自動車事故二回なり。而も何の危害なかりき。

三月二十六日　曇　雨

琉球島の一角に敵軍上陸す。我等本土との遮断は愈々覚悟せざるべからざると共に、印度支那に対する米軍の上陸意図は愈々稀薄となれり。

三月二十七日　晴

佐伯、国富参謀[67]も揃ひたれば予も非役となれり。

家庭に通信附し度くも、今や連絡も不可能に近し。人間の本能より子供に会ひたく思ふなり。

栴檀の根を煎じたるものを蛔虫駆除薬として呑む。味は全く「マクニン」と同様なるも苦味あり。早速利き目あり。

三月二十八日　晴

敵は落下傘を投じ残存仏印軍を救済し始む。北辺漸く多事を加へんとしつつあり。中央防空警報所を視察す。河内周辺一〇〇粁圏内に於て、恢復率は八割なり。国境線を含み四割乃至三割程度の恢復率ならんか。

今次、明号作戦を経験して、予は感じたり。そは歴史上青史に止むるものは、表面的辻妻を合はせたるもの多く、真相或は裏面史と云ふものは隠匿せられ易し。又、隠匿せざれば、之を公表せば大変なる騒ぎとなるなり。外交交渉と武力行使との時間関係（所謂Z時の不履行問題）、或は、ランソン仏人俘虜〇〇事件の如き是なり。斯くの如き事件の内容は、往々巷間に漏れ口舌に依りて伝はることあり。故に「デマ」と云ふものの外、往々真相なるものあるを以て一概に巷間の噂を否

[66]「安部隊」「安機関」とも称された明号作戦のために編成された特殊工作部隊（Tachikawa p.102）。
[67] 国富勇　少佐　第38軍参謀（兵站）（『戦史叢書　シッタン・明号作戦』p.551）。

定すべからず。

仏印に於ける仏人軍人の俸給は最低九十円にして、妻帯する時妻に百円の加俸あり。又小児一人五十円にて、子供の増加する毎に此の加俸が加はる制度なり。率の問題は別として其の計算の方式は面白し。植民地軍に於て特に然り。少尉にて独身二五〇円位なりと。さて此の後始末が問題となりつつあり。

三月二十九日　曇

琉球に於ては、彼我上陸の攻防作戦続行せらる。正に皇国の運命を制する作戦と云ふべし。余想は我れに非なり。

ビルマ作戦に一年間の苦戦を嘗めたる大越兼二大佐[68]曰く、戦陣の体験は、予をして今後の処世方針は愚直なれとの教訓を得たり。是、予の従来の処世と百八十度の転向なりしと云へり。予は過般再度の危険を体験し、別段人生観に変更を生ずる様な所感も生ぜず。是、予の処世方針が従来より大越の教訓に近きものありしが故か。但し、生物の生命を愛護尊重するの念慮は、此の体験を画して旺盛になった様に思ふ。

三月三十日　曇

仏印の武力行使の結果に対する余想は、現在の所、我の考へよりも楽観すべき状態である。之は一面太平洋戦局が我本土近くに動いて、仏印が第二義的となり敵の関心を牽く事が薄くなったに由る事もあるが、仏印軍の抵抗が我々の想像よりも弱かった。即ち、ゲリラ戦が組織的に未だ行はれぬと云ふ点に在る。併し、事実は想像の如くもない極端の中間に在ると云へやう。又、一面事実（現実）の進行は想像よりも緩徐に進むと見るべきであらう。人間の前途に対する判断は荒削りで、現実の緻密さと迂余曲折性がないと云へやう。

今日は第二十二師団の堀田参謀長が来られたので、ゴーチエ総務長官の官邸に引越された軍司令官の招宴があって幸道、国富、宍戸、及予は之れに陪席した。土橋司令官の細心周到なのには感心の外はない。予も今迄気がつかなかったが、洋食で酒を注ぐのは其の人の左肩の方よりすべきもので、膳や皿を運ぶのは其の人の右肩よりすべきものだ。

尚、今日感じたが、世の中の事を良否適否を判定する基準の一は「調和」と云ふ梯尺である。「調和」が良いか悪いかと云ふ事は、良否適否を判定する非常に大きな梯尺である。衣服の身体との調和、家具と部屋との調和、陣地と兵力との調和、夫婦の調和、生活と職業との調和、所謂「らしさ」と云ふことは調和に外ならない。故に、此の調和の梯尺と云ふものは非常に大きな着眼点である。

---

[68] 大越兼二（1903-1973）大佐　1943年7月から1944年9月まで第18師団参謀長を務めた（『日本陸海軍総合事典』p.35）。

病気も一度はして見ると色々の経験が湧く。人間の思ひやりの厚薄などよく観察出来る。予の今回の遭難に於ても、心から同情するものもあれば、もう一ヶ月も立ったのに何時迄病人づらをしてゐるかと云ふ様な態度を取るものもある。

三月三十一日　曇

聖賢の書を読む事は死ぬ迄必要なり。年齢行く程精神的になると云ふものの、又反面巧利的精神と世故も長(た)くる故、純真を失ふ傾向ある故、之を矯正するの要あるなり。

世の中の事は結果論に支配せらる。此の結果論支配が極端に走る故、反動として動機論が抬頭するなり。然れども、未だ結果論に対抗する力なきを如何せん。明号作戦開始時刻の如き、結果が良かりし為、笑ひ話となりあるも、若し外交交渉のみにて埒明くなれば如何なる責任追及問題生じたるや測り知るべからず。

明日は辰彦が二年生になる日なり。愉快なり。人情とは不思議なものなり。時々無暗に小供に遭ひ度気分が湧く。生物の本性なり。

四月

四月一日　曇

今次、明号作戦に於て各兵団の鹵獲品の数量の報告を求めつつあるも、各兵団は事実討伐作戦に忙しき点もあり、又、自動車、燃料等の鹵獲数量は或る程度隠匿する傾向もありて、真相の捕捉に手を焼きある次第なり。予は中支作戦に於て、軍隊と司令部間に於ては「信義」を脈絡の基調とする事を感ぜしが、今に於て再び同様の所感を生ずる也。実体を握れる軍隊を信頼して其の申告を信じるより策なき現状に於ては、平素より司令部と軍隊とは真に親子の間柄の如く、何のわけ隔てなき信頼感を以て繋がれあらざるべからず。

土橋司令官は口喧(やかま)しき人なるも、過去の過失を追及していぢめると云ふ様な点は毫末もなき点、実に長所なりと信ず。喧しき人にて、過ぎし過失や失策に対し許さざる人あり。過去の過失に対し感情を混ずるは、常人の犯し易き常。土橋司令官は此の点に於て、実にさっぱりして居らるるなり。

四月二日　晴

敵虜、遂に琉球本島に上陸を開始す。皇国の危急、今日より大なるはなし。情報に依る我航空力及水上艦艇の戦果は、敵の物量の十分の一にも達せざるが如し。唯、天を仰いで切歯扼腕するのみ。敵は我守備兵力に対し、三倍の兵力を以て進攻を企図するものの如し。過去の各島嶼の攻撃皆然り。今、沖縄本島の我守備兵力を二箇師団として、敵の攻撃兵力は六師団（一四〇〇隻）なり。硫黄島は一師団半に対し四師団（八〇〇隻）なりし。所謂攻撃の必成の兵力なり。我航空部隊と水上艦隊を以て一四〇隻を撃沈破せりと雖も、一割の損耗（実際は兵員救護出来たる以上〇・五割以下の損耗なるべし）を与へたりと雖も、遂に敵をして欲する所を行はしむるに至れり。

四月三日　晴

沖縄の戦局、手に汗を握るばかり。第二十二師団、第三十七師団の沖縄出身の兵は仕事に手がつかず、ニュースに聞き入ると云ふ。さもありなん。身を切らるる思ひとは此の事なり。

道路構築計画進む。

夜、湯浅氏の宅にて幸道大佐及予、森少佐、御馳走になる。土橋軍司令官の公平なる事を湯浅激賞す。此の点実に然り。安南婦人は夫に従ひたよる念慮強く、亭主を大事にするとの事なり。大東亜政策は血液政策を根底とせざるべからずとは幸道大佐の持論にて、予も夙に同意し、且、主張する所なり。唯、実行方法が画期的なるだけ困難なるのみ。要は其の具体的実行方法の如何に在るのみ。尚、久し振りに人情美談を聞く。国境を超越し人情は人心を感激せしむ。

四月四日　晴

第二十一師団小川参謀長の官舎に予及森少佐同宿す。森少佐は仏蘭西の留学生出身故、仏国の観察は仲々うがちたる所あり。例へば、仏語は日本の上方語の如く最も洗練せられたる円滑且温雅なるものなり。「キャー」と云ふ音はなし。又、語尾に「ト」と云ふことを略すは上方語と相通ず。仏人は数理に長じ物を鑑識する目を持つ国民なり。勘の発達したる国民なり。但し、音楽の霊能は独逸人、和蘭人に及ばず。彼等は老成の国民なり。年齢にせば隠居的国民なり。故に、向上発達なるものなく、闘志なく、生活の其の日々を享楽する国民なり。之に比すれば、アングロサクソンの米英は、五十四十の働き咲り、油の乗りきったる国民なり。仏人に於ては、人の振り見て我が振り直せと云ふ事は全然なし。人は人、我れは我、我れには我れの進む道ありとて、他の人の長所を取り入れる向上心も功名心もなし。老成せる国民の特色茲に在り。彼等には既に反省と云ふものなし。彼等は行きづまりたる国民なり。生長しきりたる国民なり。独逸の如きは尚青年の闘志、努力、勤勉、向上心、未来に対するあこがれあり。その反面未完成の所あり。固まらざる所あり。予は森少佐に日本人を外国に比し如何に感ずるかと云ふ質問を出したるが、少佐曰く日本人は底力のある国民なり。明治維新以来七十年にして、外国人の真似の出来ぬ急速なる進歩向上を為せり。此の点に於て最も力を有する国民なり。然れども、其の発達の程度は尚欧米列強に比し及ばざる所あり。然るにも拘らず、日本の国内には誤れる偏狭なる国粋主義なるもの昭和時代に抬頭し、外国の長所を排撃し自ら耳を塞ぎて小さく固らんとする傾向あるは、日本の為に悲しむべき現象なり。日本人はもまれあらず。生活に夾雑物多し。社会道徳に於ても科学に於ても、非合理的未発達の点多し、云々。

仏人は「美」とか芸術は、最も小なる物量を以て目的を達し得る所に在りとなす。無駄の無き簡素を以て芸術なりとなす。又、仏人は物の分配調和の取り方に、美術芸術を見出しありと云ふ。

尚、森少佐は面白き事を云へり。仏蘭西の高等教育（美術学校教官に就て云ふ）は、筆記は一切行はしめず、教授の口より学生の耳に入れる主義なりと。筆記する主義は一度物に頼より、又物を介したる知識となる時はすぐに口なり耳に移らず身につかぬなり。之れに反し日本の教育は、万事「ノート」を取る主義なるを以て、学生は一の刀筆吏に過ぎず、受講は真剣に非ず。之に反し、仏国の講堂は真剣そのものにて、一言も聴き漏さずと云ふ気になるなり。此の際のヂェスチア豊かなる教授の教授振りが妙に印象に残れりと。正に日本の学校教育に於ても省察を要する問題なり。真正の教育は教育者、被教育者間の霊の交流ならん。

四月五日　曇

ハノイ－サムヌア－パクサン道の構築の主任参謀となり忙し。苦慮中なり。

沖縄の戦局ははかばかしからず、敢然、国難に赴くは正に今日に在る。而も拱手為すを得ず。

遺憾千万なり。寧ろ沖縄の戦士を羨むべし。

神谷中佐より仏印に於ける仏人安南人の俸給の差の一例を聞く。左の如し。安南二等兵、月二十五円、妻の手当三十円、子供一人につき六円。之に反し、仏人二等兵は月九十円、妻手当百円、子供四十円にして、子供一人を増す毎に九十円以上累進的に増加す。如何に仏人の子供を愛護するかを知るべし。少尉は仏人にて七五〇円、妻二四〇円、子供一人二〇〇円なりと。

夜、予の官舎にて幸道大佐、森少佐、吉沢主計少尉、寺田法務中尉等とオハギを食ふ。美味なり。十数年斯くの如き経験なし。我等単（ヒト）りもったいなし。

四月六日　雨

ソ連、日ソ中立條約を廃棄し来る。小磯内閣更迭す。一として国歩艱難を顕示せざるものなし。予はソ連の動きを恐る。何となれば国際的天佑として、予はソ連の日本に対する出方が偶然の理に依り、我国に有利に進展すべきを信じあればなり。我が予感が正しきや、或は、ソ連の出方が我れ非なりや。

本日、道路作業の命令発令。人間に責任を持たすと云ふ事は非常に力の生ずるものなり。夜間醒めて思ふ。孔子の仁、キリストの博愛、釈迦の慈悲、日本皇室の大御心は皆、帰する所同一の根本思想なりと断ず。万物を慈しみ育つ事なり。宇宙生々の活力とも云ふべく之を人間の所作に云ひ直したるに過ぎず。

予は三月三日の空爆以来眼鏡を失ひたる為、爾後、素眼となれり。最近読書を継くる事なきにもよるも、既に一ヶ月にして慣れたり。唯、読書を継くる時に疲労迅速なるを覚ゆるなり。

四月七日　雨

同盟ニュースにて田中鉄次郎大佐戦死し、少将に進級せるを知る。思へば、我出身連隊歩三九の同僚は殆んど悉く戦死し、予独り生残れる感あり。宮崎、小島、加藤、野條、山本は満州事変支那事変に於て、右岡、田中は大東亜戦に於て、戦没す。感慨無量。予も又、此の三月には危く戦死する処なりしなり。何の因縁（ゆか）りで予独り生残れる。予や奮励せずして可ならんや。

道路作業計画も逐次進展しつつあり。

内閣改造せられ、鈴木貫太郎大将、首相となる。若きも老も一丸として決死国家の存亡に挺進、国難に赴くべきの精神を振起するのみに意義ありと為す。鈴木大将は七十九才なり。一体に局面の収拾の如きは老人が適役なり。若き者の風呂敷を広げたり、失策したるものを鳧（けり）をつけたりつくろうたりする事は、老人の引受け役と云ふ事も考へらる。内閣を更迭するは、外国に対しても出征軍人に対しても感じのよき事に非ず。それだけ国歩艱難を示すのみ。

四月八日

凡有欠点を差引き、土橋軍司令官は大なる人材なり。然り。一の偉材たること間違ひなし。着眼のよき事には敬服す。

沖縄列島方面に彼我の決戦的海戦ありしものの如し。我海軍は全力の艦艇を潰しても決戦せざるべからず。沖縄を取られなば海軍の存在（水上艦艇）は意義なし。

四月九日　曇

予の脚も「ギプス」を取り得る頃とはなれり。本日、久方振りにてパクニンに行く。行程、自動車にて一時間、内地の姫路神戸に相当す。思へば仏印は広き哉。梯尺が大きくなる。

沖縄附近の戦果稍満足すべきものあり。V1号、V2号等にて対英作戦を遂行し、或は、潜水艦戦術に決捷の鍵を求めたる独逸流戦法は己むを得ざるとするも不可なり。総合戦力に依り勝を求むる方式ならざるべからず。而も、其の主流を為すものは数と精神となり。過少なる新奇兵器も、数を伴はざる新戦術も、大勢を決する力に乏し。

第三十五師団長長野［祐一郎］中将ジャバ軍[69]司令官に栄転せられ、本日メトロポールに於て我等関係兵団幕僚の招宴あり。我終日忙し。

四月十日　曇

土橋軍司令官より統率上の注意を賜る。（統率指揮の経験中に記入）

予の負傷せしより一ヶ月を経過したれば、予が入院中世話になりし主治医樋村中尉と患者療養所長植木大尉とをメトロポールに招宴す。所長は都合により不来なる故、連絡所の内藤准尉と渥美軍曹とを陪席せしむ。考へ見れば、予の九死一生の危険を経験する事四度なり。若くは大失策、大なる問題を生ぜんとして免るる事一、二回あり。予は真に天佑に守られたるものと云ふべし。否、予が天佑と一体となり得る心的修養に努力しある賜なりとも云ふべきなり。思へば感謝感激の一日なる哉。

予は、今、織田信長に仕へある如き心境を以て、土橋司令官に仕ふるなり。両者人物に規模の大小あるべけれど、性格に於て共通点甚だ多し。人を救ふものは唯（タダ）一の信実なり。

四月十一日　晴

シタデル兵営の安南国民軍の編成状態を視察す。安南人は日本兵がなぐる事に対し非常なる反感を持つと。仏蘭西人は少しもなぐらず。日本兵は気短にてなぐるなり。日本人の気短は異民族統

---

[69] ジャワ島の陸軍第16軍。長野祐一郎中将が1945年4月7日より11月3日まで司令官を務めた（『日本陸海軍総合事典』p.364）。

治の為、一の癌を為す。

沖縄方面に於ては、過般の戦果ありしにも拘らず、尚、敵艦は陸上を砲撃し百数十隻の船団は沖合近く遊弋すと云ふ。日本軍の攻撃は後がつづかず、九仞(きゅうじん)の功を一簣(いっき)にも欠く事多し。縦長的戦力乏しきは何よりも遺憾なり。

四月十二日　晴

道路作業隊長、能勢大佐[70]と共に「トン」に赴き、稲井砲兵大佐を訪ひ、安南国民軍の編成を見る。中尉安南人が大隊長なり。安南人及仏人共に花柳病特に多しと。

能勢大佐曰く「徳は力に勝る力なり」と。真に然り。連隊長も四年やれば人心倦むなり。部隊の将校も吸収力もなくなり新隊長を欲するなり。故に隊長は二年位が可なりと云ふ意見なり。

予の過去の見聞体験を通じたる日本人観に依れば、日本人は素質の優秀なる将来性のある民族なるも、未だ々々鍛錬修養向上努力を要する点甚だ多し。未訓練未修養に伴ふ欠点甚だ多し。日本人は独善に止まるべからず。独善こそ日本人の進歩発達を停頓せしむるものなり。外国の長所も大いに学ばざるべからず。内省も大いにせざるべからず。例へば、仏人の製造に係る地図一枚を見ても、日本人は未だ測量に於ても仏人に及ばざるものあるを発見するならん。日本人は須(すべか)らく自彊不息を標語とし、日に新に月に新に向上発展を遂げざるべからず。

四月十三日　晴

四十日目にしてギプスを脱す。歩く事の出来る事が幸福なり。子供には立つ事が喜びなりと同様、始めて松葉杖をつき歩く真似をして、健全なる人が歩く事を羨み自ら歩く真似の出来ることを喜ぶ。人は生きて居る事その事が感謝せらるべきものなり。立つ事、歩く事、食へる事が感謝せらるべきものなり。甘く食をする事を得るが如き実に幸福なるなり。五体の健全なる事それ自体感謝すべき事なり。不自由の足を抱いての予の所感右の如し。

本日、能勢大佐と共にシタデル兵営の安南国民軍の編成を見る。モイ族[71]は隊長のみ仏語を解し、隊長が土語を以て通訳するなり。千二百人の最高階級者は准尉なり。之が第一大隊長なり。彼は能勢大佐の訓示に対し御趣旨はよく了解せり。家族の事が心配なるを以て之れのみよろしく頼むと云へり。人情に就いては人種を通し変りなし。

---

[70] 能勢潤三（1893-1968）1941年5月14日から1945年6月4日まで歩兵第85連隊長を務めた。この連隊は1945年1月から第38軍に編入され、2月には第22師団から第21師団の指揮下に入り、明号作戦に参加した。3月末からはラオスでの自動車道建設に従事した（『日本陸海軍総合事典』p.122、平野 pp.54, 64-66。なお、連隊長を務めた時期が両文献で異なっているが、連隊史（平野）の記述に従った）。

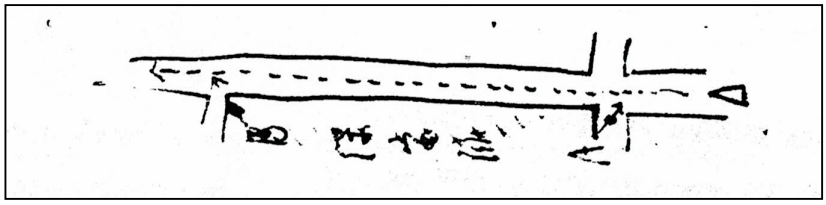
[71] ベトナムに居住する少数民族。言語はオーストロネシア語族に属し、人種的には原マレー系とされる焼畑農耕民（合田 p.141）。

四月十四日　晴

軍司令官、長野中将、松本大使、飛行機出発につき朝ジャラム飛行場に見送りに行く。

神戸旅館のおかみは予が入院以来絶えず見舞に来たり、土産を持って来たり、すしを造りたりして呉れる。河内の女傑は此のおかみと早川バーのマダムの二人なりと云ふ。其他仏印にては虎御前、横山老人、石山ホテルなど有名なり。

つくづく三月以来の予を顧みれば、予が今日生きて居る事は不思議なり。三月三日の爆撃は更なり。十一日の保安隊の狙撃事件の如きも、予の車の後より通過せんとしたる患者収容「トラック」は運転手を合し八名を射殺されたり。若しAの地点のみならずBの地点に敵が配備し居りたるならんには、Aを突破したる予の車はBに於て当然射撃を受けざるべからず。又、敵側配備の常識より云ふも、Aに機関銃を備へつつBの偶角にて機関銃を備へざるが如きは不可解と云ふべく、全く敵の過失に属することなり。Bに敵が機関銃を備へあらば予の生還は全く考へられず。して見れば十一日の狙撃事件のみにても、予の生存は奇蹟と称するの外なし。予の今日生存は天意の然らしむる所と考へざるべからず。予の救道心予の天下国家に奉仕する思念、所謂敬天愛人は、今次、明号作戦前後以来頓に熾烈となりつつあり。



［岩國氏が描いた状況図　左からＢ　保安隊　Ａ　と記されている。
縦書きの原文を横書きに改めたのに伴い、縦の図を横にして掲載した］

四月十五日　晴

神戸旅館に於て、予及森建秋少佐、内藤准尉を招待し呉れ、鋤焼の御馳走になる。始めて、夜、散歩す。蓋し四十数日目なり。

佐藤賢了中将[72]光兵団長として着任せらる。

四月十六日　晴

予の四十二回目の誕生日なり。

昼食時、佐藤中将と官邸に於て会食す。容貌体格など、人は不問に附するが如きも、実は無言

[72] 佐藤賢了（1895-1975）中将　1945年4月から第37師団長、12月、A級戦犯指名、1948年11月、終身刑宣告、1156年3月、仮出所（『日本陸海軍総合事典』p.70）。

の力を有するものなり。真田穣一郎[73]、佐藤賢了等の要職に用ひらるるは、一は其の神経的ならずして線の太く見らるる点にあるべし。人の長となる人の体格容貌は、一種別なり。秀吉の如き容貌体格の貧弱なるものは異例に属す。

予は予の家庭中長齢（寿）者なり。予の兄弟姉妹に於ては予の如く長命なるものなし。而して、予は兄弟中最も宗教心厚く霊感の体顕者なりと云ふべし。

四月十七日

土橋司令官曰く、道路は最初一回仕上げ、次に［車］両に痛めつけられ、後補修して初めて使用し得るに至るべしと。道路構築隊長能勢大佐にさとさるるは、人間の育成に於ても同様と信ずるなり。或る程度形が出来る迄は之を慈育愛撫し、次に徹底的柑槌を行ひ痛みつけ、後更に之を見直ほし指導すべし。人間個人の進歩に於ても、松陰先生の説く所の道を行ふこと十年にして、敵ありて大いに苦しめらる後、反省を重ね、世に謝し人を許し始めて真に道を行ひ得ると云ふ様な意味の訓言を想起し、至極尤もと思ふなり。

熟々（つらつら）思ふ。予の念願たる、一日親しめば一日親しみを増し、離れ難く思ふ為には如何なる心構へを必要とするやと。之に対しては、予は、親心を持つ事を以て回答となさん。子として親の長生きして呉れる事を願ふ所なり。親の許には一日にても長く居りたく思ふが人情なり。故に万物に対し親心を持つことなり。換言すれば、生物に対し天地の心たることなり。はぐみ育てる心なり。親は不具なる子程不憫と思ふなり。此の心を以て他人に対すべし。身を殺しても子の為に捧ぐる親心を以て他人に対すべし。子を伸さんとする心を以て他人を伸すべし。他人を自己の延長と思ふべし。更に換言すれば万物一体の心なり。此の一点を把握せば、人心は葵（ひまわり）の太陽に靡く如く我れに近づかざるはなけん。皇室の大御心と称するも畢竟是の事なり。

琉球方面の戦局や如何。特攻隊の勇士に感謝あるのみ。

独逸は「ベルリン」東西六〇-八〇粁にソ、米英両軍の挟撃に会ひ危急の局面となれり。ヒットラーは最後の悲壮なる訓示を将兵に与へたり。五年前「ヒットラー」が西方戦場に捷利得て凱旋せる際、ベルリンは花にて埋れたるを今と対比し涙無きを得ずと云ふ。

東京に於ては、爆撃火災に依る罹災者二百万人に登ると云ふ。御所、明治神宮、伊勢大廟、熱田神宮、皆被害あり。予の抱懐する外交的国際的天佑、米英対ソ連の正面衝突は独逸崩壊後に実現すべし。彼等は独逸と云ふ対象あって始めて一致協同したるも、若し此の共同の目標が無くなれば相互に実力を以て直接接触せざるを得ず。茲に彼等の為、危険時期到来す。

予の護衛兵として［三月］十一日負傷せる宍戸一等兵を病院に見舞ふ。彼は両脚を射貫かれ一足は複雑骨折なり。本日見舞ひし所、三十八度の高熱十四日程続けりと述べたり。顔は割合に元気

[73] 真田穣一郎（1897-1957）少将　1945年4月から第2総軍参謀副長（『日本陸海軍総合事典』p.75）。

なりし。茲に予の護衛として戦死及負傷したる都筑中尉及宍戸一等兵を想起し、傷心の至りなり。

歩兵第八十五連隊第三中隊

陸軍中尉　都筑　群馬県吾妻郡□□□□□□□□□□□□□□　父　都筑□□

福島県信夫郡□□□□□

宍戸信（ノブ）夫

尚、三月三日の予と共に爆撃を受け戦死したる大畑少尉及三谷兵長の御里は左の如し。

鳥取県鳥取市□□□□□□□

大畑徳種　父　大畑□□□

石川県鳳至郡□□□□□□

三谷信三　父　三谷□□

予は何としても戦後は父兄と会見しお詫びし、且、家事の面倒を見ざるべからず。

軍司令官官邸の世話掛湯浅嘱託は何となく予と意気投合す。蓋し、彼は情熱漢なる為か、彼曰く、人種の下等なる程感能的に発達し智能的に幼稚なり。故に、生殖器の構造等は未開人種程可なりと。或は然らん。人間にても人種にても技巧は人種が年を取り経験が多くなる程進歩するなり。

四月十八日　晴

軍司令官、西貢に帰還す。

人の性質に依り何となく忙しく感ずる人と大船に乗ったる如く感ずる人とゆったり感ずる人とあり。人の性質なるものは不思議なり。

小山参謀、第百六十一師団参謀長に転出す。

子供を見れば吾が児と無性に会ひたくなる。人間の本能なるべし。夫婦間は左迄でもなしとは誰でも云ふ。夫婦は他人、親子は肉親なればならん。

四月十九日　晴

安南国民軍の編成にて海防（はいふぉん）に至る。昨年の今頃なりし海防に至る時は、橋梁皆健全にて一時間半位にて行きしと記憶すれども、今度は二箇所の橋梁爆破の為、二時間四十分を要したり。石山旅館に泊る。

第三十七師団の出鱈目には閉口。

海防も、不猟の為、魚全然なし。

四月二十日　曇

海防より帰る。空襲は大抵十一時半以後なれば、午前九時出発し、河内迄十一時半迄帰る事に

するが通常となる。車中、兵を指揮するには方向を与ふる事、時機的に仕事の達成すべき限度を示す事、責任分界を別当てする事必要なる事を考へたり。

夜、小山参謀の送別会が三国閣下主催にて将校集会所に於て行はれ、予は陪席す。予の足の負傷に基く機能障碍も遅々として恢復せず。

道路作業隊に対し、予も出来るだけ世話せり。

予は今死すとも、人に迷惑を掛けず、幾分人の為（世の為、迄は行かず）尽したりとの自負を以て瞑し得べきか。

大島憲兵少佐より一七九〇年製ポルトガルの葡萄酒を貰ふ。

第二十一師団伊藤参謀の作戦地視察談を聞き、米国製手榴弾及迫撃砲弾、落下傘落下器を見る。実に精巧なるものにして、安全装置に於て我国製に勝る。要するに米国の機械力は日本より進歩せり。航空用地図、浮ボートの如きも、同様に、日本の真似の出来ざる所あり。軍艦の如きも、個人の割宛面積は日本人の作戦第一主義に及ばざるべきも、機械力に至りては恐らく日本の軍艦以上なるべし。日本が軍隊軍艦のみ米国製の機械力に勝ると云ふ事は考へられず。矢張現時の戦争の場合には、国の最高水準線の比較競争なるべし。機械力は恐らく米国は世界一なるべし。如何に口に皇道主義を唱ふるも、現実のものに於て日本が米国や英国や仏国に劣りなば、人心は自然優秀国に帰するは当然なり。電位差の高い方から低い方へ電気は自然流るるなり。支那が日本に靡かずして米国に靡くなら、靡く理由があるなり。日本に靡かす理由を造れば、求めずして重慶は日本に靡くなり。靡かざる所に理由あり。即ち、米国の方に日本より良しと認めらるる理由あるなり。此の理由を造らずして、「重慶よ目醒めよ」とか、蒋介石の認識不足呼ば張りするは、する方が認識不足なり。支那は賢明なり。単に支那のみならず世界何れの国家にても賢明なり。

所詮今度の戦争は、日本が苦しみ自覚し向上し発展する為の天の配剤とも考へられる。日本人は日本は神国なり、今迄天佑なしとて悲観しあるが如きも、此の日本覚醒の実物教訓は毎日の戦場、毎日の実物教訓が日本人の眼前に展開しあるなり。即ち日本人には毎日天佑がおとづれ神意が加へられあるなり。是以上の天佑は現在日本になし。日本人にして今少しく覚醒せんか、天佑は形を代へて現はるべし。伊勢の神風、玄海の台風の如き天佑は、日本人が今少しく精神的にも物質的にも向上したる時始めて現はるるものと思ふべし。

『戦局や　日本を醒ます　神の鞭』なり。

四月二十二日　晴

独逸の運命も既に決せり。最早、既涛を挽回する事不可能なり。予は独逸民族の為、ヒットラーの為、万腔の涙を禁ずるを得ず。

本日、樋村軍医中尉の診断を受く。予は医業の家庭に生れつつも、幼時医業を嫌悪せり。然れども、

今、予の不具なる足部の治療を受け、樋村中尉の科学的的確なる説明を受け、医術こそ仁術の名に背かざるを覚えぬ。予若し七生世に生れなば、天下の名医となりて医の仁術を施さんと。

予は経世救民を念願とするものなり。此の世界戦禍に対し何とかして禍害を減少したきものと思ふ。

四月二十三日　晴

昨夜は湖畔にて小山参謀の転任の送別会を催し、ラム酒を呑み過ぎ本日はだるし。釣竿を買ふ。身体、意の如くならぬは何となく不愉快、気の晴れ晴れせぬ心地す。

夕食後、幸道参謀より島村矩康大佐[74]、白石通則中佐[75]の航空事故体験を聞く。痛惜の極みなり。少しにても是等故人の遺績を継ぎたく思ふ念慮を生ず。

四月二十四日

午前六時夢醒む。岩國百寿様の夢を見て夢醒む。何でも愉快なる顔なりき。病身なりしも、予に対し非常に喜こび語られたり。予は故人の霊のある事を確信する者なるが、予が毎回郷里を訪れる毎にお墓詣ですることは、祖先の霊の常に喜ばれある所なるべしと確信す。何となく霊が予の身を護りありて、いざと云ふ瞬間に予を安全地帯に誘ひ、或は安全なる如くかばふに似たり。実に不思議の現象多し。唯、予には未だ国家の運命を夢む程の事は出来ざるは遺憾なり。

四月二十五日

予の身体の故障の為、活動力停頓せる為、抵抗力も低下したるにや、近頃は身体至る所痒く、掻けば直に水ブクレ（水腫）を生ず。余り湯に入りすぎ皮膚の脂肪分を除去し過ぎたるならんと思ふなり。何れにせよ身体活動力を失ない、意思力も失ふ次第なり。

最近は少しづつ仏蘭西語を独習しつつあり。

四月二十六日　快晴

稲の香に　遠き古里　偲びつつ

駒（コマ）を進むる　紅河（ソンコイ）の辺

「人間の常道を踏み違ふるな、人間道を坦々堂々として歩め」と。是、予の児孫に訓諭すべき語か。

各種機関の不和の根本原因は、自己と他とを平等に見ず自己を偏愛し過ぐる為なり。他の立場を理解し、其の気持を察し、「情に依り情を治む」の主義に依り行けば、天下社会の事余り問題は起

---

[74] 島村矩康（1904-1945）1943年9月、大本営参謀兼連合艦隊参謀、1944年3月、兼中部太平洋方面艦隊参謀、1945年1月、スワトー南方で（飛行機上）戦死、少将進級。岩國氏とは陸軍士官学校同期（『日本陸海軍総合事典』p.81）。

[75] 白石通則の二男、白石通教（1910-1945）であると考えられる。通教ならば、中佐、1945年4月より第2総軍参謀。8月、公務死（『日本陸海軍総合事典』p.82）。

らざるなり。而も、自己を他より偏愛重視するは又生物の本能なり。故に克己自制の制動に依り、奔馬の如き俗情を制御せざるべからず。茲に人間の道徳あるなり。尊徳翁の水車の回転の訓への如く、半ば至情に依り、半ば人間の掟(オキテ)に依りて至情を制する事必要なり。

四月二十六日[ママ]　晴

軍司令部が河内に来るや、戦闘司令所が来るや不明にて、予等の仕事も基礎が確定せざる故、仕事に熱が出ぬ。愈々司令部先発者も到着し、百名を超過するに至りたるを以て、明日より新位置に引越さんとす。

本日、第二十一師団参謀長宿舎より隣前の仏人外交部長ボアサンジューの官舎に移る。神谷中佐、森建秋少佐、予を招待し、新移転先に於てスキヤキと汁粉会を催す。

予も過去三ヶ月、自彊術を怠りたれば、最近の身体異和を生じ何となく胃腸も弱くなれり。

四月二十七日　晴

新司令部の移転。

河村参謀長閣下飛行機にて来らるるとて飛行場迄迎へに行く。何となく会ひたき気持なり。事実は間違なりき。重大命令下る。

四月二十八日　晴

兵器、軍医、法務各部長来らる。佐藤賢了中将を招待あり。得な人なり。朗かに世が渡れるだけ得なる人なり。三世の因果と云ふ事が感ぜられる。

三国閣下、予に懇々軍司令官に対する不平を云はる。正に人心攻撃に近し。三国閣下の統率とは月とスッポンなり。三国の修養と相容れざる土橋司令官の性格の為か。

四月二十九日　晴

天長の佳節、予は受傷五十七日目にして始めて長靴をはき軍刀を帯して、十時皇居を遥拝し万歳を三唱す。山本参謀[76]昨日西貢より到着しければ、一般の情勢に就て説明を受く。河内に軍戦闘司令所を推進する理由薄弱となる。

二宮尊徳夜話を読む。四年前読みたるものながら滋味津々。農聖の域に達したる人の言は古今を貫き教訓となる。世の中を渡る要道を述べて、刃物を人に渡す時自ら傷を受くるも人には傷をつけぬ気持を持ってせらる。此れが道徳の本質なり。此の精神を押し広めて行けば道徳は完了し得るなりと。又曰く、世の波を穏かに渡る泳ぎ方の方法は、勤と倹と譲との三なりと。江川太郎左衛門、

[76] 山本格男　中佐　第38軍参謀（情報）（『戦史叢書　シッタン・明号作戦』p.551）。

翁に政道の要を問ふに対し、翁は予には権勢なし。然し、人の言ふ事を聞きわけぬ米や野菜を育つる事をしっかり握りたる所あれば、此の理を人に応用するのみなりと。国家経済の原則は大学にある如く、「利を以て利とせず、義を以て利とす」と。個人の経済と異なる所なりと。翁の分度法の如きは、我国の海外発展の方法なき封建時代の経営方法として、物心両面に於て寔(まこと)に適切なるものなりしならん。但し、現在の日本に照せば更に積極的寸度を要すべし。

尊徳夜話第百七十三は感銘特に強し。訓往来に、注文に載せられずといへ共、進し申処也と書けるは、能く人情を尽せる文なり。百事斯くの如く有度(ありたき)ものなり。馳馬に鞭打て出る田植かな。馳せ馬は注文なり。注文に載せられずといへども鞭打処なり。影膳に蝿追ふ妻のみさをかな。影膳は注文の内なり。注文になしといへども蝿追ふ処なり。進で忠を尽すは注文なり。退く過を補ふは注文に載られずといへども尽す所なり。菊花を贈るは注文なり。注文になしといへども根を付けて進する所なり。凡事斯くの如くせば志の貫かざる、事のならざる事あるべからず。是に至て孝弟の至は神明に通じ、西より東より北より南より■として服せざる事なしと云ふに至るなり。

本日旧仏印軍司令所の備付家具中、軍戦闘司令所に持ち込みたるものを、今回師団が仏印軍司令部に移る故、帰へす。之は予の自発的指導に出てゐるものに非ず。三国閣下よりの注意より実行したるものなり。親は親の道を守り、子は子の道を守り、君は君の道を究め、臣は臣の道を踏む所に、社会は円滑にして秩序あり。然るを君の道を臣が要求し、君が臣に忠を要求し、夫が妻に貞を要求し、相手のかくあらん事を要望し、或は相手の道徳を自ら研究する所に、世の中は波瀾あり。是、権利の思想なり。斯くては日本の分道徳に背馳するものなり。三国閣下の要求に何だか変な心地するなり。

四月三十日　晴

尊徳翁夜話を再読す。「己が子を　恵む心を　法とせば　学ばずとても　道に至らん」の翁の和歌は真に迫れり。予も予々斯く感じ居りし所なり。換言せば、親心は万物一体の精神の表はれなり。「思ひやり」相手の立場を考へる事も万物一体の真理の表れに外ならず。

独逸は米英に対し無條件降伏せりと。覚悟せし所にして些も動ずる所なし。唯、何となく平和が近きに在りとの予感を知る。一葉落ちて天下の秋を知るなり。唯、日本は独逸の轍(テツ)を踏む勿れ。少くも対等に於て、講和するを絶対の前提條件とす。

本日、幸道参謀と共に今井海軍渉外部長の官舎に招宴せらる。特攻艦隊大和は、遂に戦場に到着する迄に雷撃を受け撃沈せられたりと。米の火薬の力は相当のものにて、爆撃の威力は現代戦に於て絶対に近し。

カムテンの安南芸者町及ダンスホール（宝亭外一軒）を今井中佐に案内せらる。

本日の戦局に依り、天皇陛下の宸襟を悩し在ること畏けれ。

日本自体に必勝不敗の手段なしとせば、ソ連を利用する外交の外なし。昭和十年、予が陸大学生の時、平田正判大佐の米国軍制の講義を受け、最後に、日米若し戦へば如何にして必勝を得べきやの課題に対し、予は日米決勝の鍵はソ連に在り、故に日本が対ソ作戦をのみ没頭するは我執偏見なるを述べ、田副大佐[77]の戦争指導の講義の際、日ソ軍事同盟を予は学生に先んじ主唱質問し、田副氏より時機尚早を以て撃退せられし事を記憶す。今や予の意見の正当なる事を逐次証明せられつつあり。

[77] 田副（たそえ）登（1893-1948）1934年3月より12月まで陸軍大学校教官を務めた（『日本陸海軍総合事典』p.90）。

五月

五月一日　晴

尊徳翁に江川県令問て曰く、卿、桜町を治むる数年にして年来の悪習一洗し、人民精励に赴き田野開け民聚(あつま)ると聞けり。感服の至也。予支配所の為、心を労する事久し。然るに少しも効を得ず。卿、如何なる術があると。予答て曰く、君には君の御威光あれば事を為す甚だ安し。臣、素より無能無術、然(しかり)といへども御威光にても理解にても行はざる処の茄子をならせ、大根を太らする事業を慥[たしか]に心得居る故、此理を法とし只勤めて怠らざるのみ。夫(それ)草野一変すれば米となる。米一変すれば飯となる。此飯には無心の鶏犬と雖も、走り集り、尾を振れといへば尾を振り、廻れと云へば廻り、吠よと云へば吠ゆ。鶏犬の無心なるすら此の如し。臣、只此の理を推して下に及ぼし、至誠を尽せるのみ。別に術あるに非(あらず)と答ふ。是より、予が年来実地に執行せし事を談話する事六七日なり。能(よく)倦まずして聴(きか)れたり。定めて支配所の為に尽されたるなるべし。

翁曰く、論語に曰く、信なれば即(すなわち)民任すと。児の母に於ける己れ何程か大切と思ふ物にても疑はずして母には預くる物なり。是、母の信、児に通ずればなり。予が先君に於る又同じ。予が桜町仕法の委任は、心組の次第一々申立つる及ばず。年々の出納計算するに及ばず。十ヶ年の間、任せ置く也とあり。是、予が身を委ねて桜町に来りし所以(ゆえん)也。

五月二日　雨→曇→晴

昨日は暑く三十七度の高温を示したるも、本日は雨の関係上涼し。中秋の気節の如し。

「ヒットラー」死す。一説にヒムラーが殺し、英米に和議を提したりとの説あり。

本日の情報に依れば、ムッソリニー翁は反ファシスト党の為、再び反逆に会ひ処刑せられ、遺骸はミラノの広場に曝されたりと。伊太利人と云ふものは実に劣等なる国民なり。釈迦は衆生と共に病むと称せられたる由なるも、本日の如き情報を聞いてはよき気持になれず。浮かれて遊びに出る気持になれぬなり。日本人だけは如何なる事態に立至るとも外人に後指さされぬだけの道徳力を持たざるべからず。

軍参謀長来らる。第二十一、第二十二、第三十七師団各参謀長も河内に在り。夕刻会食す。日本も満州を固むる主義の如く、杉本参謀[78]は軍より、野原参謀[79]は泰(タイ)駐屯軍より、関東軍へ引き抜かる。

日本人の試金石の秋は来れり。世界の重圧に対し日本人の本領を発揮せん。前途に望み少しと

---

[78] 杉本森雄　少佐　最終職は第1方面軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.597）。

[79] 野原博起　中佐　最終職は関東軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.590）。

雖も、日本人の真骨頂を発揮し世界をして目に物を見せ呉れんず。過去を問ふを止めよ。善きも悪しき過去に執着する勿れ。今は前進否驀進の一途あるのみ。

五月三日　晴

「ボアサンジュー」の官舎より司令部の参謀官舎に移居す。家具類皆揃ひありて甚だ美なり。仏人は家を綺麗にす。日本人の教養は未だ仏人に及ばざるが、日本人が住めばきたなくなり、仏人が住めば綺麗になる。

参謀長閣下来られ重荷下り、信軍連絡所を閉鎖す。実に三ヶ月の勤務なりき。

人間は困窮すれば第一の要求は食なり。次は衣なり。次は甘きものなり。次は性問題の解決なり。欲望が性問題迄達すれば個人の健康は恢復し、又生活も余裕を生ずる事となるなり。

幸道参謀、西貢に帰還する事となりたるを以て、参謀連は会食す。

五月四日　晴

幸道参謀を飛行場に送る。パクニンの爆撃あり。午后、パクニンに第三十七師団参謀部を訪ふ。第三十七師団の転進促進問題の為なり。途中自動車二回パンクし、予は河内東方十三粁の地点より人力車にて帰る。実に人力車にて旅行すれば道路の不良がよくわかる。仏印の道路は手入補修を行はず。為に荒廃し、凸凹甚しく人力車の乗り心地悪し。自動車の痛むこともうべなる哉。道路は棄損し、恰も仏印の現時の頽廃、道路を見れば分明なり。絞れるだけ絞り使へるだけ使って愛護せざるなり。疲弊とは斯くの如き状態を云ふならん。道に餓死体散在す。実に悲惨と云ふべき也。

乗り物と通信とは神経なり。仕事の基礎なり。之れなくしては何も出来ぬ。之を揃へる事が何より先なり。政治にても軍事にても之を先づ整備する事を第一とせざるべからず。

河内は西貢に比し何となく落着きのある町なり。其の原因素より少なからざるべきも、プチラック［ホーホアンキエム］、グランラック、の両湖水の潤ひに依る事多し。水の色彩の変化、水遊び、水景は人間に何とも云へぬ慰謝愛惜を与ふるものなり。都市の造成、住所の決定に顧慮せざるべからざるものなり。若し東京に隅田川と海とを除けば、或は宮城の堀を除けば如何に落莫たるか思ひても判ることなり。人間は元来水性なり。水を欠いて一日も生存は不可能なり。

ビルマ方面の戦況は急変し、「ラングン」に敵機甲部隊は迫れり。対等の武器なき時はクラウゼウイツの云へる如く、山地に依り地形の険に依り生存を維持せざるべからず。南方軍の最後の複郭地は泰（タイ）の平地にては不可なり。ビルマ国民軍の背反あり。泰国の動向も疑はし。南方軍は今や内部疾患の患者の感あり。とは云へ泰国は荒療治するは不可なり。

五月五日　晴

患者療養所樋村中尉の手に依り再びギプス（陰性）を造る。樋村中尉の如きは人格円満にして真に国手たるに近し。小田少将は彼を信頼せしと。予に於ても同様なり。元来医者は弱者を救ふものなれば、弱者即ち患者には信頼せらるる資格あるなり。然れども樋村中尉の如きは其の親切、其の学術的良心と研究の深度に於て患者を信頼せしむる事大なり。本日を以て松葉杖を用ひて夜散策に出掛ける嚆矢なりとす。

人の欠点を追及する事急なれば、必ず人亦自己の欠点を糾弾するに至り、遂に假瑾に依り失脚するに至る。人に対し寛容なれば、人亦己れに対し寛容となるものなり。是、統率処世の要道と知るべし。

五月六日　曇　雨

如何ある愚なる母と雖も、小供を育つる事が出来るを思へば、世の中に六つかしき事、出来ぬ事は少いと思ふなり。即ち、慈母の至誠だにあれば決して困らざるなり。要は其の事象に対する心構へと至誠の問題が成否を決するなり。

阿南新陸軍大臣[80]は情義は戦力なり。徳義は団結の礎なりとて訓示せらる。道徳力が戦争の勝敗を決する最後のものなる事は明瞭なり。道徳的民度の低き伊太利、支那を見よ。個人に於ても戦陣間最も忌むべきは利口者なり。人の見て居る前を繕ひ、人の見て居らぬ処を適当にやる流義程、戦の成果を害するものなし。命ぜられたる事を忠実に実行し、信頼の出来る軍人軍隊ならざれば一日も軍隊の真価を発揮し難し。弾丸雨飛の間、突撃命令と共に決然蹶起し突入せし、歩八二のシタデル兵営の攻撃の如き状態ならざれば、戦は出来ざるなり。

五月七日

沖縄方面、稍（やや）好戦況なり。近頃の最大関心、且（かつ）、最大愉快は実に沖縄方面戦況の好転なり。「ラングン」の南方河口に敵の上陸あり。一部空挺部隊の落下ありたるものの如し。南方軍西辺の情況あわただし。昭南に対してはボルネオより背面攻撃に依り奪回する敵の企図を首肯するものなり。

葉隠論語を読む。苛烈なる戦局に於ては平素過激と思はるる位の葉隠程度のものが正気を鼓舞し、将兵の琴線に触れ得るものなり。

第三十七師団の転用を見る。一二〇〇粁の行軍を計画せしに、鉄道と比較し、余りにも徒労行軍と云ふものは利なし。鉄道は腐っても鯛の感あり。

---

[80] 阿南惟幾（1887-1945）大将　1945年4月より陸軍大臣、8月、自決（『日本陸海軍総合事典』p.4）。

五月八日

独逸は正式に英米ソ三国に無條件屈服せり。やるせなき思ひとは最近に於ける日本人の心情を指すならん。前途に光明少く、其日々々を焦燥に暮すなり。打算的に考ふれば日本は不敗の理由は発見し得ず。真に日本に天佑ありとせば、ソ連と米英との角逐葛藤よりする国際的天佑のみ。予は之を信じつつも心に一抹の不安禁じ難し。他の日本人に於てをや。平田将軍と会ふ。米国通の将軍は米国の婦人団体の非戦運動とソ連と米国との葛藤（社会組織に就て）今後期待し得べしと為す。

司令部庁舎の施設に方り、軍司令官は簡素を旨とすべしとの趣旨に依り、予は先発者として司令官の部屋の簡素化を図らんとす。河村参謀長点検せられ、司令官の簡素のレベルと君の簡素のレベルとは同一ならざる事も考へざるべからず。寔（まこと）に然り。土橋司令官の宿舎、家具に対するレベルの標準は吾人のレベルと比較にならぬなり。之を察せずして、司令官の言葉のみを観念的に信じて司令官の部屋を簡素にせんとする予一流の考は端見たりしなり。世上斯くの如き事多し。

葉隠論語を読む。矢張りチョイ々々よき事多し。統率の参考に抜粋せり。

五月十日　晴

独逸の全面的降伏は日本人に最後の決断を要求せり。今や国内日本人は、おそらく皇国守護の為、国家に一身を犠牲にする事に一糸紊れざる決意を固めたるならん。最悪の事態は決心の鞏固なる者に対し、却て刺戟興奮剤となるなり。況んや武夫の道は唯一筋の外あるべからず。

参謀長転居しモルダンの家屋に入らる。本日関係者の招宴あり。陸軍中将と少尉とが殆ど友達の如く接近し得るは河村参謀長の人格か。

五月十一日　晴

近頃唯一の楽しみは、沖縄の戦闘に於て敵に与ふる打撃の発表を見る事なり。是、予一人に非ず。日本全国民皆然らん。同盟通信に依れば、慶良間島の国民学校の児童は先生の指揮の下に手榴弾を投じ敵陣に斬込み討死せりと。寔（まこと）日本人特に日本軍人に取りて斯くの如き情況は断腸の思ひなり。日本人を守るべき帝国軍人が日本人を守り得ず、就中（なかんずく）小国民を護り得ざるが如き、涙なくして語るを得るや。

五月十二日　晴

神戸旅館のおかみと語る　彼女曰く安南人を人と思ふ勿れ。彼等はうそつきにして盗癖あり。是、安南人の特質なり。此の安南人を人と思ひ、慈善行為を為す日本人はお人好しなり。彼等は恩義を感ずるに非ず。少しにても利益のある方につくなり。是、おかみの四十二年在印度支那に於ける安南人観察の結論なり。仏人は安南人を人間として取扱はず。日本人は情にほださるる国民にて、

忽ち憐憫の情を起こし、安南人を救はうとするなり。是、日本人は、日本人に接する心情を以て安南人に接する馬鹿さ、人のよさ、気の弱さあり。異民族を躾くる事は日本人は下手なり。日本人は異民族をつけあがらす欠点を有す。仏人は安南人を押へ徹底的に圧迫して現在に至りしなり。仏人は罰金刑を以て安南人に臨めり。掃除が悪ければ罰金を課し、自動車の交通規則を守らざれば罰金を課し、金を以て徹底的に安南人を圧しつけたり。それ故に現在迄仏印を持ち来れり。日本人の政治となり、従来の粒々建設したる仏人の安南経営を崩し、無秩序となり、盗人を増加し、インフレを生ぜしめつつあり。仏人は自己の造れる法律規則は忠実に実行す。日本人は自己の造れる法律規則を自己の都合に依り直ちに犯す。これにては安南人も云ふ事を聞かなくなるなり。日本人はお目出度く出来すぎ、異民族の統治指導には未経験、否、不適確なりと。正に云ふ所一面の真理あるなり。要は日本人は安南人を理解せざるなり。小供の躾に於て、甘えさす事の不可なると同様、未開の原住民には日本精神の実現も順序あり。直に日本人に対すると同様の気持を現はすの不可なるは論なし。換言すれば、内に大慈悲の親心を蔵しつつも、表面は不動明王の威厳を存せざるべからず。

五月十三日　晴

第二十一師団団隊長会同に列席す。徳義は戦力にして情誼は団結の礎なりとは阿南陸相の強調せらるる所、軍隊に於て最近各所に此の声を聞くは喜ばし。三国中将も此の点を団隊長会同に於て強調せらる。皇軍―天兵の真姿復活の一表徴たり。

夕刻、約千米を散策す。予の歩行は尚自由ならず。一歩毎に尚微痛を感ず。

田舎道に餓死体を見る。天保の飢饉もかくやと思はる。ナムデン[ナムディン]、ニンビニ[ニンビン]には餓死者十二万、飢餓に類するもの百二十万に上ると云ふ。然るに都会の安南人は一向に平気なり。此の点は日本人に真似の出来ざる悪徳なり。民度低ければ社会道徳は又低調なるは、支那人、安南人に於て明かに之を見る。此の飢饉は昨秋の洪水に起因する事最大なるも、仏印処理に伴ふ行政の乱脈停頓は之に拍車を駈けたるなり。

日本人は現実的国民にして、目の前に物が迫らねば勉強せぬ国民なり。目の前に迫れば火の如き活動を始む。仏印も敵が上陸して来ることを予期し、或は将来の南方戦局の推移を予想し、真剣に施策を講ずべきに拘らず、議論多く成果挙らざるなり。換言すれば、日本人は、独逸人の如く、或は英米人の如く戦略的国民に非ずして、戦術的国民なり。先を見越して手を打つ事に下手にして、現実に熱心なる国民なり。組織的国民に非ずして情熱的国民なり。我等の日常生活に於ても斯くの如き傾向少なからず。

「ラングーン」は突如として敵手に落ち、軍需品の大部は敵手に委せり。「モールメン」の保持の如き既に近視的なり。今や泰(タイ)西境の山地帯を固めざるべからず。泰緬線の苦労せし鉄道建設も、

今日之を放棄せざるべからざるに至れるなり。嗚呼。

明号作戦も一応五月十五日を以て打切りとなれり。作戦的に回顧せば先づ八割（八点）の成果を収めたりと云ふべし。然れども予は憂鬱なり。「怏々として楽しまず」なる語は予の現在に当て嵌まる語なり。理由は我戦局の推移に希望性が減少せるに由るなり。現在の予の心境は沖縄方面の戦局が好転せん事を祈るのみ。「我れ衆生と共に病む」、この仏陀の言の如く、吾日本国と共に病むなり。

五月十三日[81]　晴

空は澄み　青葉目に映ゆ　此の頃も

我が胸はれず　皇国思へば

一宮大佐殿と小田旅館にて語る。民心把握に就て令名ある此の部隊長も、皇軍全員が民心を把握せざる場合は一部分一人の努力は水泡に帰すと嘆ぜらる。

五月十四日　晴

寝冷の精ならんか少しく微熱あり。午后休務す。予の「ギプス」脱去後一ヶ月歩行尚意の如くならず。階段の下り方には正常ならざる所あり。駈足のはね返へしが出来ず。坐す事も十分ならず。凡そ歩行の如き日常茶飯事すら、一人前となる事には非常なる訓練と少なからざる日子を要することを、今更ながら痛感する次第にて、人事万般に亘り卑近なる事象も経験と訓練と日子と反省努力の結晶なるを嘆ぜざらんとするも能はず。

五月十五日　晴

明号作戦は本日を以て終了す。現地在留邦人は兵役に在るものは兵員に否らざる者は悉く非常時に軍属として軍役に従事する事となり、在留邦人の志気大にあがる。決心は一つとなれば却て気が楽となるものなり。道路作業隊長能勢大佐より現地の状況を聴取す。人間の計画は如何に周到綿密にするも実行となるや予期せざる障害が続出し、而もこの障害が大きく見え出すものなり。此の障害は人智の不備上避くべからざるものなるを以て、諸計画の基礎に予め算入し置くを要し、切りつめたる計画は必ず齟齬を大ならしむ。換言すれば一割二割の余裕を存すべきなり。又、途中の障害に遭遇せば、当然来るべきものが来りしと考へ、寧ろ此の障害を突破する事に出来不出来成否の鍵あるものと観じ、喜び勇んで障害打破の方途を講ぜざるべからず。糸のもつれをほどく努力と労を惜しまざる様な誠意こそ必要なり。

[81] この日より1946年4月13日まで『南方作戦従事中の日記』。5月13日は2回、書かれている。

五月十六日　晴

軍司令官到着。食欲猶進まず。夕刻メトロポールに於て道路作業隊長能勢大佐等を招待す。メトロポールも千番一律の料理にて閉口なり。

五月十七日　晴

本日より四ヶ月休止せる中井式自彊術を始む。此の頃は火焔木（広東桜）の花盛りなり。新司令部の並木は五割は此の大木なり。緑に真紅映し壮観と云ふべし。熱情と青春とを混和せる如く、南方第一の美観たるを失はず。内地の桜の如く四顧霞棚引く模糊たる環境には淡白なるがよく、熱帯の如く万境鮮彩強烈なるに方りては、広東桜の鮮彩目を奪ふが相応し。

総督府官邸にて軍司令官、予及［び］兵事局軍督両部長を招待せられ室内を案内せらるも、始めて見て成程立派なる所と感じたり。司令官より種々御注意あり。統率の公平を期する為、叱る事を公平にする事は仲々六つかしきものにて、特に年齢や士官学校の期の先輩の部下に対し叱る事は決して弱き気象にては出来ぬと称せらる。

沖縄決戦は世界視聴の凝集する所さながら民族の根気くらべの感あり。那覇方面の戦線には、敵は主陣地に進入し来り、激戦紛戦を交へあるが如し。我が弾薬の補充如何。我人員の補充如何。

五月十八日　晴

加戸川［幸太郎］来る。最近北部仏印地区に於ては、米の問題が治安警備社会の最要問題となりあり。皆実情を握らずして、空の計算にて米の足らぬ足らぬと云ふのみ。此の米の足らぬと云ふ風評が民衆に浸潤し、米価は高騰し遂に米騒動を起しつつあり。加戸川参謀は西貢（サイゴン）より鉄道輸送に於ける米の停頓状態を視察し来りたるが、米は北へ着いてゐるなり。其の量は少きも、毎日々々着きつつありて、其の集計量は相当なるものなり。然るに現実を握らざる部隊政治家は米がつかぬつかぬと称し、民衆、之に和し人心を動揺せしめつつあるが現況なり。政治とか経済とかは人気的のものなり心理的のものなり。米がないと云ふ人気が起れば米があっても米騒動を起すなり。人間に対する風評に於ても之に似たる事あり。人気と云ふものあり。此の人気の指導の呼吸を解せざれば高等政治も出来ざるなり。軍隊に於て軍隊が動揺を来す事あり。此の際も上長官の泰然動ぜざる態度に依り、動揺を取りもどす事を得る例多し。之も人気を静める方法なり。民衆指導には人気指導を考へざるべからず。

五月十九日　晴

谷川稀之■博士より南方視察談を聞く。専門的事項は予には判らず。其の現地踏査に於て遭遇せし猟奇談に感興あり。曰く、猛獣の多くはこちらより手を出さなければ先方より逃げ去るものなり。

曰く、土民に対しても武器を持って行かざれば彼等は害を加へず。曰く、原始人に近き住民は性的方面極めて珍奇なるものあり。例へば男根にカンヌキを入れたるもの陰核を二寸三寸と伸したるもの。女子の歯を全部抜き取りあるもの等々。曰く、鰐の男根は最も精力強きものなり云々等々。

谷川博士の風貌性格は蒙古通の矢野中佐を彷彿せしむ。全く両者探検癖と旅行を苦にせざる事は一致しありて、探検家の資質を全備せるに近し。特に貧家に育てられ、困苦欠乏に堪へ、労を厭はず辛棒強き性質は、此種研究家に必要なる資質なり。

那覇敵方に帰せりとは敵側の放送なり。決戦場裡に何等貢献の出来ざる身をなさけなく思ふなり。

一昨日、服部武士航空師団長（歩五九出身の先輩）に会ふ。田中鉄次郎大佐は電話をかけつつある際爆死せしなりと。有岡と云ひ爆撃の被害者なり。

五月十九日（続き）

最近敵側は日本の和平説を掲げ、我戦争意思の挫折を試みつつあり。沖縄戦況の一点に関心しある予には、他の事に興味なき現況なり。

仏人の家に居住し日本風の家屋の構造と比較すれば、風呂場風呂敷の代表に依り個別主義と抱擁主義とを対比し興味深し。衛生的の点に於て、便所の構造が仏蘭西は進歩せりと思ふ。他は感心する事は少し。日本の風呂は風呂敷の如く大は小を兼ね包含自由なるも、外人、特に西洋人はバスケット、トランクの如く個人式にて少しの融通と云ふものなし。恰も権利義務の思想にして日本人の如く「注文以上」の融合的特色なし。

五月二十日　晴

河村参謀長参謀長会同より帰還。酒井参謀河内に来る。沖縄の戦局寒心すべきものあり。予は毎夜皇国の前途を祈り、何等かの前途に関する啓示あらん事を神に祈るも、未だ一回の啓示なし。唯、感ずる事は戦争が後数年続く様な事は考へられず。本年末か明春頃迄に終る様な一般的観察を予感し得るなり。

河村参謀長に学ぶべき事出来たり。そは南方寮の問題にて河村参謀長以下と軍司令官と感情の疏隔出来んとせる所を、河村参謀長は之を放任するは益々心の■隙を大ならしめんとするを察知し、機先を制し之を早く談笑の裡に解決せんとせり。此の如き感情上の疏隔は或る時機を経過すれば気不味くなり変な事になる所を、成るべく早く手を打って火災に至らしめずして鎮火せしむるに呼吸あるなり。

五月二十一日　晴

光、討、信の幕僚部長を河内討■材倶楽部に於て河村参謀長の招宴あり。神戸ホテルの女将と

語る時は何等かの教訓を洩す。彼女も仲々しっかり者なり。凡そ世の中に真理が亡びるとは考へられぬ。絶対にあり得ない。然る時、日本の国家が亡びると云ふ事は絶対に考へられぬなり。是が必勝の信念なり。現在の日本人は現実に一面深き懐疑を有しつつも、此の抽象的の観念に自己を満足せしめ自慰しつつあるに似たり。自問自答日本は神国なり。此の戦争は絶対に負けぬと称し心に祈念し、且、之を信じつつも現実の情勢は日一日日本の不利なる如く見られ心に矛盾を感じつつも、而も、自らの信念を信じ励ましつつあるなり。

五月二十二日　曇

参謀長各兵団参謀を集め、総軍参謀長会同の伝達あり。我編成装備悉く特攻斬込戦法に的合せしめ大兵団の戦法も之に合する如し。南方軍戦闘命令を発布せしめたり。茲に於て始めて特攻精神も生くるわけなり。戦局の前途楽観を許さざるは、一面馬革に屍を包むを本懐とする軍人に取りて以て幸運と云ふべし。故山多ければ多き程、危険が加はれば加はる程、軍人の働き切に顕著となるわけにて喜び勇むべきなり。軍人個人としては寔に然り。之れが皇国の前途を有利に好転するの資となるに於て然り。

五月二十三日　曇

予最近食欲進まず。怏々として楽しまざるものあり。然れども作戦道路指導の主任参謀として現地を視察せざるべからず。勇を鼓して本日午后四時丁度出発。乗用車一、トラック一を以てサムヌア地方に向ふ。梅原西方地区第二十一師団の構築中なるドンベン[82]の洞窟倉庫を道より眺めつつ、ホアビン経由、午后十一時ネオボ[83]の渡場に、午后十二時頃スエ[84]の渡場に達し、渡河に一時間半を要し、午前二時頃スエの道路構築隊の中継集積所に宿泊す。野沢主計少尉、五十嵐曹長等同行す。本日の行程七〇粁なり。食慾なし。

五月二十四日　曇

午前九時半出発、坂路をモクチョウに向ふ。二月現地踏査時に比し道路は画期的によくなりありき。午后二時頃モクチョウ道路構築隊小池部隊に着す。途中七、八粁の広柔の高原あり。明号作戦時、我トラック十四車輛を焼かれたる残骸あり。モクチョウは田舎の小都会なりしも見る影もなく焼かれたり。此の附近猿多し。比高は八百米位なり。安南人苗族の雑居なり。午后四時モクチョウ出発、山岳地帯を越えソッパオ［ソップハオ］川渡場に着く時に満月薄明るき午后十時なり。ソッパオの「ラオス」人村長の家屋（借上）に泊る。スエよりモクチョウ迄七〇粁、モクチョウよりソッパオ迄四四

[82] ホアビン北方約5キロ（『戦史叢書　シッタン・明号作戦』p.674）。
[83]「ネオボ」はホアビンの西方「チヨボ」の可能性有（立川京一氏のご教示による）。
[84]「スエ」は「チヨボ」西方の「シユー」の可能性有（立川京一氏のご教示による）。

粁なるも標高一五〇〇程度の峠を越えざるべからず。此の峠にて午后六時頃虎の自動車前を横断するを見たり。ラオス人の日本軍信頼は絶対的なり。本日首、肩の痛むこと甚し。原因は不明なり。食慾少しく増加す。

五月二十五日　晴

「ラオス」人の家は一階なるも階下高し。下に家畜を繋畜す。座敷は全部竹敷なり。裸足にて至所を歩くと共に我等の靴も履きたるままなり。囲呂里数個あり。夫婦のみ別室に寝臥す。家族は男系のみ残り妻を娶り同居す。女子は他家に嫁す。夫婦の組に慮し別室の数を設く。予は此の借家の持主の村長の子供に金二十円と塩若干（飯盒掛子二杯）を与ふ。彼等の一家喜び、予等にバナナを返礼せり。「ラオス」人は計数に疎し。十以上は書いて勘定せざれば正確ならず。嘘言を吐く事なし。我要求に応じたる以上は忠実に之を守る。安南人を嫌ひ日本軍を歓迎す。安南国民軍は悪き事をするとて村落内に入れず。住民より進んで村落外に安南国民軍の露営地を設けて提供すと云ふ具合なり。労銀は一日苦力一円、駄馬一円二十銭程度なり。塩を欲する事甚し。彼等は日本人の如く野菜を食せず。主食と塩とあれば十分なるが如し。素より青物を食はざるに非ず。筍、蕨等をユデずに生にて塩や味噌をつけて食ふなり。此の附近の筍はアク強く苦み多し。此の苦味に対しては全く鈍感なり。主食は籾米なり。之をふかして日本のオコワにするなり。実に美味なる米なり。日本の最上米の籾米に匹適す。之を箸を用ふる事なく手にて食す。完全なる自給自足経済にして塩のみ交換す。綿を造り、幟にて織るなり。故に木綿着は安南人に比し窮乏しあらず。此の点より、斯の如き半開の民族に対し文明国流の経済封鎖戦は成功せざるの理を覚れり。支那事変に於て重慶政権が四川を根拠とし五ヶ年持久しあるの理を悟れり。文明人は或る意味に於て弱く、経済的に衛生的に原始人の自活力耐久力に及ばざること遠しとす。原始人に近き程、生殖器の発達大なり。「ラオス」婦人の乳の優秀なる恐らく此の原則に由るものならん。塩は一握りにても十円の値ありと。

午前十時ソッパオ出発サムヌアに向ふ。途中は山岳重畳の峠にて自動車を屡々停止せしめて水にて冷却せしむ。行進速度はトラックにて一時間十粁、乗用車にて十五粁なり。然れども自動車道の価値は具備しあり。橋梁は悉く我軍の手にて補強せらる。午后二時サムヌア着。ソッパオより二十二粁なり。八巻大尉[85]は作業現場より十五里を一夜にて踏破し、予を出迎に来りあり。感謝の辞なし。サムヌアは山間の小邑なるも電燈施設あり。華僑街もあり。州庁の所在地なり。守備隊を午后四時出発。作業起点「バンボイ」[86]に向ふ。八巻大尉同行す（此の大尉は五十六期[87]の若輩なるも箱石准尉の如く誠実其のものの性格面に現はれ、思慮周密立派なる将来性ある人物なり）。

[85] 八巻教造　歩兵第85連隊所属の集成大隊長として、1945年4月中旬からラオスのサムヌア－パクサン間の道路建設に携わった（八巻 p.19）。

[86] 八巻の手記では「バンパオ」となっている（八巻 p.19）。現在の地名が不明であるが、ラオスのフアパン県フアムアン郡バーンパーオかもしれない。

[87] 正しくは、55期（八巻 p.19）。

バンボイ作業起点迄六〇粁なるも四十粁の地点にて驟雨に会ひ乗用車を通せず。已むなく引起し、中間三十粁のラオスの部落（名を忘却するも戸数四十軒位の大村落なり）村長の家に泊めて貰う。夜間「ラオス」酒の馳走になる。甕に水を注ぎ竹の吸口を入れて吸ふ。酒の元は籾米なり。味は酸味を帯び甘酒或は梅酒より一層酸味あり。気持よく酔へるものなり。囲爐の傍にて臥す。後半夜は冷気を覚ゆ。内地十月の気候に匹敵す。此の附近全山蕨の山なり。又、松の木野生せる事内地の如き山ありて、東満州或は内地を思はしむる自然景色なり。本日の行程四十粁。

五月二十六日　晴

午前九時半出発。乗用車にてバンボイ作業起点に迎ふ。前夜、村長に対し苦力二十名、婦人苦力四名を日本兵一名が指揮し道路を補修せしめたり。此等は午前三時頃迄かかりて作業せり。以て其の忠実振りを伺ふに足れり。午前十二時過、作業起点に達し乗馬にて新設道を見る。安南国民軍が労力の主体なり。予の顔を覚えある者あり。予は道路構築の経験なきも、始めて其の要訣は補給にあると知る。飯を十分に食はしめれば人間は独りでに働くなり。午后三時バンボイ附近の山本部隊の本部の「ラオス」部落に至り、本部の所在する村長の家にて昼食す。家婦（オバアサン）は予に歓迎の標に梅檀の薬とローソクの芯の如きものをバナナの葉にて巻きたる扇形のものを献上し来る。客に対し歓迎の標なりと。県長外附近の村長等挨拶に来る。ラオス酒のモロミの如きものを食膳に供したるを以て、記念に竹筒に入れて貰ひて帰る。午后四時半出発。乗用車にてサムヌアに帰還す。午后七時サムヌアに着し、警備隊に泊れば、サムヌアの州長[88]と郡長と挨拶に来る。交通通信の復活は地方行政増進の鍵なり。明号作戦は之を破壊せり。サムヌア警備隊にてドラム缶の湯に入り筧〈カケヒ〉の水を汲みて顔を洗ふ　四日目の風呂なれば気持良き事極みなし。十五夜の月なり。大気は澄む。さながら仙境に似たり。本日の行程六十粁。乗馬行十粁。

五月二十七日　晴

午前八時サムヌア発。途中異状なし。午前十二時ソッパオ着。村長再びバナナを以て予等を歓迎す。ソッパオの渡場は工兵が施設を強化しつつあるも乗用車の渡しに多大の苦心を要したり。次で午后二時出発モクチョウに向ふ。途中フォードの乗用車も連日の険坂に疲労したるにや機関に故障を生じ、一四〇〇の峠の三分の二の乗り口にて自動車停止し、姑(しばら)く策の施すべきものもなし。此の附近の山地は十粁二十粁と上り下りの峠少なからず。国境方面に至りては一日中行軍し上り坂のみ下り坂のみの峠ありと。往路虎の出でし峠なり。姑くにして操縦手の応急修理成功し、再び自動車は運行を始む。予は自動車の故障時、本夜、此の峠にて露営を決心せり。水は三粁以上離れたるラオ

[88] 当時、フアパン県（サムヌアが県庁所在地）知事であったプーミー・ウォンウィチットであると考えられる。プーミーはラオス革命に従事し、1975年成立のラオス人民民主共和国において、副首相や国家主席代行を務めた人物。1987年に執筆した回想録（ラオス語、邦訳あり）において、日本軍による道路建設のことを記している（プーミー pp.53-59）。

ス村落又は六、七〇〇米の比高ある狭谷に下らざれば得難し。幸に此の露営は実現せざりき。モクチョウに達せしは午后六時頃なり。小池大尉の外、行木[89]大尉国境作戦より帰還せるに会し会食す。「ラオス」人の家屋を借上げ本部の居住室を造る。風呂最も予の趣味に合す。野趣満々たり。渓流の大樹の下にドラム缶を立てたる露天風呂にて水は自由に渓流より汲むを得。本夜は満月なり。蛍も月に負けぬ光りを放つ。気冷爽にして中秋を思はしむ。

高原や　月明るうて　かじか[90]鳴く

と思はず一句出づ。午前三時迄、中少尉と議論したり話したりして、隣室の予は安眠を妨害せらる。本日の入浴も予の姿を認めつつも、獣医中尉は予の先に風呂に入る等、上官に対する徳義心礼儀は全く出来あらず。又、行木大尉や小池大尉は中少尉の此の不躾に何等の注意も促さざるなり。依って予は翌朝将校を集め教育的小言を言へり。日本軍は兵は今日世界中完全爛熟せる能力資質の域に達しあり。下士官は兵に比し劣るも尚可なり。中少尉大尉級に至りては訓練素養共に足らず。此の点国軍の欠陥として残らん。

五月二十八日　快晴

午前九時出発。行木大尉兵を伴ひ帰還す。途中スエにて昼食。梅原にて丸山工兵部隊本部にて小休止す。午后八時、停道し重原参謀の歓迎会に臨む。重原参謀（四十八期）は遅れて来り、加戸川参謀は遂に来らず。此日、名月にして長時間の空襲警報あれども敵機来らず。

五月二十九日　晴

能勢大佐（道路作業隊長より南京下士官学校生徒隊長に転任）と再会す　軍司令官に能勢大佐の滞在を申上げし処、直に召され恩賜の酒とベッコウの煙草ケースを授与せらる。軍司令官の智情意共に一般人に比しレベルを超越せるを知る。能く人を使ひ能く人を感激せしむ。又人をしてよく感奮興起せしむ。榊原参謀、東京へ出張中の処、帰還す。

五月三十日　晴

榊原参謀より内地の情況を聞く。都市中心主義の弊は欲すると欲せざるとを問はず、空襲の結果、地方分散主義に変転しつつあり。即ち、日本内地の姿は再び封建制度時代の地方自活主義に変換しつつあり。一面喜ぶべき現象なり。内地各地に工業を分散し地方分権の様相を呈し、大正昭和にかけて先覚の唱道せし地方分権都市疎開主義は強制的に実現せられつつあり。内地の近況は頑

---

[89] 行木英也（なめき）　歩兵第85連隊第2大隊長　1945年4月、行木を長として、仏印軍追撃のため、デンベンフ支隊が編成された。ディエンビエンフー、ポンサリーを占領した後、5月上旬、カンカイに到り、歩兵第85連隊の指揮下に復帰、ラオスでの道路建設に携わった（平野 pp.584-586）。

[90] かじかの横に「トツケ」と書かれている。トッケーのことであると思われる。

張れば勝機自然に生るとの自覚を無意識中に維持しありて、独逸の屈服前よりも尽忠の気分は明朗なるものあり。ソ連の出方は最重要問題なるも、日本の実力にして甚しく低下せざる限り、彼より手を出す事は先づなかるべしとの観察にして吾人の全然同意する所なり。

五月三十一日　晴

山本参謀内地転任の報あり。又、辻政信[91]当司令部参謀の報あり。本夕、山本参謀の別離の宴を参謀長官舎にて催す。集る幕僚、加戸川、神谷、榊原、山本、及(および)予にして河野［省介］副官を加ふ。多士済々談論風発。斯くの如き多士済々を統御するには道徳的高度の教養あるのみ。

[91] 辻政信（1902-1968）1945年5月、第39軍参謀、7月、第18方面軍参謀、8月、地下に潜行し、中国へ渡る。復員後、1959年、参議院議員となり、1961年、ラオスへ行き、行方不明。1968年、死亡宣告（『日本陸海軍総合事典』pp.103-104）。岩國氏とは名古屋幼年学校、陸軍士官学校で同期。

六月

六月一日　晴

過失を放任すれば自然次第に大きくなり、遂に収拾つかざるに至るべし。人との感情の阻隔に於ても放任すれば時間の経過と共に益々阻隔を大ならしむ。それ故に萌芽を未成に芟除する事必要なり。此の理を応用するには『断』を必要とす。一時の苦痛を押し切る勇気を必要とす。斯くて長時日の苦痛不安は除去せらるるものなり。

本日、山本格男参謀の軍司令官送別宴を官邸に於て開かる。河村参謀長、神谷、酒井、榊原、加戸川、各参謀、海軍今井中佐、上田、長岡、白石、各部長、坂根経理部高級部員、河野副官なり。軍司令官曰く、語学は考へてから云ふ様なものでは樽俎折衝時に使へざるものなり。又曰く、語学に親しめば其国に親愛の情生ず　親仏、親英等となるは自然の勢なり。云々。

六月二日　晴

ヴィンエン歩六二［歩兵第62連隊］討伐研究会に参列す。同行者は田原中佐（報道部長）と森居中尉なり。研究対照は越盟の討伐なり。日本軍の討伐は独善に陥り易し。宜しく安南有識者に意見を聞くべし。武力的弾圧のみにては却て勢を助長する虞あり。

タムダオを視察す。ヴィンエンより四〇粁なり。標高一二〇〇。瀧あり。渓谷あり。松樹林あり。規模小なるも内地の山間に似たり。総督の別荘に休憩。一時間にして帰る。

橋梁の破壊の交通を妨害する事の大なる事、渡河点の隘路を成形する事の大なる事を知る。ヴィンエンの東方小流の空隙に依り、交通の妨害せらるる事、実に大なり。

土橋司令官の所見は戦争は此の半歳が関原、特に今が関原にて、後半歳じっと我慢すれば戦争は我に利あるなり。即ち欧州に於ては既に交争を勃発し、第一次大戦以後の国際紛争は俄然火の手を挙げ、英米ソ共に欧州問題に手を焼き、極東対日戦争を継続又は加入不可能となり或る條件を以て媾和を提議せんに至らん事必定。故に、後半歳の我慢が肝要にして今が関原なりと。此の所見に予は同意す。明春迄に極東戦争は日支関係を除き終息する公算大なり。独逸屈服の時よりも何となく我心が明るくなりつつあるなり。欧州の英米ソは共同の敵を失ひ共同一致の縄をきられたるに等しく、利害は悉く相反するわけなり。唯、正面的に争ふ事を不利と考へあるのみ。予は半歳後に戦争終るべしとの予の持論を山本参謀の転任に託し留守宅及郷里に送り、激励し頑張りを要望せり。

河村参謀長閣下更迭す（兵器行政本部附）の報、本日承知し感謝あるのみ。実に世話になりし人なり。

六月三日　晴

昼、河村閣下部長、幕僚を招宴せられ、夕、山本参謀を参謀が河内料亭に於て送別宴を離る。

鈴木大拙の禅の著書を二三頁繙き左の点を悟れり。禅僧の奇問奇挙は何の事か従来わからず余りにも無軌道なりと感じありしが、そは実に人間の相対観の迷ひを絶対観の悟りに転換せしむる機縁を与ふるものなるを知れり。

六月四日　晴

久方振りに家郷留守宅に通信を書き、転任の山本参謀に託す。沖縄の戦局大詰に入る。悲憤に堪へざるも如何ともする事難し。能勢連隊長以下、歩八五の将校（道路構築隊）参謀長官舎にて招宴。能勢連隊長、感激性に富める人なれば予を終生の友として感謝する事頻りなり。予もこれにて面目を施せり。久方振りに連隊の将校の意気軒昂たるを見て、青年将校の気分に触れたり。

六月五日　晴

始めて今井海軍中佐指導の下に競馬場にてゴルフを習ふ。同行酒井中佐。予は素質優秀なり。此のゴルフ競技は金を費ふ事と健康的なる事と頭の入らざる事とに於て、他の競技に出色す。故に高貴遊民には適合したる娯楽なり。

幸道新参謀長、飛行機にて来る。沖縄戦局非なり。

六月六日　晴

兵団長会同。軍の作戦企図を示す。最後の複郭地帯が司令部と戦力の主体とが掛け離れある所は実施困難ならん。戦力の主体の中心に司令部機関が居らざるべからず。今次の戦争に於て、米の戦法は決して日本より下手に非ず。ミンダナオの反抗作戦の如き全く日本軍の虚を衝けり。只々情報に於て敵は優越せる者なり。戦法の鮮なるは虚を衝く事なり。而して虚を衝き得るは情報正確周密なるに在り。此の情報も科学的補助に待つに非ずんば役に立たず　米軍は科学に依り之を解決しつつあり。

六月七日

沢野少佐の公金（逆産）処理事件に関し沢野少佐を尋問す。昼は競馬場に於て新旧参謀長の迎送宴。夕は軍司令官の新旧参謀長の招宴。河野副官、本日、歩八五に転進の命あり[92]、町尻、河村、河野ありて印度支那駐屯軍司令部の空気は実に和親そのものなりき。河村中将遂に去られんとす。各種の方面に第一流の人物なり。但し性格、余りに中正に失し味が少き感あり。偏する所に味ある

[92] 歩兵第85連隊第5代連隊長に就任（平野 p.66）。

なり。河村将軍は余りに中道を歩み偏らざるなり。

六月八日　雨　晴

陸大初審試験行はる。二十名は河内、二十名は西貢にて行はれ一日なり。本日、彼等と会食す。第一線中隊の実力僅少にして、一中隊七十名程度なら、これにては第一線の戦力発揮出来ず。補充員なき現況は気の毒なるものなり。河村参謀長閣下曰く、君は反淬の名人なりと。土橋司令官の鍵淬に対し反淬作用を必要とし、君が最も適任者なりと。嗚呼、予を以て単なる人情家、温情家、親切家、善人と称する勿れ。予自身の自覚に於ては、予は一層高次の念願を有するなり。予は社会人類の救済に志ある者なり。天下の為大慈悲を行はんなり。熱烈なる求道者なり。

西貢より十九日の汽車輸送後、南方寮来り早速予に挨拶に来る。

六月九日　雨　晴

最近十日以来、夜間必ず驟雨来る。内地の梅雨に近し。河村中将閣下、本日軍司令官と共に順化経由出発せらる。榊原、神谷参謀、予等の宿舎に会食に来る。決心の早き事は将帥に具ふべき一要素否重要なる要素にして、此点土橋司令官は極めて神速なり。現在世界の人々は無意識中に戦争は後半歳位にて終熄すべしと感じあり。具体的の事実、具体的の理由はなく、何となく斯く感じつつあり。此の何となく感ずる所に人類の尊さあるなるべし。説明のつかぬ範囲に於て直感なる霊能あり。人類以外の動物乃至生物は説明理由なくして直観に秀であるなり。人類に於ても、理智以上此の直感なる霊能の範囲あり。恐らく此の戦争も人類の直観の如く進展且終熄すべし。唯、日本に対する限り、世界人と日本人との直感の差は大なり。世界人は日本は必ず負けると直観せるに対し、日本人は断じて負けずと直観す。

明号作戦開始三ヶ月の今日、予想せる敵の上陸なく、重慶軍の進撃なく、治安は確立し、安南国の域長日に進展す。寧ろ僥倖に近し。それ故に明号作戦そのものは大成功なりと云ふべし。結局はやって宜しかりきと云へるなり。旧仏印当時に比し不可なるは、河内市街に乞食及餓死者の多き事、公園道路等の荒廃甚しき事等なり。物価は作戦前より漸次昂騰しつつあり。洋菓子一箇一円五十銭と云ふ程度なり。仏人はそれにても割合呑気なる生活を為しあり。彼等は後半歳もすれば戦争は終熄すべしと信じある為なり。

~~予も一年半の印度支那勤務にて、漸く軍部内に信用を博するに至れり。司令部の参謀中、最も信頼出来る人と世評せらるる様になれり。予の自惚に非ず。誠意真実に於て豪も人に譲らざる予の覚悟の滲み出てくる反映なり。~~

六月十日　晴

参謀は予一人となる。夜、南方寮遊びに来る。彼等を教育するは予の責任なり。人間も頼りにして来られると責任が湧くものなり。余り遠慮し人に迷惑をかけぬ主義にて人を頼らざる流儀は、親交を増さず。何時迄も対立状態の交際関係にあって彼此一体となり得ず。従って他人の協力援助を得るに十分ならず。之に反し、全身全霊を相手に投げかけ頼りきる時、相手は責任を感じ一生懸命に世話を焼く様になるなり。或は、最初は迷惑を感じつつも、結果は自分のもの自己の責任と感じて援助協力する様になれるなり。南方寮の我等参謀に対する態度は後者なり。南方寮の人気を得たる一端を聞くに、彼等は兵に対しサービスをよくするなり。其の結果は逐次上層の方に宣伝せられ、幹部大隊長も其の評判に動かされ南方寮を訪れる様になるなり。之に反し、将校或は上層幹部に対しサービスをよくする主義は、余り宣伝が広げられず。何としても大衆を掴む事が必要なり。軍隊に於ける大衆とは兵階級なり。此の盛り上る宣伝、盛り上る人気でなければ広く且持続的の人気を維持し難しと。予がラオス人を懐柔したるも此の手なり。先づ子供を対象として宣撫するなり。然る場合は一家悉く喜ぶなり。母親は勿論老人迄喜ぶなり。之に反し、若し妙齢の娘や婦人を最初の宣撫目標とせんか、必ずや彼等は反感迄に至らざるも蔑視嫉視の眼を指し向くべし。子供を相手とする事が盛り上る力なり。南方寮に「よし子」と称するサービスガールあり。兵間にマスコットの如く云はるる由、其の原因を尋ねるに、自己の月給小使銭迄投げ出して迄兵にサービスするなり。それ故に人気は大したるものなりと。又南方寮の経営方針は、根本は義侠心親切より発しあり。最も交通不便の所に慰問に行く事を楽しみとし、或は南方寮閉鎖前採算を度外視して別離の奉仕を出張して行ふ等の挙ありしと。結果人気は利益を生むなり。最初利益を前提として出発せば人気は上らず結果は利益を上ぐるを得ざるなり。「焚く程に風の持ちくる落葉哉」なり。

六月十一日　晴　雨

帝国政府は八日の御前会議に於て戦争貫徹一億決死皇土守護を決定し、中外に之を寮知せし由なり。中央より、今後如何なる難局に処するも戦争を完遂すべく、非常の決意ある旨打電せられ、之に伴ひ南方軍総司令官切に烈々なる訓示電あり。世界を敵として唯一国が闘ふ事、一面悲壮美を感じ、我等は独逸と提携して共同戦線を張りありし時よりも確かに一種の気軽さを感ず。之は腹のきまりゐる為なり。此の開闢以来の曠古（こうこ）の大戦難戦苦戦に参劃し従軍し得たる我等生涯の歴史的意義は、実に千歳一遇と云ふべく後世子孫に語りつぐべき多くの美談教訓を得ざるべからず。迷へる間は憂鬱なり。既に道は絶対に一筋よりなしと覚悟を定むれば朗かになるなり。此の朗かさとは一種の気軽さを云ふ。遮莫（さもあらばあれ）皇土決戦は天与の試練なり。元寇以来嘗て無き試練なり。此の試練を克服したる時、日本人は正に世界最優秀の練成せられたる国民の名を齎（カ）ち得べし。南方寮の女性四名が兵と共に十九日の旅行に於て体験せし事は、我等は兵隊さんのする事は出来ると云ふ

事の体験なり。非常の場合非常の力を発揮し得る試練を迎へゐる日本は神の選民ならずんばあらず。夜、南方寮と散歩す。

六月十二日　晴　雨

安南帝国に対し政府は、交趾支那（こーちしな）、ツーラン、河内、海防を還附する旨、軍司令官より保大[93]に伝達せらる。米の供出制度を撤廃す。

第二十二師団参謀長等来り。夕食を河内に於て行ふ。坂根中佐最も芸人なり。

人間は環境に順応する特性を有す。自然の勢に反抗する事、環境雰囲気を克服する事は非常なる克己心を要す。之を為し得る人は寥々たり。非凡人のみ克く之を為し得、遑ある環境に於て勉学の出来る事は難中の難なり。遑あればある程身心は弛緩し惰勢がつくなり。防御に於ける攻勢移転の発動は非常なる克己心を要す。自然に抗するものなればなり。

六月十三日　晴

沢野少佐、憲兵隊の取調を受けたる後、予の許に来り泣き乍ら話す。部下を過信し後始末悪かりし為、公金の使途に関し兎角の風説を立てられたるを悔ゆ。榊原参謀と同期なれば予と共に我官舎にて昼食を共にす。彼は九歩の兵の頼母しきを説く。傷ついて後へ下る様なものは居らぬと。一騎当千とは九歩の兵なりと。沖縄の兵は捨鉢なり。上官を頼る事絶大なり。既に家もなく妻子も行方不明なれば、我身一つのみ。沖縄の兵は気の毒なり。

夕、神戸旅館の女主人と語る。憂国の情に於て我等とも同一なり。彼女曰く、家の泥棒（安南人）は使用人に在り。内部の手引なくして外部より泥棒侵入せざるを安南人の特色とす。彼女は亦、人に物をやりて喜ばれる事を喜ぶ人間なり。一種の義人侠婦とも称すべけれ。大使府にて情報会議あり。

六月十四日

本年度、河内地区現地入営兵五十名の壮行会が河内神社に於て行はれ予は列席す。日本人の小学生十名ばかり列席す。河内神社は国民学校の内に在り。国民学校の生徒が先生より歌を習ひあるを聞き、予は沖縄に於ける日本児童の可憐なる斯くの如き小供が戦禍に斃るるの状を想見し断腸の思あり。日本児童の七、八才より十二、三才の子供の雄々しくも純真可憐なる態度は異境に於ける予を最も感傷的ならしむ。敢て吾が児を思ふに非ず。人間の本性なるべし。斯かる児童の為には身を粉にしても保護せんとの心情湧くなり。夜、今井海軍中佐の官舎に招かれ日本酒月桂

[93] バオダイ帝（1914-1997）阮朝ベトナム第13代皇帝、在位1926-1945年。明号作戦後に日本が成立させた安南帝国の元首（桃木 p.329）。

冠を飲む。実にうまし。南方寮、すみ子、年枝、まり子、よし子の連中サービスに来りあり。後宝ダンスホールに至り、カムテンの安南芸者屋にて躍りを見物して帰る。

六月十五日　晴

討（第二十一師団）兵団隊長会同に列席す。司令部と麾下兵団と呼吸がぴったり合ひたりと三国閣下申さる。寔に麗しき集団なり。上田久太郎兵器部長少将に進級せらる。我事の如く嬉しく思ふなり。実に職務に精励し純情の人が上司の受悪しく進級遅うされありたり。予は之を国家的罪悪と思ひありしが、今漸く進級の快報来る。慶すべし。賀すべし。明機関の運用に関し、本日、小福少佐、須賀大尉、毛利中尉等と討議し、遂に予の説が勝を制し、其の方針の下に新発足を為す事にならんとす。要は従来の西南支那政治工作を撤回し紅河以北に於ける遊撃的捨石たらしめんとするに在り。

最近越盟の跋扈を注視せざるべからざるに至り、近く討伐行動を開始せんとす。然れども住民に云はしむれば、越盟よりも匪賊よりも日本軍が最もこわしと。越盟はヨタ者の集合なり。軍隊は武装的威力なり。日本軍の軍紀風紀の振粛を要する所以なり。

六月十六日　晴

参謀長官舎に於て塚本公使[94]（総務長官）、西村総領事[95]（東京州理事長官）、奈良橋総領事[96]（河内市長）、木原司政長官（■■局長）等を招宴。予は列席す。塚本公使、予に曰く、君は軍人として政治家にならうと思ふ勿れ。各々本分あり。軍人に政治の隅々迄わかる道理なし。それがわかった様な顔をする時は、政治家は反撃す。軍人は政治がわからぬとて委す時には政治家は軍人を援助する気持になるべし。各々経験あり。本分あり。文官が軍人に対し発言するはよくよくの事にて通常遠慮する者なり。然れども軍人は政治に割合に嘴を入れるものなり。若き幕僚などは如何に失言しても差支へなし。君等の階級と年配となれば失言は面子問題となりて後始末が大変なり。抜き差しならぬ事となるなり。慎重ならざるべからざる年配なり。印度支那の将来は、土橋軍司令官を更迭するに非んば巧く行かぬと思ふ云々。又、塚本公使曰く、文官は此の時局に於て立身出世する様な気持を持ちあるものは少きも、現状を維持せんとする気持濃厚なりと。

木原司政長官曰く、鈴木貫太郎首相は屍を踏み越えて挺身する精忠至誠の人にて、小林躋造台湾総督輩は全く蝿に等しきものなりと。最近新聞記者団と首相との会談記事が同盟通信に在りしを読むに、日本国体の尊厳を徹底的に体得せる首相は日本は絶対に亡びず。日本が亡びる事は宇宙

[94] 塚本毅（1896-1973）仏領インドシナ大使府特命全権公使（外務省外交史料館 p.613）。明号作戦後はインドシナ総督府総務長官（『戦史叢書　シッタン・明号作戦』p.647）。

[95] 西村熊雄（1899-1980）仏領インドシナ大使府総領事（外務省外交史料館 p.678）。明号作戦後はトンキン州理事長官（『戦史叢書　シッタン・明号作戦』p.647）。

[96] 奈良橋一郎　仏領インドシナ大使府勤務（中野 p.34）。本日記によれば明号作戦後はハノイ市長。

の絶対真理正戦が亡びる事にて、斯くの如き事は絶対に在り得ずとの大確信を有せるものの如し。吾人の共鳴措く能はざる所なり。

塚本公使曰く、仏人の日本軍の正義感に信頼する事、実に大なり。安南人の迫害に対し之を救済せるは日本軍なりし例少なからず。斯くの如く敵側より信頼せらるるに至らざれば王師とか皇軍とかは云へぬなり。現在頼るべきものなき仏人の境遇に於ては安南人を信頼せずして日本人を信頼しつつあり。日本民族の優秀の一端として喜ぶべき話柄なり。

六月十七日　晴

参謀と事務能率の向上と宴会との関係は一応考慮の要あり。大佐以上となると兎角宴会等に追はれ、深厚遠大なる企画の思索を行ふの時間と環境減少の感あり。本夕、吉村大佐（鉄道連隊長）の転任送別会を河内料亭に於て行はれ出席す。帰途、南方寮（開寮前）に寄り、午前一時半迄話す。約二千米の道を歩きて帰る。歩行は殆んど負傷前に異ならざるに至れり。

醜敵東漸空襲減少
東京都民自更生
馳思沖縄血戦場
同胞苦戦転断腸

を口ずさむ。馬木原（南方寮主）曰く、商売上知己友人になりし者と、商売を離れて友人となりし者への気分は全然別個なり。後者の如き知己友人に対し感謝措く能はず。信軍の参謀と南方寮との関係斯くの如しと。

六月十八日

昨日、安南人の独立先覚者阮大学[97]の殉難記念慰霊祭ありて、其の余勢は仏人家屋を襲撃破壊し、仏人を殴打し、首謀容疑者を憲兵隊にて収容したる所、憲兵隊前にて解放示威行為をなし、本朝憲兵隊の工作員は越盟（？）の為、一名射殺せらる。独立運動も下手をすれば外人排斥となるべし。越盟は民衆の福祉を増進する事を標榜しある為人気ありて、越盟の情報は仲々あがらず。民衆は内面共鳴しある故、之をかなはんとする精神あるものの如し。之を探索する時は仕返へしを受くとの恐怖心もあるものの如し。

佐藤久弥参謀着任す。予が区隊長なりし佐藤弥太郎少佐[98]の弟なりと云ふ。奇縁と云ふべし。最近は軍司令部の参謀は予一人なる為、昼間は忙しく夜間は疲れて眠るばかりなり。

自分ながら最近、将校と下士官兵隊、将校にても上級将校と青年将校間に衣食住の余りに甚だし

[97] グエン・タイ・ホク（1902-1930）1927年にベトナム国民党を設立し、党首となる。1930年、イエンバイ蜂起を起こすが、フランス領インドシナ当局に鎮圧され、処刑された（石井 pp.16, 75）。
[98] 佐藤彌太郎　少佐　最終職は第37軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.600）。

き懸隔を生じ居る事を痛感す。之は外国に駐屯し外国の建物に居り、都会と田舎に分屯せば勢陥り易き現象なるも、皇軍の本領としては大いに戒慎を要する事実なり。土橋将軍なども若し純日本式の鍛錬を加へなば、今頃如何ばかり名声嘖嘖（さくさく）たる名将軍となりやも知るべからず。遺憾ながら大尉時代より外国の生活に慣れ過ぎ、軍隊的簡素生活を体得するを得ずして今日に及ばれたり。それ故今日部下の信望を失ふことありとせば、此の東洋的教養より生ずる武将的風格の不足なるべし。記して以て後来の戒他山の石とす。外国駐勤久しければ勢日本軍人の本領を失ふ起居と化し易し。

六月十九日　晴

総督府官邸に於て、軍参謀長の高等官（奏任官待遇）司政官の招待あり。明日、偕行社南方寮の開寮を行ふに方り、第二十一師団司令部は突然タイアンに戦闘司令所を進む。一種の皮肉の如し。人生は感情にて動く事に理屈を之につくるが真相にして、理性が働きて感情が之に加はるは寧ろ従なる如く感ず。憲兵隊の沢野少佐留置事件の如きも之れなり。

若い内は如何に放言するも差支へなし。然れども地位進み年配となれば一言には責任を伴ふ。故に言は慎重洗練せられたるものならざるべからず。研究不十分なる事を猥りに思ひつきて言ふは不可なり。言へば責任を取らざるべからず。失言は信を失ひ、鼎の軽重を問はる。言へば辻妻を問はせる迄実行せざるべからず。茲に各種の無理を伴ふ。

第二十二師団の転進前国境外進行作戦は軍司令官の思ひつきにて白紙的に有力なる一案なりしも、十分なる研究を行はず直に命令せんとし、第二十二師団は之に反対せしを以て、軍司令官は面目上引っ込むことも出来ず命令を以て強要せんとし、茲に兵団長と軍司令官との感情上の対立となり妙なる空気となれり。

佐藤参謀は寺内元帥副官を二年に亘り勤めたる人。左の挿話は経済現象の面白き原理を示すに足る。曰く、南方軍司令部にて管理部の主計がやかましく酒や煙草を節約する程、之を統制緩なりし時代よりも各品が余計に入ると。理由は、節約緊縮主義で臨めば各部が山をかけ、実際必要より余計に請求する故なり。人間の心理は足らぬと思へば求めんとする気分あり。有りと思へば要求せず。此の人間の心理に投ぜざれば不可なり。

六月二十日　晴

南方寮開寮式あり。事、茲に至りし原動力は予も幾分干係なしと云ふを得ず。若し予をして披露宴の挨拶を行はしめんか、今、少しく深刻なる言葉を吐きしならん。原住民の給仕女十三名、二百数十名中より選抜したりと。然れども女の銓衡と男の銓衡したる場合、幾分差あり。女性仲間の美人と男性仲間の男好きする女性とは一致せざるなり。斯くの如きも銓衡上注意すべき所にて、客本位と云ふ事が必要なりしなり。

本夜出発。河野大佐、毛利中尉と共にランソン第二十二師団司令部連隊長会同に参列の為出発。午后五時出発、ランソン着午前三時。途中タンプコー［ダップコウ］、フーラントン［フーランチョン］の鉄道爆破されある為、渡場二箇所にて意外の時間を要せり。昨年の春は橋梁安全なりしに変化も大なる哉。ランソンにて警備隊宿舎に泊る。

六月二十一日　晴

第二十二師団連隊長会同午前十時よりあり。然るに敵戦闘機P-51屡々頭上を低空にて旋回し、会議中屡々待避を余儀なくせしめらる。今回の会同は師団の泰（たい）国転進の為の準備に関するものなるが、此の兵団の特色として司令部の当幕僚の麾下兵団に対する態度は親切を極めたり。就中情報関係を重視しあるは此の兵団最大の特色なり。今回の会同に於て予の最も啓蒙せられしは平田閣下の精神的方面に造詣の深き所にて、予も従来の疑問を氷解せしめられたる所ありたり。即ち日本の必勝は現象（表面）（色）の方面より説明がつかず、内面的心的（識）の方面より始めて説明がつくと云ふ事。何となれば日本の国体は絶対宇宙の真理にして、此の絶対真理の破るると云ふ事はあり得ざるなり。日本の国体のみ宇宙の真理に副ふものにして、日本天皇陛下は宇宙真理にておわす。日本は神国なりとはそれを云ふ。宇宙の根源を為すものあり。平田閣下は之を天の御中主神と称せらる。何れにせよ宇宙の根源を為す霊体なるものの存在を認めんとす。日本天皇は実に此の大霊体の顕現なり。且子孫にておわす。それ故に、日本天皇の居ます日本が亡びる事はあり得ぬなり。その天皇に刃向ふ醜敵は時に隆替あれども、何時かは神の摂理に依り征配せらるべきものなり。以上は宇宙に霊の存在する事、神の存在する事を前提とするものにして、神も霊も存在を認めざる人にはわからぬ議論なり。之は行にてのみ知り得となすが、平田閣下の持論にて幾多の体験を積める人ならでは説明は無実なり。此の点は予の如き霊の存在に関する体験者はわかるなり。大日本は神国なりとの大確信の如き理屈より来りたるものに非ず。実に宇宙の霊体を把握せし人の体験より看破されしものなり。日本の天皇の御心に副ふものは栄え、御大心に背くものは衰ぶ。宇宙の絶対真理に反するものは滅び、之に合するものは栄ゆ。平田将軍の尊敬せる知己にして、清淨神の如き生活を営み、所謂天御中主の神の霊を体得し予言する人あり。此の人の説に反する或る実業家は目がつ［ぶ］れ或る知名人は産を破りたり。此の人の予言は不思議に中るなり。此の人は神妙不滅なりと断じあり。神は極度に不浄を忌む。真理を体験する人は少しにても邪心あれば忽ち天罰加はるなり。此の人曰く、秩父宮殿下と松平節子姫との結婚は子孫を生ぜざるべく、高松宮殿下と徳川紀久子姫との結婚も子孫繁栄せざるべしと、蓋し松平家は維新の際皇室に弓を引き徳川家は亦朝廷に対し忠勤を抜んじたるものに非ず。云はば賊なり。之が皇室と縁組する事は真理を悖す事となればなり。三笠宮様に至りては子孫繁昌すべしとは此の人の予言なり。松平宮内大臣の更迭は神国の為喜ぶべし。如何に皇室に御稜威ありとも之を輔佐する人に真理に反する者あ

れば神の恩慶を受くる事難し。此の意味に於て日本の最近の姿は神の恩恵を受くるによき環境となりつつあり。即ち、清められ改められ神ながらの姿となりつつあるなり。日本の政治とは「まつりごと」にして絶対真理に通づる心となり、神の真理を受け之を行ふ事にして、祭事と政治とは一体たるべきものなり。日本に議会を造り之れにて政策を樹つる事は間違ひなりと断ず。東條首相は必勝の信念を東亜の物量の利用開発にありとなしたるも、物量の利用は不可能の時代となり東條流の必勝の信念は崩壊するに至れり。此の東條首相は、心界方面の施策を不問に附したるを以て日本の戦争指導は困難となりたり云々。事実日本の現状は物質的に一面悲惨なる状況になりつつも日本人の鍛錬にはこれ程よき相槌はなきなり。明治以来の大都市の靡乱せる文化の余毒は清浄され日本人は相互の信愛のもとに立ちあがりつつあり。以上平田将軍の説く所予の平素の思想を更に裏書する点にあり。今回の旅行中最大の収穫として意を強くせり。唯、平田将軍は口ぐせに「神様」を持ち出されるを以て、常人には神がかりと称せられ、却て所説が一方的極端論として人に容れられざる所あるなり。説く所は吾人全然同感なり。少し表現法を俗人向きとなすならば大衆の首肯を買ふに至るべし。

会同は二十一日、二十二日、二十三日と続き、二十三日には第二十二師団の合同慰霊祭ありて予は之に参列したり。ランソンの要塞攻撃の跡を、河村正保中佐の案内にてウシウイ保塁を見学して帰りしも有益なりし。要塞攻撃と云ふ特種の攻撃は其の心構へに於て殊勲と認めざるを得ず。

平田閣下の説に附加すべきものあり。上生下が日本の国体、上が下を思ふが日本の神ながらの道にて断じて下剋上に非ず。然るに明治時代より下剋上の思想抬頭せり。下剋上とは自己を基礎として他を律する思想なり。之れにては神が守らんとするも守れずと云ふが現状なり。本来の神の心に還元する時、天佑と日本とが一緒になりて必勝来るなりと。閣下曰く、機構改善と云ふ事を頻りにやる。之を以て仕事しと為すも、反面機構改善は其期間仕事機能の停止なり。之は一面赤の謀略なりと。又曰く、石原莞爾将軍の如き現象界を見て云ふ人に非ず。霊界を直観して云はるることを以て総て常人には驚異的にして予言的なり。現象界の二二が四式に推論を進める人に非ず。霊界を通して真姿を直観して言はるるなり。それ故に多田将軍は石原の言ふ事を少しでも早く国家は実行して置けばよいのに実行せぬと。又曰く、物質は物質の因果関係を結ぶ事は事実なり。又心界が現象界に於て因果関係を結ぶ事も事実なり。故に、三世の因果と云ふ事あり。永き目を以て見るべし。唯、余りに物を心理的に考へすぎて、身体の物理的原因を直に心界の因果関係に結ぶ声あるは認めざるべからず。何でもかんでも天罰心罰と云ふは個人の修養には可なるも、余りに物理的法則を無視せりと予は考ふなり。

六月二十五日　晴

予は何としても沖縄島の占領せられたる事は人一倍痛恨に堪へず。依って沖縄島の奪還さるる迄、

心中喪を表明する為に煙草を断つ事とせり。

戦争の苦難の底のどことなく

神州不滅の声がする

是が予の最近の心境なり。理屈で説明のつかぬ処に、何となく斯くの如き直観、斯くの如き確信が生ずるなり。吾身が少しにても正しく清ければ、神州の真姿顕現日本の戦勝が一刻にても早しと信ずるなり。

本日の同盟通信に依れば、沖縄守備軍は二十日最後の総突撃を決行し、爾後消息を絶てりと。同時に牛島満中将以下、守備軍に感状を授与せらる。本日の大本営発表程悲痛に感じたるはなし。然るに、我同胞我日本人仲間に於て行的方面に慎しみを増せるが如きことを認めず。嘆ずべきの至りなり。吾人は心中の感じを直に行に移すべきものなり。日本人総てが神の如き姿となるは前途遼遠にして、日本人は更に更に大なる天譴を蒙らざるを得ず。

泰(タイ)東北方地区の敵機による物量投下盛んなるのみならず、南部印度支那地区に対する落下傘諜者の投入も累加する情勢にて、ボルネオ島の侵寇の次に来るべきものは印度支那地区の侵寇の予感あり。

六月二十六日　晴

神の宣託を受くる者は行績正純ならざるべからず。即ち、ラジオの波長を定むる如く神の宣託に相応する波長を有せざるべからず。日本の明治以来の実情は大勢に於て良かりしも、内容に至りては随分いかがはしく顰蹙すべきもの多く、大正昭和の初期に於て特に然り。此の意味に於る神州日本の顕現の為の波長となるには、国内の夾雑物を一掃せざるべからず。外科的内科的大手術に依らざれば得べからず。此の点に於て現戦局は、其の大手術、大掃除、大はらひ、大みそぎとも称すべけれ。国内の糜爛時代の内容を聞く毎に、これにて直に天佑が来れば不思議なり。神国日本と雖も、神様が左迄不公平に甘く取扱はるる事なしと感ずるなり。中山忠直氏の言へる如く、正に百万の犠牲を払ひてのみ始めて神国日本を顕現するを得べし。

六月二十七日

皇国の神国たる実証を歴史上に確乎不抜の信念を後世に残す為、百万の生霊を犠牲にするも亦已むなし。是亦、子孫の為に計るの一なり。今や吾等千古未曽有の歴史を樹立する責任に直面しつつあるなり。武者振ひとか雄叫とかは今の吾等が身に嵌めて相応しき言葉なり。

文官が感心する軍人とは政治に知識や能力ある軍人に非ずして真正の軍人なり。地方人の感心する軍人とは交際の上等な障(さわ)りのよい軍人に非ずして真正の軍人、生粋の軍人なり。花柳界の女供或は水商売の女供に聞いても、如何なる軍人が好かと問へば芸の出来る軍人にも非ず、円転滑

脱の軍人にも非ず、軍人らしき生粋の軍人なりと答ふ。男性が女性を見る場合も同様の事を云ひ得べし。外人が日本人を求むるは外国智識や外国語や外国儀礼を知れる日本人に非ずして、頭山翁の如き生粋の日本人に尊敬と興味とを持つなり。茲に於て其の道をまっしぐらに深く深く進むことの処世の法なる事も判明すべし。

六月二十八日　晴

越盟問題が印度支那治安のポイントとなった。去る二十一日、越盟党員容疑者百二十名を日本憲兵に於て一斉検挙したのである。本日、大島憲兵分隊長の報告に依れば、其の検挙者の中、女子宣伝部長たる二十八才の女性があった。最初仲々口を割らなかったが一週間親しく飯を食ったり親切にしてゐる憲兵将校の態度に感激し、日本軍の親切な事を始めて知ったとて始めて白状し、やや越盟なるものを掴み得た。此の女は、私は最早転向は出来ない、転向すれば越盟に暗殺される事はきまってゐる、何れにせよ一度越盟に血盟的加入をした以上、一生は足が洗はれない事になってゐると。越盟の秘密結社的組織は驚くべき巧妙と根強さがある。犯人や俘虜を捕へて泣き落し主義に行くべきや威嚇主義に行くべきやは相手にも依る事であろうが、何れの方法に於ても根気負けさせるためには相当の辛棒が入るものだ。大抵相手は根気負けするさうである。

六月二十九日　晴

沖縄島に於て、最高指揮官牛島中将、長[99]参謀長は、二十六日腹十文字に切って自刃し副官が介錯（かいしゃく）したと云ふ米軍のニュースがあった。悲愴の極みである。然し武人として長中将等の如く華々しき生涯を送られた人は少く羨しくも思はれる。遮莫（さもあらばあれ）、此の戦争に於て人材の多数死没はなげかはしき限りである。

戦争に於て儲けるものは何か。日本人の真姿顕現、大和魂の復活か。都民十万戸の罹災民の帰農の如き、徹底的地方分權の如き、文武一途義勇公に奉ずるが如き。之は本土の敵寇を予想し始めて行はれ得たる現象だ。平時如何なる方式を出しても之は実現出来なかったものだ。兎もあれ、戦争は建設に破壊に平時不能なる事を一気苛成にしでかすものだ。

参謀の素質も低下したものだ。士官学校出身者が悉く参謀にならなくてはならない現況では、国軍の能力低下が疑はれるでないか。

六月三十日　晴

沖縄島最高指揮官牛島満中将の辞世として同盟通信の報ずる国風は左の通りである。

---

[99] 長勇（1895-1945）中将　インドシナにおいては、1940年9月、印度支那派遣軍参謀長、1941年11月、仏印機関長を務めた。1945年6月、沖縄で自決戦死（『日本陸海軍総合事典』p.102）。

春待たで枯れ行く島の青草は

　　御国の春に蘇らなむ

矢弾尽き天地染めて散るとても

　　魂かへりつつ御国護らん

マデシチック映画館に日本物「取物帳」を観て帰る。南方寮に寄る。金井憲兵中尉、同県人にて歩三九出身なる由、予に挨拶す。人情は血戦遂行の途上に於ても、毫も平常と変ることなし。寧ろ純となるのみ。人間特に男女間に好悪愛憎の生ずることは自然の情なり。唯、愛憎好悪の為に日本人たるの面目を失墜せざらん事を期するのみ。

七月

七月一日　晴

西貢陣中新聞[100]を閲読中、過般の牛島中将の訣別の辞あり。予は血涙を含んで之を読めり。

曰く「大命を奉じ皇軍醜敵撃滅の一念に徹し、勇戦敢闘茲に三ヶ月皇軍必死の奮戦力闘にも拘らず敵の攻撃を粉砕する事能はず。事態正に危急に頻せり。麾下部隊本島進駐以来、現地同胞の献身的協力の下に鋭意作戦準備に邁進し来り敵を邀ふるに当っては航空部隊と相呼応し皇土沖縄防衛の完璧を期したるも、満不敏不徳の致す所、事志と違ひ遂に負荷の責任を継続する事能はざるに至り、上陛下に対し奉り下国民に対し真に申訳なし。事ここに至る以上、残存手兵を提げ最後の一戦を展開し阿修羅となりて猶敵兵を撃滅せん存念なるも、唯々重責を果せざりしを思ひ長恨千載に尽きるなし。最後の血闘に当り既に散華せる麾下将兵の英霊と共に皇室の彌栄を祈念し奉り皇国の必勝を確信し、或は護国の鬼と化して敵の本土来寇を破摧し、或は神風となりて天翔り必勝戦に馳せ参ずる所存なり。茲に従来の御指導御懇情並に作戦協力に任ぜられたる各上司各部隊に対し深甚の謝意を表す。遥かに微衷を披瀝し以て訣別の辞とす。

春待たで枯れ行く……

……

矢弾尽き……」

七月二日　晴

予の生涯、特に今次戦争を通じた体験で人物の鑑識と云ふ点に従来人の見方が誤ってゐた様に思ふ。即ち人間の価値を個人本位に立脚して点数を取ってゐたのが従来のやり方だ。併し之は個人主義に失してゐる。更に一体的見地に於て人を見る必要があった。如何に個人の点数が高くとも多衆の中に働かして成果を挙げ得なかったなれば、個人の価値は僅少否無に等しいではないか。而して、此の多衆の生活環境に於て能力を発揮し得るものは予は犠牲的精神が根本だと思ふ。自分自分と云ふ考へがあれば一刻も多衆生活の中では大きく生きて行けないのである。個人が如何に点数が高くとも人を動かし得ないのである。それ故に人間界の様に人と人との力を併せねばならぬ環境に於ては、自我の強すぎるのは結局衆望を得る所以でない。だから個人の価値も従来の個人主義的見地より余程変った角度を見直さねばならない。

光兵団（第三十七師団）の印度支那地区に於ける乱棒狼藉は吃驚の外はない。之が皇軍とは如何にして思はれやう。そんな事例は枚挙に遑がない。光兵団は熊本師管の兵にて沖縄出身者も少

[100] 同盟通信社が発行していた2ページのタブロイド版日本語新聞。1945年9月20日まで発行された（早瀬 p.98）。

くない。其の内、沖縄出身者が最も自暴自棄的行為に出でたのは同情すべき点はある。併し光兵団の将兵は乃公の師団は、内務は出鱈目だが戦争は強いとの自負心を持ってゐる。之が又非常に誤った考へである。軍紀風紀の振粛しない軍隊にして如何にして戦場の勇者となり得やう。彼等の云ふ戦争に強いと云ふ事は、手荒い事を平気でやる殺伐な事を好むと云ふ代弁に過ぎないのである。光兵団は戦争には慣れてゐる。それは討兵団に比し老巧であることは吾人之を認めるが、断じて戦争が他兵団に比し強いとは云ひ得ないのである。物心一如、表裏内外一如、内務即戦務である。一方が良くて一方が悪いと云ふ事はない。両者は同一のものであるからである。皇軍も名を冒涜する様な恥づべき軍隊も少くない。支那事変は一面皇軍を悪くしたとも云ひ得やう。衣食住を極端に不自由にする事は軍隊に於てすら軍紀風紀の振粛上不可である。衣食足って礼節を知るで、ひもじいから盗みの心を生じ不足心から求めんとする心を生ずるのである。飽満状態に於ては慾心が起らない。（そのものに就て）光兵団そのものを責める事は失当で、過去一年、山西より出発し徒歩行軍で而も作戦に作戦を重ねた光兵団が、気も心もすさび不自由不足不如意の戦陣生活で掠略強姦殺人放火が常習犯になった事も上司の兵力運用に起因する事が多い。ビルマ方面の我退陣も、原因が民心把握に失敗した事に起することが多い。此の民心把握に失敗した原因は、インパール作戦の様な無理な作戦をして、軍隊をして餓えしめ所謂軍紀風紀の壊れた事に依るのが多いと思ふ。

七月三日　晴

長中将の壮烈なる陣没より一週間目に当ると云ふので、長さんを予てから尊敬してゐる神戸旅館の女主人が、責めての供養に河内の信及［び］討の幕僚を招待して法事思ひたつとて、吾等はその招待に預った。長さん程男らしく気楽に気儘に一生涯を送った人は少なからう。万人が其の横紙張りを認めるようになればその人は処世上に於て成功してゐると認めてよからう。併し万人が此の横紙張りを認める原因には、其の人の非凡な所があるからであって平凡な人物なれば忽ち落伍者として爪弾きされる運命に陥る。此の点に於て、長さんは常凡でなくやはり傑出した所を持って居られた。

米軍が日本の本土に上陸作戦を試みたら必ず失敗する事を断言する。予一個の体験に依れば邪は正に勝てず。遂には最後が悪い。素より所謂正の位置に立つ側が人道上に於て至当な事を行ってゐた場合の話であるが、日本も漸くにして正の立場に立ち天佑を享受する運命に立至った事を予言する。かくて本年秋迄に米国は九州或は四国に対し初回の上陸作戦を試みるべきも、其の犠牲余りにも大なる為、遂に国内に於て戦争遂行反対の世論が抬頭し、遂に本年末期頃何等の形式に於て休戦状態が生ずるのであるまいか。

神戸旅館のお神にも感ずるのだが、商売とか人気とかを度外視して此んな職業方面の人で義理を立てる人が少くない。仁義を踏む点に於て軍人や官吏の及ばない所がある。人の褌で相撲取る事

を以て常習とする属吏根性程指弾排斥すべきものはない。職業の如何を問はず中途半端や未熟のものはつまらない。如何なる職業に於ても秀でた部類になると、人としても何処へ出しても恥かしくないものだ。

小林方明参謀が来てから賑かになった。小林方明大佐の言では、土橋将軍は公平である、人情に厚い。併し決心の変換が早すぎて用兵上では支障を来す事が多いとの事であって、全くその通りである。

七月四日　晴

此の頃は雨期に入り毎夜必ず雨だ。日中の暑さは西貢以上で夜も暑くて眠りつかない日も度々ある。河内の夏は漢口に比して雨があるだけ凌ぎ易い。

第三十七師団の印度支那地区に於ける対民衆上指弾すべき悪例多きに比し、茲に感心すべき事例は歩八五の第四中隊八巻大尉の指揮する部隊のラオス地区に於ける民心把握だ。道路構築に従事して二ヶ月の後、中隊が今度泰の方へ転進する事となったが、住民は皆泣きながら五〇粁を惜別の情に堪へず送って来たと云ふ。「ラオス」人の純情もさることながら八巻大尉の中隊が軍紀風紀の正しくよく住民を悦服せしめたに由る。予がバンボイで八巻大尉の本部を尋ねた時、同居せる「ラオス」人家族の如何に尊敬してゐるかが窺はれた。之は八巻大尉に対する中隊将兵の尊敬心がラオス人に伝波してゐるのだと予は直観した。こんな八巻大尉の様な責任観念の旺盛な人徳の立派な将校が皇軍将校の典型である。殺したくないものだ。本日、八巻大尉と河内で再会した。

人生は浮沈あり。栄枯盛衰がある。予の脳裡には今シベリア派遣軍司令部の華やかな生活及［び］南方軍司令部の昭南に於ける華やかな生活、之に反して現カガヤン河谷の山下兵団の軍司令部の苦境、果ては沖縄に於ける長中将等の敵上陸前の華かな生活と上陸防禦戦以後の朝露の如き運命が走馬燈の様に徂徠する。人生とはこんなものだ。泣き悲しみ楽しみ笑ひ抑揚頓挫吉凶禍福あるのがうつし世であり人生である。之に処するには環境に従って之れに深く徹底する事だ。悲しむ時は悲しみ、遊べる時は遊び、働くべき時は一生懸命に働き、広く且深く人生を満喫し経験を豊富にする事だ。随所作量の態度が必要だ。他に何者もあるべきでない。要はなりきる事だ。

七月六日

構築中なる作戦道路偵察の為、直協機に依り十時ジャラム飛行場を出発す。之が予の生涯に於ける最大災厄たらんとは夢にも予感せず。飛行機は出発前、故障の為一時間を修理に要せり。同乗者は藤田伍長と平賀伍長なり。直路サムヌアに向ふ。雲深き為、ヴェンチャン[101]に飛ぶべき所を途中より引返す。河内に帰還せんとしたるに如何なる次第なりしや、操縦者はタンフォア［タインホア］

[101] ビエンチャンのことかもしれないが不明。

方面平地へ向ふものの如し。天気は平地に於ては晴朗なり。空襲の危険もあり予も気が気ならず、何となく絶望的予感に襲はれたり。操縦者は一向に地点の標定に自信なきものの如く、予の視察に依れば飛行機は海防方向に向へる事明かなり。予は地図に依り河内に帰還せしめんとし位置を探査中の処、十二時頃フンエン［フンイエン］市と紅（ホン）河とを発見したるを以て紅河を遡り河内に向はしむ。十二時十分頃フンエン西北方紅河右岸を高度八百米位にて通過中、平賀伍長は突然「敵機P三八」と叫ぶ。藤田伍長は「急降下します」と称し、飛行機は見る見る地上に接近す。予は思慮を運らすの遑なく、数分にして右上方を見れば、P三八の双胴の敵機我れに二百米も接近追躡し来り忽ち我れを射撃す。花火の如き火線が敵機より我れに向へるを明かに認識す。機関砲の射撃を受けたるなり。次に予は右指頭と右顔に衝撃を受け敵弾を蒙りたるを意識す。爾後予は人事不省に陥りしものの如し。敵機の射撃を受けしは地上五十米位ならんか。蓋し某村落の藪を機上にて瞥見したるをほのかに記憶すればなり。

・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・　・

フト目を開く。予は何時の間にやら安南家屋の床几の上に横臥し、周囲には十数人の安南人が予を囲繞し、がやがやさざめきあり。左の胸及［び］顔面は流血にまびれ、尚ほ出血已まざるが如し。身体は我力を以て起きる能はず。起んとせば胸部に激痛を覚ゆ。人事不省に陥りしより幾時間経過したるや全く不明なるも、飛行機の墜落が一二三〇として午后二時頃にあらざるか。

予は「ハノイ」「ハノイ」を連呼し、安南人に予を「ハノイ」に運搬せん事を要求せるも意思十分に徹底せず。「フンエン」に日本警備隊及［び］保安隊あり。現在地より二十粁あり。そこへ予を運ばんと筆記にて答ふ。予、之を諾す。上体を人を介して起すや胸背部に激痛を覚ゆ。予の同乗者たりし藤田、平賀両伍長は予の周辺になし。予は戸板に乗せられ数人の安南人に担がれ太陽のカンカン照る中を運ばるること数百米。紅河の渡船場に出でたるものの如し。予はアンペラかかりの小舟に乗せられたり。予の傍には大なる梱包あるものの如きも正確に見るを得ず。予は以前仰迎けに臥したるままなり。後、此の梱包らしきものが平賀伍長の遺骸なる事を船中にて悟れり。然れども藤田伍長は遂に発見せず。顔面よりの出血は依然として止まず。戎衣（じゅうい）為めに潤ふを意識す。然れども気分は確かなり。舟の旅は永かりき。午后の炎天の為、アンペラ張りの予の居所は頗る暑し。折しも至近距離にて飛行機の爆音すると共に機銃掃射を受く。三度連続する故、三機なる事明なり。安南舟夫は大あわてにて水中飛び込めるものの如し。幸にして我が舟には異状なし。後より聞けばB-25の掃射にて、近頃紅河の舟運にて米の供出を為しあるを妨害するを例とし、我舟もその巻き添へを食ひしなり。茲に於ても予等は命拾ひせしなり。機銃掃射を我慢して舟の中で歯を食ひしばって居る事は空中戦の一瞬の活劇に比較し神経を悩す事大なりき。予の顔が日光の反映するや安南

人はバナナの葉を以て覆ひ呉れたり。行けども行けども舟は止まることなく、船中三－四時間以上経過したりと覚しき頃、舟は岸の茂みに接触し舟つき場に到着したるものの如し。是、フンエンなりし。此の間の永かりし事は身体の衰弱に依り漸く我慢されしなり。

舟着場には早くも連絡ありし為か日本人の声す。是、警備隊より予を迎へに来て呉れしものにて、事故地点よりフンエンへ予め電話連絡ありしものの如し。警備隊は舟着場に近く、予は忽ち警備隊に担送され予は全く安堵す。茲に於ては安南の医師まで招致し予を待ちありて、予は負傷五－六時間後始めて治療を受けたり。予は数回の注射を受けたるも就中右股の食塩注射は痛く一週間も後迄局部が痛めり。時、既に黄昏にして須臾にして夜となり、警備隊（日本兵十三名）より河内に対し数回の電話連絡に依り予の迎へに来らん事を交渉せり。予は入院場所迄指定し要求する等意識は平常と変らざりしを覚ゆ。午后十一時頃、河内より国富参謀、佐藤参謀、伊座敷軍医等、自動車にて予を迎へに来て下さる。後にて聞きて判明す。安南人医師は、予は最早明朝迄持たぬと称し、警備隊長は其の旨を受け予に遺言を要望せり。予は変な事を聞くものかなと当時感じたりしが、後、佐藤参謀より此の間の事情を聞き成程と感得す。正午頃出発。予は自動車にて河内に運ばれ、午前三時半頃グランラックの傍なる陸軍病院外科分室に運ばれ準備せる手術室に入り、荻野軍医大尉の執刀にて顔面の手術を受けたり。三十八度五分程度の熱を発す。顔面に衝撃を感ず。入院当日、軍司令官と三国師団長閣下の御見舞を受く。

七月九日

予の診断傷名は、右頬部口唇部介達弾創、右眼部損傷、歯牙損傷、左胸部損傷、右示指骨折、右中指及［び］左臀■部擦過銃創なり。高熱は続くるも意識は平常と変ることなし。右眼は失明に近し。痒痛を感ず。十年の寿命短まるが如し。其他の傷は頬部の痛さの為、忘れらる。終夜寝られず。食欲進まず。夜は夢うつつに後半夜を終る。思索まとまらず。恰も忙しき電話にかかり身を切り取らるるが如し。

赤道を　七廻りする　夜永かな

七月十二日

傷に病んで（いたつきや）　時立つ蚊帳の暑さ哉

河内は真夏の絶頂にて。予に提供せられゐるグランラック湖畔の最上級室も熱き事限りなし。

心なく　痛きをさわる　にくさ哉

患者にぞ　注射で迫る　軍医哉

予は注射は大嫌ひなるも、毎日々々之を受く。

予の胸は狐につかれたる人の如し。一身に二人生活せる如く時に非常に呼吸のはずむ事あり。予

の当番笠原一等兵（石川上等兵後より来る）の食事を進むる時、予、尚更然り。是、左胸部打撲の致す所にて不快なり。予は依然三十八度台の熱を伴ふ。眼疾の神経を労する中最も大なり。眼科医瀧中尉、予に暗に右眼剔出の要をほのめかす。

人生の齟齬過失の原因の九割は準備の不十分に依る。予の今回の遭難も此の点の例に漏るるを免れず。

予の飛行機に同乗しありし藤田、平賀伍長は六日戦死す。平賀伍長は即死せるものの如く、遺骸を予と共に運ばざりし所以なり。両名の死体は予の入院せる第二分室の草原にて火葬に附せられたりと聞き感概に堪へず。予が生を贏ち得たるが如き理屈より考へて有り得べからざる事にて、全く人間業にあらざるなり。

七月十四日

入院中種々所感が起るなり。但し眼痛は予をして焦燥ならしむ。病院の事務を想察し、左の所感を得たり。

独立隊長は或る一定業務を向上刷新する為には、立入って細部指導を要することあり。例へば炊事場の残飯整理、家畜の飼育、娯楽施設等、各細務項目に亘り指導を要す。病院に於て斯くの如き点、将校の注意必ずしも行届きあるを見ず。

体温は到着時三十八度五分附近より逐次低下し、今日頃は三十七度内外となる。脈博は最初百二十より逐次減少現在八十代となる。

七月十五日

看護人よ働いて呉れ。病人の気持を刺戟せぬ程度に。平熱に近し。四日目の排便。快又快。食欲全く進まず。果実の汁のみ嗜好に適す。

予の右眼底には異物介在せるものの如し。剔出は已むを得ざるものの如し。主治医荻野大尉、瀧中尉、之を■■するに似たり。予も大依覚悟す。荻野大尉及［び］付添の三木看護婦は兵庫県人にて予と同県なれば話の都合もよし。

七月二十三日

討軍医部高級部員の眼の診断其他により、大体剔出手術避け難きものと見え、西貢より眼科専門医飯島少尉（博士）を飛行機にて招致中なるが如し。予も眼の痛みは脳神経を刺戟する事大にして、到底永く此のままにて放置し難し。一眼を失ふも亦已むなし。之に依り左眼を救ふを得べし。若し右眼を此の儘放棄せんか、却て左眼を損する結果となる由。予も剔出に何の異存なし。午前中の繃帯交換のみ楽しみにして夜分は最も嫌なり。眠る事に苦心する故なり。食欲は依然不振。

二十日、南方寮の女給連見舞に来て下さる。右鼻の感覚痴鈍となり、つまること夥し。

七月二十五日

待望の飯島軍医少尉西貢より飛行機にて到着。即夜右眼剔出を行ふ。摩睡薬のかからぬ間に手術したる故、苦痛大なり。殆ど堪へ難く生死の巷を逍遥するに似たり。本日頃、予の神経は最も焦燥となりおこりぽくなる。

七月二十六日

右眼手術後の気分良好。熱も平熱に近し。

グランラック闘傷一夜と題し左の句を得たり。

すがしさや　蚊帳も忘れて　夜明迄

飯島軍医少尉（博士）は全く予の看護の為派遣せられ、今日以後、予の眼の主治医となる。

七月二十七日

憂を分つ　友の心のなさけにて（心尽しをしるべにて）

我傷日増し　いや直りつつ

右、南方寮諸嬢の見舞の好意に対する感謝の辞とす。

幾多の苦痛は当時の最大苦痛に依り代表せられ他を忘る。予には眼の外、胸、臀部、右手の傷あるも顔面及［び］眼の外の傷は痛まず。之を忘れたるが如し。

新しき施策を為すに方りては事些末と雖［も］高級者に於て指導按配せざれば迅速なる徹底実効を収むる事仲々困難なり。

盗俸も三分の理屈とかや　常々一方的判断、一方的解決に陥る勿れ。換言すれば相対二面の観察を怠る勿れ。

捨身にて　仇討つ術を　知りつつも

我は傷つき　敵はうせたり（空中戦所感）

七月三十日

胸の方面、眼に次いで問題となり注射。温布。安静を励行す。息はづみ起り微熱あり。七月二十日前後、事務所前に歩行したるも今は中止せしめられ、就寝の儘排便、起れば胸部の疲労大にして息はずむ。軍医は大いに警戒しつつあり。

八月

八月一日

友多く　散り行く便り　聞く中に
　　我永らへて　いたで養ふ

八月二日

たらちねの　文見ぬ十月　過ぎにけり
一年は　故国の便り　絶えにしも
　　皆健やかに　暮せりと思ふ

八月三日

本年正月及［び］昨年十一月発信の郷里及［び］留守宅の航空郵便を入手し、大いに安堵す。昨日の所感は解消せり。

毎食を座して行ふ事を本日より始む。従来は寝たままなれば食欲進まざりき。八月に入りて食欲進む。起床時左胸部に圧迫感を感ず。故に尚散歩等を許されず。食事時の起床も軍医に内所なり。

顔面の負傷部八割程度治癒す。

高級副官大神大佐見舞に来て下さる。

八月四日

軍司令官及［び］平田第二十二師団長閣下御見舞下さる。蓋し御両所西貢へ旅行の前々日なり。[102]

河村正保中佐、病を冒して見舞に来り、鯉の絵と兵書孫呉二巻を贈りて帰る。それより先、予の負傷時、河内の同期佐藤中佐には度々見舞を受く。カルシューム注射。湿布は何時迄続くならん。嫌だ。嫌だ。

八月五日

戦局や　日本を直（タダ）す　神の鞭
治癒近し　食欲進み　気も楽に
小夜更けて　虫の音すだく　病床（ヤミドコ）に

[102] 実際の旅行は8月9日～12日であった。犬童己来男氏（1945年1月28日参照）のご教示による。

偲(シノ)ばれてけり　故郷の今

雨ふれば　訪ふ友更に　後絶えて

入院患者は　淋しかりけり

決心は思惑が最大の癌。

八月六日

入院一周月。明日より顔面の繃帯を取らんとす。飯島軍医の西貢より携行せる義眼は予の眼には合はざれども、時々嵌めて点検する事となる。

本日左の所感を抱く。

事務第二　人情第一

是統帥の要道。

淋しさや　想ひは尽きぬ　病の床

討参謀長宍戸大佐、見舞に来て下さる。予の再起の処世方針を話す。予の今回の奇蹟的生還に関連し、予が在満当時四十日かかりて母に観音経の普聞文を写経せし事を話す。予の神仏の加護は予の善行に依るや否や疑はし。或は母等の信仰に依るならんか。

八月七日

左の所感を抱く。

事務は連絡が大切なり。連絡の手段方法の適切なるは道に近し。連絡の不備は粗漏と一手段を過信し之れのみにたよる欠陥なり。

寝ては食ひ　食ふては眠る此の頃は

日の立つのみぞ　のぞみなりけり

死地三度　踏みたる跡を　顧みば

神の恵みの　深さをぞ知る

百日の建設も一日の破壊に及ばず　故に破壊の適用は慎重ならざるべからず。

病院内に職員の病者少なからざるを始めて知る。部分は又全部の部分なり。全部に於て現はるる現象は又部分にも現はるる理を悟らざるを得ず。

八月八日

病室の草花は慰安を与へ気分をなごやかならしむ。美は人生の活力素也。環境の美化軽視すべからず。当番笠原よく此の点着意す。本日、南方寮の諸嬢又花を持ち呉れる。花を見つつ左の所感あり。

草花の　色取りどりに　香ふ如く
　　人の性質（サカシ）も　伸ばまほしけれ

注文以上（二宮尊徳の所謂）を行ふこそ信用獲得の第一方便なり。

八月九日

過去一ヶ月、予の治療の為費せし人的物的の努力消費幾何ぞや。是、悉く国家の負担なり。而も疾病や負傷を招くは個人の無思慮、不注意、不理解、無計画に起因する事大なり。大西郷の片言謬事仆千兵の教示を想起す。

本日右頰部の一部より弾丸の小片摘出、痛し。耳鼻科、入来院中尉の診断を受く。右鼻が梗塞して不快なりし為なり。大鼻糞を取りて以来鼻孔開通し愉快となる。

入院中、総督秘書湯浅氏、予を見舞ひ再々果物を送らる。厚志感謝の外なく、湯浅氏とは何となく一脈通づる所あるなり。

待つ母に　我傷見せん　その時の
　　母の言葉や　如何にあるらん

予の今生の頼みは母に再会せんことを第一とす。母子の情の濃かなる測り知るべからず。母は本年七十七才、予は四十三才なり。

松茸の　香りとまがふ　湖畔の風

入院中体得せしは、感謝の気持の増せし事なり。

本日、佐藤参謀、ソ連の「対日宣戦」の報を齎す。予の最も期待し希望せし「ソ」連の対日中立は実に成立せざりしか。予の判断は誤れり。素より我国力の萎微大なるに於てはソ連の出る事を考へざるに非ざりしも、斯くも早しとは予想せざりしなり。予は最初より大東亜戦勝敗の決定権はソ連の出方にありとし、ソ連が敵側に立てば日本は勝算なしと断ぜしものなるが、今や之が実現せり。然れども、今、直に屈するの要なし。敵に打撃を与へ日本もさるものとの感を敵側に与へつつ、此の冬を待つのみなり。而して、予は尚妥協媾和の條件を得ん事を期待するのみ。予は陸大の試験に落第せし時程の失望感、暗黒感を抱き、佐藤参謀の情報に接しぬ。嗚呼、日本は遂に神国ならざるか。神国なれば何故にその念願せし国際的天佑―ソ連の対日中立―の状態を顕現せしめ給はざる。予は悶々の情に不堪夜を迎へぬ。

八月十日

適度の運動は身体肥満の原動力であり、如何に美食飽食しても此の運動なき限り肥満は望み得ない。

身体自然の恢復治癒能力は驚くべきものがある。此を助長する事が医術だとさへ思はれる事が多

い。

隻眼の生活は変化を嫌ひ安定を欲す。目の疲労を減少するは勿論、目の不備よりする意識の不明晰を補はんとするからであらう。

予の眼の主治医飯島軍医の明日西貢帰還の報に接したるを以て、河内の市中にて購入せし靴下五足を贈る。

一宮大佐、稲家大佐、見舞に来て下さる。ソ連の対日宣戦にて遂に最後のものが来たりと我等暗然たり。今後の我国是に就ては、我等より更に情報に通暁し国体観念に透徹せる人士の決定熟慮すべき所ならんも、今日の帝国の現状こそ深憂に堪へざるものがある。

八月十一日

理性が感情を制御するには時間を要す。あきらめてもあきらめられぬと云ふ所がこれである。隻眼の淋しさと之を克服する理性との関係の如きも是れである。

顔面繃帯を脱す。然れども左胸部は未だ恢復せず。尚カルシューム注射と胸部の湿布を行ふ。焦心の至りなり。

予の負傷も創痍日本の姿の片顕なりと思ふ。それ故に予の負傷も無駄ではなかった。釈尊の「我れ衆生と共に病む」の教示を体験してゐる様なものか。

何事も時間の解決を待つの外なし。

原兵団入院者竹内准尉、予の為に尺八を奏して呉れる。本日にて二回。尺八の音程、予は音響中好きなるものなし。

病床に　行末思ふ　蝉しぐれ

ニャーニャーと　叫びつ龍眼取る　安南人

河内は梅雨期にも匹敵する降雨始まる。

八月十二日

人に交る。唯、真実あるのみ。

傷つきて　寝る四十日　身の痩せし

上田兵器部長閣下御見舞。真情掬すべし。

床に在りて　今日も聞くなり　暮の鐘

戦争に対し天佑神助に藉口し、結果を甘く考へ過ぎるは日本人共通の欠陥にて、個人の思索上にも神だのみする傾向あり。宮本武蔵の神の存在を信じつつ、神を頼まざる力への信頼心こそ望ましけれ。

一人も多く友を得、遂に拡充して一丸となる。是交際の要訣也。「進んで友を求めず、好んで敵

を造らず」の過去の予の信条は更に飛躍するを要す。

此頃の予の生活

七時起床。八時朝食。就床。十時より十一時の間治療。十一時半カルシューム注射（二〇瓦）。十三時昼食（食事時のみ起床）就床。十九時夕食。臥床・湿布交換。二十三時頃就床。一日間服薬八回なり。

夕立や　河内の暑さ　拭ひけり

予の希望を云へば、任官後二十年にして一年の賜暇休働。已むを得ざれば数ヶ月の休暇を与へ、身心の疲労を医すべき也。現在の日本軍人は余りに疲れ過ぎあり。休息を軽視しあり。又軽視せざるを得ざる環境なりしなり。人生には余裕必要なり。

傷痍予の再起は瘡痍日本の再発足なり。

神仏曰く「お前は当然死ぬ所であったが、過去に於ける善根並肉親祖先の願望もあったから若干の余裕を与へるから愉快に暮せ」。予は以上の如き宴助に依り生きながらへあるものと信ず。予の将来の処世方針も楽天主義。天事に安んずる主義ならざるべからず。

八月十三日

昨夕、西貢、増田大佐、俘虜収容所問題にて当地に出張せられ予を見舞下さる。同大佐は姓名学の研究家なれば、予も最近の事故もあり興味を曳かれ、予の姓名学上の価値を判定して貰ふ。同大佐の答へたる所左の如し。

一、一生苦労多し

二、幼時より肉親と離るる孤独性あり

三、活動的なるも形式に捉はれず突飛的波瀾の生涯を送る

四、自己の性癖を呑み込み他に対すれば社会の支持を受く。社会と調和する事を得

五、晩年失意の生活を為す運命に在り　と。

遠近の正確視を欠く事最も心淋し。恰も夢に遊ぶ如くなり。遠方位の景色を眺めたり。日暮以後近距離物体の遠近不明確となるや両眼健在なる場合と異ならざる感覚生じ淋しさは解消す。嘗て予の上官、日下少将閣下、中耳炎を病ひ両耳重聴となられし事を想起し感慨に堪へず。境遇に同情の念湧く。

身体の肥痩は先づ顔面に始まると云ふ。是、血管多き為なり。治癒の現象も顔面最も迅速なりと云ふ。

三沢大佐、ジャバ派遣軍より河内防衛司令官となり来河。予に早速見舞に来らる。名古屋幼年の第十八期にて、予より士官学校は三年先輩との事。

入院患者は心淋しければ人と結ばんとの意欲強し。

印度支那の　夏は逝くなり　葉月末

八月十四日

予の食欲は二三日来、頓に増加す。原因は予の愛好措く能はざる菜の漬物か。三度三度膳に上る故なり。如何なる美味なる副食物よりも予は之を愛好す。

大衆の支持を受てこそ予の今後の方針ならざるべからず。

江川大佐見舞に来て下さる（二回目）。

春情を覚ゆ。入院後約四十日なり。恢復顕著の證とす。

黒川獣医部長、予と隣室の獣医部高級部員広瀬中佐を見舞はれ花莽を贈らる。感謝の外なし。

傷つきて　床重ぬるや　痒さ増す

予を単に平凡尋常の人間と思ふは誤なり。又卑下に失す。三度の死地脱逸の体験に依れば、予は神仏より一大恩寵を受けある人間なり。或は神仏の片割との自覚を要すべし。而して我が為すことは現世に光明を幾分にても与ふるに在り。

五月雨に　似たる河内の　葉月哉

何事ぞ　命拾ふて　未だ慾か

八月十五日

予隻眼を失ひてより五官の逐次鋭敏化するを覚ゆ。蓋し視覚に尽すエネルギーは恐らく五官中最上位に上るべく、此のエネルギーの半分は節約されたるため、熱他の五官のエネルギーに振り分けらること以てなり。大隈侯が片脚となりし以来、既往の痩身が一変健康体となりし事実あり。予の身にも此の現象が感ぜらるるなり。又、残る一眼は逐次視力を増すを覚ゆ。さすれば一眼を失ふ事、尚嘗て想像せし程不利不自由のものに非ざるを悟る。是、亦不幸中の幸と云ふべし。

今次戦争に於て日本の打ちたる最大ヒットは、日本は世界解放の為戦ひ各民族の独立的自覚を高むるの動機を与へたるに在り。

近頃義眼挿入の訓練は一日六－七時間なり。

予等の如き疾病廃疾者を慰謝する言葉は仲々むつかしく、満点を与ふる程の言葉に接する事甚だ少し。要は同情心を基底とし、前途に希望を与ふるに在り。前者は之を最も欲しあるなり。力をつけんとて「君の疵は何でもないぞ」等云へば同情心が少き様感じ、又非常に同情に過ぎればめ入ってしまふなり。疾病者を悲観せしむるなり。

湯浅秘書官、龍眼を持参、見舞に来て下さる。果物を貰ふ事これにて三回なり。此の人の厚志忘るべからず。龍眼は沈静剤なりと。

入院中の歩兵第八〇連隊より陸軍士官学校区隊長に転出する柳大尉、予に挨拶に来る。予は被

教育者の前途に対する希望を持たし奮励せしむるの要を力説せり。

人体恢復の順序は最初より直ちに外形的に肥満に至るものに非ず。先づ血液の質を向上し、血流の量と循環とを良くするものなり。神経組織、中枢組織を完整して後、末梢に及ぶ発達の原理を思ふべし。凡有(あらゆる)事業も亦然るならん。

素人なるが故に専門外事項に意見無しと卑下する勿れ。情理を基礎とし真実の眼を以てせば技巧に捉はれ或は偽りたる専門家の意見を凌駕すること多し。

本日正午を期し、午前十時頃、大元帥陛下の御放送ありとの事にて色めく。正午、拡声機の前に病院の職員患者整列、拝聴するも玉音の御意味を解するを得ず。

予は歩行禁止中なれば部屋に至りて待機す。予の判断は戦局愈危急なり。汝等棹尾の努力せよとの御激励の御言葉と胸を驚かせつつ想像し待機せり。

八月十五日夕　御詔勅の御趣旨を拝知し、

詔勅を拝して　我は　夢なりと
　　友　顧みば
　友は　泣き居り

病院内窒息するが如き空気となり。

下士官兵等、夜分、予を尋ぬるもの多し。

予は睡眠剤を貰ひて呑む。

八月十六日

戦局推移に関する予等の判断は、唯我的独善に流れたるが現実に於て悉く覆されぬ。

阿南陸相は聖断の平和案に反対的意見を保持しありし為、責任上、昨十五日自邸に於て自殺を遂げらる。軍人として、又、操守の堅固なる点に於て亀鑑たるべし。

昨夜は眠られざるもの多く、悲憤慷慨するものもあり。今日は逐次爾後の復興復仇に就て語るものを見る。

八月十七日

食慾進み身体快調。日増に肥満を意識す。隻眼に遠近感、自然に馴致せられあるが如し。五十米以上なれば昔日と変らず。歯科治療を本格的に始む。

大東亜戦各戦場の教訓は、力以上の事を望めば結局は失敗し、有頂天になれば遂には失脚すると云ふ事なり。制限を知らざれば元も子も失ふに至るべし。

軍人にして時として地方人と親交あるものあり。是、職業以外の交際は魂と魂との接触にして御座なり的ならざること多し。是、交際の親密なる所以なり。利害に依り結ばれざる人間としての交際は永続性あり。月並的接触を脱却して人間的接触に至らしめざるべからず。

日本のポツダム声明受諾に伴ふ先方の回答に依れば、日本天皇陛下は連合軍の指揮下に置かるるなり。三千年来の国体の尊厳は正に傷けられ、日本歴史の前史は茲に終結せり。

明断以て規則以上に超越する様にならねば第一流の人物と云ふを得ず。又、無智の為規則以外に脱逸するは第三流以下の人物也。

情理兼備に非んば一流の人物たるを得ず。

日本人及［び］日本国家の因襲たる形式的にして非能率的なるは、先づ洗濯払拭せざるべからざる項目なり。

非難は、より以上の草案を有する者に非ざれば非難の資格なし。

八月十八日

前提条件に変化流転あるか否かを検討せよ。前提条件も社会の変転に伴ひ動揺生長不定の事多ければなり。

予は母と再会を今生第一等の望みとす。母と子とは互に自己の魂の所在と感ずる也。

各種薬定には「アルコール」計あることを判明せり。身体健康恢復せざる時は、酒は刺戟強く受けつけざりしも、今や之が飲用可能なるに至れり。

驕る者久しからずとは古今不滅の格言也。但し日本は驕りしか。

八月十九日

将来世界に戦争の絶滅の能否は姑（しばら）く置き、戦争の形式は原子弾の現出に依り一変せる事確実なり。最早、小銃機関銃の如き近接戦争兵器は決戦を支配せず。無用に近き存在なり。之に恋々とせずあっさり敵手に渡し、我は最新の科学的蘊蓄に依り空と新戦争兵器に発達すべし。軍人として武装解除さるるが如き屈辱悲愴なりと雖（いえども）、実質的には世界戦争の転換期に処し旧套を蝉脱する為、却て戦勝国より容易なりと云ふべし。過去への執着の切断を余儀なさるるは却て将来への飛躍を助くるものと云ふべきなり。日本は旧式武器と戦争様式に膠着したるが為に破れたるに非ずや。

七八割迄成功し最後の二三割にて失敗に帰したるこそ、最近、否、戦争後半期以後の日本戦略の特色となれり。物量に関する見解に足らざるものあるに依る。

東久邇宮殿下総理大臣とならる。思想的安定を策するの最後的方法なり。予の理想が一年遅れ

て実現したるなり。此際宜しく石原莞爾将軍の更生に関する長策を実行するに非ざれば良策なからん。

南方寮の女将面会に来る。

現象界と霊界とは隔然たる区別あり。現象界に在って其の因果関係の顕然たる如く霊界の威力を借るが如きは誤なり。現象界の事は現象界に於て片づけざるべからず。然るに現象界に霊界の威力を持ち来らんとする願望盛んなり。之を苦しき時の神頼みと云ふ。天佑神助とは現象界の最絶頂、即ち神人合一の絶対境に於てのみ霊界と交流作用を見る場合に現はるる現象なるべく顕次現象界の因果関係の如く現はるるものに非ず。

予の大東亜戦終結を本年末と予想せしことは二年前よりなり。但し引分け勝負と思ひしに、此の点は徹底的対蹠現象を生ぜり。後半歳の持久作戦が無條件降伏より互格引分けの勝負となるとは少し有利に解釈し過ぐると云ふが正しき判断ならんか。然らば媾和の時機としては確かに今回の政府の執られたる時機は一案なりしや必せり。時日の経過は我等の予想、否、期待の如く、我に有利に敵側に不利に傾くとは現実に照しあり得ざるなり。

将棋師は駒を惜しまず、医師は血を惜しまずとは今次入院中の所感なり。素人は之を惜しむ。是、物の真相を把握し価値判断力を有せざるに由る。

八月二十日

羅馬（ろーま）は武力、宗教、法律の手を以て三度世界を征服せりと。日本の将来に対する有力なる示唆と謂うべし。

日本戦術は消費術なり。敵側（米国）戦術は創造（生産）術なり。

男子の患者は看護婦に対し異性感を抱き、看護婦は男子患者に対し母性感を抱くと謂う。

下級者から叱られて見たい甘えて見たいと思ふ気が起る様な上級者にならねばならぬ。

調和（美、善）は物の価値優劣を判定する大なる梯尺である。

己が子を　恵む心を　法とせん

学ばずとても　道になるらん　　二　宮　尊　徳

組織を研究せよ。能力能率を挙げるも此の着意に依らざるべからず。組の素織、火力団の制圧等皆此の一例なり。

神の存在を信じて神に依頼せざる態度こそ望まほしけれ。

八月二十一日

言葉少きを徳とするも條件を示す。即ち有用に弁じ無用に節することなり。若し有用に弁ぜざる寡言なれば吾れ之れを取らず。

偏する所に味あり。人間も余り中正ならんか淨溜水と同じく味を生せず。人を牽きつけず。

予は日本国民に要請せん。各人一個の世界的パテントを抱るべし。然れば発明に於て世界征覇可能なり。

大東亜戦は軍事的に出動し総力的に破れたり。長期戦に於ては国家の最大水準を破ること戦争勝敗の「バロメーター」なり。

八月二十一日

小型義眼を嵌む。歯科治療進む。

本日六時を以て停戦行はる。

荻野軍医大尉（主治医）に予の写真を送る。

入院中の青年将校に予の所感を話す。

社会科学に於ける梃子の原理。

難きを図るは其の易きに於てし、大を為すは其の細に於てす。（老子）

挨拶と言葉　挨拶と言葉との下手なる為、社会生活に如何なる不利を齎しあるやを教育し、其の手段を練磨すること実学と云ふべし。教育は須らく卑近の日常生活より始むべし。

八月二十二日

本日病院の許可を得、予の恢復程度を見せに軍司令部に行く。軍司令官に申告すれば、軍司令官、涙を催して予を迎へ「命を拾ふた。命を拾ふた。」と仰言る。将軍も亦情の人なる哉。

人間の体力を検査するに血液の沈下度を以てする方法あり。偉大なる発明哉。

個人でも国家でも「生意気」気のある間は人からも嫌はれ巧く行かぬものなり。予の過去を顧みても然り。

最近の米国の言論機関為政者の論調を見るに、日本を物質的は勿論、精神的にも骨抜きにせんとしあり。国破れて山河ありの感深し。

将校病室の将校等、予を招待しつつ色々の議論を為す。若き者と我等壮年者との思考上の差異を発見せり。即ち、青年将校等の考へは単純にして、一前提のみを基礎とし之を飽く迄深くつき込んで進む傾向あり。壮年は思考は広く現実的なるも、余りつきつめたる考を為さず。一般に青年は不定の前提を確定せる如く考へ、時局を憤慨する者多し。

八月二十三日

閑院宮春仁王[103]殿下、南方軍に聖旨伝達の為、御出遊ばさる。今回のボツタム声明受諾は全く

[103] 閑院宮春仁王（1902-1988）少将　1945年8月、戦車第4師団長心得、12月、予備役となり、1947年10月、皇

聖断に出でたる旨、伝達遊ばさる。

予の身体も概ね健康体に復し脈博も常調となる。病院に於ける病状日誌、並、脈博体温調査表は其の科学的な点に於て一般の事象にも「指導」上参考となるものなり。

予は自由散歩を慫慂せられ、歯科治療は下顎部のみ之を完了す。鼻孔に水の湛るが如き感し始む。

八月二十四日

日本人の勇敢は捨身精神に特色があり、欧州人の勇敢は合理性－安全率に頼よる－に特色がある。

鼻の裏に水の溜まる感依然たり。

八月二十五日

瀧中尉の手にて眼鏡一箇購入。三二〇比弗なり。

南方寮の諸嬢見舞に来る。

八月二十六日

同盟通信の報ずる内地空襲の被害――原子弾――に依れば、今次日本の屈服は全く内地の戦争意志放棄に依るものにして、外征軍は厳として動ぜず。恰も第一次世界大戦の独逸（ドイツ）の終末と相似たる感す。

日本に被統率者なく、支那に統率者なきの言はよく穿ちたり。更に日本人には年越苦労と先走り的焦燥感に陥る神経質あり。

八月二十七日

原子爆弾の出現は奈翁［ナポレオン］の新軍制に依る戦争方式の変更以来、軍事上の大革命と断じ得べし。将来の戦争様式は全く一新紀元を画したり。

予も病院移転の風説に伴ひ、近々退院の運びとなれり。顧みれば、此の入院中程生涯に肉体的苦痛を嘗めたることなし。然れども肉体的苦痛は其の瞬間に於ては激甚なるも、時間を経ば忽ち其の苦痛は消失す。今や予は朗らかとなれり。

歯の治療も本日を以て終れり。上三本下三本の治療なり。石垣見習士官の努力は感謝あるのみ。

皇軍の解体と共に皇軍有終の美を完うすべき詔勅を拝す。

将来学校教育に於て看護法を加ふるの要あり。豈（あ）に女学校のみに止まらんや。要は学校教育の実学化に努めざるべからず。又、家庭薬園を設け、薬草を栽培する事必要なり。学校に於ても薬

籍離脱（『日本陸海軍総合事典』p.52）。

園を必要とす。日本の総貧乏化に伴ひ医療費の節約を緊急とし、医療費の節約は家庭薬園と簡易看護法を各家庭に培養せざるべからず。

八月二十八日

昨夜妻を夢む。

世は一大転換期に遭遇せり。絶対戦争、世界最終戦は終われり。日本の発展は新時代の尖端を行き、科学的精神文化に於て相手を凌駕せざるべからず。

入院中なる獣医部広瀬中佐と語る。

病院附葛西衛生軍曹、予に日本内に学術技術的指導組織を提議す。この人、各種の方面にプランを樹つる性癖ありと自ら語れり。

八月二十九日

予の問合わせに対し、昭南教育飛行団より返電あり。七月六日、予と同乗せし藤田、平賀伍長の留守宅は左の通り

藤田軍曹　京都府船井郡□□□□□□□□□□□

父　藤田□□

平賀軍曹　山梨県中工麻□□□□

父　平賀□□

予は以上に依り、三月三日以来五人の同行者をして戦死せしめ、予のみ生還する結果になりたり。

入院中、俳句若干かぢりかけたるが、主観的な所懐は和歌に依らざるを得ず、客観的の叙景は俳句にて之を為し得。

予は神仏の加護に依り命拾ひせる事は、河内の定評となれり。予も自重せざるべからず。

二十七日の下村陸相の放送は人をして断腸せしむ。神埼与五郎の馬子に詫状文を書きし思案。大石良雄の主君、自害の短刀を見て落涙する姿こそ日本人現在の心境ならざるべからず。

八月三十日

退院。軍司令部各部長等に挨拶。

八月三十一日

第二十一師団司令部に参上。三国閣下、宍戸参謀長、後藤軍医部長等に御礼並挨拶。神戸旅館の女将に御礼。一宮、稲家部隊長に名刺送付。

九月

九月一日

南方寮、予を招待。予、金三〇〇比弗を諸嬢の各支度の一助に送る。

九月二日

入院中御世話になりし関係軍医――荻野大尉、瀧中尉、入来院中尉、外に軍司令部の伊座敷中尉を加へ、河内割烹店にて会食し入院中の厚意を謝す。光子なる女中は真実に予の生還を喜び、一眼を特に眼薬を以て大切にすべきを告ぐ。苦労したる真実の人間と苦労せぬ人間と、人情のある人間と人情のなき人間との差を、今次、予の災難に罹りて如実に経験せり。然れども人間は四十代近くならねば人間の滋味の発探困難なるを知る。軍人以外の河内の人間にて、予に人間味を見せたるは神戸旅館の女将（青山よね）、河内割烹店の光子、南方寮のすみ子、湯浅秘書官位なり。予とそりの合ふのは人情家と宗教心ある者となるべし。

瀧軍医中尉曰く、眼の手術に於て光兵団の某兵は勅諭を終始奉読して平然と受けたり。之れには医員以下泣かされたりと。予は此の兵は勿論感心なりと思ふ。然れども予の経験に依れば、魔睡剤の利かざる間の手術は到底嘆声の外発し得ざる予の体験に依り、勅諭を奉読し得ざりし故に精神より劣等なりと云へず。此の辺を一方面に即断すべからず。恰も手柄をたてたる軍人は勿論勇敢なるも、手柄を樹て得ざりし軍人は勇敢ならずと断定し得ざるが如し。

予の飛行機遭難当時の事情を入来院中尉より聞き判明せる事あり。即ち敵機撃墜せられし当時、飛行機は沼地と森林との中間の乾地に不時着し尾橇を破損せし程度なりき。此の際、操縦者は即死し、同乗者――平賀伍長――は飛行機より脱出して数間歩行中、敵機の掃射を受け、下腹部に重傷を受け収容護送中死亡せしものの如し。予は飛行機の中にて手を拱（こまね）きたるを以て飛行機内に搭乗者あるを知り、安南人は救出に来れりと。

九月三日

酒井参謀、蒙自（もんつー）に至り停戦交渉の下打合せす。交渉に於て相手の痛手をつくこと必要。相手にやりこめられ居るばかりでは不可。交渉に於て相手に決定権ある場合は、細大漏さず相手の意向を打診して実行せざれば、相手は不誠意なりと解するに至るべし。

酒井参謀、開遠（かいえん）に於て一泊の後、帰来。所感に米軍の観察の一、二。

一、米人は支那軍人を軽蔑し、日本軍人をより頼母しく矜持あるものとして尊敬する念あり。米人と支那人との感情は末梢に於て良ろしからず。

二、米人は率直にして天真爛漫なり。一兵に至る迄、写真機を携行す。彼等の物質的文化生活見るべし。

三、米軍に関し感ずべきは、全員天幕生活に慣熟し民家を利用せざる事なり。

三[ママ]、彼等は日本人が何故に天皇陛下に忠順なるかを理解せず。質問の矢を茲に向けると云ふ。

四、米人は日本刀を非常に欲しがりあり。

九月四日

我、健康日増に恢復すれども義眼目に合はず。午后になれば眼レン緩るみ、義眼の不知不識に飛び出すにはほとほと閉口なり。頬の傷は日と共に肉を張り見よくなる。自然の恢復力に感謝す。片山中尉、内地帰還に際し、家郷留守宅親戚に予の消息を托報す。

九月五日

参謀宿舎を軍司令官宿舎に譲らんが為、庁舎内に転居す。軍司令官宿舎はユエ[フエ]より来れる王大[104]に提する為なり。正午、軍司令官、予の全快祝と称し支那料理に依り予を招待せらる。司令官曰く、日本軍隊の一時的解消に伴ひ現在の軍人は経験を筆記し将来の為保存せざるべからず。司令官も既に着手せりと語らる。石原莞爾将軍を評して理想家にして実行家に非ず。五十年三十年先の目標を示したり、現在のやり方を非難したりするに便なる人にして、それだけ実行の衝に当らしむれば失敗する人なり。閃きを持ちたる人なり。現在の混沌たる日本国内情勢に処し、獅子吼するに最適任の人なり。天才に近きが故に狂人に近し。それ程癖のある人は少しと。

九月六日

受傷二ヶ月は経過し、予も健康体となりぬ。右脚の骨折に依る歩行、長途に伴ふ軽痛を最とし、右示指の繃帯は未だ取れず。洗顔に、尚、毎日人を要するの現況なり。右眼の目やには日に依り異なるも相当なる量なり。

目下、支那側第一方面軍先遣連絡者、謝中佐（本年四十八才にて雲南講武堂出身第二課長）河内に停戦交渉の折衝を為しあり。彼の能力程度は日本の伍長に匹敵す。商売気ある男にて、戦争も終りなれば商売をやりたし何かよい口はないかなど云ふ。支那通の判断に依れば、彼れは当方の賄賂の提供の無きを諷刺しやつあたりに当り通しなりと云ふ。目下、軍と師団の幕僚間に於て彼れに如何にして賄賂をつかますべきやを研究中にて、支那軍人一般は謝の如き商売根性を有すと。一般に米人下級将校以下の支那に在りしものは、支那人の真価を知れるが故に反動的に日本軍人を尊敬し信頼しあり。彼等は酒井参謀、三好参謀、高橋大尉の三人を飛行場に於て始めて見

[104] バオダイ帝のことか？

て、日本の将校は仲々しっかりしてゐる、支那の将校などと比較にならぬなど批評しありし由。予は以上の諸情報を聞知し「如何に大東亜戦に於ては支那は優位の立場を占むとも、支那は依然救はれず。台湾満州を支那が掌握すとも、数年後に於ては、住民は日本の指導或は統治時代を憧憬渇望するに至るや必せり」と。米英の政策は劣等民族の支那を操縦して東亜に於て自利を営むを以て、日本の東亜に於ける跋扈時よりも有利と認め支那を斯くの如き状態に導きたるなり。米英ソ連の講和時のやり方は日本人をして悲憤に絶倒せしむ。往年の三国干渉の何倍の非道振りやも知るべからず。軍人をしてただ唖然として瞠目せしむるなり。

九月七日

軍隊生活二十五年、否、陸軍の学校を入れて算ふれば三十年になんなんとする軍隊生活と戦争参加の教訓とを綜合し、矢張り軍人教育に於ては内務――「心の持ち方」――軍人生活の基礎に力を入れ、真実にして影日向なき軍人を造る事を根本方針とせざるべからず。如何なる技芸に熟し学術に長ずるも、真実誠なき人間は末なり。而も斯くの如く人間の価値梯尺を精神要素に置きつつも、学術技芸に長ずる者を以て優位に置く人事こそ国軍を誤りしなり。若し大東亜戦戦敗の基本的原因、最も根本的原因を問へば、実に予は人間の価値判定が物質的なりし為と答へんのみ。

予の心境の進化は、予の眼に依りても證明可能なり。元来、予は幼時より眼光ケイケイに近き方にて、人は皆、予の目は威力ありとなしたり。幼年学校の一年生頃には上級生徒が五十名中、予と大庭小二郎[105]の眼に威力ありと噂しおそれたり。士官学校本科時代も予の眼には威力ありとは同僚の語る所にして、中少尉時代も此の調子にて人にこはがられたり。予ににらまれたる兵は恐怖心を抱けり。士官学校の区隊長時代、長尾正夫の如き生徒は予の眼に野心満々たる光ありとて影にて悪口を言ふ状態なりしが、少佐時代、否、大尉の古参時代より予の威厳ある眼は慈眼に変れり。柳原の如き予の目は優しきとなしたり。又、最近、南方寮の女将の如き予の眼は実に優しと述べたり。事実、予は今隻眼のみなるが、片眼を鏡にさらす時、予の眼は何となく人なつかしく自らも感ずるなり。それ故に、義眼を入れて見れば片方は鬼の眼の如くおそろしく見ゆるなり。要するに、人相特に眼の如き心の窓と云ふ語あるが事実其の通りと思ふなり。

九月八日

土橋司令官会報時、往事を懐去す。参考に資すべきものあり。曰く「満州事変は昭和二年の明治天皇祭より四年間準備したるものなり。各種の苦心と研究が運らされ柳條溝の導火線に依り切って落されたる活劇は、四年間の準備を基礎とし着々と成功を収めたり。之れの表面のみを知る軍人と一部の国民は、支那に対しては何でもあの様に甘く行くものと考へたり。上海事変及支那事変の

[105] 大庭二郎（9月26日参照）の二男、陸軍大佐（『日本陸海軍総合事典』p.37）。

キッカケは全く支那を甘く見、事を軽く考へたることと功名心の発露なり。支那事変勃発時、駐仏武官として赴任に方り、日本将来の施策の方向を多田駿参謀次長に打診す。問ふ、支那事変は何時終息するや。次長曰く、保定定州の線に進出せば蒋介石も屈服する公算あり。問ふ、保定定州の線に進出するも尚屈せざる時は如何にするや。答ふ、黄河の線に行けば先づ屈するならん。問ふ、黄河の線に至るも尚ほ屈服せざる時は如何。答ふ、上海を取る。問、上海を取るも尚屈服せざれば如何。答、南京を取る。問、南京を取るも尚屈服せざれば如何にするや。答、君の様な事を云へば戦争でも何でも考へられないではないか。予曰く、然し最悪の場合の腹がなければなりませぬと。支那事変の勃発時、当局は多田参謀次長の如く一般に甘く考へて以て事を軽く考へありしなり。当時若し事を慎重に考へ之を中止するの英断に出づるか、或は之を決行するに方り、一師団や二師団の出兵をやめ全軍動員で以て一挙に揚子江漢口以東を占領せんか、蒋介石側も日本の本腰を恐れ或は屈服したるやも測り知るべからず。満州事変以来日本人及日本軍人に事を軽く考へる弊風を生ぜしめたり。又、支那事変を永びかしたる他の原因は強姦掠奪なり。占領地の拡大を喜ぶが如きは強姦掠奪の地域を広めることとなり、結局民心を離反せしめたり。我占領地域の拡大を喜ぶことは、民心の離反地域を拡大する不幸なる結果を招来せり。それに気がつかず民心把握の根本因子を捉へずして枝葉末節に狂奔す。是、支那事変の永びきたる第二の理由なり」云々。

大東亜戦開始に於ても戦争第三年自後には勝算は不明不確実なりしも、国際情勢の変化に依り何とかならうと云ふのが陸軍の態度にて、遂に海軍の消極態度を押へ開戦に導きたりと云ふ。事実然りとせば、支那事変勃発時と同様事を軽く考へ最悪に処する対策を準備しあらざりしに依るならん。

— … — … —

予と共に入院中なりし広瀬獣医中佐、遂に逝く。天命は計り知るべからざるものなり。予の如き何たる幸運児ぞ。死すべくして死せざりしに非ずや。

九月九日

小事即大事と云ふが思ひ当る事が多い。交渉の如き初印象が大切で、此の良否が爾後の交渉の成否を支配することが多い。停戦交渉に於て幕僚の先づ語るものは、相手の初印象の良否であった。

最近、将兵は勿論、在留邦人の頭を支配するものは何時内地引上げが出来るかの問題であって、ざっと二年を要せざるを得ざる船舶の払底さにはお先真黒で不安な事夥しい。人間には希望性があればどんな苦労も欠乏も堪へ忍び易いが、お先真黒では現在が如何によくとも満足出来ないものである。光明を与へる事が慈悲だ。善導だ。

河内（ハノイ）の九月は内地の九月に気候が匹敵する。

米軍は仲々良い所があるとは米軍を観察したる日本将校の言だ。彼等には日本軍の持たぬ所の

良習を持ってゐる。欠点もある反面、長所もある。米軍将校の戦時服は下士官兵と何等異ならない。又、各兵に至る迄写真器を持ってゐる程技術科学のレベルは高い。河内飛行場の日本兵と米兵とは仲良しになってゐる。従って進駐日本の米軍も時日の経過と共に左迄日本人との間に悪感情を抱かない様になるものと思ふ。日本は今や思想攻勢の的になってゐる。必ずや米英の自由主義攻勢に翻弄せらるる期間があろうが、日本の中産階級の存在する以上、再び日本の真姿を顕現する時機があろう。

最近の同盟通信に依れば、米軍の日本進駐は全く占領軍の態度であり小学校の統制権、新聞の検閲等耳を掩はしむるものがある。斯くの如き不快なるニュースを聞くと、内地に帰還して何の楽しみがあるやと言ひたい。此際、世を捨てて仏門にでも帰依したい気になる。之は前途に何の希望も楽しみもない者の共通の所感である。

国内に於ては国家主義、統制主義者は凋落し、自由主義、国際主義者が抬頭しつつある。併し之は当然の現象であり、国家の永遠の生命を維持する方便でもある。一の主義に膠泥する時は必ず行き詰りがある。今度が日本的自由主義者が米英の矢表に立って国家を擁護すべき時期だ。国家主義者は地下潜行を続くべき時機である。

九月十日

寂涼脱力感に堪へ難きは近頃予の心身の実況なり。内地帰還は後三年を要すとか、益々憂鬱となる。予の右眼も義眼合はず、右頬部の傷跡も時々しびれる様に傷むことありて常調に非ず。右鼻孔も閉塞著しく、右示指も尚皮膜構成せざる程度にして激痛あることあり。況んや屈折運動をや。無聊を慰み得る予の唯一の趣味読書は、左眼のみにて何となく懶(ものう)く感じ進捗せず。軍隊内の節制は向上せず、空軍紀となるのみ。現在は堕勢にて動きあるのみ。此の如くにして目標を与へずに二年三年を経過せば、軍隊は軍紀風紀弛緩し、支那軍隊にも劣るものを生ぜん事を惧(おそ)る。軍隊は解消するを以て尚此の弊風を忍ぶとするも、個人に生ぜし懶怠性は復興日本に最害あり。

予の身体は右半分不自由なり。即ち右脚は爆撃の骨折跡尚完治せず。歩行に疼痛を感じ、右手は示指不自由なり。右眼右頬は負傷の跡あり。口辺も右側に故障あり。額に於ても右半部は無神経なり。右鼻孔も同様、左鼻孔に比し遜色あり。観じ来れば右半身の故障の多き事よ。

昨夕、支那第二方面軍参謀副長尹少将と土橋将軍とが会見された。話を聞くと、土橋軍司令官に尹少将がしてやられた様だ。交渉事はあやふやな事を云へば必ず相手にしっぽをつかまれたりやっつけられたりする。よくよく研究の上、要点をエキスにしてちくりちくりとやるべきものらしい。田舎者の尹少将は国際交渉の老練者土橋将軍にしてやられたのは当然であろう。

凡有(あらゆる)動物に於て蟻程道徳的に学ぶべきものはない。彼等には昼夜はない。不断の勤勉あるのみだ。彼の不屈不撓の精神力と其の数の威力とは、凡有ものを侵透し凡有障碍を突破する。道は近きに

在り。吾人は蟻に多くを学ばねばならぬ。

九月十一日

昨夜始めて辰彦の夢を見たり。広島に於て原子爆弾の損害を受けあらざるやと掛念中なるが、夢は本人の軽傷なるを告ぐ。真相果して如何。

人間の情を譬へんか食物の味、就中（なかんずく）「ダシ」と云ふものに匹敵するであらう。情のない人間は味がない。ダシがない。食物には味がないのと同様だ。

徳を以て仁を施すを王と言ひ力を以て仁を籍（カ）すを覇と言ふ。今次終戦処理に於て米英のやり方は全く覇道の本質を遺憾なく発揮してゐる。却て蒋介石のやり方の方が覇動的色彩が少く、王道に近いとさへ言へやう。覇道の特色と云ふのは自分に利害のある事は極めて熱心執拗であるが、然らざるものには全く捨てて顧みない。例へば彼等は自国側、或は連合国側の俘虜に対しては至れり尽せりの優遇を与へ、俘虜をして随喜感激せしめ神に対する如く連合国に感謝の念を湧かしむると共に、反面敗戦者には遠慮柄酌もなくトコトン迄冷酷なる取扱ひをする。暴に対し暴を以て酬ゆるのが米英の覇道主義の特色である。暴に酬ゆるに仁を以てするこそ王道の生粋なのであらう。蒋介石は停戦に方りそんな訓示をして部下に日本人に対する暴力を禁じた。ソ連の如き英米以上覇道と云へやう。蓋し覇道思想は英米と同一であるの外、ソ連は民度文化の度が英米より低いだけ野蛮な行為を平気でやる。如実に樺太、満州、北朝鮮の状況が之を證明してゐる。

土橋司令官、蘆漢将軍[106]来河［ハノイ］の際は、其の日に訪問し支那側の巷間の風説に依り日本軍の不信頼を来たすが如き事なき様釘打ちせんと企図せらる。最も先入主に支配せらるべきを以て他の何物よりも早く面会せん所存なり。

三沢大佐南京より帰還し、総軍小島参謀[107]東京より帰還時三沢大佐と行動を倶にし河内に立寄る。森赳近衛師団長、畑中少佐[108]等に刺殺せられたる事（クーデターを起さんとして否決せられしを遺憾に思ひ）、ポツタム声明に屈服したる原動力は宮中に在る事等を知る。ポツタム宣言受諾を前提として遡って琉球作戦の如きは不徹底なものであって、総力を内地決戦に集中した故、戦力は戦争時完全に使用されなかった。航空兵力に於て然り。

支那軍の技術能力の低級と組織力の欠乏は停戦後日本軍の力を借らざるを得ない。予は技術能力組織能力及情操は近代文明の梯尺である。マックアーサーは日本軍を評価して兵隊は強し、但し統率部及将校は近代戦の本質を認識せざるが故に作戦に破れたりと称して居ると。

明星倶楽部で小島参謀を主賓に参謀会食す。日露戦争も四年続けば日本の負け、大東亜戦も二

[106] 蘆漢（1895-1974） 中華民国の軍人。日本の敗戦後、北緯16度以北のベトナムに入り、日本軍の降伏受諾に関する業務を担当した（『民国人物伝　第三巻』pp.145-151）。

[107] 小島純勝　大佐　南方軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.590）。

[108] 畑中健二（1921-1945） 少佐　最終職は陸軍省軍務局軍務課員。1945年8月、終戦反乱に参加して自決（『日本陸海軍総合事典』p.126）。

年で終了せば日本の勝であったのだ。前者は日本の為、終戦の時機が僥倖したるに過ぎない。世界の同情、露西亜の内部情勢が然らしめたのだ。勝てば官軍、負くれば賊軍だ。日露戦争の論功行賞で最上位に位する山県や伊藤老公に匹敵すべき東條元首相が戦争犯罪人の巨魁として敵側の手にて死刑に宣告せられんとしてゐる。之は一例だ。戦争の功罪の如き其の時の勢である。軍縮会議の若槻、幣原等の使臣が受爵されたのと同工異曲である。思へば人生世の中は果敢ないものである。

九月十二日

昭南に於てマウンドハッテンと南方総軍司令官との調印式挙行。東條大将自殺（重態）。

支那軍ノ自動車取扱の無知識は驚倒の外はない。又数の觀念に乏しい。之に反し米軍の如き一人も自動車の操縦の出来ないものはない。技術に関する両者の遜色は此の一例を以てするも分明である。

予の顔面の疵も追々に自然的に治癒し驚くべき程疵痕が縮少した。負傷当時の印象が湮滅される事が却て名残惜しい様な気さへする。

土橋将軍に学ぶべき点は多いが、人が嫌ふことがあるとしたら一番の疵は自己宣伝がましき言葉を不用意冗談半分に露吐される事で、聴き慣れぬ者は冗談と解せず宣伝と解する。之は東洋道徳、特に日本人の徳義的通念に対し差し障りがある点であらう。

相手の不準備中に我自主案をつきつけ不用意に同調的言辞を発せしめ、爾後の自主権を獲得するのが交渉の上手と云ふものだ。之は土橋将軍の交渉振りから習った一節だ。

予の健康状態も一般業務に支障なき程度に恢復した。二十年来の中井式自彊術を実行し得る域に達した。右示指に目下若干の未恢復部位を残すのみである。却て三月三日の右脚骨折の余後が不良である。

今度の停戦交渉で現はれた列国の態度。

最も日本に接近せんとしてゐるのは支那だ。最も傍若無人無法暴行を平気でやるのがソ連だ。最も感情的陰険で御殿女中いぢめの報復的態度を取れるのが英国、実質を把握せんとする現実主義が米国だ。

米国は日本人と支那人、日本人と朝鮮人との提携を如何にして妨害せんかと焦慮してゐる。有為転変の世の中と言ふも現在の如く甚だしきはない。

菜根譚訳を読んで見た。全編を通読したのでないが、往事感激した程今は興味も印象もない。説く所も大抵は予の経験し感じて居る所だ。唯、明哲保身安定のみを説く所吾人の処世とは趣を異にする所が多い。

戦争犯罪人と称し米英等が著明の日本人士を召喚するが如きは片腹痛い限りだ。却て日本人に

根深い怨恨を植えつけ世界の信を失ふだけだ。敵を恐怖せしむるも悦服せしめ難しとは覇道主義の特色で米英欧州人のやり方だ。不法行為者を犯罪人として取扱ふ事は受け取れるが、責任ある人を犯罪人の仲間に入れる事は甚だ不穏当だ。事実、重要な責任の地位に立った人は道徳能力に於て少くも一般人より秀でてゐて、其の重責を享受したのである。例へば戦争勃発当時の各省大臣と俘虜収容所で不当な処置のあった××警戒兵監視人とを同様に戦争犯罪者として抑留するが如き玉石混淆も甚だしいではないか。正義人道主義ならば万国共通の正義人道ならざるべからず。然らざれば不正義不人道となるではないか。

九月十三日

予は入院一ヶ月二十日、入院後の休暇半月で此の間智能が如何に変化したかを考察するに身体的方面の無能化に比し智能は毫も変化の無い事を経験した。寧ろ二ヶ月の頭脳的休息で頭脳の新鮮さを覚えるのであった。例の数字の計算を以て頭脳の働きを点検したが、嘗て無い程の新鮮さを覚えるのであった。だから頭脳は疲れては駄目だ。之に適度の休息を与へねばならぬ。一般人は疲れてゐる。予は幸に従来の焦燥勤勉癖を今次の災厄に依り矯められた傾向がある。休息の価値を今日程痛感した事がない。日曜日は休息すべきを怠った時は非能率錯誤と云ふ報酬で労動償はない結果を生ずる。

河内の邦人婦女子四百人は支那軍進駐を前にして十四、五日に亘り■はれハイフォン北方五里カンエンに集結する。神戸旅館のお神がウイスキーを餞別に送って来たから夜挨拶に行った。四十二年の在印度支那生活を清算して神戸に引きあげるとて涙を流してゐた。予の負傷には最も同情して居る一人だ。それから明星倶楽部の南方寮を尋ねたらこれも十五日、舟でカンエンに行くと云ふ。

杉山元帥[109]が米軍拘引の前に自決された。

九月十四日

予の観察に依れば、大東亜戦は支那事変の延長として避くべからざるものであった。大東亜戦宣戦布告の際、日本人は何人と雖も溜飲を下げ天下晴れての心となり感激禁じ得ぬ者はなかった筈だ。支那事変に至りては即ち否らずだ。全く日本に責任があり、拡大すべきや局地解決に止むべきやは日本の意の儘であって、国内に於ても拡大非拡大の二思想が抗争したのである。予は当時陸軍省整備課に在りて北京の派遣軍司令部の非拡大主義の意見具申に全然同意であった。我国の経済力は到底大事変を収拾するの力なしとの池田純久高級参謀（派遣軍）[110]の意見に同意したる次第であった。若し英米側の言ふ様に大東亜戦勃発の責任者を問ふならば、予は寧ろ支那事変拡大

[109] 杉山元（1880-1945）元帥　1944年7月～1945年4月まで陸軍大臣。1945年9月12日、自決（『日本陸海軍総合事典』p.86）。
[110] 池田純久（1894-1968）中将　1935年12月～1937年8月まで支那駐屯軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.15）。

主義者にその責ありと做す者である。大東亜戦の如き乗り掛った船で驥虎の勢上何人が局に立っても避くべからざるものである。

大東亜戦の後半期に於ける我太平洋作戦は常に後手後手に陥り予は不思議に堪へず。海軍の暗号を敵側が窃聴しつつあるべしと判断せしが果せる哉、本日の同盟通信に於て山本五十六元帥の飛行機を暗号解読に依り捕捉し得たと云ふ。米軍の発表で予の判断は正しかった。事実、海軍は陸軍に比し暗号技術は著しく遅れてゐる。米軍の見解に依れば日本海軍よりも日本陸軍の方が手剛かった事はマックアーサーの談話に依るも明瞭である。作戦は陸軍の方が満州事変以来経験に富み場数を経でゐた。米国の対日施策は凡有(あらゆる)智能を動員して日本を如何にして劣等化せしむべきや、如何にせば日本の優秀分子を芟除し得べきやに腐心してゐる。其の外には何者もない。唯、世界の世論の攻撃を受けない為に平和的の国民生活を妨害しないと称してゐる。凡そ軍事も文化も其の根基は同一であって軍事を発達せしむれば文化も向上するわけである。米国は此の方面の向上発展を阻止してゐるのだから結局文化を閉塞する結果に陥るのである。然しながら一つ良い事は米国人との接触に依る彼等の美点長点の吸収である。例へば米人の婦人は看護婦の資格がなければ結婚の資格ありとし人に進める事が出来ないと云ふ。主婦の看護能力の如きは実に必要で、予の主張と全然趣旨を同じくする。是等は米人に学ぶべき点の一端だ。

九月十五日

予、個人より云へば軍人を休める塩時であった。予の能力に比し予の陸軍に於ける地位境遇は甚しく不遇ではなかったが、必ずしも良好とは言ひ得なかった。陸軍の一部就中人事の中枢方面では必しも予を正解して妥当に取扱ったとは認め得ぬ。それ故に予の陸軍に於ける将来は必ずしも愉快至極のものではあるまいと考へられた。此の際、戦争が勝てた場合不具負傷の身で陸軍に残るのと、全軍人が敗戦の為丸腰になって予も亦軍職を退くのと相対関係に於て今回の軍職を退く方がキレイサッパリとして愉快である。裸一貫になって今からスタートを切って同僚と競争する場合（そんな事はないがありと仮定すれば）と、幼年学校入校当時の同僚とスタートを切った場合と、予は現在の方が遥かに優位に在る。幼年学校入校当時は全くハンデキャップを同僚に取られ、予は小供ながら苦心したものであった。今では別段同僚と伍して引けを取る様な事は先づない。それだけ予は陸軍生活に於て訓練され自ら向上した。

「有為転変」なる語は現在の社会に最も適合した言葉である。米英の戦争犯罪者として我が俘虜収容所掛官を狙ってゐるが、如何なる善人でも廻り合せで俘虜収容所勤務をした人は其の犯人として責を負はなければならなく不合理極まる結果になる。斎藤正鋭少将の如き全く其の例であって、尊敬すべき善人であって廻り合せで犯人として抑留された。敵側の無暴を怒る反面、人生の果敢なさを認知せざるを得ないではないか。

南方寮の諸嬢も愈々「カンエン」に退避するので、予は司令部職員として最後の義理を尽す為煙草を以てお別れに行った。義理人情も社会徳義上理性に訴へてやらざるを得ないと云ふ様な型式的義務的では面白くなく、人情自然の流露が社会徳義に一致吻合する様にならねばならぬ。予の今日の行為は後者から出た事を自認する。

近頃司令部の生活は一部支那側と交渉事務を管掌する外は醉生夢死の状態だ。敢て酒のあるわけではないが、何もせず囲碁や昼寝に時を尽してゐる。思へば勿体ない話でないか。最早前途に栄達功名の望の無くなった予の如き、然らば今後何が欲しいかと個人的欲望を問はるるならば卒直に左の如く答へるであらう。「優しくて賢い婦人に仕(カシ)づかれたい」と。公人として私人として人生の七割を経過した人間の偽らざる告白である。

九月十六日

英軍の馬来地区日本軍に対する態度は冷厳と云ふよりも報復的である。日本軍を俘虜に準じ取扱ふ旨宣告した。内地に於ては米軍は報道通信に極端な干渉を加へ、遂に同盟通信は閉止せしめられた。吾等の生活は此れ迄同盟通信で一月二回のニュースで潤ほされてゐたが今後お先真暗だ。陸軍の将星相次で自決の報を聞く。曰く田中久一将軍、曰く吉本貞一将軍、曰く小泉親彦将軍、曰く本庄繁大将……。

世の中は暗黒恐怖時代に突入した。後世史家は現在を恐怖時代と呼ぶであらう。恰も仏蘭西革命直後の様なものである。

現世人は死後を余りに現世人の生活環境に当て嵌めて解釈してゐる。死んだら遽に神通力を得て天駈けたり怪力を出して報復したり全智全能の神か否らずんば悪魔の様に立振る舞ひ、而も個性の存在してゐる様に思ってゐる。併し予の人事不省の体験其他に依れば之は異ふ。死すると云ふ事は生前に還元することである。個人は自己の生前が何であったかを完全に知らない様に死すれば完全に自己を消滅する。凡そ生前と縁のない太虚に帰するのである。空に還元するのである。唯、予は霊を否定するものでない。霊なるものは宇宙精神である。此の霊が個人の霊として絶えず分離して個々に存在するものかと云ふ点に就ては予は未だ何とも確信がない。或時は個々の霊に分離し、或時は宇宙の大霊に帰一するのか何とも言へないが霊の存在は認める。併し死して個人の霊が飛び廻り神変不可思議を演ずる様な事はあり得ない。之は現世の生活に強ひて当て嵌め様とする考へ方で事実と相違してゐる。予の人事不省中は自己も無く時間もなく空間もなかった。全く大虚である。生前に還元した気持である。だから死する事は決して苦痛でない。感覚が無くなるのである。生まれると共に現世に因縁を生じ死と共に現世から完全に離脱絶縁するのである。世人の恐れる程死は苦痛懊悩でなく楽なものである。要は生より死に移る瞬間の様態如何が恐怖すべきか否かを決する。但し茲に断って置くが人間の執念と云ふものは「エネルギー」として死すとも存在するもの

であらう。

極めて自然裡に義理人情を尽す事が予の処世方針だ。義理人情に拘束されず人情自然発露が世の所謂義理人情の筋に兼ふと云ふのが予の方針だ。而して現世に処して義理人情の発揮十全にする為には、或る程度の資産資力と云ふものが必要だ。それ故に予は必要の限度に於て資産を造り度思ふ。清貧だけでは此の節、人に満足を与へ得ないと云ふより義理人情を実質化する事が出来ない。世の多くの人は資産が出来れば「恒産ある者は恒心あり」或は「衣食足りて礼節を知る」と云ふ流義で義理人情を物質で表現するのを常とするが、予の処世方針は之と逆だ。因果関係は反対だ。或る高僧の言に「道心の中に衣食あり。衣食の中に道心なし」とある。予の方針は道心の中に衣食を求めんとするものだ。高僧は自然に与へられる説であるが、予は俗人として此の方面に求めんとして努力する考へである。

停戦交渉進捗に伴ひ、軍司令部の河内撤退の議が進みつつある。大体海防方面であるけれども、予は交通連絡を第一着眼として海防案を主張する。他の者は軍隊と一緒とてカンエン案を出したり宿営地の獲得上ドーソン[111]案を出したりしている。予の提案は今後其の真実性を発揮するであらう。

佐藤中佐来り。小林大佐と三人同期生の談合を為す。考へる所皆同じ。皇国の将来を懸念して長嘆之を久しうす。

九月十七日

満州方面に於ける我軍に対するソ連軍攻撃は電撃的であったと云ふ。詳しい事は知る由なきも牡丹江市の如きアット云ふ間に機械化部隊に急襲されたと云ふ。此度の世界大戦に於てソ連程過去の面目を一新したものはなからう。其の実力に世界皆認識を新にしたのである。これは革命以来二十五年営々改善の賜にして、国家国民性も努力の如何に依っては如何に豹変が可能であるかを如実に証明して居る。観方に依っては第一次世界大戦に於て露国が一回完全に潰れたが故にあれだけ新しい新国家組織が建設されたのだ。若し次木(ツギキ)式の彌縫策では到底あれだけの面目は一新しなかったであらう。それから勤勉の徳の効果と云ふものの偉大なる事の認識だ。以上の事は我国将来の復興と再建に示唆を与へるものである。根強い民族性に賢明にして鉄腕の政府があるなれば復興不可能なりと断ずる事は出来ぬ。

ソ連の事例は個人の生長発達或は評価によい参考とならう。世の中に一瞬も常住のものはない。勤勉なる個人や民族は末頼母しいものである。

米人の能率的な特色を発揮してゐる一例として軍人の服装であるが、平常服も礼装も同一で将官も兵卒も同一の型式着地である。参謀肩章もない。将官の帯でも靴でも簡素なもので兵と何等差異がない。熱い所では上衣とシャツとを一つにして上衣を着てゐる。長袴とか短袴とかの差は無く

[111] ハイフォンの南東、約20キロのところにあるトンキン湾に面した町（『印度支那地図地名索引』p.23、『印度支那地図』）。

一つである。之に比較すれば日本軍人の服など余りに型式が多すぎ且実用的ならず儀礼的である。ソ連なども確か米軍と同様の簡素振りである。彼等の能率こそ世界に覇を唱へ得る大なる原動力である。日本の如く貧乏の癖に衣食住を複雑非能率ならしめてゐる。改善せねばならぬ大なる部面であらう。

米軍の飛行機には女性の名が書かれあり。甚しきは女の裸体画が書いてあると云ふ。それで却て彼等は戦場で志気が鼓舞されるのである。マックアーサーの訓示に「米国の将兵よ、祖国の妻女や愛人に早く会ひたいなれば義務を完全に遂行する事が捷径だ」とある。女性に関することを日本陸軍などに米人式に取入れたら如何に不軍紀不風紀のかどで叱られる事であらう。又日本人の通念は、勇ましかるべき時女性の事などを取り入れたら志気が阻喪するであらうと云ふ風習だ。米人式がよいのか日本式がよいのか国民性習慣にもよる事であらう。慣れればどちらでもよいのでなからうか。唯、日本人の形式的窮屈な軍人風紀観念は或る程度是正さるべきであると共に、行きすぎた米国式の脱線振りも感心は出来ない。必ずしも米人流がより良いと云ふのではないが、日本人の狭量なる限界は今少しく闊大ならしむるを要する。平野寛一「縦見」が洋行帰りの第一声として予に語るには日本も今少しく女性を解放せねば外人の人気を得ないであらうと言った事を想起する。以上の如く、米人の率直さ能率性を認めつつも、彼等の日本に対する政策は何としても感心が出来ない。彼等は日本を愛して居るのでない。日本を憎んで居るのだ。憎悪より生ずる施策である。故にやる事為す事が殺気を含んでゐる。

支那人に対する交渉に於ては、公私併行してサービスする事に依り彼の好感を得て我が要求をも貫徹し易いと云はれてゐる。併し従来予等のやり方は形式に拘泥し過ぎて公の場合のみを考へ、私の事を一切考へず寧ろ私のサービスを以て悪徳なり犯罪なりとさへ固苦しく考へる傾向があった。牽いて私のサービスを故意に閑却した傾向がないでもなかった。併し考へて見れば私のサービスも人助けであって、凡そ親切より発する私のサービスは禁ずべきものでなくして奨励すべきものである。特に上官に対し公私に亙り奉仕する事の尊ぶべきを忘れ、所謂上官に諛(へつら)ふ事の譏(そし)りを免れん為、私の奉仕を閑却する傾向が少くなかった事を今反省する。予一人のみならず陸軍教育は予の如き偏狭さを以て正しいと看做した傾向があった。徒弟主義の教育とか親分乾分主義の教育に於ては、陸軍の法理的な偏狭な教育よりもっと人間味が深いのでないかと思ふ。私のサービスを排斥すべき場合はない事はない。それは自利を求めん前提に於て打算的に家庭とか個人の枠に取入って気嫌を取る事だ。心から奉仕精神や親切心に燃えて奉仕した結果と形に於て同様であるかも知れぬが問題は形でなくして動機の如何に在る。元来こんな私的サービスする事は人の評判にならぬかと考へる様な所に其の人は既に社会の軽薄なる悪風に染んでゐると見るべきである。

現在の様な武装解除の様態に於て、半歳一年経過すれば道徳的に日本人は低下し勤勉心を失ひ無為より来る智能労作力の逓減は免るべくもない。予は個人として此の欠陥に陥らぬ為、従来の予

の良習を持続助長する考へである。軍隊に対し何等かの施策を必要とする。

昨夜、小林方明、佐藤中佐等と談合したのであるが、予等が此の戦争を頑張れば相手は戦にあぐみ日本を或る條件を以て媾和するに至るであらうとの我田引水的一方的判断は、停戦後の敵側の対日憎悪感に照し我に有利視すぎたる観測であった。ソ連が敵側に加担し而も米本土に何の損傷も無く、反対に日本は日に弱められある情勢に於て、敵側は大阪夏の陣的の妥協的媾和に同意するであらうとは虫が良すぎる。それ迄に我方は敵に大打撃を与へ置かねばならなかった。本土決戦に於て大打撃を与へたとしても既に決勝点（ゴール）に入った際の事であるから、敵側の戦争意思を封ずることは出来なかったであらうし、時間の経過と共に本土決戦に入るに先ち更に更に悲惨なる損害を免れなかったであらう。原子爆弾の採用ある場合に於て特に然り。茲に於て今回執られたる降伏時期の選定は最も最後的の良き場合であった。戦争第二年目位に何とか手を打つことが出来ねば、現在の採られたる媾和時機の外、良時期はあるまい。予の理想は支那事変を始めないのに在った。斯く観じ来れば日本は此の媾和条件に甘んじ、将来支那との提携を密にし自彊の策を講ずると共に文化的方面に於て列国に抜んでねばならぬ。列国は未だ戦争戦争と云ふ事に執着し之に勢力を費してゐる。日本は完全に戦争意識より脱却し、真に全精力を平和事業に投入し、文化方面に於て他の列強に抜んずるを以て賢明としないか。日本人は多し。従来の形態に於て報復を考へてゐるが、従来の方式を以てすれば百年立っても列国をリードする事は出来ないであらう。故に全然異なった文化平和事業に於て一大報復―即ち相手国に頭を下げしめ吾が意見を貫徹する事―を希はなければならなくなった。敵国側は日本が従来の形態―武力戦―に依る報復を危惧して此の方面の芽を芟除する為凡有(あらゆる)憂身をやつしてゐる。

同盟通信を繰り返へし見てゐると左の記事があった。

（八月二十九日東京）皇国の敗戦に対し自責の念にかられ一死以て上御一人に対し奉り不忠をお詫び申上げた民間憂国の士は相当数に登るが、現在迄に判明したものは左の如くである。これらの人士の大部分は二十歳前後の純血無雑の汚れを知らぬ尽忠報国の一念に燃えた赤心の士で死して護国の神となるの道を選んだものである。

明朗会[112]会長　日比和一氏他十一名　二十三日午前十時　宮城前に於て自刃

尊攘同志会[113]　国粋同盟会[114]会員　十名　二十三日　愛宕山に於て自刃

大東塾[115]生　十三名　二十四日代々木原頭に於て自刃

---

[112] 明朗会は日本郵船の機関士が組織した親睦団体、機関士協会であったが、1935年に社内革正刷新を目指す一部が新たに明朗会を結成した。その後、右傾化し1945年8月23日、無条件降伏に反対し、これを阻止できなかったとして、12人が集団自殺した（堀 p.574）。

[113] 1944年4月に結成された。日本の降伏を承服せず、1945年8月15日、木戸幸一邸を襲い、その後愛宕山に籠り、10人が手榴弾で爆死した（堀 pp.355-356）。

[114] 国粋同盟のことであると考えられる。1942年6月、国粋大衆党が政治結社から思想結社に改組され、国粋同盟となった（堀 p.208）。会員は愛宕山で自決してはいない。

[115] 1939年4月、皇化修練の場であった維新寮を改組して開かれた。日本主義、皇室中心主義を主張しており、敗戦に

なほ明朗会員の内には女性一名が含まれてゐる。

… … … … 昭南では自刃者三百名あったと海外ニュースは放送してゐる。

以上は何と感激禁じ得ぬ話柄ではないか。

九月十八日

首相の宮の新聞記者団との御談話に依れば、日本は従来戦争に全力で準備傾倒したが今後は文化に対する熱心さを以て世界に貢献する。之が日本復興の大道であるとお示しになってゐる。新時代に対処して百八十度の頭の方向変更を要する。

河内市中を通って見ると支那兵と日本兵との差が明瞭に見える。支那兵は十六、七才から二十才頃迄の若い兵隊で筋肉未だ定まらず可憐と云ふ感じがするが田舎者丸出しで、その辺の安南苦力に官服を着せた様なものである。之に比し日本兵はガッチリとして単独兵の歩行振りを見ても隙のない如何にも威厳がある。但し仲には気の毒な程年が寄った老兵で新鮮味がない。支那兵は車に乗ったり歩きながら物を食ふ姿やキョロキョロとして落ち着きのない姿が多い。総督府の衛兵司令が字が読めぬ為に、日本人の通訳がどうしても這入れなかった例もある。兵は先づ全部字が読めないと見てよろしい。米人でも字の読めない兵が少くない。支那軍の上級幹部中、清廉な日本人的な考へを持ってゐる人もないではないが、多くは支那人の通弊より脱却する事が出来ない。日本から移譲する倉庫品を見て其の八割を正式の取引とし二割を着服せんとする者が多い。否、寧ろ上前をはねて金儲けが出来ると考へてゐるらしい。張作霖とジョッフル将軍[116]との談話に、作霖が閣下の如く大兵を指揮されたらさぞお金がたまったであらうと云ってジョッフル将軍が目を廻したと云ふ話がある様に、上官は部下将兵の上前をはねる事を以て役得と考へるのが支那人の通念である。此の点は現在の支那人の大部を支配してゐる。それ故に支那人の此の根性を叩き直さぬ限り、支那は一等国として世界に雄飛する事が出来ない。而も支那人をして斯くの如く正廉潔白ならしむるは、国が広いだけに教育指導の普及に困難があり道徳の向上は一朝一夕に望むべくもない。故に支那は依然他国の尻馬に乗って行くより方法がない。

九月十九日

久方振りに病院に入って荻野大尉等に傷の治癒状態を見せた。予の入院中の居室には鎌倉領事が重態で横臥してゐた。予はこの部屋は必ず全快の出来る部屋だと激励して置いた。夫人の豆々しい看護振りが目に立った。予も最早死と云ふ事に少しも恐怖を持たぬ。併し鎌倉領事の様に最愛の夫人に最期（？）迄看護される身を羨しく思った。

さいして、1945年8月25日、14名が割腹自殺した（堀 pp.35-36, 369-371）。

[116] 第一次世界大戦を指揮したフランス陸軍総司令官（西川 p.460）。

米国のやり方は益々日本人の怨恨を買ふばかりだ。日本国体の尊厳を破壊せんとして国定教科書に神話の採用禁止、将た家族主義の打破と個人主義の植付或は首相宮をマックアーサー司令部に招致して新聞の態度も難詰し軍国主義打破に競争すべき事を指示するなど傍若無人を極めてゐる。斯くの如き事が果して永遠に日本より日本精神の特色を駆逐する所以なのであらうか。寧ろ日本人の心ある多くの者は顰蹙してゐるであらう。反面民族精神に対米反抗の根を植えつけつつあるのではないか。彼等の我儘政策は結果に於て良果を収めるものでない。寧ろ日本人としては彼等の搦手――日本人の軟弱化政策こそ危険なのである。米国を謳歌し日本をさげすむ様な結果を生ずる。真にゼントルマン式態度こそ日本人をして祖国を捨て米国に走らす所以なのである。此の点に於て寧ろ米国は感情の余り下手な政策を取ってゐると云わない。否、換言すれば彼等は王道主義が採用し切れず持前の覇道主義を丸出してゐる所に其の低級さがある。但し米英の悪いと云ふ事を表面にあからさま唱へる事は現在の施策としては策の得たるものでない。大望ある者は自重せんければならぬ。アハハノアハハ、オホホノオホホ主義で腹中甘いも辛いも酸ゆいのもよくよく呑み込んで置いて時勢の流れに反抗もせず流されながら最後は遂るべき目標点に確実に到着するこそ現時に於ける日本人の執るべき策案でなからうか。

九月二十日

予の入院中一切の看護を引受けた当番兵笠原一等兵は衛兵隊に帰った。彼の郷里は左の如くである。

長野県岡谷市□□□□□□□　□

予は剃刀を購入して彼に贈った。

蘆漢将軍と土橋軍司令官との会見に於て蘆漢は左の如く語った。「支那には列国の軍事指導者が来た。独人が来た時、支那人は三日目には皆感心した。ソ連人が来た時は尊敬心は独人に比し薄れた。米人が来た時、最初の半年は軽蔑した。併し半年後、彼等を尊敬する様になった。我々は今米人を尊敬してゐる」と。土橋将軍曰く「予は米人と交際した事はないから詳しい事は知らぬが、米人は最初粗野で我儘の様に思うが元来率直で陰険悪辣な所がなく正直な活発な民族である。併し何と云っても米人の強味は物質力と金とである」と。蘆漢将軍曰く「米国の産業力は当の連合軍でさへ驚嘆してゐる。ソ連の飛行機と戦車は殆んど米国製である。印度から重慶（昆明）迄、六吋（いんち）の送油管を百日にて完成した。其の延長は千九百粁である。これには支那側も驚嘆した。日本は米国の生産力を過少評価した事はなかったか」と。又、蘆漢将軍は停戦時に於ける日本人日本軍が天皇陛下の鶴の御一声でピタリと戦争を止めた日本人の忠誠と天皇陛下の御威力には心から驚嘆してゐたと。

知名の将軍が頻々として自殺される此頃一の不思議なる現象は海軍に無、之陸軍に多い事であ

る。田中静一将軍[117]篠塚将軍[118]浜田将軍[119]皆陸軍出身だ。不思議に海軍の将星に自決者の少いのは何の理由であらうか。今迄に大西海軍中将[120]一人を知るのみだ。

予も幼少にして軍人が好きであり、小学校中級時代から早くも軍人になる志を樹て中学校に入るのも幼年学校に這入る前提として入学したのであった。十五才の時陸軍幼年学校に入ってより四十三才の現在迄波瀾と曲折とはあったが兎に角自己の希望とする道を曲りなりにも通って来たのであった。幼年学校時代は予はスタートが遅れたのと家庭的事由、及予の悪習より成績は芳しくなかった。予の中学校入学迄の秀才振りと比し甚だ振はざるものであった。予の奮発心のみは矯められず予は士官学校（本科）時代（士官候補生隊附時代より）より予は努力家となり自覚家となって人一杯精励したのであった。其の結果は士官学校卒業時の成績は優秀の部類であった。応用戦術の点数が同期生中最高であったり、原案博士の称号を友達より貰ったり、本科入校の素養検査が一番であって守屋区隊長[121]より激励せられたりした。予は今でも愉快な輝しい思出であった。士官学校卒業時の成績は寧ろ予の実力以上であったため、卒業後連隊に復帰後、先輩同僚後輩の予に期待する度も大となり予は重荷の為却て自縄自縛に陥った様な結果を招かないでもなかった。併し今日あるを得たのは其の当時よりの予の自負自責自覚の致す所である。予は元来宗教心に富んだ慈悲深く犠牲的精神にも豊富な人間であったが、中少尉時代は自己の地位を保つ為の努力に忙殺され予の美質を他に発揮することが少く、単なる勉強家向上心旺盛なる努力家、或は野心家程度の認識を人に与へたるに過ぎなかった。予の陸大入学の如きは真の動機は自己に対する郷党親戚母姉の期待を満足せしめんとするに在って、国家奉仕の為とか青雲の志より発する向上心は第二位第三位の動機であった。物事をあっさり片づけ得ない思ひつめた考を持つ予の性癖は陸大の受験の為人一倍取越苦労的な勉強振りをした。陸大入校後、色々な試練を経て予は本来の善人に還元したと云ふより本性を率直に発揮し出した。名利の心が減少し敬天愛人の心がより多く湧き出した。元来予は小供の時より社交が下手で独立孤立的且突飛な性癖を持ってゐたが、加ふるに感情が強いため予の上官に仕へる態度は常に必ずしも模範的ではなかった。予は温厚派に属する人物故甚しく上官と争ったり口論したりした経験はないが、上官より特に愛せられ引立てらるると云ふ事はなかった。併し予の特色を認めて愛護して呉れた上官に守屋精爾中尉（区隊長）が居られる。

予は自ら事務家を以て任ぜならした。大綱を統べ人を使ふ事が出来る事、予の長所であった。予

---

[117] 田中静壱（1887-1945）大将　最終職は第12方面軍司令官兼東部軍管区司令官、1945年8月24日、自決（『日本陸海軍総合事典』pp.92-93）。

[118] 篠塚義男（1884-1945）中将　1941年6月～1942年4月まで軍事参議官兼陸軍士官学校長、その後、予備役。1945年9月17日、自決（『日本陸海軍総合事典』p.79）。

[119] 浜田平（1895-1945）中将　最終職は第18方面軍参謀副長。1945年9月17日、バンコクで自決（『日本陸海軍総合事典』p.127）。

[120] 大西滝治郎（1891-1945）中将　最終職は軍令部次長。1945年8月16日、自決（『日本陸海軍総合事典』p.192）。

[121] 守屋精爾（1895-1943）中将　1943年1月、タイ国駐屯軍参謀長、同年5月、戦病死（『日本陸海軍総合事典』p.158）。

の人の長たるの資質は中尉時代より区隊の生徒などの認める所であった。予の結婚生活は苦労が多かった。楽しいと云ふよりも苦労が増したと云ふべきであった。予の中佐の末期、大佐時代は予の軍人生活の華であった。予は統率の方が使はれるよりも得手であったから、或は階級の上になる方が予の長所を多く発揮したかも知れない。予が大東亜戦にて負傷した事は予の軍人生活を印象附ける紀念でもある。予は負傷を決して恨んで居らぬ。軍人として最後の奉仕が出来その印象としての負傷だと思ってゐる。観じ来れば予の前半世は紆余曲折を経たが先づ先づ順路を登って来たと見るべきであらう。思へば感慨無量である。

九月二十一日

今日は辰彦の十五回目の誕生日であるが彼は健在せるや。広島の原子爆弾が気にかかる。
米国や英国のやり方は蘆漢将軍の言ふ如く根底に於て人種的憎悪心を持って居る事は明瞭だ。だから如何に非人道行為を行っても国内の清教徒平和団体からの非難的言論を聞き得ない。抑止する者がないらしい。丁度米国内の黒人に対するリンチを大目に見て当然とすると同様の心理だ。嗟呼世界絶対平和時代は未だ距ること遠しである。

三沢大佐の話に独逸の俘虜が内地に居った時代、青島の留守宅から靴下等の慰問品を送って来た場合、必ず補修材料を添加して来たと云ふ。其の細心にして実際的な点は大いに学ばねばならぬ。

九月二十二日

気候の変り目か涼気を覚ゆるに伴ひ予の顔面の疵跡じりじりと痛む。何を考へても希望も愉快も少き生活なり。

人間の運命の如きも計り知るべからざるものであって、自己の為と計った事は必ずしも自己の為にならぬ故に運命を天に任せ世の為人の為に働くことを方針とすべきである。

陸軍乃至海軍をのろう程日本に於ては軍部の威力が大であった。其の威力は何に依りて来るか。此の美点を世人は学ばねばならぬ。それは統制力と組織とである。就中平時に於て此の組織は日本の各種の層に比して断然頭角を現はしてゐたと云へやう。

停戦交渉間、米支関係に関し側面的に看取し得る事項は米国将校以下と中国軍側と物を言ふ事を欲しあらざることである。就中米人は支那人から物を聞いたり貰ったりする事――指導力を放棄する事――を嫌ふ。反面日本軍に対比的に尊敬を払へることである。蒙自に酒井参謀が行った時、蘆漢に呼び出されてやって来た旨米人将校に酒井参謀が言ったに対し、河内に蘆漢を呼び出せばよいにと米軍将校が答へた由。日本軍を支那軍に比し数等高位に評価せるのは斯くの如くである。最近日本国内、特に日本陸軍に対し米軍の戦争犯罪人検束の厳しいのは、一面日本陸軍を恐怖する故である。此の点、我が海軍に対し甘く感ぜられるのは米軍に取っては日本海軍の如き余り問題に

してゐないからであらう。さて支那人の計画性のない事、組織力のない事、即ち数理的科学的でない事は驚くべきもので、行き当りばったりで且粗笨な考をしか持ち合せない。近代軍の運営は彼等の頭だけではやって行けない。米空軍将校以下は最も支那人を瞥視してゐる。

九月二十三日

南方[122]では英軍にいぢめられ且兵団も多く業務煩瑣の為軍司令官の西貢在駐を希望して来た。之に対し、今直ちに軍司令官の移駐は支那側との交渉の途上に在る関係もあり困難なので、予等目下対支折衝業務に傍観的立場に在るものが加勢に行く事となり軍司令官の移動は後日の問題となった。先づ行く者上田兵器部長、小林方明参謀、三浦主計大尉、小野瀬憲兵大尉及予である。

米英の戦争犯罪人摘発は燎原の火の如く広がって行く。憲兵と俘虜取扱関係者は根こそぎさらはれる観がある。土肥原将軍[123]など満州事変の辣腕を理由に総軍司令官の椅子より米軍の手に逮捕された由で痛恨極まりない。之に反し海軍は一名も逮捕されたと云ふ話を未だ聞かないのは不思議で、之は既述の如く如何に日本陸軍が有力であるか敵側に目の仇にされてゐるかの證左ともなるものである。著明な戦争犯罪人は著明な愛国者著明な武功者と一致することが多い。米国では原子爆弾創案者に対し勲章を授与してゐる反面、独逸のV1号弾の創案者某博士を終身禁錮にしてゐるではないか。世の中は変なものだ。大根役者が大名になる、千倆役者が乞食になったりする芝居と似た様なものだ。正義や正理は部分的にしか行はれないのである。宜しく世の中を達観すべしである。

素心を忘るなと云ふ一例に書き止める。予の小学校時代には一銭でタイヤキ（鯛焼）と云ふ量の多い甘い菓子があった。之を二匹も食へば小供でも腹が張る位であった。中学時代にアンパン一箇が二銭で特に其の中のアンコは美味禁じ難いものであった。之を五箇も買ふ程の金さへ使ふ事に躊躇した。幼年学校ではウドン一杯五銭で固パン一箇五厘、一日の外出に於ける消費は十銭か十五銭であった。学校の酒保では菓子一袋が十銭で二袋は食へない位であった。幼年学校一年生の時、予は休暇に帰り或る生徒が此の菓子を五十銭買ってゐるのを見て吃驚した事を語った。予には到底一時に五十銭を使ふ勇気もなかったのである。然るに最近予の心辺［ママ］に於て如何に金銭を思ひ切って使ふ事よ。眼鏡が三百二十円、トランクが二百円、当番に五十円剃刀一挺買ってやった。内地で田一段が五百円であった事がある。最近でも七-八百円を上るまい。思へば贅澤な話である。

日本人は未だ未だ外人特に苦労した独逸人等に比較して生活は贅澤で節約心が周到でない。一例を取れば水道の水、電気の使ひ方など不注意極まり多大の浪費をしてゐる。一事が万事。他は推して知るべしである。マックアーサーが本冬は日本に飢餓の悲劇が起るであらうと予言したが、

[122] 南方軍のことと思われる。

[123] 土肥原賢二（1883-1948）大将　1945年9月23日に逮捕され、1948年12月、A級戦犯として刑死（『日本陸海軍総合事典』p.107）。

日本人の節約心を鍛錬する機会と云へやう。予め当局は勿論日本人の家庭の猛省を要する。

九月二十四日

今上陛下御退位、皇太子殿下に御位を譲らせ給ひ摂政宮として秩父宮殿下お立ちになれりとの外国放送あり。何とも畏き極み。臣子の分限として云ふ所を知らず。是も外国勢力の浸透の致す所今や日本の憲法皇室典範は外国勢力の為蹂躙せらるるに至れり。阿南陸相がポツタム[ママ]声明受諾は国体の尊厳を維持し難しと喝破せる通りなり。即ち日本は其の伝統ある光栄を保持する為には全滅の外なく、若し生を保持せんとせば屈辱より外に策なかりしなり。思へば悲嘆の外無之。外国新聞記者は東京の状況を報じ日本人は一億戦死を免れたるも敗戦の冷厳なる現実に壓倒せられ大部分は馬鹿の様になり身の持ち方に苦しむに似たりと批評しあり。

龍雲[124]工作の大立物の王正梅の置土産たる金の延棒、金の紙板を生れて始めて見たり。小人玉を抱いて罪あり。予も若し女狂ひでもして居る時ならば金策の為欲しき品物なりしならん。陰匿携行に容易なるを以て万人之に魅力を感ずるものなり。傾国の美人と金とは正に人類の二大魅力物とも称すべけれ。常人はかかる者には近づかざるが賢けれ。近づけば彼等特有の魅力に魅せられ必ずや魂を奪はるる結果となり終んぬべし。

九月二十五日

今上陛下御退位の報は虚報であった事判明し、日本人一同は胸を撫で下した感がある。我国の憲法を蹂躙する様な異例で聳動を感じた次第である。

聞く所に依れば印度支那進駐の支那軍の上級将校は活溌なる商売を始めた由である。蘆漢の如きも変名で商売を始めたと云はれる。謝中佐の如き（中央軍少将参謀）夜は居室に居った事がないと云ふ。中級以下の将兵も亦支那一流の営利的根性を発揮してゐる。袖の下の利がないのは先づ日本人と独逸人の如きものであらうか。此の正義観の高い潔癖な国家が敗戦するとは世の中は決して道義が捷つとか支配するわけでない事を証明せられるであらう。米国人使節は日本側との交渉に於て、正直に云へば日本人は義侠心を発揮するも嘘を言へば仲々手剛い国民であると云ふ事が判ったと告白してゐる。日本人は意気に感じ易い民族である。情熱的である。此の点支那人と接触した米人が日本人の支那人と異なった点であると自覚したらしい。

参謀宿舎は事務室と兼用であるが家庭でない限り往復の手数が省け事務能力が向上する。宿舎に使ってゐる安南人の十四五才の子供の「ハイ」と云ふ返事が何となく我児にも似て、其の無邪気

[124] 龍雲は1928年から1945年10月まで中華民国雲南省主席を務めた人物（劉 pp.834-840）。日本と提携する新政権を樹立しようと、1938年12月18日、重慶を脱出した汪兆銘は雲南省昆明に一泊してハノイに向かった。この時、汪は雲南省主席であった龍雲と会談し、龍雲は、翌日、ハノイに向かう汪を見送ってもいるが、蒋介石に電報を打ち、汪が昆明に着いたことを伝えた（有馬 pp.220-221、蔡 pp.133-134）。龍雲工作とは、親汪派を増やし重慶政権を切り崩す工作の1つであったのであろうか。

な声は予の腸に滲みる様だ。子供に会ひたい。妻にも会ひたい。戦地の将兵は作戦任務が終了したので望郷帰国の念に堪へない現在である。これが三年も堪へ得るであらうか。夢の様である。

支那側は北部印度支那地区を領土とする野心があるらしい。仏国の権益は全面的に認める前提に於て領土化せんと企らんでゐるらしい。此の結果は北部地区は支那の最大限の勢力を認める前提に於て仏蘭西の主権を恢復するであらう。

何人にも間稽古の効果の偉大なる事を知るも武道とか技芸上に止まり精神上の間稽古頭脳上の間稽古を志す者が稀である。予は過去二年半以上に亘り毎朝十分間計算術を練習してゐるが、其の効果たるや屢々予の日誌に記入せる通り顕著にして最早病みつきの如くなり。已めようとしても已められぬ程の快味がある。予は之を目して予の頭脳の間稽古と思ってゐる。予は元来抽象的思索的観念的の人物にして具体的実際的緻密なる頭の持主ではなかったが、此の計算を以て訓練した所頗る具体的計数的になり他の人は予の数字の調査記憶の精緻なるに感心してゐるものもある。之は予に取っては非常な修養であり進歩である。此の意味に於て予は今後共此の計算を続行し、又、後進子弟に此の法を薦めたいと思ってゐる。幕僚業務に掌る人など特に「数」に親しまねば責務を十分に果す事が出来ないから特に此の数に毎日親しむことを勧告したい。

九月二十六日

土橋軍司令官に就いて学ぶべき件の一として機密費の使ひ方が放胆な事だ。国策上有効と認めた場合どんどん高額の金を投じる断行力に至っては感心の外はない。多くの者は配当された機密費を死蔵して会食等の小出ししか使ひ切れぬのが実情であるが、国際場裡に馳駆して此の方面の消息に経験ある土橋将軍は吾々の目から見れば大胆すぐると思はれる程思ひ切りよく金を使ふ。やられる事が大幅で気持がよい。而も国策の線に副ふ事に思ひやりがあるのは同感である。

今度の停戦交渉は国民全部に取りては晴天に霹靂（レキ）に近い衝動を与へた。特に軍隊に取っては尚更である。丁度赤穂藩が浅野長矩侯の刃傷沙汰御家断絶を以て恐愕したと同様、心理的にはパニック現象を生じた。赤穂に其の例ありし如く、斯くの如き際お上の金をかっさらって逐電した大野九郎兵衛の徒の尠なからずあったと同様、八月十四日以来約二週間は軍隊より離隊逃亡者も少くなかった。印度支那北部地区の我軍に於て百余名。南部地区に於て百五十名（総軍関係の各種部隊が数が多い関係でもある）あった。台湾人及朝鮮人出身者が其の半数を占めてゐるが、日本兵にして官金拐（カイ）帯のまま逃亡した者も少くない。主として主計下士官に此の例が多い。パニック状態に於ては道義心が失はれ本然の利己心が抬頭する。軍の後仕末に於ても官金の仕末など今後問題であらう。幸、金が比弗であるから内地に其のまま持ち帰る事が出来ないのが事故防止上制動機の作用を為すのは何よりだ。官を離れ早速家族と共に寝食の道に困ると云ふ人間、心配は生存保持の

本能より色々の物質的悪行為を発揮するものだ。嘗てシベリア出兵当時、大庭[125]中将は師団長として帰還の際出征当時の同様軍用行李二箇のみを携行して帰られたが、将校の中には随分色々の荷物を増加して持って帰ったと云ふ話を大庭小二郎から幼年学校当時聞いた。その時予は大庭閣下の主義は当然なりとし別に豪いとも感じなかったが、南方に作戦し従事し内地帰還の将校以下が船の旅をするに方り莫大な荷物を携行帰還した数々の例を予自ら体験した所よりして、大庭将軍の主義の実行者で任じてゐながら今度帰還する場合は「トランク」が一箇増した事を告白せざるを得ない。げに人間は慾の固りだ。死生の巷に於ては生を熱求し生既に贏ち得れば食を求め食既に足れば金を欲し金既に満ては異性を慾す。斯くの如くにして欲求は尽くる所を知らない。

小林方明大佐曰く山田国太郎師団長[126]は大佐時代接した時の感じでは冷やかで事務的であったが、師団長としてお迎へして仕へて見ると春風胎蕩赤子もなつくと云ふ統率者としての貫碌を備へられた。或時修養された方法を尋ねた。将軍は将官になって感じた事は、統率者は人を引きつける資質がなければならぬと自覚し爾後毎日修養の日記をつけ此の資質養成に心掛けた。就中自分のやり方は、昨年の今日の日記或は一昨年の今日の日記と対照し進歩の程度を験し且感じた事を深く印象するにつとめたと語られた。

又別の話、ジャバで某独立歩兵大隊は他隊に比し特別のマラリヤ患者の発生が多いので、兵団長は破天荒にマラリヤ予防対策の検閲と云ふ国軍開闢以来ない方法を行って見た。検閲して見ると驚くべし。防火用水にはボーフラが湧き蚊帳は穴だらけで補修しあらず兵舎周辺には雑草繁茂し、所謂常識的のマラリヤ予防策が何一つ実行されて居なかったので吃驚したと云ふ。凡そ成績の上らないのは六つかしい事が出来ないのではなく卑近な事を熱意を以て実行せざるに在ると云ふ実相をつぶさに体得したと此の検閲に参加した三沢参謀は語ってゐる。

「梨下[ママ]冠を正さず」と云ふ事は守らなくてはならぬ社会道徳だ。予は大丈夫だから梨下冠を正すと云っても世人の疑ひや風評を招く事は免れない。男女関係の如き如何に童心[ママ]堅固でも相接近する事その事は世人から疑惑を投げかけられる事は免れない。故に聖人君子は縦ひ身は間違なき自信を有しても相接近せないものだ。（土橋軍司令官の問題を風刺して此の所感ありしか）

北部仏印地区に進駐してゐるのは雲南軍が主力であるが故でもあるが、全く田舎の田吾作連の風がする。将校でも支那軍は将官にならねば引き緊った風貌がない。尉官佐官は全く抜けてゐて見るからに頼りない風貌をしてゐる。此の点に行くと日本軍は顔や体格が引き緊ってゐる。米人が感心するのも無理はない。矢張り風貌上の気品とか緊張力とか威厳と云ふものは智性徳性の表徴となることは争へないものだ。唯支那人全部がさうと云ふわけでなく国が広く人口が多いだけに中には仲々傑出したのがゐる。今来てゐる行政顧問代表陥中将の如き其の一人だ。土橋軍司令官を手

[125] 大庭二郎（1864-1935）1932年9月～1933年10月までシベリアに出兵した（『日本陸海軍総合事典』p.37）。
[126] 山田国太郎　中将　1944年11月22日～第48師団長（『日本陸海軍総合事典』p.377, 580）。

玉に取る位の喰へない人間だ。

九月二十七日

予の西貢行きも飛行機が来ぬので沙汰己みになりさうだ。

土橋軍司令官は本心は良いのだが口が悪いので、人心の内部まで見貫く能力のない者又は接触の少いは非常に悪く云ひ顔を見るも嫌だと謂ふ。予は統帥者として口の悪いと云ふ事は非常な欠陥だと思ふ。一言にして人を悦服感激せしめる事が出来るのに一言にして人に反感離反せしめる様なのは悪徳の大なるものだ。而も御本人は、予は本心が良くて口が悪い、口の悪いのは国宝だ、即ち国軍の弊を矯正するの毒舌だと得意の様に見える。併し国軍の弊を矯正の為には何も悪口が必要と云ふわけでない。寧ろ悪口言ひは招く害ばかりである。唯予の上官を例に挙げて批判したのは、予の「言にして人をして友たらしめ敵たらしむ　言恐るべし　慎むべし」との予の信條を裏書したいためである。

九月二十八日

本日を以て北緯十六度以北の印度支那地区の日本軍は中国第一方面軍蘆漢将軍の軍門に降った。軍司令官の悲壮なる訓示を起案したのは畢生の事だ。

支那地方軍の特色を発揮する一例として、調印式が終った後で案内に任じた某少将は土橋将軍、三国将軍の前で何か紀念に呉れと云った由。蘆漢将軍に自動車を土橋司令官から寄贈した。噂が広がって我も我も何か紀念品を呉れと云ふのが支那軍人の特性である。彼等を物質で操縦し易いのも一利一害だ。

暇あるままに予も身の行く末をつくづく考へさせられる。内地へ帰って如何にして生活すべきか。如何に生計を樹て家族を養ふべきや等……。併し考へた末の結論はかうであった。今如何なる職業を求めやうとしても自由の利く身ではない。自分の欲する所が行はれる境遇ではない。然らば当方の人があの人ならと見込む程の貫碌実力が必要で之さへあれば人生到る処青山ありで人に捨てられることはない。故に現在に於て勤むべきは其の貫碌（人格識見能力）の具備である。されば予の修養は現役軍人の一本筋の場合よりも更に其の必要性を増したと云へるであらう。現役軍人で居れば此の調子では中将か少将迄は墮勢で成り得たかも知れない。之れには時間だけ必要であって後は大なる努力精進と云ふものが必要でなかった。併し今や軍職を退き裸体一貫にて再スタートを切るに於ては満身の実力とエネルギーが必要なのだ。観じ来れば現在程修養努力向上を要するものはないと謂ふべきである。予の大成は今後一段の力を要すべし。四十にて手習の原則が予の身に最も相応しい言葉であると云へやう。最早陸軍の考科表も入らない。何をやっても後害を胎さない。故に旅の恥は書き捨てと云ふ風の捨鉢根性は最も戒むべきである。苟も四十にして手習と云

ふ決心を樹てたる以上、日常の茶番事こそ最大の修練要目であり之が直接間接将来に影響する所の大なる所以を知らねばならない。

九月三十日

予の隻眼の淋しさは逐次慣れて薄らぎ夢の如く感じたる景色も今は雙眼健全時と大差なき感覚を抱くに至れり。唯顔面の疵は気候の変り目に会ひて従来に比し痛みを覚ゆること多し。

混成第三十四旅団長服部少将来河［ハノイ］せらる。停戦以来事故を起したる跡を尋ぬるに下級幹部の実行監督と世話の不十分なること軌を一にすと語らる。真理は平凡なり。

大局に通ぜざる時は無駄が多きのみならず却って企図と反対の結果さへ生ず。停戦交渉以後越盟に走りたる日本将兵中には動機の純なるものもありしならんも、今や米英側に逆用せられ我軍の立場を不利ならしめつつあり。

日本兵が外出して市場などで物を買ふ（将校当番）と支那兵も来て物を買ってゐる。安南商人は支那兵に面宛(ツラ)的に日本兵に言ふ。片言の日本語で―「支那兵キタナイ弱イ、日本兵上等、仏蘭西兵キレイ弱イ」と。之が河内市中日本兵は盛んに聞かされる現状だ。之で一般安南人の日本軍、支那軍、仏蘭西軍に対する感情評価を端的に表現したものとして面白い事だ。事実日本兵は質素で戦が強く軍紀厳正である証左だ。此の天下無敵の日本軍が解消する事になった。軍旗も奉焼した。米人でさへ日本陸軍の冠称に「世界無敵を誇る」の語を許してゐる。此の皇軍の精華は形は無くなっても吾等の体中に宿ってゐる。

何人も練習の効果の偉大なるを知る者は奇蹟は平凡の裡に胎胚するの理を知らん。

当地は勿論印度支那全域も然らん。反動心理も手伝って安南原住民の日本兵に対する憧憬信頼は壓倒的で支那兵仏人に対する憎悪軽侮の念は之に反比例して強い。日本の兵が支那の将校に敬礼せんとすれば安南人は支那人に敬礼などするなと止める。日本兵が帰ると云へば又印度支那へ来るかと問ふ。日本兵が居ればよいと言ふ。安南人に日本軍は頼母しく思はれてゐる事は事実だ。安南人は日本軍は戦争に負けてゐない己むを得ずして印度支那より去るのだと認識してゐる。

軍司令官官邸（我等の旧宿舎）に往復の途次、安南人の八、九才の子供が二才位の痩せた弟を担って歩いてゐる。弟の方はひもじくて身体が痩せ頭のみ大きい。こんな光景を見せつけられて腸をむしり取る様にいぢらしい気がする。予の心中には凡有(あらゆる)欲望があるが尚ほ救道救世済民の熱意の方が自己の欲望を凌駕克服してゐる事は事実で此の子供等に対するいぢらしい気持は他の衝動より一層強烈である事が自覚される。矢張予は善人であって悪人と縁が遠い様である。

米人は日本の秘密警察が一番恐ろしいのか之を目の仇の様にして之を撲滅することに浮身をやつしてゐるやに思はれる。米人、支那人の中には階級を変じた軍人が少くない。仕事が終った後で階級や任務の名乗りを挙げる。米人パッキー大尉は連絡員として最初河内(ハノイ)に着陸したが米陸軍省直

系の秘密諜者であった。将来各国共かかる秘密の組織が流行するであらう。

天寿とは不思議な不可抗力的のものだ。予の如き戦争に参加し死すべくして死せざるに反し、予の兄、予の両姉の如き生くべくして死んだ。本人の予期にも反し死せざるを得なかった。予の如き死せざるべからざる経路を辿りながら生き延びた。斯くの如き到底人力を以てしては所作の出来ない事である。

戦争犯罪人とて多くの知名の人を逮捕拉致せられる現状に於て、予は戦争犯罪人と数へあげられる人は殆んど皆其の技能或は迫力に於て人を凌駕する有能人士の多いことを惜しみ、此等の人の長所を残された我々が吸収し受けつぎ皇国今後に寄与せねばならぬと思ふ。

十月

十月一日

米人の特色に「徹底的」と云ふ長所のある事を認めざるを得ない。彼等は周到なる計画準備を樹て、一旦着手した上は百難と莫大な犠牲をも厭はず全力を尽して之を完遂する。太平洋戦局の作戦指導或は印度よりの給油管敷設、其他戦争犯罪人の調査法に至る迄やり方が徹底している。苟も中途半端とか不徹底とか生温しと云はれる様な事はない。此点は見上げたもので学ぶべき点である。ギャラガ少将[127]曰く、米人は豈て豪くはない。併し他国民より馬鹿にされたくはない。故に米人の名誉に関する事は徹底的に追及しなければならないと。西貢越盟党の米軍連絡所を襲撃した事件の背後関係の究明に就て土橋司令官に所信を披瀝した。

武器引渡しに就て浅間しく感ずる点は「恒産無ければ恒心なし」との真理だ。支那軍の物を欲しがる思想は体迄滲み通ってゐて我等日本人の私物品迄も押領しやうとする。米英人にはそんな事がない。之も矢張り物たざる者の悲しさの所作だ。浅間しい、気の毒だとさへ感ずる。支那人はあはれだとの憐憫の情さへ催して来る。

公衆道徳社会道徳の履行力の程度は徳性と教養のバロメーターになる。蓋し公共の心と自己との一体化の程度を察知し得るからである。

人間の身体は霊妙なものだ。予の右指示など原形を止めぬ迄傷められたのが三ヶ月近くの今日機能は別として形は原形に殆ど復した。之は外部の所作を加へず全く自然の恢復を待ったのだ。予の口辺は右唇先が釣り上り左右著しい不対称であったが、之も昨今は殆ど目立たぬ程原形に復した。五管の如きも精妙に出来るものだと感心する。

米人に話してゐるのを日本人の通訳が聞いたのに依ると、彼等は中国軍に愛憎を尽かしてゐるのは事実らしい。「日本人もびっくりするだらう。あれでも軍隊かと」なんて会話が飛ばされてゐる由。交渉でも米人との間で行へば要領よくテキパキと運んでしまふ。米人には事務的な所ばかりだが夾雑物がなく要点のみに限定しすぐ解決してしまふ頭の良さがある。

最近西貢地区は英仏米日蘭安［安南］、卍の様な活劇を演じてゐる。越盟のゲリラ戦に対し英軍は日本軍に討伐命令を下し日安間にも衝突があった様だ。昭南の日本軍八万五千を離島に移し一ヶ月以後自治を要求した英軍の仕業、どうあっても理性だけで判断の出来ぬ不合理な仕打だ。日本軍を餓死さそうとするのか。

内地二十一箇の有力銀行を米軍は戦争協力の角で接収したと云ふ情報が伝へられる。前途暗黒

---

[127] デイビット・マーによるとギャラガ准将（Brigadier General Philip Gallagher）で、彼は蘆漢将軍の顧問を務めていた（Marr p.545）。

の様な気がする。そんな事を平気で許されるのか。世の中は力の支配する世の中だ。金や物で支配される世の中だ。正義だけの孤立は忽ち圧倒される世の中だ。此の人間の根性を叩き直さぬ限り恒久平和などあり得ない。憤慨すべき事項ばかりだ。

不具者の淋しみを味った予も漸次此の淋味より遠かりつつある。近頃は隻眼の不自由さをかこつよりも残った隻眼の霊妙さに感謝する方が多くなった。

十月二日

秋らしいが尚日中も夜分も暑い事が多く内地の九月の中頃に匹敵する。北部印度支那地区の季節だ。近頃は頭を使はぬので頭の皺が伸びて来て頭が働かぬ気がする。将棋や囲碁はその予防薬になるであらう。読む本もない。

「奇蹟は平凡の裡に胚胎す」是古今の真理なり。

日本陸軍の運用運営に於て誤った事の一つは憲兵の如き特權を行使する部面に配する人材良質者の不足である。憲兵になる人は多くは不平分子が本科方面で志を得ない者であるを通例とした。最近は強制天降り式に上司よりの任命で憲兵になる例を聞いて若干は矯正せられたであらうが、憲兵的陰惨な精神は抜く事は出来なかった。憲兵は国民は勿論軍隊より怖がられたが敬愛と尊敬心を持たれなかった。それは憲兵の方に明くない気風があっての反動である。将来軍制を建直すに於ては品格精神の最も優良なる者を憲兵に充当せねば再び日本の憲兵は世人に嫌はれるであらう。明治維新に於いて士族階級から警察官になる者が多かったから、日本の警察官は比較的廉潔だとして世界でも認められてゐる。之も質に関する原因に依る。予は陸軍航空が海軍航空に比し些か遜色のあったのは其の充当人員に於て海軍の方が陸軍に比し早くから強制的に良材を航空部面に配当したからであらうと信ずる。陸軍も支那事変以後は爾かくなったが、良材の転科は上級将校に多く盛り上る力の部面に少なかった。それ故に自由放埒な気分が我航空を支配した。稲田正純少将の陸軍航空に関する改革意見の如き此の病弊を剔抉して余す所がない。

河内地区の武装解除も十月一日より四日の内に終る。

人の非難は軽々しく行ふべきものでない。正鵠を失してゐる事が多いと云ふ事を同僚の対話中痛感した。

蔭にて悪口を言はぬ事が明朗さであり融和の原因となる。団結の基礎でもある。

十月三日

李鴻章曰く「予が外交問題の談判に於て蹉跌せざりしは曽文正（国藩）先生の一語の教訓の賜である。先生が北方総督より南方総督に昇任せられたるに際し予は先生の後を襲って北方総督に就任せり。予は先生の御指南を得んとて先生を訪ふ。予の発言に先立ちて先生は予に問へり。

「李鴻章よ。汝は今や外交問題の難事に直面すべき地位に昇進せり。我が国は列国に比して国力弱く而も外国は連合して我が国に当らんとす。然らば些かの過誤を以てしても全国を損ふに至らん。外交交渉に際する汝の原則的政策は那辺にありや」

「我が先生を訪問せし所以は尽く諸問題に就きて御指示を仰がんが為なり」

「汝既に心に決する所あらん。先ずそれを語れ」

「我に於ては決する所なし。されど外国人に折衝するに狡を以て当らんとす」

此の時先生髭を撫して黙すること久時にして徐ろに云へり。

「嗟。汝は不届者なり。予は狡猾の如何にして行ふべきを知らず」

予の言先生の意に満たざるを察し直に弁明して云ふ。

「我の言、囈語に過ぎず。過てり。願くは御示教を垂れ給へ」

先生屡々髭を撫し沈黙久し。やがて予に曰く、

「予の観る所を以てすれば誠実こそ当に汝の心すべきものなり。世に真実に依りて動かざるものなし。外国人と雖もその思考と行為の我と異なるものに非ず。信義誠実の万国に通ずること既に聖賢の言に在り。誠に至言なり。我が国は軍備に於て欠く所多し。汝力めて富強を装ふとも必ず彼の看破する所とならん。富強を装ふは無益なり。須らく正実にして公明正大なるに如くものなし。然らば得る所無しとせんも失ふ所無く真実は永続的なり。確固として大地に立つものは倒るるとも損傷頗る軽微ならん。誠実の頼るべき豈詐佯の比ならんや」

頂門の一針を得て教訓を得たるも予はかへって惑ふ。思索を重ねて後はじめて我が師の言道理に叶ひ且不滅の忠言なる事を悟り左の如く答ふ。

「然り。我今漸く事実なるを知れり。爾後師の金言に従ひて当に事に望まん」

爾来、英、露、独、仏の諸国と外交折衝するに於て常に此の方策を用ひたり。誠実の一語こそ予の常に用ひし唯一のものなり。為に禍を得たること全くなく好結果を得たること数度なりき。一語こそ生涯に益あるものとは我が先人の言なるも寔に至言なり。我が師は学殖深き人なれば一語を以て予に教なし得たるなり」

以上の出所は英人 W・マッケクニイ大佐の記述に依るものである。

英人も其の真理なるを感心してゐる。

自由主義国の英国のハァト大尉の軍紀に就て語る所は次の通りである。

過ぐる大戦に於て敗北した軍隊が独裁国の軍隊であった事は意味が深い。露西亜、土耳古、墺太利、独逸等、これ等各国の軍隊は絶対服従を強ひられた。戦争の最後の年に最もよく活動した軍隊は濠州軍と加奈陀軍であるといふ事が一般に言はれてゐるが、此等の軍隊では組織が厳格になって行く一方、至って自由な反面があり愚なる不当な命令は完膚なきまで批評されるのが普通であった。其の結果、指揮官は彼等の命令が常識と正当さとに一致する様細心の注意を払った為に

彼等の命令はいと欣然として而も効果的に遂行される様になったのである。私は濠州軍の経験から常にかう云ってゐる、「理性の批判的習慣は能率増進の基礎である」。これは兵士が独断専行心や創意力を束縛されない形式で規則あるものとされる間に、自然に彼等に規則の必要を認識させるのである。

右に対する予の批判。自由主義思想が更に極致迄発達するなれば軍隊に於ける絶対服従の必要を認め欣然之を遵奉するに至るであらう。自由主義は中道に於ては軍隊生活に害があるが発達向上すれば害はない。盲従主義独裁主義は中道に於て軍隊に役ある様であるが、極莫に至っては非常に脆く害がある。未開国土耳古、露西亜は盲従主義独裁主義を取らざるを得ざるは自然の事であり、英米が自由主義軍紀を発達せしめんとするは是亦当然である。我国に至っては英米の思想と独露の思想との長所を取り入れ独自の軍紀観を育成発達せしむべきである。唯日本の政治の如きは従来頼らしむべし知らしむべからず式の独裁式色彩が濃厚であって、尚大いに向上発達の余地が存してゐる。独裁主義が良いとか自由主義が良いとかは言へるものではない。其の国の特性、文化発達の程度、当時の趨勢に依り決定さるべきもので、自由主義軍紀の破れ独裁主義の軍紀の勝った例も多い事である。

十月四日

組織の巧拙は責任分界の確否に依り判定せらる。

最近の予の日常生活は寝て暮すばかりだ。司令部の武装解除も終った。兵に帰還時期と部内報ニュースの読み方に就て注意を与へた目的は希望を前途に持たせるに在る。

気候の変り目は身体に想像以上の変化を与ふるものだ。予の疵が夜分チクチク傷んで気持が悪い。茲十日前よりの現象だ。

死の体験者たる予は考ふ。死には五管なし。喜怒愛楽［ママ］なし。死は恐怖すべきに非ず。若し現世に於て楽みあり喜悦多き者は死を選ぶの要なし。然れども若し苦あり哀愁ある者は死を選ぶべし。苦悩より解脱し得ること必定なり。

十月五日

近頃は内地のニュース悉く不愉快な事ばかりだ。矜りを疵つけられる事は独立人として堪へられぬ苦痛事だ。国家もその通り。日本の政治其他一切が米国の鼻息を窺はねばならぬとは何と云ふ残念な事だ。唯大津浪に一過される様に最も堅固な根強い日本的なものが米国の跳梁の後に残るであらう。吾々は此の芽の出るのを待つより他に策なきに至った。東久邇宮内閣は二ヶ月にして退陣を余儀なくされた。之も米国の干渉の至す所だ。先に名誉の戦死を遂げた人々こそ此の苦痛を知らず幸福な人だと羨さへ生ずる。

近頃は何もせずに暮す。将棋をさす位が精々だ。体力気力能力共に低下する感がある。遊惰は鴆毒だと云ふ事を知りつつ環境を切り抜ける努力心がない。本を読まうとしても其の材料がない。現在では手に芸をつけると云ふのが目標でなければならないにも不拘仲々かくは参らぬ。

十月六日

野地少佐を病院に見舞ふ。予の負傷三ヶ月目だ。外見疵も小さくなり以前の創痍を忘れしむる位だ。併し気候の変り目で実質は以前より暮し難い。

東久邇宮内閣が米軍の横槍で総辞職して幣原内閣が誕生した。近頃の日本の情報を聞く毎に心は黒く、竹林の七賢の様に何処か外界に煩はされない仙境にでも逃避し余生を暮したい気さへ起る。

軍の精鋭の度の判定に軍隊内務書では命令の迅速的確に行はれる事、上下斉しく法規を格守する事を指摘したが、支那軍と折衝して其の上司の命令の伝達方法の緩慢不確実なるを見て成程と首肯される事が多い。之れは通信連絡の不備欠陥に由る事も少くない。換言すれば物心両面の組織力の不備より起因してゐる。

我が拳銃は支那側某上校に贈り物にされた。

十月七日

一方的に見て人を憾んだり悪口を云ふ事は妥当でない事を悟った。

治安維持法要部の撤廃其他の米軍の横槍で東久邇宮内閣は国内治安の責任が負へず総辞職するの己むなきに至った。心ある人は眉をひそむるであらう。併し天皇陛下に関する自由なる言説を為し得るからと云って日本の国体が動揺する事はない。言はば明治中葉以来我が皇室は温室育ちの取り扱ひをお受け遊ばしたが、今後は姑く荒風や霜にお打たれ遊ばす事となる。併し天理は飽く迄天理であり松柏の風雪に虐げられて後愈々本然の面目を発揮する様に、吾が皇室の万世に秀で給ふ御稜威は自由なる批判の後更に万人に依り其の光彩を認めらるるに至るであらう。臣子の安んずるのは茲に在る。

ともあれ米国の対日施策の根本には博愛とか人道とか慈悲は見られない。日本を如何にして無力にするかの憎しみの思想のみが基調である事をひしひし感ぜられる。

十月八日

予等の現在に於ける軍紀維持は希望性も乏しく作戦なる直接目標もなく不快なるニュースばかりにて、従来の如き権力主義が強制力を持たぬ。蓋し軍隊は軈(やが)て解散されるのであり人事上の権力は意義を殆ど喪失したからである。然らば此の際何を以て軍紀風紀を維持するかと云へば、上に立つ者が正しい事を為す事と義理人情を発揮する事に帰する。正しい事を各々に実現せしむるには

人間個人の慾を制御する事が必要となるのである。それ故に予は孔子の教へたる克己復礼は至言であり実践道徳の基礎である事を感ずる。克己と復礼とは別箇のものでなく克己を団体生活に発揮すれば各人行ひが正しくなり復礼の実を発揮し、復礼の実を発揮すれば正しい団体生活が出来る。克己と復礼とは原因と結果とを互に繰り返へしてゐる実践道徳の基礎である。

十月九日

日本民族は世界に対し何をか誇るべき。今次大戦に徴しても明瞭なる如く皇室に対する忠誠心は日本民族の他国に冠たる所だ。即ち換言すれば国家に対する奉仕的精神だ。而して外国の日本の強みを認むる所も茲に在る。故に日本を無力化せんとするものは皇室の尊厳を失墜せしめ日本人の信仰的尊重心に亀裂を生ぜしむる事だ。現在米国の日本に対する施策の根本精神は茲に置いてゐる事は日を追って明瞭となりつつある。

支那軍が逐次近代軍化しつつある事は冷静に認識せねばならぬ。彼等の編成装備訓練給養は吾等の想像以上近代化してゐる。唯日本軍の如く平均してゐない。近代化軍と否らざるものとの差が広く参差不肖になってゐるのである。

今度の戦争に於て獲た収穫の一に国民教育の基調は正しい人物を造ると云ふ事の必要さである。正しい人間であれば如何なる部局に立つも如何なる場面に際会するも大過なく進む事が出来ると云ふ事を経験した。日本の敗戦の原因の一も人間性の不正が癌を為してゐる事を認識せざるを得ない。

如何に個々の粒が立派でも連絡協同がなければ其の力は微弱なり。力―偉大なる力は組織に胚胎す。米軍が我三井三菱の財閥を狙ふはその組織力を破壊し自らの資本を以て之に代らんとするに在るべし。

十月十日

支那軍中下士官以下は先づ字が読めぬと思へばよい。之は国民教育の然らしむる所だ。日本の如く人口稠密な所は普通教育の普及と云ふ点に於て世界に冠たる長所がある。米人でさへ兵中には字の読めないのが少くない由。但し日本人の熱し易くさめ易い性質は拭ふべくして拭へぬ。俘虜惨殺事件の皇軍に少くないのは満州事変支那事変以来の習慣にもよる事ながら、本人の一時の興奮から常軌を逸する行為の然らしむる所も少くないと思ふ。静に帰り大風一過後は日本人は世界中一番人情に脆い善に感じ易い民族であるのだ。併し動乱の巷に於ては常識で考へられぬ程越軌の行為に出づる事がある。国民の普通教育の普及や常識の進んだ国民としては理に合はぬ所である。

予と小林方明大佐と毎日将棋を行ってゐるが、技倆伯仲してゐながら日に依り成績に良否がある。其の原因の一に過度に消極になる日がある。人間の気分は日に依って随分波動があるものだと思

ふ。

人心の帰趨の如きは測り難きものである。ジャラム飛行場の印度人俘虜三百名は地区隊の下に忠実に働いて居たが、停戦交渉となり日本軍が武装解除されるや従来地区隊（斉藤隊）の待遇不良なりとしズーメル［ドーメル］橋に立番して斉藤隊兵士の通過に際し棍棒を以て報復行為に出でんとしてゐると云ふ。米人の指嗾（そそのかし）に依る事も預って力あるのであらうか。人心は少しの転機で随分変るものである。

仏蘭西人の下に忠誠を誓った安南人が全面的に反仏的になってゐる。明号作戦に於て仏人指揮の下に我軍に反抗した安南兵は其の全数の六割はあったであらう。今や反仏分子になり変ってゐる。我が特攻隊の勇士たる学生層は嘗て帝人同志会等共産党員出したり。学問の自由を謳歌して反軍の淵叢でもあった。赤と云ひ白と云ふも時流によって変化するもので元同一根である。人心は時の流れに従ひ斯くも浮動流転常なきものである。伯夷叔斉の如く一国一城の向背に関せず我独り行かん体の信念を堅持する者は真に千万人中寥々たるものである。一面政治や人心指導から考ふれば人の指導は大切であり右へでも左へでも指導法に依ってはどうでも動かし得るものである。日本も米国の工作に依って恐るべき方向に人心の向はないと誰が保証し得やう。手を翻せば雲を作り手を覆せば雨。人心の浮動頼み甲斐なきを嘆ずる勿れ。人心は素と斯くの如く流転するものなるを思ひ之を善導する事をこそ努むべきものであらう。

窓外自活用の畑を眺む。一は副官部、一は参謀部、蔬菜を植う。副官部は水をやり朝夕の手の怠りなし。参謀部は放任ノ体。一は未だ芽を出すに過ぎぬに他は既に数本に伸び正に食膳に供し得るに至る。而も十日も立たぬに斯くも差を生ずるなり。生物の甫育恐るべく慎むべきの至りなり。

十月十二日

支那側の要求の朝令暮改には関係者ホトホト閉口してゐる。米人が「犬と支那人入るべからず」と立札する理由もわかる気がする。支那は目下日本に好意を示してゐる。併し支那を救ふ事は仲々容易でない。人間の数的に支那は大国だ。血の廻（めぐ）りも悪い。響かない所に支那の長所と短所とがある。支那事変が八年も長引いて片附かなかったのも支那の土地の広大と近代文明化してゐない為だ。組織の整ふ程崩れる時は覿面だ。独逸の如き此の範である。組織の整はないアミーバ的の国は叩いても叩いても仲々死なない。何処かで生きてゐる部分がある。「鈍重」と云ふ事も確かに一の長所たるに違ひない。

停戦交渉（八月十四日）以来、日本軍内の逃亡者が多数に登る。百分の一は下らないであらう。（勿論帰って来る者も其の半数近く居る事は居る）朝鮮人の如き逃亡の最たるものである。

土橋司令官の雑談に日本人は誤れる教育をしてゐる。それは金に対する態度だ。武士道の一として金銭に淡白なれとか執着するなと云ふ事が金銭の使ひ方を放漫ならしめ、特に公金の勘定をして

放漫ならしむる結果を生じた。外人など此の点は実に几帳面である。外国人は金銭に関する限り日本人程だまし易いものは居らぬと云ってゐる由。表面金銭を気にせぬ事を道徳の如く考へてゐる。而も裏面に於て金を気にしてゐる。是は日本人の誤れる教育だと。――或は然らん。

十月十三日

河内は秋酣となった。肌寒い感じがする。金沢出身の谷村と云ふ兵、予の肩を毎日「マッサージ」して呉れる。軍隊程家庭的情味を発揮するに適する所はないであらう。起居が共同であるから将来過去の軍隊生活が楽しくて追憶に堪へない時期が必ず来るであらう。「永らへば亦此の頃やしのばれん　うしと見し世の今ぞ恋しき」で社会の濁流に揉まれた時清い流の軍隊は一入懐しいのに違ひない。軍隊そのものを分析すれば矢張り小波瀾があり濁りがあるが之を社会の濁流に比すれば物の数でもないであらう。

近頃暇に任せ小説を手当り次第読んで見る。嘗て予は小説など見る気がしなかったが今では暇つぶしの方便として見てゐるのであるが、題材が平凡すぎて文士と云ふものはつまらぬ題材より持ち合せがないと云ふ事に憐れを感ぜしめる。若し吾等の如く変化あり未曽有の歴史を辿った事を文才ある人の手に依って記録に留めたら、後世にも残る程の傑作が出来るであらう。真に我等の過去の経験と云ふものは特色を持ってゐる。遮箋［ママ］文学と云ふものは風教に益するものは寥々たるものである。社会に潤ひを与へる位の価値があれば上々である。

終戦処理に就ては予は身体的事故の為酒井参謀と三沢大佐とに委ね、全く門外第三者の立場に立ってゐるが、当事者が支那側に会って色々の所感をのべる事を聞いて支那人心理、支那軍の実情を把握するに有益である。支那人は遂に救はれぬの感が深い。支那軍の司令部では書記は下士官でなく文官である。字が書けたり読んだりするには下士官では程度が低いから文官の書記を用ひざるを得ない。又無線通信手（モールス符号を打つ者）は将校である。下士官以下では出来ない。米軍でさへモールス符号を打つのは下士官である。字が読めたら下士官だと支那軍はされてゐるさうだが、事実衛兵司令の下士官で通行証の字が読めず、反対に証を眺めて頭を傾けてゐるのが多い。字が読めぬから通行証を持っても至る所の歩哨に車が抑へられて通行許可の埒があかない。第一方面軍の参謀と称する佐官級の頭の無い事は夥しい。大佐でも少将でも日本の兵隊と思はれる程わけのわからぬのが居るらしい。之に比較すれば日本軍は世界一教育程度が高いと云へよう。米軍も其の半数は字が読めぬと云ふ。教育が米国では義務制でない為かも知れぬ。日本は書記が兵でありモールス符号を打つ無線手は兵で十分である。支那は文を貴び武をけなした。兵になるものは最も劣等視されてゐた。之に反し日本の兵は義務制であり将校は少くも日本の社会では上等の部位に取扱はれてゐる。従って軍隊の素質国民からの信頼は高かった。此の素質のよい者を軍隊に集める事は建軍の根本主義にせねばならぬ。幸、日本は之に成功した。将来皇軍再建の場合、

此の国民の優良素質を軍隊に集める事は最も着意すべき事と信ずる。尚日本の普通教育の普及徹底は過去の当局に対し感謝すべき美点である。軍隊教育と国民教育とは不可分のものだ。将来自由主義の瀰満に依って国民教育にタガ（箍）の緩む様な事があってはならない。

十月十四日

理論家と実際家との差異如何。理論家は飽く迄事象を追及するに在る。然るに追及の結果は必ず正反の二つの要素に分析されるであらう。正反は矛盾であり分離である。此の矛盾を同時に同一場所に行ふ事は出来ない。実際家の特色は此の正反の矛盾を調和せしめて同時に同一場所に行ふに在る。理論家から見れば実際家は中途半端であり不徹底であり妥協であり不純であり時にはゴマカシの感さへ湧く。併し実社会に理論家の如く徹底した片倚った案を施行するとしたら必ず動揺を生じ危くて生きて行けない。実際家は理想と現実、理論と実行とを調和せしめて進むのである。学者と政治家、思想家と官吏との性格的差異は茲に生ずる。理論家は学者であって、実際家、政治家、実行家であり得ないのは当然である。実際家は一方的のひたむきであり得ない。多円形的視野を要する。従ってやる事が理論家から見て不徹底である。実際家の六つかしさは他角形的視野に於て如何なる点に焦点を結ぶかに在る。如何なる点に調和点――換言すれば妥協点を求むるかに在る。

或る米人将校は日本軍の情報勤務と米軍の情報勤務とを比較して、日本軍は密偵を多く使ふ事が米軍に比し特色であると云った。予輩の見る所、米軍の情報は組織的多角形的で其の相互情報の交会法接触法に依って事象の実体を掴まんとしてゐる様である。之に反し我軍は直接的であり断片的であるかの様に思はれる。例へば日本軍は外交機関や商社の情報など殆んど歯牙に掛けてゐない。軍は軍自体でやり且又軍の内でも或る機関に信頼を置き其の機関に頼り過ぎる傾向がある。米軍は外交機関や商社の情報を重視してゐる。彼等は各種の情報部面を総合利用してゐる様である。直接法に頼るか組織に依存するかは問題であるが、情報は組織的総合的に進むべき筋合のものであり、之を以て科学的と云ふべきである。

支那派遣軍より宮崎[128]及高橋[129]両中佐参謀連絡に来る。支那軍の賄賂を常用するは南京の方も同じ。豈独り雲南軍のみならんや。又物を接収するに表外品を設けざれば承引せず。或る支那軍は我軍の通信器材千箇の内半数を表外品にせよと強要す。余りの額に驚ける我軍は其の上級司令部に強要の事実を告げて其の不当をなじりたるに、上級司令部の参謀曰く、千箇の中先づ百箇帰ればよい。半数の表外品位はよい方でせうとて部下軍隊の不正を是認せるには我軍は一驚を喫したりと。然れども之は支那軍の習慣にて誠意の通ぜざる人種にはあらず。中山源夫少将[130]の参

[128] 宮崎舜市（1907- ）中佐　1943年8月～支那派遣軍参謀、1947年1月、復員（『日本陸海軍総合事典』p.155）。
[129] 高橋晃　中佐　最終職は中国武官補佐官（『日本陸海軍総合事典』p.593）。
[130] 中山源夫（1899-1979）少将　1944年10月～第12軍参謀長、1946年7月、復員（『日本陸海軍総合事典』p.114）。

謀長たる第十三[131]軍に於ては、中山参謀長の誠意には支那軍いたく感激し爾後中山参謀長の云ふ事は何でも之を是認するに至れりと。其の最初の原因に軍内の小銃の番号を調査せよとの支那側の要求に対し、忠実に之を昼夜兼行目録を調査し汗牛充棟も啻ならぬ書類を作製したる其の努力と誠意に痛く感激せるに由るなりと。誠意の通ぜざる人間なし。今次の停戦にて文化の低きソ連軍と濠州軍の我軍の取扱最も不良なり。米軍は文化の高きだけ未だ無理がなき由なり。支那軍は蒋介石の方針にて好意を示しあり。但し南京占領時の我軍柳川兵団の行ひし大強姦事件は蒋介石の常に含む所にて、今次の戦争犯罪人の摘出を之に求むべしと。皇軍に於ても斯くの如き不当行為あるなり。支那に於ては香港山海関に於て多数日本婦女子はソ連と英軍の為強姦せられ由なり。満州樺太に至りては最もソ連の暴行甚だしく惨状目も当られずと称せらる。日本内地にてソ連を憾む者多しと。

濃厚食を食ひし入院中は末期に於て性慾を感ぜしが、目下は減食の粗食なるため毫も斯かる気が起らず。暖衣飽食は此の方面不品行の原因なり。欠乏せる条件に於て身を持せしむるは修養上の最良の条件と云ふべし。食物と品行との関係をよくよく考ふべし。又異性を求めることは生活に余裕ある事の証左なり。制減自粛斧鉞(エツ)を振ふは先づ此の方面よりする事当然なり。

十月十五日

予は最近毎日小林参謀と将棋の手合せを為すが、之に就て感じたる事は自己の想像外の企図を相手が行ふ事往々ありし。意表に出でられ自己の思慮分別の足らざるを思ふと共に、総じて人を相手とする仕事は相手の自由意思ある故我方の独善的思索を戒めざるべからざる理を悟る事深し。比較的人を相手とする事少き者は独善的に流れ易し。此の点に於て反省を与ふるは勝負事なり。勝負事の嫌な人は相手の自由意思の活動を認識する事少きに非ずや。

予は子孫の為に何を残さうかと考へたるが、現在の予の身で環境等の関係もある事勿論なるも財産や器物を残す事は予の主義に非ず。予は子孫に対し努力の刺激剤となるものを残さんとす。例へば日記類、計算表等を残し過去に於ける予の努力予の勤勉等の表徴なるものを残す事に決心せり。換言すれば魂を磨く材料を残さんとするなり。

予の将来の進むべき方向如何。予は人間の指導、日本人教育に一臂の力を致さん事を期す。予は国家浮沈の際、将来の為日本人の魂を磨く事を以て最根本事と看做すものなり。予は今更金持にならうとか政治界に発展せんとする野心もなし。或は斯くの如きは予の本来の性質に適せざるにもよるべけれど、国家の前途を思ふ時日本人をしっかり鍛錬し腹を造り魂を養ふ事が将来の為最も緊要事と看做すものなり。最近友と話し将来の職分に就て議するも一定の方向を定めあらざる者多し。予は今些か前進の方向を把握し得たるを意識するものなり。軍司令部内の部附将校の最近の

[131] 正しくは第12軍（『日本陸海軍総合事典』p.114, 363）。

起居を見て自覚心なきものは停戦前に比し精神全く弛緩し歯痒き極みなり。之を見ても人間の魂の鍛錬の必要を痛感せざるを得ず。予の念願たる天下の為大慈悲を行はんとする具体的方策は、現下国家浮沈の秋に際し将来再生の為の日本人魂を養生附与するに在りと信ず。衣食の為に汲々するの要なし。道心の傍に衣食ありて衣食の傍に道心なきなり。但し一方面に成果を挙げんとすれば一方面に節約を要す。予の経済的方面の願望は宜しく思ひきるときなり。

素織[ママ]の要素を分析するに、連絡のよい事と責任の分野が明瞭なこと（上下左右の責任で物の領域と其の一つのものに就ては深さがある事に注意を要する）、即ち秩序が立ってゐる事が必要である。更に統制力と云ふものがよく働かねばならぬ。此の点に於て支那軍と日本軍と比較してつくづく日本軍の組織のよいのがわかる。日本国内の諸機構の内、何と云っても軍隊の組織力に勝るものはあるまい。尚素織[ママ]の一要素に個々の活動力が旺盛な事が必要である。之を図に示せば次の通りである。

力の発現 ← 組織 ←
- ←統率力の旺盛
- ←責任分野ノ明確
  - 左右の領域
  - 上下の深さ
- ←連絡の良好
- ←個々の分子の活動力の旺盛

大東亜戦の経験に徴するに皇軍に相応しからぬ蛮行非行を行ひし軍隊軍人も尠くなかった。其の原因は軍隊に在りては幹部の統率力の正常強烈でない事、個人に在りては教育指導の欠陥の至す所である。昭南の陥落に際し辻政信参謀等の話を聞くに、日本軍の英軍俘虜の取扱ひは人種的優越感の打破に基く厳烈手段で日本軍内部に於ても聞いただけでそれはひどすぎる感情的で道徳的でないと思はしめる節も少くなかった事を追憶する。矢張予等の意見の如く皇軍の武威発現は意張る事でなくして正当なる行為を為し敵国住民をして床しさを感ぜしむる事である。此の点が日露戦争時代より向上したと認められぬ節がある。之は感情も加りて敵愾心も加味されてゐる事とは認めるが感心した所作ではなかった。今や皇軍は解体の己むなきに至ったが、軍再建可能の前提に於て、軍の解体は新皇軍の無垢清浄なる建設に新規一転の機縁を与ふるものである。来るべき皇軍は高度にして麗しき教育を受けたる若人に対し優良にして就中道義心に於て冠たる幹部の統率し得るものでなければならぬ。後日の為に絶叫する所以である。凡て大改革の達成には大死一番旧套を脱するのが一番よいのであって、日本国内の改革も現在の受難的環境を利用し起死回生の大経綸を要し之が為には大英断的手術を要するのである。悪質の疾病に対して身体の或る部位に対し思ひきりたるメスを下す如く国政に対し瞠目的改善を断行せねばならぬ。

十月十六日

玄妙の境地と云へば相対観の滅却せられたる境地を云ふのであらう。剣禅の極意も茲を出る事はない。涅盤［ママ］の境地も畢竟茲に在りと信ずる。

目にあまる　醜のしぐさを　聞く毎に
　　皇国の末に　思ひやらるる
行末の　思ひも暗し　今日の月

世論とか情勢と云ふものは時々刻々に変化し端倪を許さぬものがある。状況の変化したる時機を失せず人を派し連絡する処置を要する。此の手の打ち方の遅速が時務弁否の岐れ道である。外国に居る者は国内事情の変化の如き一ヶ月も経過すれば判らなくなることが尠くない。

互格程度の人と勝負事をして感ずる事は「謹慎なれ」の一語である。放胆の美名の風に不謹慎即ち油断とか堅実を欠くと云ふ気風が萌し之が相手に致される原因を造る事が多い。之は戦争と囲碁将棋の如き本質的に違ふだらうけれども、確かに注意せねばならぬ真理であって放胆も考へ抜いた軽率無鉄包ならざる結果でなくてはならぬ。放胆の形の中に謹慎と云ふ基礎的要素がなくてはならぬ。謹慎とは消極と云ふ意味でなくして思慮を尽し且驕らずと云ふ意味である。尚酒の上の勝負事は必ず必敗に終るのを体験した。之は謹慎の徳を失ふからであらう。

十月十七日

今日は神嘗祭なり。河内の秋は漸く酣ならんとするに拘らず吾等の生活は虜囚に近し。広東に於ては軍司令官以下、俘虜の俘虜一号と袖に俘虜番号を附し鉄条網の囲ひの中に収容せられ、柵外に出づる時は日本軍の階級を脱し甚しきは帽子を禁じ或は帽子の星章を剥奪せられある由なり。

予の愛刀則光は一般の安物と混淆せざる為、支那側の地位ある人に保存せしめんとし寄贈の形式を探る事とし兵器部に渡せり。田隅貞信氏の予の結婚当時寄贈せられしものなり。爾来予は特に此の軍刀を愛護珍重せり。今や予の身辺を離る。予の離別の情は他の同僚が軍刀を手離すよりも一層寂莫なり。是予の愛刀癖の致す所なり。

十月十八日

中野学校出身現軍参謀部勤務石川大尉、岡部大尉、脱走して帰らず。遺書あり。開き見るに国体艱難を慷慨し日本の捨石とて大陸に朽ちんと云ふに在り。彼等の意気と純情とを憐むも其の手段方法の選択適当を欠き却て国家に害を招く事、恰も二、二六事件に於ける加入青年将校が如き事を知らず思慮未だ熟さずと云ふべし。而も中野学校出身者の身を持する事謹厳ならざるは同情と尊敬心とを招く能はざる弱点あり。一般に謀略機関に活動する日本軍将兵（多くは中野学校出身者なり）は目的にして善なれば手段は問ふ事なしと云ふに思想一致す。之公職の為日常の行為の規

範をはき違へたるものにして、謀略機関が公の為身を捧ぐる場合時として目的の為手段を選ばざる不法行為に出づる事ありとも、個人の日常生活に至りては正常の規範を脱逸すべからざるの理を諒知せざるなり。今や戦争は終熄し謀略活動は停止せられ中野学校出身者も一般正規の日本軍人の起居行動と何等の変化あるべからざる時、従来の職域的惰勢に依り動機善良なれば手段を選ばずとなすは思慮最も軽薄憐むべきの至りなり。

支那軍と接収業務に従事したる日本将校は異口同音に「支那さんには閉口じゃ」の不平冷笑を漏すなり。それ程支那軍は低級なるなり。支那軍の内容空疎にして形式を重んずるは其の命令を見るも明なり。処理を報告すべしと如何なる命令にも末尾に附け加へあり。それ程干渉せざれば実行せざるが支那軍なり。

人は自己の長所特長を認める上官に感謝する者なり。故に人を感激せしむるには其の人の特長長所を見貫くに在り。己を知る上官に仕ふる部下は如何に感激し活気よく働く事よ。又上官にして隙もなき人は近づけぬものなり。上下の親和は上官と下官との間に近しとの感を抱かしむる事が基礎なり。第二十一師団の西沢輜重兵連隊長の如き酒好にて酒を飲めば愉快となり部下も又愉快となり上下親和の実挙れる実情を看取せり。

十月十九日

軍司令部ドーソン移駐を前にし携行物品の検査を支那側に受く。支那第十八師の第三団は将校の指揮する兵一小隊内外を出し約半日に亘り凡有(あらゆる)所持品を点検し、毛布襦袢被服を公私を問はず一貨車程度押収して去る。上質のものは悉く没収す。昼食時歩哨のみを置き点検部隊は一時引上ぐるや、此の押収物品監視の歩哨が上官の隙を見計らひ日本兵の前にて襦袢等を陰匿す。支那軍の面目躍如たり。さて日本軍が征服者側の立場に在る際、降伏せる敵軍の所持品余りに見事なる時、果して支那式を発揮せざるや。此際征服者が被征服者に比し所持品欠乏せる時は如何。予は兵に之を問ふ。日本兵曰く或は支那式を発揮するやも知れずと。予は支那軍の所為を浅間しく思ふ反面、又相手側の所持品欠乏し欲心を生ぜし事を察す。彼等を操縦するには道あり。彼等の狙ふ所は若干の金品のみ。他の書類とかは一切触れざる所に簡単さあり。米英人なりせば如何。或は物を取る事少なからんも精神的に更に不快の印象を与へしなるべし。支那軍に対しては一種のナンセンスにて済むべけれど、米英の場合にはナンセンスにては済むまじ。さはあれ本日の支那軍の態度は日本軍に支那軍の低級さ浅間しさを白昼公然と暴露したるなり。日本兵に笑はるる所に却て勝者の負けあるなり。若し秋毫も犯さざる反面更に個人の所持品等に制限を加へ数量的科学的に検査せしならんには我等も一目措く所あるべきに、白昼強盗の真似して支那軍の価値を笑はれたる結果を生じたり。唯日本軍の所持品も或る数量以上の制限を要するなるべし。

十月二十日

軍高級副官は昨日の物品検査に関し当の責任者第三団長の所に交渉に行く。本日も残りのものの検査ある為、工作の要あればなり。此の団長には乗用車と拳銃一挺と軍刀とを既に引出物として寄贈しありしが、本日は高級副官はラジオを引出物に持参し、昨日の押収物件に検微鏡二箇其他将校の私物尠なからずあり之を何とか考慮せられ度旨述べ本日の検査には何分宜敷と頼み込む。団長之を諾す。本日の検査には団副官来れり。高級副官は金五百円と毛布十五枚を事前に進上せり。本日は遂に一物も取らずして帰れり。明日は河内市の此の団と警備区域を異にする駅より出発せざるべからざるを以て、第九十三軍の検査を受けざるべからず。是が支那式なり。更に海防にては五十三軍の検査を受くるの要あり。此の毎回検査には若干の工作物資を要す。明日の九三軍の検査官には綿布を進呈する筈なりと云ふ。彼等支那人は検査官には当然役得として何等かの被検査者より物件の贈与あるものと心得あり。之れなければ実地に亘り色々と迷当［ママ］がましき事を為すなり。支那人に対して事を運ぶには斯くの如き工作物件を絶対必要とす。反面支那人は物質により操縦容易なり。決して道理一つにて動くものに非ず。道理には物質の色艶を附せざるべからず。此の呼吸を解せざれば支那人と折渉すべからざるなり。予は本日高級副官の本日の苦心を聞き相供に呵々大笑せり。支那人は寧ろ組し易しとの感を深くせり。

十月二十一日

日本軍の苦境に際し始めて軍人中の偉大なるものが現はる。国歩艱難国乱れて忠臣現はるるの類にて現在の日本軍の様な状態に於て一般から崇敬せらるる様な人こそ真に偉大なる軍人であらう。又日本人として人として偉大なのであらう。考へて来れば現在はよい試金石の時期であり吾等を磨がく最も稀有な環境なのである。十月十四日、参謀本部解散し悲痛なる訣別の電を寄せらる。正視するに堪へず。電文は連合軍の校閲を経たるものなり。言外悲憤の気溢る。陸軍省も追て解散すべし。参謀総長の訣別の挨拶の内、何となく国体変更に関す憤りが秘められある様に感ぜり。

人を攻め人を中傷し人を警戒する代りに、人に感謝し人に和する気を何故起し得ざるや。非をなじらんとする相手の心情生活を仔細に観察せば、排撃より同情を先づ起すべき場合多し。

大体予が生きて居る事が啻事ではない。予が一身一家の事だけ考へて居る様では生きて居る資格が更にない。予は本年三月以来五人の友を失った。予は当然死すべき条件に囲繞されて居た。それに此の五人の友を捨て一人生きてゐるのは何故か。若し予が自己の事のみ考へ自己の事にのみ働くなれば生き甲斐と云ふものは少しもない筈だ。それなら五人の死んだ友の仲間に入り死すべきであった。それを生して貰って居るのであるから何か世の為人の為に貢献する様に働かねば義理が立たないのである。予の今後は生を伸ばされたものと解し努力すべきである。予の処世の根本主義は元来然りであったが、之が愈々確信の度を増し又増さねばならぬ様になったのが本年三月以来

予に加へられた鉗鎚(けんつい)なのである。

押しが弱いから仕事が出来ないとか出来るとか云ふ事を世間では云ふ人があるがこんな事は問題でない。正しい事をしっかり把握した人は正しい事を強硬に主張するであらう。気の弱い人でも責任観念の旺盛な人は主張すべき事は強く主張するであらう。何も厚顔しい事を練習する必要はないのである。寧ろ道徳心を高揚すれば処世に於て大過が無いであらう。

停戦以来夜間の外出禁止となり料亭にも宴会にも行かない。それ迄は客のある毎に会食はつきもので飲んだり食ったりしたものだ。健康状態を当時と現在と比較すると少くも胃腸に於て現在の方が遥かに健康だ。健胃散を呑んだり下痢を経験する様な事は絶対にない。即ち欠乏の条件と云ふより現在は節制の環境であるが過飲暴食の時より遥かに健康だ。我々の階級地位になるとどうも交際上不健康生活が多い。之れが停戦交渉に依りて是正された。質素にして某程度欠乏条件を有する程度が身体に一番健康なのだ。従来の生活は過食であり贅澤である。それ故に健康上のみならず精神上に於ても女遊びと云ふ様な事も強くなる。西貢で英人俘虜の述懐に俘虜になってから健康になった。此の鍛錬された身体であれば日本軍に負けなかった。贅澤な故に敗れたと述懐した事を想起し、現在の予等の生活に引きくらべ思ひ当る事が多い。動脈硬化や性病や婦人問題から解放されたのは日本が戦争に負けたお蔭であるか。睡眠不足に伴ふ不健康、予は断然長生き出来る事を自覚せざるを得ない。予の父の如き医者で経済的にも自由の身であったから四十歳以後相当飲んだのではないかと思ふ。中風で遂に斃れた。予も若し従来の環境であったなら父の真似をせねばならなかったかも知れないが、時局は予に欠乏節制の生活を強要し予は健康上極めて裨益する事が多い。（精神上の苦悩は姑(しばら)く問題外として）今支那側と交渉の衝に立つ三沢大佐などの生活は職掌柄宴会とか夜ふかしが多い。華やかさを羨む人があれば大間違ひだ。公務の為身体を傷つけつつあるのだから同情すべきである。

十月二十二日

小川勇吉博士の「信仰と科学」を読む中に啓発される意見を含む一二を摘記す。

〇神と云ふ問題に就て

万物は神が創ったと云ふよりも神そのものの発現であって、其の発現と其の作用とは一絲乱れざる一定の法則があって万物はその法則を受ける。而も其の法則は今日の科学者の所謂自然法と云ふ物質科学に偏した法則のみを云ふのでなく、吾が心とか精神とか霊とか称して居る形而上の問題に関する法則をも包含して居るのである。

〇物質と精神とは同根である

科学の研究は最近著しく進歩し殊に物理化学の方面の発展は電子説更に進んで霊子説に迄及んでゐる。此の霊子説こそ心霊現象の根本と一致するものでなからうか。

〇疑問は科学を生み信ずる心は宗教を生む

〇強き信仰とは或る対象を目標として吾々の内にも存在して居る其の不思議な力の非常に強大に発せられたる状態にあるのを云ふのである。其の力こそは元々万物を創生し成長せしむべき根本の力であるが故に、其の発現たる信仰の力に依って精神的及肉体的の疾病が癒される位の事は当然あり得べき事である。信仰心のある人程病の癒え方も早く死すべき重患が生きかへる事は稀でない。

現在の環境に於て遺憾なのは日本軍人中自己保存の本能より生ずる為であらう責任回避の抬頭であり、難局に立って他を救ってやらうとする義侠心の欠如である。つくづく人間の根本的の教育の不足を痛感する。全く腹の立つ事、気のいらいらする事が多い。併し予の立場に於て腹を立てたりおこったりする事は禁物である。斯くの如き環境に於て人は不平を云ひあひ人心攻撃をし易いから和を保つ事が特に必要であるから、予の立場に於て叱ったりおこったりする事は絶対に慎しまなければならぬと腹をきめて居る。状況不利なる場合の人心指導治心術と云ふものは骨の折れるものである。軍司令部に於ては目下精神中枢がない事は遺憾である。最高指揮官が精神中枢になる様に勉めねばならぬ。之が為には人から尊敬される人格を持たねば制令も行はれぬ事をつくづく感ずる。

十月二十三日

軍司令部の移転に伴ふ支那軍の物品押収には高級副官もほとほと閉口しあり。支那軍を譬へて犬につけるダニの如く欲しきものは理屈の如何を問はず強奪す。彼等には条理なく上官の命令の権威なく慾の一字あるのみ。支那軍中にても第六十二軍の如く軍紀厳正なる部隊もあるも当地の九十三軍の如き悪質の方が支那軍の主体なり。然れども支那軍に良質の軍隊軍人と悪質の軍隊軍人との差等極めて甚だし。支那軍中にても感心なるは順化方面に進駐したる第六十軍の如き直に日本軍より砲工兵各部将校の教官を招聘し戦力の向上を図りつつあり。物を持つと人を造ると非常なる違ひなり。支那軍全部を馬鹿にする勿れ。支那人悉くを低級となす勿れ。玉石混淆の一大怪物を支那と知るべし。向上は苦痛を伴ひ堕落は愉悦を伴ふ。此の理よくよく考ふべし。

野地少佐を病院に見舞ふ。少佐と云ふも二十六才の青年将校なり。若き者の向上心は頼母しき限りなり。

十月二十四日

久方振りに小林参謀と共に市中を歩いて見る。目立つ事は安南人の人手の多い事、乞食のなくなった事、支那軍人の目立つ事なり。市内の道路は益々衰損しつつあり。安南人街には一名の仏人の

通行せざるも特異なる景色なり。仏蘭西及安南女性の美麗なるもの吾等幽囚者の目には輝やかさを以て印象づけらる。支那軍進駐に伴ひ物価は一倍半となる。安南人は日本兵には尚好意を寄せ物の販売も尚廉価迄は行かざるも定価にて行ふも、支那軍人に対しては法外の値段を吹っかけ後にて日本兵の前で赤い舌を出し支那人を見送りある光景を見たり。支那人は安南人より嫌悪蔑視せられある事斯くの如し。仏人の女は日本人には好意を示さざるも米人には絶対に厚意を示し米人の行くダンスホールには従来見ざる仏人の女性がダンサーとして出入する者多しと。西欧人は依然として人種的差別感を抱きあり。唯女性は何となく仏人に美なるもの多し。是のみ比較すれば民度の高きに依るならんも仏人の方が有色人種より高尚に見ゆるなり。

予等最近の食事は五〇〇瓦以下の主食に制限せられ肉類は断片を数日に一回食ふのみ。魚は川魚にて小骨多し。朝は飯二杯、昼夕は三杯に定まりあり。予の如き大食漢も今にてはそれにて満足なり。少しく過剰の物を購入して食べんか忽ち胃腸に変調を来し甚しきは下痢を伴ふ事あり。粗衣粗食は実に健康に可なるのみならず欲望を制限する良道なり。胃腹を害するは小食に依ること絶対になく過食と濃厚飼料に依ること十中の中なり。然らば粗食は実に健康の安全弁と称すべきものなり。十中の八九迄は贅沢が身心をそこね粗衣粗食が身心を剛健ならしむるの理をつくづく悟れり。而も世上給養の不良不足を訴へ美味美食の却て不可なる所以を叫ぶもの少し。

安南人の泥棒には其の素織[ママ]に於て感ずべきものあり。彼等は一人にて泥棒するの不利なるを悟れるが故に、多くは組を組成しありて白昼公然戦術の原則を応用し牽制作戦佯攻戦等を巧に実施し目的を達しあり。夜間に至りては戸内に侵入する者、外囲を警戒するもの、物品の逓送に任ずる者等分業的に活動す。何れにせよ「組の戦法」の有効性を遺憾なく発揮しあり。彼等は戦術を学ばずとも兵理に会する如く、泥棒の編成、運用を計りつつあり。

十月二十五日

予も最近隠居生活の様な眺があるので碁の稽古を始めた。先生は小林方明大佐であり予の相手は佐藤久彌参謀や酒井参謀である。将棋の相手は小林方明参謀や酒井参謀である。囲碁将棋に依り如何に何事にも手順と云ふ事が大切であるかが判る。実際事務に於ても手順で事が巧く運ぶ場合と行き詰る場合とがある。多くの組織の実行部面には手順と云ふ事が極めて重要な地位を占むる事を理解すべきである。近頃の日の立つ事の早い事よ。酔生夢死とは現在の予等の生活であらう。病気の恢復期と現在の予等とは共に時間が一足飛びに経過して来れる事を願ふ。碁、将棋は此の時間つぶしに最も良き手段だ。予も今後隠居の様な生活を送らねばならぬだらうから碁をものにしやうと思ってゐる。

予が嘗てなやみし坐睡癖は過労と過食との累積の致す所であって、最近特に予の入院以後は全く之を解消した。小食と睡眠十分なる現在に於ては坐睡せんとするも為し得ざる状況だ。元来予は

二十四、五才以後、耳疾があって絶えず耳が鳴ってゐるので人一倍脳の疲労を覚えるからそれだけ睡眠を要するわけだ。又、予は青年時代より早飯の癖があってそれだけ過食に陥って居った。それが現在は環境上制限せざるを得なくなって来たので此の癖も矯められ出した。予の毎朝の計算訓練に依りて検するに入院前は宴会やら夜遊びやら過労と過食の為頭脳は疲れて居った事が多かった。酒は特に害が多い。而も日本人の飲酒は適量以下に止まる事が六つかしく遂々不節制する事になる。思へば予の現在幽囚の身こそ健康恢復と増進の為最良の環境で、予はどうしても此の調子では父祖の天寿を超過しさうである。

十月二十六日

米軍将校日本人に語りし。支那軍に於て讃むべき事の一として憲兵の軍紀風紀の厳正なる事なりと。之は蒋介石の直系にて人選も注意せられある由なり。

土橋将軍の経験の一として、新聞記者と会見には第三者を入れ筆記等を為し後日の参考資料を預り置くを要す。新聞記者はニュースの関係上真相を伝へず尾ヒレを附し事実を歪曲する事甚だ多し。又、田舎の講演の速記者は能力不足の為誤り多し。印刷の前に必ず初稿を点検するの用意なくんば思はざる大齟齬を起す事多しと。

葉隠、論語に古老の言として、敵を討ち取るには鷹の小鳥を狙ふ如く千羽の中に入りても初めに見込みたる一羽の鳥ならでは目を附けぬものなりとあり。古人と今人と比較するに今人は何事にも便利ありて多心に失するが如し。学問の例にても参考書辞書の如きを人の資料に比較せば思半ばに過ぐ。それだけ今人は多岐に心を奪はれ、古人の葉隠の教訓を実行せるに反し。此の過失を犯し易く遂に何事にも中途半端にして一方面に深く把握し得ざる結果を招くが如し。予の如き過去の生活を顧みるに技芸の末に至るも人に秀いで自ら腕に自信ある域に達しあらず。是偏に右の過失を犯せる事に帰せずんばあらず。多能ならざる者は益々此の古老の教訓を学ばざるべからざるなり。

慈悲は必ず報ひらるる傾向あり。笠原幸雄中将[132]は連隊長時代、病める妻女を看護し困窮せる准尉の私宅を訪ね名も告げず五百円を見舞金に置きし事あり。中将は自ら慈悲なるのみならず其の祖父君の慈悲の報ひが中将を現在の地位迄好運に導きたりとは平田中将の言の如し。笠原一家には慈悲の流るる血液ありて今日の幸運を致したるが如し。嘗て河村繁子刀自より柴山中将[133]夫人の幸運なるは其の祖母の物を恵む慈悲の報なりとの話を聞き、あれやこれを思ひ合せ人は牽強付会の説と云へば云へ予は其の事実なるを信ぜんとするなり。予の家庭の如き母の仁心は確かに予の身上に幾何かの幸を与へあるを自ら意識するなり。予の仁心亦予の子供に幾分の良影響を及ぼしあるを感謝しあり。葉隠にも慈悲は子孫繁栄の元との訓言あり。

[132] 笠原幸雄（1889-1988） 中将 1945年4月～第11軍司令官、1946年7月、復員（『日本陸海軍総合事典』p.45）。
[133] 柴山兼四郎（1889-1956） 中将 1944年8月～1945年7月まで陸軍次官、1948年5月、戦犯拘留、同11月、禁固7年判決、1951年、仮釈放（『日本陸海軍総合事典』p.80）。

物事の持続せざる原因は一事に多くの慾を逞しうするに在るが如し。又、余りに性急に成果を求むる所に在るが如し。宜しく太陽の運行の人に感得し難き程の「漸」を追ふを要し慾を時間的に制限するを要す。必ず一を狙って一を仕止むる習慣を要す。之れには時間的持続が必要の要素なり。而も一回の量を制限すること必要なり。量を制限し狭く深く追求研究せんか身につく事も確実なるべし。恰も検微鏡を以て物を鑑識するが如し。今迄発見し得ざりし平凡の外面に内部の驚異を発見し得べし。

鉄道隊長久保田中佐の言に依れば支那軍の鉄道輸送計画は極めて簡単なり。此点は日本軍も真似るべきなり。即ち二等車は将校、三等車は兵卒と云ふ様な日本流の区別なく将校を監督者として部隊毎に区割しどしどし車輌につめ込む故。乗車区分等の微細なる計画、車輌の配当計画等の煩瑣を要せず搭載量も大にして乗下車も迅速なりと。日本軍は欧米の階級区分に拘泥し能率を発揮しあらざる現状なり。欧米流の将校下士官兵の対立観念の厳密なるは決して善事に非ず。仏ブロッシヤー少将も此の点却て日本軍の勝れる点を指摘したる事を記憶す。俘虜の取扱に於ても将校には其の収容軍並の俸給を与ふるも下士官以下には之を全然給せざるが如き欧米流の悪規則なり。万一此の規則を日本軍の取扱に適用せんか従来の日本軍内の上下を流るる家庭的団結に一大亀裂を生ぜしむべし。新軍建設に於て大いに注意すべき点なりとす。

十月二十七日

『仁心は繁栄の元　殺生は衰亡の因』と云ふ。是宇宙の大法則に合せるが為ならんも個人の心理方面より見るも当然然かあるべきものなり。タケクに於て〇〇を残殺［ママ］したる〇〇述懐して其の決行後、夜蚊帳の影に〇〇の顔が現はれ恐怖に堪へずと[134]。又シベリア出兵時、某中尉は多数の露人俘虜を虐殺したるが、其の命日には必ず発狂の体を起し遂に神経衰弱となり自決するに至りたりと。仁心は心に円満喜悦を生じ殺生残忍は寂莫恐怖を生ず。繁栄と衰亡との因子の放るること斯くの如し。

或米人は土橋軍司令官に支那軍と比較し日本軍が終戦以後各所にて評判よきを讃めたり。仲田工兵大尉がバクマイより軍司令部へ電車に乗りて来りたる際、電車賃を払はんとせるに安南人車掌は「日本軍上等。電車賃いらない」と答へ金を取らざりし由。皇軍の有終の美を発揮せんことを祈る。

碁に於ても戦略に於ても小局部の立場より有利なる施策も大局の立場より不利益なること多し。最近日本軍逃亡者の如きも、一時的且自己の立場より男らしき振舞と意識して脱走し或は越盟に加担せんとする者あるも国家国軍の大局より見て皆非なり。結局思慮を伴はざる小節に拘泥する行為は害を生ずること大なり。思慮周充ならず未熟の若輩に此の過失多きは囲碁や戦略と何等愉りなき

[134] 1945年3月9日の明号作戦により、ラオス中南部の町、タケクを占領した日本軍は、フランス人捕虜を殺害した。「タケク事件」と呼ばれており、戦後、関係者が戦犯として起訴された（大島 pp.202-203）。この「タケク事件」のことであると考えられる。

原理現象なり。

暇に委(ま)かせ軍司令部近傍の安南人部落を散策して見る。近くに支那第十八師の屯所あり。安南娘が垣根越しに予の軍服姿を瞥見し荷を捨てて姿を消すは支那軍が此の部落に暴行を加へたる証拠か。不具者多し。又不潔なり。清潔と衛生とは物質文明の象徴の一なり。支那軍幹部が日本連絡所の日本料理を招待せられ其の清潔を痛く喜びたりと。特に外国育ちの支那人に於て清潔を喜ぶと。帰途支那軍の宿営地（競馬場）附近を通過す。清潔整頓の不可なるは支那軍の特色か。支那軍には整理的才能欠乏せるが如し。

十月二十八日

文献に依ると光と云ふものは一種の電磁波であると云ふ。光と物質とは違ふけれども物質にも電磁波の様な波動があると云ふ。心と云ふものは一種の電磁波で恰も光と相似たる所があるが一層微妙なものであると信ずる。心－精神作用を一種の電磁波とするなれば物心一如で従来精神を不可解のものとされてゐたのに科学的解釈がつくのである。至誠人を動かすとか祈り殺すと云ふ様な精神作用が外界に働く作用も謎が解ける様にわかる。人は死しても其の生存当時発散した精神力は電磁波たる一種のエネルギーとして宇宙に存在するわけである。祟(たた)りがあると云ふ事も此のエネルギーの存在を認めるなら信じ得られない事でない。信念とか信仰と云ふものは強烈なる心の電磁波であらう。之を「霊波」と称すべきものであらう。霊波を認める場合従来迷信なりと一概にけなした不可思議の心霊的分野を科学的に解決し得る事も尠くない。精神と物質とを余りに区別して取扱はぬがよい。物心一如だ。精神と物質とは相遊離し相反発するものでない。精神を思へば物質を考へ物質を扱はんには精神を顧慮外にするは片手落だ。両者の何れかに軽重をつけすぎるのも物心一如の原理に反する。

別の事であるが一つ感心する事は米国が組織的調査を盛んにやる事だ。単に戦争犯罪人の探索と云ふ様な狭い範囲ではなく、各種の事象に亘り組織的に調査し之を本国に報告すべき指令を受けてゐるらしい。日本が若し現在の米国の立場に在ったとしてもあれだけ組織的に各種の分野に亘りつっこんで調査尋問することはないと思はれる。それだけ米人には組織的研究癖がある。日本の各種教科書百五十種類を過去二年に亘り翻訳研究せる結果、今回文部省編纂の教科書に大改訂を加へる指令をマックアーサー司令部が発したと伝へられる。是は事実であらう。日本が支那の排日教科書の改訂を企だてた事があるが米国程組織的に研究してやったかどうか。今回予等の経験せる米人の調査態度を見て之は明に民族的特徴の一で日本人は米人程組織的研究に欠けてゐると思はれる。彼等の情報集収は戦争中では仲々素織的［ママ］科学的であった事を想起する。世界的発見も創意も此の組織的研究態度に胚胎すると潜かに考へる。之は学ぶべき長所である。支那軍等には全然此の組織的科学的調査の能力がない。調査する気もつかないらしい。此の点は米人と独

逸人が世界で抜群の資質を持ってゐるらしい。

十月二十九日

第二十一師団参謀三好少佐（二十六歳）目下吾等の家屋に同居しあるが同官は士官学校の一番なり。凡そ百芸に通ぜざるはなし。一を聞いて十を知る体の能力家なり。人間も斯く素質に差あるを思ひ嘆ぜずんばあらず。他人が一年かかりてやる事を一ヶ月にても出来る人なり。而も身体健全なり。真に偉丈夫と云ふべし。人間本来不平等に出来あり。三好少佐の如き才能ある人が世の上位に立ち指導者的生活を行ふに反し無能者の失業すること亦自然の法則なり。

幕僚部長会報時、土橋軍司令官より昨日の英人新聞記者との会談の説明があった。英米人は日本の教育が著しく軍国主義的であることを認めてゐるらしい。土橋司令官は外人に対しては好機に投じ相手の弱点をつく事がよろしい。そうすると相手も引下ってしまふと色々応酬の要領を例を挙げて説明があった。日本の宣伝のやり方は実際的でなく抽象的で又高踏的で宣伝としては価値がないと云はる。一例として軍司令官が巴里滞在中、支那事変の南京占領後の日本軍の大強姦事件なるものが流布された。仏蘭西の新聞記者団は土橋大佐を訪ねて貴殿は何時も日本軍はシンボルが高いと云はれるが今回の南京強姦事件はどうだ。貴君の所説と違ふでないかと云ふ。土橋大佐は之に対しそれはあった事はあった。然し君等は支那側の白髪三千丈式の宣伝に躍らされてゐるのだ。事実を調査して見よ。宣伝の千分の一にも足らぬ事だと応酬した。後、日本の方に支那側の宣伝を報じ日本も手を打たねばならぬと注意した所、日本軍に限りかかる事実絶対になしと宣伝せよと返事が来た。此の日本の思想がよくない。そんな事を云ったって外人は信用する者は一人もなからう。それを日本人は宣伝の方式を独り善がりに考へてゐる。予であったなればそんなやり方はしない、若し日本軍司令官であったなら日本軍は奪略強姦は固く戒めてあるから起らないと思ふ。併し戦場倥偬の間だから間違の絶無を保し難い。故に住民は強姦掠略から免れる為十分注意を怠ってはならぬ」[ママ]と宣告する。此の際日本軍は絶対にそんな事をやらぬから安心せよ」[ママ]と宣伝するのは実際的でなく屓策でない。若し事故があれば忽ち日本軍司令官は嘘言をついたと云ふ事になり、益々日本軍への信頼を害するに至るであらう。若し予の言ふ様に宣伝するも事故の起った時、責は住民の不警戒に在りと返撃さへする事が出来るのである。兎に角日本人は神がかりの様な事を口にしながら実行と不一致だから外人に信ぜられぬ様になるのだと云ふ話であった。

米国のプリストン[ママ]大学に於ては名誉組織の試験があって監督者なしに試験を受ける。受験中疲れると校庭へ出て喫煙し再び戻って答案を書くが、併し外へ出ても書籍を見るとか友人と試験問題などは決して為さず飽迄紳士的態度である由。日本の学生は果して出来るであらうか。

英国に於ては小学校の一年生、中学校の一年生、大学校の一年生、それから実社会へ出た暫くは無権利で服従の訓練を受ける。だから社会の秩序も規則も整然と行はれると英人は語る。此の

英人は見習に来た日本の大学卒業生は嫌に気位のみ高い。日本の教育に何か欠陥があるでないかと語った」[ママ]と。デモクラシーの旺盛な英米で此の美点があることは記憶せねばなるまい。

偉大なる人物は必ず性質の両面を持ってゐる。大胆にして細心、聡明にして温情ある等である。併し一の徳目も徹底すれば他の徳を養ふかも知れぬ。細心なるが故に大胆、聡明なるが故に温情ありと云ふ具合であるかも知れぬ。

渋沢子爵が親孝行に就て面白い話をされたとの増田義一著の「茶前茶後」に載ってゐる。往昔、江州の孝行者が自分は世間から親孝行だと賞めらるが未だ十分でない。信州に大の孝行者があると云ふから往って修業しやうと思ひ、わざわざ出懸けて其の家を尋ねて見ると不在で母親独り留守居してゐた。往訪の趣意を話すと、倅は親孝行かどうかは知らぬが今山へ行ってゐる。暫くすれば帰って来るから待ちなさいと勧められ、暫時待って居ると柴を背負って帰って来た。家へ入るや否や老母は出て柴を降してやる。倅は平気で老母に柴の始末の手伝をさせてゐる。其の態度を見て江州の孝行者は変だと思ってゐたが、続いて老母は倅の草鞋の紐を解いてやる。お負けに足まで洗ってやる。此の様子を見て親孝行など飛んでもないと内心憤慨したが、今度は疲れたと云ってゴロリと横になった。すると老母は足を揉んでやった。此の態度を見た江州の孝行者は最早我慢が出来ず、自分が見てゐる所親不孝の標本で親孝行など真赤な嘘であると怒鳴った。すると信州の孝行者の言ふのに、自分は孝行と云ふことはどんなものか知らないが己れの母は草鞋の紐を解いたり足を揉んで呉れるのを喜んでゐるのだ。若しこれを断ると大層機嫌が悪い。依って母の言ふ通りになってゐるのだと言った。此の説明を聴いた江州の孝行者はハタと膝を打ってナール程分った、自分の是迄行った孝行は形式であったと痛く感心した。『形式を学ばずして精神を捉へよ』。

岩崎小弥太氏は社員にして三菱の用箋を用ひし者に十五円の罰金を課したと云ふ。風紀粛正の主義を明にしたのであらうか。陸軍なども官用の用紙を私用に供する者がある事は恥ずべきである。

十月三十日

教育勅語下賜の記念日に方り時局を回顧し今更慚愧に堪へない。西貢より飛来せし航空将校より西貢の近況を聞くに、参謀にして英軍の前で土下座させられたり靴を磨かされたり欠礼せし為殴打されたりした者がある由。英人のひどい行為を憎む前に、マレー占領時斯くの如き行為を英軍の前に試みた日本軍参謀のありし事を附記する。英人は暴を以て暴に代へたのだと思へ。予は勿論英人の行為を憎む。併し日本軍の俘虜取扱に関する思想は純一に統制されたものでなかった。或者は人道主義国際法規のままを実行し、或る者は白人に対し優越を示すは此際とばかり相当の虐待をした者のある事を想起し、日本人の感情に捉はれた行過ぎを反省する次第である。さはあれ日本軍人にして白人俘虜を虐待せし人の心理は、日本人自体が従来白人阿諛主義で一も二もなく白人優越崇拝思想に侵されてゐたのを此の際とばかり矯正せんとする一種の公憤に出たのが多いと思

ふ。此等の人も国を思ふ純情から為したので、白人をいぢめて愉快だからやったと云ふ人は稀であらう。又かくの如き行為に及んだ日本軍人は英米人の態度が俘虜にして横柄極まるから懲戒を加へたと云ふであらう。何れが是か何れが非か。日本人の態度が正しかったなれば彼等は順従であったかどうか当事者でなかった予には何とも云へない。唯日露戦争当時、露軍の俘虜将校を優遇した為、情報収集や色々の便宜を得たと渡辺章将軍[135]は予に語られた。人情に国境がない。誠意を以て当れば両者意思の疏通が巧く行くのであるまいか。

予は退院後丸二ヶ月を経過した。傷以外の身体は概ね旧態に恢復した。稍(やや)体重が減少してゐる様に自覚する。傷（顔面）は夜分目が醒めると痒くて仕方がない。口辺尚神経が殆ど無感覚でしびれた部分がある。併し退院当時よりも神経は顔面に於て若干右手示指に於て完全に恢復した。義眼が適合しない事と予備のない事が気がかりである。時の威力をひしひしと身に感ずる。予の健康恢復も時の威力だ。従来は時間がなくて困った身は現在では隠居生活の様に時間が余って困る。囲碁将棋麻雀程時間を消費するに便利なものはない。之も社会生活に欠くべからざるものだ。暇人の好呂伴だから。予も四十三才にして松平定信の様に陰居生活を経験してゐる。小林方明大佐は内地へ帰ったら馬政課の知己の関係上農林省の畜産局方面で仕事したいと云ってゐる。農畜方面は今後日本は大いに伸ばさなければならない分野である。小林参謀は北海道の牧場経営を夢見てゐる。予には未だ何の目当てもない。予が生活するなら都会を離れ海と山との恩恵に浴し得る海岸と山岳に近い所に居を構へ自然に親しむと共に世の為人の為になる様な仕事に従事して見たい。最近の生活に於て愈々認め得る事は予は親譲りの勤勉と云ふ徳が少し人よりも備はってゐる様に思ふ。予の家庭では年枝姉程勤勉な人はなかった。予の兄も努力家であった。之は父の遺産である。是はどうしても予の子孫に伝へなければならぬ宝だ。予の勤勉に更に乞々の持続性を加へねばならぬ。幼年学校の卒業の茶話会に阿部と云ふ数学の教授が予等の贐(はなむけ)に「乞々の努力」と以てした。教官がそんな事を云ったと云ふ事を何時か思ひ出して呉れれば思ひ当る事があらう」[ママ]と。正に思ひ当る事が多い。此の教官は今どうして居られるであらうか。

十月三十一日

予の碁は小林参謀の「手ほどき」で既に半月になったが、一向其後進歩しないのは残念である。本日つくづく次の事を思ふ。日本国に悠久性があるのなら今回の国難は民族の質の改善鍛錬上に於て戦争に勝つよりも効果は大きいであらう。若し日本が大東亜戦に勝ち抜いたなら民族的自信の昂まる事は申す迄も無い事ではあるが質の向上に寄与する事は少い。或る部門に於ては低下し少くも停頓する。科学の発達生活の贅沢的方面の進歩はあるであらうが、改善と云ふ方面は非常に

[135] 渡辺寿のことか？ 渡辺寿（1874-1962） 中将 1904年10月から1905年6月まで満州軍参謀（『日本陸海軍総合事典』p.174）。

乏しいであらう事は日露戦争後戊申詔書が出たのを見ても明だ。だから日本民族に神鞭的鉗鎚を加へる為には戦争に負けた方が結果的に適切である。問題は此の国難を試練とし堪へ抜くか或は此の重圧に圧倒され心も臓腑も腐ってしまふかに在る。真に日本民族に天与の使命があるならば大きな目から見て禍を転じて福となるであらうし、又吾々の自覚として斯くせねばならぬ事は当然である。

三好参謀の如き精神健康智能趣味凡そ総ての方面に常人の最高点を取る様な人に出会ふと優生学の貴さを感ずる。凡そ彼には欠点と云ふものがない。今後は長寿と運のよい事を三好少佐の上に祈るばかりだ。

栴檀の樹皮程回虫駆除に有効なのはない。宜しく国民保健法の一助として日本の国に栴檀の樹を植樹せねばならぬ。マクニンやセメンエンや治入草よりも有効だ。予も数回体験の上之を確認した。

十一月

十一月一日

歳月は流れて昭和二十年の十一月とはなった。母国の近況や如何。本日予等の当番が市内に買物に出ると支那の憲兵が肩章を取れと云ふ。取らずに居ると日本は軍隊がなくなったのに階級のある筈はないと肩章を支那兵の手に剥奪したと云ふ。我等を俘虜扱ひにする手が段々と伸びて来る。予は今、草書の読み方を習ってゐる。一日に一時間の割だ。支那の草訣百韻歌と称するものを材料としてゐる。良き教材もあるものだ。之が幼年学校時代でも判ったら余程進歩した事であらう。漢文の教官が暑中休暇にても宿題を出したら如何。優生学の価値を認めると共に教材良教育の価値をも認めざるを得ない。嘗て盛岡に於て閑院宮春仁王殿下のテーブルスピーチを拝聴した時に、士官学校御卒業以来の殿下の御進歩御研鑽の常人以上のものあるを拝察したのである。此の時殿下の様に良きことのエキスのみ吸収されて居るからあれだけ御進歩あらせられたと推察した。素質と教育とは蓋し車の両輪の如く併行すべきものであらう。

北緯十六度以北印度支那の日本軍三万五千の中、過去二ヶ月（停戦以後）の離隊脱走者は百六十名に達する。如何なる種類の人が其の犯罪を犯すかを尋ねて見ると、現地語を解し現地女と交際があって爾後印度支那にて生活が出来ると自信を持ってゐる者、越盟と関係があって其の中に這入って一旗挙げやうと思ったものが多い。特に多いのは婦人関係で逃亡後現地人の知り合ひの女の家に身を陰(か)くしたものが多い。河内に現在滞在する二百名の日本人も多くは現地女との同棲関係に在りて、一般日本人の引上げに一緒の行動が取れなかった者が大部である由。

小林方明大佐が海防連絡部長となって明日出発する事になった。酒井、榊原、佐藤、三好各参謀と小林と予、他に碁友達の白石法務部長と夕食を共にする。皆此の機会に於て趣味を涵養することに気が向いてゐる。

支那軍に依り個人の私物品迄押収せられるので、余分の所有物件を司令部で買上げる事にした。吾々の様な生活をすると最低限度の生活の味がわかる。随分持物も切りつめる様になった。貧乏生活も楽なものだ。『物』と云ふものは持つ程欲しくなるものだ。佐野学[136]の云った様に、人は外界のものを自己の掌中に握る途端人間の物欲は一層そそり立てられるものである。なければ捉はるる事も少い。禅坊主の生活も仲々味がある。

---

[136] 佐野学（1892-1953） 社会運動家。一時期の日本共産党指導者であったが、1933年に転向。1946年、天皇制下の一国社会主義を唱えて労農前衛党を結成したが翌年解党、政治運動を止めた（臼井 p.483）。

十一月二日

支那軍では高級将校の相互の能力差は日本軍以上である。是情実は支那軍に於て特に甚しいからである。又支那軍中、中央系と地方軍との仲は決してよくない。こんな所も支那軍の近代的軍としての能力を発揮し難い因子で、唯支那軍でも米式軍隊は装備訓練共米軍の指導を受けて居るから却て日本軍も恥しい所がある。例へば米式工兵隊の如き機械力的作業力は甚大で到底日本軍の及ぶ所でない。して見れば支那軍と云ひ日本軍と云ひ軍の能力強弱は常住不変のものでなく努力創意する側に優越が与へられるのである。唯日本軍と子供との仲のよい事は天下一品であらう。日本人は外国人の子供にも日本人の子供同様の態度で愛撫して取扱ふから、支那人と云ひ安南人と云ひ現地人は日本人となついてゐる。日本人は八紘一宇となすべき素質を持ってゐるのであるが、教養が足らない為に色々の問題を起すのだ。外国の軍隊には教養はあっても現地人に威厳を以て臨むから現地人からしたはれると云ふ所迄は行かない。矢張り日本軍の教養を高むる時に於て世界最優秀の軍隊が生れるのである。

十一月三日

朝、参謀部の明治神宮遥拝に方り、予は先任参謀として一同に対し「明治神宮遥拝に当り戦争の結果明治天皇の御鴻業を傷つけ奉りたる事をお詫び申上げると共に皇国の再建を誓はんとする」旨訓諭する所があった。今や吾人日本人は明治節に於て総懺悔に依り発奮を現実に現はさねばならぬ。

世の中の人は多くは自己の生きんが為に何とかして衣食の道を講じてゐる。併し之は間違ってゐる。若し世の中に無くてはならぬ人となったら社会は其の人が衣食の為に窮するのを黙って抛って置くことはあり得ない。衣食はなくてはならない人、欲しい人につきものである。道心の傍に衣食ありとはこの事を云ふのであらう。人の教育指導で経済生活を如何にするかは目標を茲に置くべきである。金儲けしやうとする人が世の多くの傾向である。併し其の人にして有用ならば社会国家は其の人に幾らでも金を提供するであらう。金儲けの為に専売特許を得るにあらずして、社会に裨益する発明に対し社会は彼に特許権を与へるのである。彼はそれに依り更に新しい研究を続ける事が出来るであらう。今更大人になり且老歳になってからお前はなくてはならぬ人になれと云っても既に遅い。宜しく少年青年時代に先輩は斯く指導すべきものである。日本は今困窮してゐる。併し目標を茲に置き奮励努力する人士には決して衣食の為困窮する様な事はないであらう。

人間は卑近な手近なものに最も心を牽かれ易く抽象高遠なものは大切な事でも人の関心を牽き難い。早い話が怨恨憎悪は日常の接触部面に最も多きい。米英の如き日本国民として最も憎むべき存在であるのに拘らず、又此の時艱に処し日本人は一致団結して外国に当らねばならぬのに、敵愾心は反対に自己の身辺の日本人相互就中最も親しかるべき同僚間に最も旺盛となり、外敵に対

しては漠としての憎悪心しか起らず、心の衝動の動機は日常の自己身辺より起ることは不思議である。それだけ身に切実に来るものであり具体的であるからであらう。

毎朝太陽を拝する時、生の有り難味に感謝する。そして五管の健全なのを感謝する。之は一眼を失ってより一層感謝の念が深くなった。眼の如き何と霊妙なものでないか。此の目が尚健全に一隻でも残って居る事は何と有難い事でないか。

面白い現象は支那軍が印度支那に進駐してから日本軍の名声が安南人間に昂揚した事だ。支那軍が閲銀券などを強制通用せしめる陰に安南人の反感を買ひ、それだけ昔の支配者たる日本人の有難味が安南人に判って来た。但し安南人間には仏蘭西の復帰を願ふ者は殆んどないと云って宜しい。それだけ仏蘭西は安南人を侮蔑し苛斂誅求してゐた事がわかる。恐らく台湾でも満州でも、就中台湾では日本人の良さが土人間にわかってゐるから支那人が支配する様になった後は日本を慕ふ情が湧然として湧く事を予言する。朝鮮人の中にも日本の支配を希ふ者も決して少くないと思ふ。関東州に至っては特に然り。日本の根本精神はそれだけ世界の人に慕はるべき淳良さがあるのである。日本の根本精神が悪いのでない。日本が非難されるとしたら日本精神を体得しない日本人の悪質的行為に依るものである。若し米軍が日本に親しく接触したら次第次第に日本の良さが判る事を確信する。米人に対する日本人の態度は卑屈ではいけない。正々堂々たるべきである。

軍隊生活約三十年近くの総結論として『徳は力に勝る力』の真なることを悟った。徳を以て進めば時間の経過と共に力を増すも、他の手段方式を以て進めば何時かはあきが来たり反動的気分が抬頭する。

十一月四日

諸種の制限に依り内地帰還の際は現金の携帯を禁止された。唯持ち帰れるものは魂と身体だけである。されば我等の精神と肉体とだけは最優秀のものとして帰らなければならぬ。併し又此の裸一貫で帰る事を以て発奮を促す資料ともなるであらう。

安南の女性に日本人が好かれる事も不思議である。支那人は安南の女には決して好かれない。女性は優秀な男に無条件に好意を示す傾向がある。印度支那に於ては矢張り日本の男が安南の女性に一番持てるであらう。戦争の結果、安南人は日本に同情してゐる。決して軽蔑しては居らない。支那人でも日本人を軽蔑することはない。恐らく英米人にしても日本人を軽侮すると云ふ事は少いであらう。大東亜戦前に於ける米英人の日本軽蔑感と戦争終了後に於ける日本人軽蔑感と何れが大であるか。予は寧ろ戦争前の方が大であったのでなからうかと思ふ。戦争の結果、日本の恐るべきを知りたるが故に日本人を再び立つ事の出来ぬ様に圧迫を加へて居る事、恰も第一次欧州戦に於ける独逸に対すると同様である。第一次欧州戦争に於て独逸は軽蔑される事がなかった。第二次の世界大戦に於て軽蔑されたのは伊太利であり仏蘭西であり支那である。大西郷の白(い)はれた

る如く国を以て仆るの大決心を以て戦争せよと。日本は概ねそれを実行した。一時的に考ふれば今次の戦争程損な結果を招いたものは前古未曽有であらうが、国家悠久の歴史の前に国民性を磨きあげる最苦難の鉗鎚と考へられない事はない。戦争をやった事がよかったか悪かったかは後世の批判に譲るとして一旦戦争を決心せば乗るかそるか迄の大決心で果敢に遂行すべきである。

十一月五日

平凡なる一日なり。草書百韻歌を熟読すること本日を以て既に十日となる。各個撃破に依り技能修得主義を実行す。昨今夢多し。夜亦身体就中鼻のつまる関係上、苦悶の声を発し我れながら驚くこと多し。拠点を造れ。拠点を造る迄は努力を要す。一旦拠点出来れば労せずして功多し。王義士[137]の草書百韻歌を十日間にて修得し鵞堂[138]の千字文（草書）を読みたるが嘗て経験せし難渋さは何時の間にやら解消しぬ。拠点を造る事の利斯くの如し。囲碁に於ても然り。用兵に於ても然り。拠点を造る迄はそれに専念すべし。各個撃破の主義にて精力を一途に集中使用すべし。古の人は学門にても拠点を持ちたり。今の人は環境上拠点を造り難し。

十一月六日

一日の単調なる。起床後、自彊術と計算の外、午前、草書稽古一時間。昼食後夕食後囲碁、午后時に競馬場に行はる司令部の野球を見に行く程度。朝食二杯。昼夕食三杯の飯を規則通り喫す。一種の軟禁生活とや云はん。

十一月七日

西貢より国富参謀飛行機にて連絡に来る。数ヶ月西貢の事情不詳なりしも真相を把握し得たり。所感。

一、ニュースに比し西貢の事情は朗かなり。寺内司令官、沼田総参謀長[139]逮捕のニュース（ラジオ放送）ありしも事実に非ず。ニュースは兎角誇大に吹聴せられ易きのみならず、外国語のニュースは翻訳の用語にてとんだ誤伝をなすものなり。

一、沼田多稼蔵参謀長の人物には英軍司令官すっかり惚れ、何事も沼田将軍、沼田将軍と称し交渉の相手となり、他に西大条中将等あるも相手にされずと。真に沼田将軍の誠実正直なるは外人に依り真価を見貫れたり。西大条中将の如き人物にかけては足元にも倚られず。第三者より見れば最も明瞭なり。当地に於ても交渉上何某は駄目だとか馬鹿だとか人好しだとか一々評価せられあ

---

[137] 正しくは、王羲之（307？～365？）東晋の書家（西川 p.150）。

[138] 小野鵞堂（1862-1922）明治・大正時代の書家。鵞堂流の創始者（臼井 p.249）。

[139] 沼田多稼蔵（1892-1961）中将 1944年12月～南方軍総参謀長。1947年11月、巣鴨プリズン収容、1948年4月、重労働7年の判決、1950年12月、仮釈放（『日本陸海軍総合事典』p.120）。

るを聞く。交渉には人物が非常にものを云ふ事を知るべし。中山少将（源夫？）は山東に於て支那側の絶対信頼を博せる由。要は誠意に在りとは過般支那総軍より来りし宮崎参謀の云ふ所なり。沼田将軍、中山将軍の如きは日本陸軍よりも敵側に称揚せらること大なりとは脾肉なるかな。

一、英軍は実に貧乏なり。日本軍より時計や私物品も奪略する程なり。之に反し米軍は物持ちなり。国富参謀は英軍の貧乏なる事を始めて知れりと。米軍は英軍の貧乏なるを軽蔑しあり。自動車にても飛行機にても一として米国製ならざるはなく英国製は見当らずと。

一、白人は白人相互の扶助に極めて熱心なり。彼等の正義人道は敵国ならぬ白人相互に於てのみ通用する語なり。正義人道とは結局自己保存のカモフラージの言葉なり。「ナトラン」［ニャチャン］に仏人の乳児十名ありて乳に困りありとて、飛行機にて牛乳投下するが如き英軍の行為。或は又タケクに白人婦人一名あり。之を日本軍の手にて護送すべしと命令するが如き。如何に白人の救恤に熱心なるかを窺ふに足らん。而して沼田参謀長より「日本将兵今後の唯一の希望は故国帰還問題なり。帰還輸送に関し判り次第知らされたし」との要請に対し「俘虜が暗い思ひを為すは当然なり。帰還輸送に関し目下示す事能はず」と英軍司令官が蹴りし由。その辺の冷たさ、日本人としては到底出来ざる気持なり。彼等は敵就中自己の強敵は徹底的に憎む主義なり。此の点に於て欧米の道徳は覇道主義と云ふべし。彼等は徳を以てせず。力を以てす。故に本質的に日本精神の大らかなる王道思想が高尚なるを知るべし。支那軍の方が王道精神の理解深刻なり。東洋道徳の西洋道徳と異なれる所以も明ならん。

沼田将軍より国富参謀の手を経て予に負傷の見舞を戴く。感激の外なし。

林憲兵大佐、越盟操縦の関係上、英軍の忌憚に触れ抑留せられ西貢刑務所に収容せらる。生活状態は見るに由なきも、一食には梅干一箇のみの副食物、且水は一日に金盥一杯のみなりと。君国の為自己を捧げたる私心なき人がかく苦しめらるる理由如何。人生の矛盾を感ぜざらんとするも能はず。

国富参謀は交渉事に於てデリケートの問題に成功するもせざるも通訳の良否如何に由る旨つくづく述懐せり。

十一月八日

支那の軍隊の喇叭の好きな事。従って喇叭訓練の盛んな事は注目を要する。音楽は或は日本人以上好きではないか。又、行進に於て歩調を揃へる事に努力するのは日本軍以上だ。之は威容を正す上に於て確かに必要な要素である。

終戦以後、辻政信が行方不明になった。仇敵と和することが出来ない操守の強い自己の利害を超越せる此の人の気持は、我々平凡人の想ひ及ばぬ所であらう。此の人こそ一生涯進んで荊棘を求め運命を開拓した人である。日本男児に斯くの如き英雄的行為に出づる脱線者が居る事は万丈

の意気を吐くものであって、正に自己保身に孜々たる者に対する頂門の一針である。

英人も個人で交際すれば判りのよい親切な人も多いが国家的に極めて冷厳な国民である。併し之も単に英国とのみ云ふ事が出来ないであらう。世界何れの国でも個人の感情と国策とは違ふから。但し英人は米人の様に単純率直でない。おすまし屋であるから近づき難い所があるのであらう。此の点は米人の方が遥かに御し易い。英軍にも印度兵濠州兵を含む。彼等は素質が悪く強盗強姦は平気である。仏蘭西兵に於ても植民地軍は素質が悪い。世界中で素質のよいのは日本軍独逸軍の様な植民地軍を持たない文化国軍であったが、今や日本軍及独逸軍は地球上になくなったことは世界文明進展上遺憾な事である。

今次の大戦に於て高等司令部の幕僚が真に麾下兵団の信頼を博したのは幾人あるか。南方軍総司令部の幕僚に対しても我等は何となく上調子の人が多い様に見受けるのである。高等司令部の幕僚と云へば戦争中でも紅燈緑酒を思ひ出す程華美な生活であった。真に国を憂ふならば、石原莞爾将軍の嘗て幕僚時漏された様にそんな浮いた気持にならぬと云ふのが常識であるまいか。一時の鬱を晴らしに脱線すると云ふ事は認むるとしても、之が習慣になる様では心の置き所を疑はざるを得ないでないか。新軍の建設に方り幕僚道の神聖化を大いに高調すべきである。此の大戦に於てラバール[ラバウル]の今村将軍[140]麾下の司令部は好評嘖嘖(さくさく)たるものがある。

コレラが北部印度支那地区に蔓延し、予の当番兵も真似コレラの疑ひで入院せしめられ、予等も隔離の身となった。医務室の神経過敏にも閉口する。凡そ大袈裟な騒ぎは責任回避より来ることが尠くない。一人が全責任を負ふの腹があれば何も騒がなくともよい事がある。我等の隔離問題も包丁医部の責任回避が忠勤振りの余波である。無智と云ふ事も事件を大袈裟にする一つの原因だ。

十一月九日

国富参謀の話に依れば、西貢地区に於ける治安維持に関し南方軍総司令部より英軍司令部に要請せる所、英軍司令官よりかかる事を今になって申出づるとは奇怪だ、何故に本職の到着せし時に云はぬかと逆襲された由。凡そ新たに接触を持つ人に対し将来何事か要求事項がある場合、最初の面接の時機より当方面の情況を知悉せしめ雰囲気を醸成する事を怠ってはならぬ。之が交渉の先制でもある。南方軍司令部は此の点英軍に後手を取った。米英等民主国の特徴を知る一例がある。我等の如く独逸流の用兵思想を享けついだ日本陸軍にあっては作戦参謀は情報参謀より有能であり幅が利く事に習慣的になってゐる。然るに米英では之が反対らしくて情報将校を重く見る。之は総じて情報に関する関心が非常に高い事を示す。事実彼等の情報収集は熱心であり且組織的である。民主国は世論とか人気とか情報を極めて重視する。此の点独裁的の主観的なるに対し著

[140] 今村均（1886-1968）大将 1942年11月～第8方面軍司令官。1946年4月、ラバウル刑務所収容、1953年8月、巣鴨移送、1954年11月、刑期終了出所（『日本陸海軍総合事典』p.23）。

しく客観的である。今次大戦後の戦争犯罪人の摘出でも我々の考へと大部隔てがある様だ。彼等は民衆の人気を基礎にして考へ我等は理論で押し通さうとする。理論的に云へば米内海軍大将など戦争犯罪人の大なるものであるが、日本の自由主義者間に人気があるから之を戦争犯罪人として未だ取扱はず自由主義的幣原内閣の大臣としての椅子を贏ち得てゐる。又、俘虜取扱者でも俘虜に首実験をさして悪評なのを収容する。山下大将のみを特に戦争犯罪人として極刑に誅せんとしてゐるが如き明かに人気を考へての処置である。我等なれば責任と云ふ理論一点張りで行く処は彼等はかく考へないのである。民主とは民衆の人気を基礎とすることだ。斯くの如き国を相手にする我等は外交折衝上に於て又打つ手があるべきである。

十一月十日

予は母より慈悲心を享け継ぎたるが、智を多量に享け継ぎたるが幸福なりしか或は又慈悲心を多量に享取せし方が良かりしか。之は量の比較的の語なるも、現在受けありし智と仁とに於ては或は予は仁を受け継ぎし方が良かりしならんと思ふ。即ち仁心に依りて予は現在人間らしくなりたるを喜ぶなり。少しばかりの智をより以上享取すとて、予は現在より左迄良果は得らしざりしならん。特に終戦後人間として再出発せざるべからざる時に方り、予は人間らしき人として「スタート」を切り得ることを母に感謝するなり。或は従来の陸軍の堕勢にて今後の生活を送らん場合は此の見解と異なりたる所あるやも知れざるも、歳四十数才に於て全く白紙的に「スタート」を切る場合、才能よりも人間味の豊かなる方を有り難く感ずるなり。

沼田将軍、土橋軍司令官に対し貴殿の如く「人一倍部下思ひの人は云々」とあり。事実土橋将軍は一度知りたる下の者を捨てぬ性質あり。弱きを助ける義侠心あり。頼まれて断りきれぬ人情味あり。安南王保大皇帝の退位するや百五十万円を与へんとし、最近其の留守宅の困窮するや育兵団より五万円支給の請求ありしが十万円をやれ、又、今後生活に困れば独断之を救助してやれ」と指示せらる。今後の安南王と日本とは如何なる関係あるやを想定し、我等は無用の事と思へども将軍は亦別の見解に依り斯く処置せらる。其他、湯浅秘書官の失業救済、渉外部島本通訳の失業救済等。其の放胆なる救恤振りには一驚を喫する次第なり。然れども救恤を受くる当人は如何ばかり土橋将軍を徳とするやは測り知るべからざるものあり。「人を救ふは注文以上」の原則より将軍の挙に賛同せざるを得ず。

十一月十一日

昨夜は国富参謀偶々(たまたま)西貢より飛来し来りたる為、参謀の会食を行ひたる所、数日来腹の調子悪かりしに予は勢に駕られ河内ビールを痛飲したる為ならん。本暁より下痢頻度殆んど応接の遑あらず。予の当番肱岡一等兵数日以前真似コレラにて入院中の処、昨日真性コレラに決定せし故予の

症状にコレラの疑ひなしとせず。新妻軍医少佐の診断を受く。一日中日光浴にて腹を暖めたり。苦慮せり。

十一月十二日

予の下痢は本朝に至りて恢復の兆あり。検便の結果も心配なかりき。

女の問題と金銭の問題とに限り普通の道徳観念や常識にて図り難き個人の性癖あり。而も地位階級年齢を超越したる問題にて高位高官なるが故に此の方面が正しと云ふことはあり得ず、高位高官にて「思慮の外」の行為を為すものあり。然らば何故に斯くの如き性癖の人が高位高官に登りしやの疑問を生ずるも、過去の経験上割合に人目に立たざりし為、此の方面に非行のありし人も其の才能に恵まれ相当の位階を得るにいたりたるが、例へば軍隊に於ける部隊長の如く衆人の注目する地位に立つに至るや従来の性癖が衆人の知悉喧伝する所となり、大いに威信を失墜するに至る傾向あり。斯くの如き性癖の人を善導することは仲々容易ならず。病膏に入りあればなり。

入院中予の主治医であった荻野軍医大尉が予の宿舎を尋ねて呉れた。大尉は目下支那軍を併せ治療してゐるが、支那軍の暴状に目を見張ってゐた。第一回の支那側の病院長は第一方面軍の某軍医であったが、之が病院を接収した時、倉庫保管中の薬品の大部分を市中に売り飛ばし私服を肥したので、第二回の病院長と更迭後それ等不正者を逮捕してゐるとの事。此の辺の心理が十分予には呑み込めない。矢張り不正を不正とする事は支那人でも同じであるが、余り大きな不正やかけがへのない物の不正横領或は対外関係上支那の面子に関すること等は司直の手を煩はすらしい。要するに支那を判断するには日本人的潔癖な梯尺ではいけない。幅のある玉石混淆の尺度が入る。併し大河の流れの如く行く道筋は低い方へ低い方へと流れる事には変りない様に、支那人でも正不正の識別はあって正しい者は遂に認められ不正は遂に指弾されるに至るのであって、唯此間の反応が日本や欧米列強の如く敏感鮮明でないのであらう。謂はば支那は不透明ガラスの国で、我等日本は透明ガラスだ、衛生思想の低級さは問題にならぬ。コレラで死亡した患者の被服を消毒せずに市中に売り飛ばして私服を肥す衛生部員あり。重病患者に対する取扱は極めて冷淡にし屍室へ運んでしまひ、屍室に堆積された死体の中から半死半生の人間が動き出したり人命の尊重すべき事は支那人に取っては余りに煩瑣なのだ。煩す者は死んで呉れた方がよいと云ふ一般通念らしい。だから俘虜の虐殺の如き米英の態度と支那の態度は根本的に違ふ。支那兵は三食の賄料を上から支給されて居るのであるが、経理員や中間搾取階級に於て一食物をサッピキするから二食しか食へない。日本兵が三食食ってゐてもそれを見てゐる支那兵は何とも思はず当然の事として上官の上前をはねる事を当然の事としてゐる所に支那の大きな無神経さがある。支那には共産思想が免疫されてゐると見る。彼等はそれ程鈍重無神経なのだ。病院の炊事掛が病院の中で食物を売り歩いたり患者が病院備付の器具を垣根越に市民に売って安南ウドンを買ってゐる光景を見受けて唖然たるばかりだ

と荻野大尉は云ふ。これでよくも戦争が出来たものだと荻野大尉が感心してゐた。此の混沌として濁りきった支那が兎に角一般方向を誤らずに進んで行く所に支那の偉大性がある。独逸や日本は清流の清冽なる如くデリケートであるが茫洋さがない。

十一月十三日

予の陸軍生活の全期間に於て他人と意見主義の最も対立したのは、階級の高い者とか特権者が他より特別の所遇を受くることを持って平気であり至当であると云ふ主義思潮との対立だ。所謂官僚的主義に対する反発だ。予は高級者なるが故に私生活にも機密費を使ってもよいと云ふ様な思想は素より絶対反対だ。之れには殆んど誰もが異存のあるべき筈はないが、陸軍省などで高等官の特種的待遇と判任官のそれに非常に差があり、家庭的情味が高等官と判任官との間に流れて居らぬのに対し心から同意が出来なかった。中隊家庭を標榜したる中隊長を歴て陸軍省整備課課員に転じた予は、庶務将校として判任官以下の気分や待遇に同情し高等官課員の冷厳なる下僚に対する心持に不快を感じたのである。予が陸軍省を嫌って飛び出した一つの原因は課の雰囲気の冷たい事である。之は陸軍省全体の空気と云ふべきでなかったかも知れないが其の傾向は全般を通じてあった事は事実だ。所謂事務屋になって統率とか人間味の少いことに憤懣を感じた。其後陸軍の諸司令部を歴任し評判のよい上官は下の者に対する思ひやりがあるし、不評判の上官は階級や特権を振り廻はし下に対する冷厳な態度である事を通例としてゐることに感じた。予は幕僚などが其の職権を利用して自己の私生活に色々の便を得る主義には反対であった。予が陸軍を嫌ふとしたら此んな陸軍の傾向を嫌ったのである。此の点で予は敏感であって寧ろ軍人よりも宗教家や教育者に必要な適性を持ってゐると云へやう。陸軍の改革はこんな方面でも行はれたい希望を持ってゐる。辻政信などと予は此の方面で主義思想を一にするものだ。辻は予よりも更に極端な考へを持ってゐる。辻は機密費全廃論者であり金鵄年金の返納主張（且実行）者である。年を取ると修養に努めた人は別として其の方面に心掛けが悪いと我儘となり、特権や職権を利用し我意を通さうとする傾向がある。此の点に於て青少年の純情正義感の強いに比し成年老年者は劣るものである。高徳の人もある反面悪化すれば思慮が周密計画的となり手腕が老練となり世故に長けてゐるだけやり方が悪辣である。恭敬謹慎こそ特権者上級階級者の努めなければならない徳目であり、之れさへあれば地位を恥しめないのみならず下僚より尊敬せらるるに至るであらう。

支那人を一概に軽蔑することは適当でない。支那人には荻野軍医大尉の例話の如き欠陥あるも、曽国藩や李鴻章の様な誠実家もある。第一方面軍の殷副長の如きも正義派で不正を憎む人ださうである。併し彼等は支那の大人振りとして人より物を贈与を受けることも平気である。日本人の或る部の如く潔癖ではない。非常に幅の広い人種だ。

朝の早起は勤勉性を判定する梯尺たり得る。

十一月十四日

国富参謀が英軍の許可を得て飛(の)って来た重爆は支那軍が押へて西貢へ帰さないはめになった。小口と云ふ三井物産の副支店長は支那軍督務営（憲兵）に誘拐されて所持品一万円を奪略された外、本人を人質にして三万円を請求してゐる。我兵二名は支那兵歩哨の射撃を受け一名は死し一名は重傷し、其の所持品は奪略された。全く支那軍に対しては道理は三文の価値も認められない。利欲と力とのみが支配してゐる様だ。雑軍に至っては手に追へない。肱岡を見舞に行ったら病院の本館は支那軍の患者に占領されて病院一般が何となく薄きたなく感じた。室内に入らずしての直感である。朝鮮でも満州でも台湾でも今後は日本人が指導してゐる時代に比し段々不潔化するであらう。果して之が人類の為に幸福なのであらうか。印度支那は仏人の統治以来七十年にして都市と道路と鉄道は発達した。恐らく安南人のみの手ではこんな美観は思ひも寄らない所であらう。仏人は泰と印度支那とを比較し常に之を誇るのである。併し民族の自信に関する空気は印度支那と泰とは雲泥の差があるであらう。何れが幸福なのか。予をして言はしむれば、能力の差等著大なる優劣両民族間に於ては優秀側が劣等側に指導援助を与ふべきである。其の方式は管理的方法に依るか指導者を派する方法を以てするかは其民度如何に依る。併し其劣等者が段々と啓発されるに従ひ異民族の指導者は逐次之を原住民族に指導権を譲るべきである。斯くて原住民の生長を希ひ自他共栄共存するこそ人類の理想であらう。併し歴史に依れば強者は弱者をかくの如く道徳的に導くよりも搾取的に導くか或は自分の都合のよい様に料理したと云ふのが殆んど全部である。同化主義に依る植民政策が理想である。朝鮮台湾の日本の植民政策は予は根本に於て非難すべきものでないと信ずる。予の言の正しいか否かは今後台湾や朝鮮の動きが事実に於て之を証明するであらう。遮箋、強弱に拘らず至当の地位を与へる事が天の摂理に兼ふものである。

日本再建の方法に就て潜かに考へる。日本は今後農業を基底として身心健全なる日本人を造るべきである。都会は日本再建に各種の悪条件を具へてゐる。他方農村こそ日本再建の基盤である。我等は地方農村小都市にしっかりした組織を持たねばならぬ。日本人の養成は地方農村に於て最も障碍なく行はれるであらう。兵力なき日本は兵農一如に徹し農民即ち兵員の覚悟を要すべし。農民の教養を嵩め訓練を向上することが日本再建の本筋である。民心の涵養なくして日本再建はない。此の意味に於て有能なる指導者は今後都会を捨て農村に組織的に分布さるべきである。職業的政治家や都市の口舌の徒は日本再建に貢献する所がない。代議士になって政治運動を掌り共産主義や米英思想と対抗せんとする人は不必要と思はぬが、そんな浮調子の事のみで日本は救はれぬ。日本を救ふにはよく生産的な根本的な方法でなくてはならぬ。それは忠良健全なる農民を造り田園文化の発達を図る事にある。

・人は其の心を労することの価値に依り人物の価値を測定せらる。

十一月十五日

内地帰還輸送計画漸く具体化し我等も概ね明年盛夏の候迄に内地引上可能でないかとも思はれる。昔から至誠人を感ぜしむると云ふ事を云ふが、之が科学的証明は未だ聞かない。実証の結果斯く云ふのみ。但し念波と云ふ一種のエネルギーが体内から発散されて相手の身心を打つものとせば起り得ることは明証される。「目で物を言ふ」と云ふ人口に膾炙された事も此の解釈に従へば直ちに証明される。読心術と云ふのは別に相手の心を推し測るのでなくして相手の念波を受信することである。人に依り此の受信感覚の鋭敏な人と然らざるものと、又、個人に於ても受信感覚が時に依り消長あるものと察せられる。さて念波は想念の強烈な程放射力も強く対象が鮮明な程通感力の強い事は一般の光の作用などと同様と解釈せらる。

昨夜は久枝、年枝の両姉の夢を見た。何か予に対し喜んで居て呉れる様であった。久枝姉の二十五周忌に於て予は姪江子にお経を書て墓に埋めて呉れとて頼んだ事を記憶する。之は満州で昭和十七年の事であったが、其の久枝姉の命日に近い此頃である。亡姉は真似コレラで死去した。予は当番兵肱岡がコレラで入院してゐるので心から彼の恢復を祈ってゐる。亡姉にして霊があるなれば肱岡の恢復に協力して呉れるであらう。遮莫（さもあらばあれ）、予は死せる肉親の者に喜ばれてゐる自信を持ってゐる。何時も夢に見る時は喜んで呉れてゐるばかりの光景を見るからかく信ずる。予が死地を脱して助かったのもこんな人々の冥助のお陰でないかと感謝してゐる。

内地帰還後如何なる生活様式を辿らうかと遑あるまま種々想像思考を運らすも、条件が具はらぬ為確たる方針も立ち難き現状だ。併しかくの如く亡姉の夢などを見ると亡姉の遺児等の世話をせねば済まぬ予の境遇と責任を感ずる。

予の顔面の疵部も神経切断部が逐次神経を恢復しつつあるのであらう。最近は唇（右）が痒痛くて仕方がない。それでも額は幾分恢復したのであらう。真に目に見えぬ程度であるが恢復して行く処に楽しみがある。

内地帰還に方り連合軍の許可する身廻り品は日常生活上最小限の必需品で一切の余剰を許さない。之は取り様に依っては有り難い事でもある。従来物に捉はれたる風習に対する神鞭である。自分の身の内に蔵するならいかなる宝も文句が云へないであらう。物が自己に一体化してゐない分離の状態に於て物は携行を禁止される。金銀財宝は自らの手腕に依り集め得る力を身につけ様ではないか。此の力を作らずして物を携行しやうとするから文句が出るのだ。又、縦ひ一時連合軍の監視の目をかすめてもその物を使ひ果せば元の木阿弥だ。だから在外日本人は此際魂を入れかへ物に捉はれず自ら物を造り得る様な能力を作る事に心掛くべきであって、天は日本人に其の機会を与へて居るのだ。

十一月十六日

白石法務部長の言に依れば、法廷にて最も簡潔に鳧(けり)のつくのは教育程度の高きものなり。教育程度低きもの程虚言を言ひ頑張り取扱困難なり。軍隊に於ては将校下士官兵の順序なり。将校にて三十分かかる所を兵卒なれば一時間にかかりて埒あかざること多し。知識人は理詰で言へば虚言はつけぬものと思ひかくさずにすらすらと云ふなり。知識低きものは証拠をつきつけられても頑として答へざること多し。女に至りては又理屈がわからず厄介なりと。以上に依り理に明るき程教育程度高しと云ふて可なり。支那軍と折衝する際、彼等は決して自分が悪かったと云った事はない。之に反し英米側は自分の悪い時は悪かったと判っきり云ふ。此の辺も法務部長の話と相比し教養の高いのと低いのとの差が明瞭でないか。

酒井参謀より注意された事であるが成程よい事と思ふから書き止める。それは腹を傷めた時は太陽の直射光線で暖める事だ。下痢などはすぐ止ってしまふし、胃腸の機能が旺盛になって健康に益すること幾何なるを知らない。唯、内地に於ては太陽の光線を三十分も連続受けることの機会と都会生活者などに於て特に婦人に於て其の場所を得難いのを難点とするのみ。予は蛔虫駆逐薬の常続的服用と胃腸の太陽浴こそ国民保健の二大便法と考へる。蛔虫駆除薬の如きも木薬を用ふべきだ。木薬の木と云ふ字は幼字［ママ］判らなかったが今にして草根木皮であることがわかった。簡素生活とは人間を自然と一体化することだ。反省すれば我々の生活は自然と乖離し生活を複雑怪奇にし自ら昏迷に陥って居ることが尠くない。日本陸軍の制式の服装で長靴と云ふものがあるが之は熱帯に不適なものだ。それを陸軍で強ひるから生活が自然と遊離してゐる。米軍や英軍には長靴と云ふものを用ひない。特に熱帯には不要有害なものだ。将校と下士官、兵、或は将校相互の階級を服装にて余りに明瞭にしやうとする見地から将官の拍車は金、将官佐官の刀帯は赤など強いて複雑な服装を設け生活に煩瑣と徒労とを来した。

近日読んだ根岸守信綱著の「耳袋」と云ふ面白い本の中で貨殖工夫の事とて左の話が記載されてあった。享保年間に藪主計頭と云ふ人あり。至って倹約家にて貨殖の手法も詳しかったが其の手法を聞きしに、假令(たとえ)ば平日にても風雨或は地震有りければ家来を呼び、昨夜の風雨に居屋敷下屋敷等破損何程やと尋ねけるに、家来も其の気に応ずる者有りて聊か破壊に及ばざる所をも是程破れ損じ入用凡そ何十金掛るべしと答ふるに、即ち右の金子を除置きて貯へけるとかや。愚なるやうなれ共、音信贈答、祝儀無祝儀、朝夕昼夜右に随ひ規矩を定め段々と積財なし給ふとせしとある。漸を追ふて為すこと及見え難き仕難からざるに為すに在る様である。健康法でも能力増進法でも蓄財の術も結局は不断の累積で塵も積れば山となる理を忠実に実行するに在りと信ずる。平凡の非凡である。「倦まず撓まず」である。平凡の不思議である。凡そ事を為すの常道は之を於て他に無い。

十一月十八日

予の受傷以来右頬に充血する精であらう従来特に良好であった予の右鼻孔が充血して鼻だけが出来し時々閉塞して気分が悪いので我慢が出来なくなり、本日第四病院入来院中尉の手にて切開手術して貰ふ。案外簡単であったが出血の止まり難いのには些か閉口した。其の節、荻野軍医大尉の本籍地が柏原町の近くの折松町と云ふ事がわかった。荻野君は親切で時々予に付添って兎や角世話して呉れる。其の際荻野大尉の話。支那兵の不潔なる。病院の二階の窓より平気で夜分大小便を垂れ流すので夜分は建物の軒を歩く事は危険だ。此の間も二階から大便中の支那兵が足を辷らして墜落し即死したと云ふ。

日本人は人に贈与するに良い品でも「お粗末ですが」と断り謙遜するに反し、外人は良い品なれば一番良いものを差上げると云ふ。英軍へ自動車等を出すに最優秀な兵を出し乍ら能力は優秀でないがと謙遜しければ、英軍連絡者はそんな下手な運転手はよしにして上手なのを出せと云ってこちらの謙遜が却って仇になったと云ふ例がある。謙譲の徳は東洋道徳であって西洋に通ぜないらしい。

十一月二十日

国富参謀の飛行機も何時支那側が出すか判らない。支那側との交渉は根気を要する。腹を立てては不可(いけ)ない。飼犬にかまれた様な我慢を要する。日本人なれば即座に解決するであらう事も一ヶ月以上荏苒(じんぜん)遷延することが常態だ。之が所謂支那式である。同文の民と云ふが習慣は日本人と英米人との差以上違ふ所が多い。

予の歩行も片目だから夜道を月明下に歩く様な不案内さを感ずる。「心許なし」とはこの事を云ふのであらう。

春日憲兵隊長[141]が諜者虐殺事件善後処置の為来り我宿舎に宿泊せらる。其の話にパクニンの有名な日本好の姉妹、美人の姉の方は日本の敗戦を聞き自殺せし由。気の毒にてもあり殊勝な人なりと感心す。憲兵隊長も認められたる如く安南女が日本人を好くこと不思議なり。現在安南女が出来たる為、河内の撤去困難なる日本人二百名あり。日本兵の逃亡率は終戦後特に北部印度支那地区に多きも、其の裏面に安南女関係あるもの頗る多し。日本人に対する好意は戦争に負けたるが故に毫も減退せず。却て気の毒に思はれある実情なり。或る安南女は日本の逃亡兵に対し、戦争に負けてどうして日本に帰れるか帰らないで印度支那で暮せと同棲を迫り逃亡日本兵を感激せしめたることある由。一般安南男児も日本人と安南女と一緒になる事を別段悪感情を持たず、同棲は其の親戚父母の支援を得あるもの多し。安南人は此の点に於て日本人に近く支那人よりも遥かに

[141] 春日馨　憲兵中佐　1943年5月より、南方軍第1憲兵隊（1942年8月、印度支那憲兵隊から改称）隊長を務める（大島 p.14）。

日本人を好みあり。支那人は安南人に馬鹿にされあるなり。事実支那人と日本人との優劣は安南人より見れば比較にならぬ筈なり。東京女は日本女に性質も似あり。情死は東京地方のみに在りと。

日本の再建は田園より。是予の信念也。浮調子の参謀達は未だ自覚茲に達せざるにや、各人勝手の処世を夢みつつあり。斯くの如き浮調子の人に国家の再建を託するわけには参らざるなり。南方軍総司令部の参謀を通して観るに、今次戦争は勝戦さより始まりし為か終戦後に於ても浮調子の者甚だ多きが如し。祖国の危急を深刻に考ふる場合、身を反連合軍側に投じ、今猶地下に潜みある某々参謀の如き遥かに日本男児として頼母しきなり。米英を謳歌せざる迄も之に随順して進む者は真に侭腹にして日本男児の風上に置けざるなり。

予は経理部につき二百円を五十銭銀貨に代へたるが、参謀部の当番兵二十名に五円宛内地に携行する土産として与へたり。事小事ながら参謀部の当番兵の予に対する態度慇懃となりつつあるを覚ゆるなり。討より三好参謀の専属当番となりて来れる浅川兵長の如き、予の銭を受けて以来、従来三好参謀の事のみ働きて他の事を一切なさざりし態度が予の為に陰ながら床あげなどせる様になり、予は東風吹かば香越せよ梅の花の原理を実行したる事を愉快に思ふなり。

十一月二十一日

予の鼻の手術も余後良好にて殆んど常態に復し、且、通気良好となりたるを以て心気爽快なり。医は仁術なりとは本夏受傷以来痛感せし処にて、若し予の児にして一人医業を営むものあれば予の本懐なり。精神的治癒は宗教家の任ずる処、頭脳的治癒は学者教育家の任ずる処、医は実に身体的治癒を本業とす。若し夫れ政治家に至りては社会的病根を治癒するものと称すべけれ。茲に特筆すべきは兵庫県柏原近傍折松町出身荻野軍医大尉の其後渝(かわ)らざる予に対する配慮と厚意となり。時を経過するに従ひ益々深厚なるを覚ゆ。

老年所感多し。予は尚老と云ふ域には入りあらざるも、軍人的経験より云へば老年と云はざるを得ざる現状なり。人は多く次の所感を抱くならん。自己に人が集まり来らざるは何故なりや。上司が自己を見出さざるは何故なりや。自己の力に比し先輩が眷顧し友人周囲が支援し後輩下僚の帰依すること少きを感ずるならん。併し予の体験に依れば此の人気なるものは外界の所産に非ずして自力内在の力の発散の反応なりと知るべし。自業自得の結果と知るべし。予が陸軍大学校を最優秀にて入校したる当時、知りもせざる教官連や面識なき同僚が予を支援し予と知り合ひとなることを喜びあるの感ありき。之に比し、卒業時は知己の教官すら顧みざるのみならず、予が態々教官に慇懃に礼を述べたるに対し月並以下の挨拶をするものありき。寔に感慨深き印象なりき。そは予が陸大の卒業を平凡の成績にて出たるに帰因す。人の人気を得んなどと心掛くるは本末転倒なり。婦人に愛されたしなどの欲望をのみ抱くことも甚だ思慮なきことなり。所謂世の成功者とならんか人気は期せずして湧き、婦人は競ふて媚(こび)を提するなり。蜜を造らずして蜂蜜の集まることを望む勿れ。

東風を起せば香ひ自然に至らんのみ。

酒井参謀の経験に依れば、日本将校にて二日にて十分偵察出来る所を支那の将校（参謀）にては四日かかっても其の二分の一も目的を達せぬ由。彼等の無計画がその非能率の最大原因なりと。支那人は動物を御することのみ日本人より巧し。遅らく[ママ]動物ののんびりした無意識振りが支那人に似てゐるならん。寧ろ支那人の動物に近き証左ならんか。動物の扱ひは文明非文明により差あるに非ず。却て非文明人の方が上手なるは此の理に由るならんか。図体の大なるに比し能力発揮困難なるは全く其の非組織的非科学的なるに由る。支那を救済するには此の点を特に重視せざるべからず。支那軍の将校と下士官との給養上は日本以上各段の差ある由。或は上司中間階級の上前をはねる事も因由しあるならん。

日本の最大長所最上長所は天皇制に在る。茲を捨てて日本の存在の意義はない。英国でも米国でも及ばぬ所は此の一点のみ。外国は終戦処理で目の仇にするのも茲に在ることは明瞭である。日本人自体の之に関する自覚は少ない。寧ろ外人の方が此の点をはっきり把握してゐる。天皇制の存する限り日本は復興する。

つまらぬ人間だなどと余り腹をたてるな。そんな人間の多いのが世の中だ。つまる人間なんかそんなに沢山居れば世の中でなくなってしまふ。千両役者一人に大根役者大部で芝居がなりたつ。之で千両役者の存在の価値がわかる。千両役者のみの芝居の如き芝居にはない、それが世の中だと思へ。苦しいこと悲しい事が多いのが世の中だ。楽しい事嬉しい事は数が少いから価値があるのだ。それで始めて楽しくも嬉しくもなるのでないか。「高きを悟って俗に還れ」だ。

十一月二十二日

広東から飛行連絡があった。張発圭[142]と云ふのが広東方面の支那軍司令官だ。仲々頑固で対日感情も悪いらしい。外出する日本軍人は俘虜の俘の字を腕章とし星章も階級章も外さしめられる。掃除人夫として数百名の使役兵を毎日広東の警察に出す。此の兵士等に対し広東市民は故意にバナナの皮を投げたり塵芥を目の前でこれ見よがしに捨てたりする。参謀等は支那軍の参謀と面接することが出来ない。凡て垣根越の命令書で事を指令する。軍司令官以下鉄条網を張り運らされた建物の中で支那軍歩哨の監視中に生活してゐる。之に反しアモイ方面の余漢謀[143]将軍の日本軍に対する態度は良好で凡そ友好的である。日本は戦争に負けたのでない。吾等は唯日本軍より武器を接収するのみであると云ってゐる。支那軍もピンからキリ迄ある事をよく悟らなければならない。当方面に来てゐる第六十軍長、万中将などは予と士官学校の教練班を共にしたる人なるが頗る友

[142] 張発奎（1896-1980） 中華民国の軍人。日本降伏後、広州地区において日本の降伏を受諾する任務にあたった（黄 pp.640-641）。

[143] 余漢謀（1896-1981） 中華民国の軍人。広東出身。日本降伏後、広東省の南東部（汕頭）において日本の降伏を受諾する任務にあたった（秦孝儀 pp.226-228、黄 p.601）。

好的だ。蒋委員長は日本を兄弟と思へと云はれて居るが、米国の干渉に会ひ思ふに委せぬ点あるを諒とせられたいと云ふ挨拶だ。何処の国でも人間は玉石混淆だ。併し支那程甚しい処はなからう。

十一月二十三日

支那人なるが故に総てがルーズなりとか不正なりとかなって居らぬなどきめつけることは出来ない。支那の社会にも正義が行はれてゐる。不正な事は不正として認められ忌憚せらるることは日本と同様である。但し日本程潔癖に敏感に反応がない所がある。勧善懲悪が日本よりもむらに現はれるだけである。日本でも決して理想的状態とは云へない。況んや社会組織が文明的ならざる支那に於てをや。支那を裏からのみ眺めて性悪説を唱へる如く支那人総てを悪のかたまりと看做す流儀は非常な誤解である。金子少将の説の如く、諸葛孔明の出師表も支那一流の面子式の辞礼と看做す如きは決して篤論ではない。大体の方向は人間たる以上、国家民族を超越して軌を一にするものである。支那のみ例外と認むべきものでない。唯支那は大きいだけ日本の如く単純卒直に行かないのである。支那は複雑であり幅があることを認知すべきである。

責任を分つと云ふ事は人を使ふ上に於て非常に巧みなやり方である。批判者側に立ってゐると随分平気で悪口を叩くが責任を分たれると一様に沈黙してしまふのみならず、何とかしてそれを良くしやうと云ふ努力心を発揮する。だから秘密主義は損なやり方だ。能率を発揮する所以でない。素より責任を分つ範囲は其の人柄、地位、能力等に応じ省察を加ふべき点である。

十一月二十四日

河内生活は本日のみとなった。明日よりドーソンに移転する事になった。司令部の主力は既に移転を了した。河内は感慨特に深い。予の死線を三度越えて生き残った印象の土地だ。西貢よりは変化があり住み良いと思ふが、好きでたまらぬと云ふ気にはどうしてもなれない。連絡処へ往復の途次考へる。人間には天性の勇怯はある。併し異状型を除き大部分は勇怯に差のあるものでない。併も此の平凡型の常人をして非常に勇怯の差を生ぜしめるのが現実である。勇気が必要だと云ふ。けれども勇気は後天的に養成出来るであらうか。勇気そのものの独立した性質はない。ある原因の有無が人をして勇気のある如く或はなき如く感ぜしむるのではないか。予は常人に対し勇敢なれと叫ぶよりも正しかれ命令に忠実なれと叫びたい。正しき時は必ず他の人を勇敢に感ぜしめ得ることは容易である。勇敢を装ふ事は困難である。正しければ期せずして勇敢に振舞ひ得る。不正なる時の怯と正なる時の勇との差は常人に於て殆ど別人たるが如く感ぜしむる程大である。職務に忠実であれば又勇敢なる行為を現はし得る。責任観念は勇気の原動力だ。正直なる者は強いとは古来よりの定説であるが正直は正しきと実直即ち責任観念とを併せた卑俗な言葉であらう。人の性格の強いとか弱いとかよりも此の正義観、責任観の方が決定的である。人には性質に多少の強弱はあ

り得るが、其の本来の差はあっても僅かである。然るに正義観、責任観は非常の差がある。故に性格の強さを求むるよりも正義観、責任観の旺盛なる事を求むるを以て有効なりとする。

予の体質の弱点たる胃腸の消化吸収力不十分にして便の短かすぎる傾向があったが、之は下腹部が冷える事が原因してゐることが判った。太陽浴を実施以来之が快癒した。多血質ならざる予は冷性である。腹部を暖めることを怠ってはならない。

今日読んだ吉川英治の剣の四君子の中の小野二郎左衛門の項に参考になることがあった。それは小野二郎左ヱ門[ママ]は七十歳の長寿であったが一日として稽古を休んだことはない。唯一生に七日ほど稽古をしなかったことがある。それは将軍家から其の御前剣術を供覧すべき命を受けてから実施の日迄七日間休養したからである。門人達は之を不審にして、将軍の御上覧に浴せねばならぬなら猶更毎日の稽古を然るべきにお止めになるのはどういふお考へかとの質問をしたに対し、彼は次の如く答へたと云ふ事である。「さればよ、わしが十年二十年の稽古も事有る時の唯一日の備へでしかない。七日や八日の急稽古をして不覚な怪我でも致したなら却て大なる不忠でないか。総じて間際と相成ってはもはや稽古の日ではない。むしろ爪を剪ったり髪など梳いてその一日をすずやかに待つべきものだ」と訓へたと云ふ。

人を動かすものは全的のものだ。全的でないと何処かもの足らぬ感を抱く。是は人間そのものが全的のものであるからである。理のみに走ってはならず情のみで解決してはならぬ。かく一方的見地にて解決せんとすれば反発を生じ苦情を生ずる。情理兼説、心身一致、精神と物質の併用と云ふ風にありたいものである。公私の別を明にし一方のみできめると云ふのは未だ到らないものがあると思ふ。公私一体と云ふのが極致であることは予の従来より唱（称）道する所だ。三国将軍が師団の現状報告書にそへ軍司令官宛長い慇懃なる私信を送り越されたのを見て之れある哉と感心した。一片の報告、一通の私信だけでは報告として司令官の心を満足せしめない。公的の報告書と共に師団長より軍司令官宛の親書を添へられた事に依り軍司令官も軍幕僚も共に満足したのであった。心のみの親切は素より有難く感ずる。更に此の精神的なものを形の上に於て具体化する時如何に相手を感激さすであらう。人間は精神だけで常に動くものでもなければ物質だけで救はれるものでもない。矢張り物心両面、即ち全的総合的のものに依り動くものだ。統率でも交際でも凡そ人間の取扱と云ふ問題になると全的総合的見地で行かなければ十分でない。然るに我等は過去に於て分析に失し、一方的に於て処理する傾向がなかったか。余りに潔癖でありすぎはしなかったか。人間は決して純粋のものでない。理で動く反面、慾も加はってゐる。人心は爾（し）かく清純であり得ないのを普通とする。勿論純粋は尊ぶべきことであるが、此の境地に達し得ないで居るのが衆生の現実である。単なる精神家になりきる勿れ。単なる物質的俗物になる勿れ。特に人の指導とか交際に関して然りである。

十一月二十五日

世の中に動機論と方法論とがある。動機さへ良ければ手段方法は大目に見ると云ふ流儀と方法の良否を重視する流儀の二があるが、予の従来の経験に依れば方法論を重視しない動機論で解決する流儀は殆んど問題にならぬ程単純であると思ふ。事実世の中で問題になるのは方法の良否如何である。故に之を軽視することは不可であることは素よりである。動機方法共に良好なるは望ましきことながら、両者を兼ね備へざる時、動機を著しく重視し方法を軽視することは適当でない。斯くの如き観念が多く世を害してゐる。手段方法を更に更に重視すべきものである。本質的に手段が動機より重いとは云へないが、世上余りに手段を動機に比し軽視し過ぎる傾向がある。若い者は特に此の方法を軽視し動機一徹に偏る傾向がある。予に云はしむれば凡そ世の中で事を為すに方り、方法手段は最も問題とする価値がある。老練達識なる者程此の方便に重く意を用ふ。事の成るも成らざるも方便の如何に依る事が非常に多い。此の方便には実に上手下手がある。動機に至っては常識で誰でも考へつく事であり観察に差等は少い。方便の巧拙の差等に至っては測り知る事の出来ぬ程隔りがある。だから方便の重視を高調する所以である。

青年の正義観は手段方法が単純なるだけ尖鋭である。老人になるに従ひ手段方法が広くなるだけ鋭さがない。

此の世の中に今少しく正邪応報が敏活覿面に行かんことを希望する。虚言が人に虚言と信じられることを自負する様な社会がのろはしい。

十一月二十六日

支那側の吾等ドーソン移駐の為の通行許可証は昨日日曜日の故を以て埒明かず、本日御前十時になって漸く許可した。吾等は之が為三日を徒費した。支那側の命令は早くて一週間の死節時を要する。日本軍の移駐計画は現地視察の時より一ヶ月を要して漸く発令となった。国富参謀の話に依ると、英軍の幕僚勤務は敏活であって日本に負けないだらうと云ふ。大抵の事は即座に決定し（事務的のことではあるが）遅くとも一日以上を遷延することがなき由。支那軍は此の点に於て列強に伍することは出来ない。支那軍も日本軍に劣ることを自認せるにや、支那各軍は日本側より砲兵将校や各部将校を招聘して幹部教育を開始し出した。支那軍相互の連絡は不良にして、情報を聞くのも直接支那軍より隣接支那軍に聞くより日本軍に聞く事を欲してゐる。そんな事は貴軍の何某の方が詳しいではないかと逆襲するとどう云ふ理由か之を拒否して支那側相互に聞かうとはしない。直系軍も地方軍との間は勿論、同系雲南軍の中でも軍、師、団等一たび異なれば外国軍隊間程意思の疎通が悪い。列強の軍隊迄一般標準を高めることは支那軍に取っては前途遼遠と云はなければならない。或は永久に不可能かも知れない。部分的には素より可能であるが支那が全体的に同一機能を発揮することは地理的特異性に依る障碍の為不可能かも知れない。支那軍が職権を利

用して物質的利益を収めること、即ち商才権才を発揮することは列国軍の及ぶ所でない程抜目なく且厚顔である。先づ日本の戦国時代の武力団体の如き感じがする。蒋介石は秀吉であり家康であり戦国時代の末期より元和の日本統一時代に転換せんとする過渡期に在るかの如くである。

午前十一時出発。予は病後の故を以て上田部長、世良司政長官と同車し乗用車にてドーソンに向ふ。ジャラム飛行場を横断したる故に支那側の検査も受けず午后六時無事ドーソンに到着せり。途中日本鉄道隊の鉄橋修理と日本工兵の渡場勤務に感激した。支那軍が若しこんな仕事をやるとしたら能率はあがらないのみならず気持が悪いであらう。安南人は日本兵と支那兵との差を如実に見て真に日本兵の頼母しさを認識してゐるらしい。世良司政長官は車中面白い話をされた。世良氏は岡山県の人であるが仙台の県庁に赴任した時、書記から世良氏は山口県なりや、私の父の言に山口県なら仙台藩を維新当時虐待した世良参謀に関係があらうから其の下で働くのはやめよ［と］言ったと。又山口県出身の県知事が山口県人に頼まれて宮城県下に在る世良参謀の墓に参らうとすると、県庁の人が仙台藩を苦しめた世良参謀の墓に知事が参られる様なことは止めて貰ひたいと申出て困った事がある由。其他世良氏が宮城県に居る時、貴方は山口県かとよく人に聴かれた。それ程宮城県の古老には維新当時仙台藩を虐待した世良参謀を忘れんとしても忘れられないらしい。之れに反し思出されるのは、世良参謀と同一立場に在った西郷南洲の庄内藩等に対する態度の恩情味のある事だ。事変処理後、西郷の人格に感激し藩主の公子以下を薫陶を受けに薩摩にやったではないか。世良参謀に対する憤激は未だに忘れられない。維新以後七十年にして尚ほ憤激の消えぬに対し、西郷の人徳は如何。観じ来れば軽薄才子の世良輩の社会人心に及ぼす悪影響と大西郷の大人格の敵側を感泣悦服せしめた成果とを比較し、斯くも人間価値の優劣あるかを思て感慨無量である。山田乙三将軍[144]が教育総監たりし時、維新当時東北諸藩の処理に於て軽薄才子が事を誤るの例として長岡藩処理に当った官軍某参謀（名はわすれたり）を挙げ、人間の養成に方り斯くの如き軽薄才子を造ってはならぬと戒められたと聞き、本日世良氏の話と思ひ併せ益々成程と感じた次第である。

車中、予はフト左の感じを持った。それは人間は物を持たぬ時は一切の物が欲しい。ほしくないにせよ物と物とに愛憎の分量は明瞭でない。然るに物を持つ場合、惜しいものと惜しくない物との分界或は自己の物と否らざる物との分界が極めて明瞭になって来る。特に自己の欲してゐる物を手中に収め得た場合、今度は之を逃がさない為に他の物との間に非常な差をつけ様とする。例へば美人を掌中に持つ人、貴重品を把握した人は之を自己の物として永久に他の一指も添へざらしめんとして自他の間に非常な差別感を抱く。と云ふ事は物に捕はれてゐる事が深いと云ふ意味とならう。物を持つ人はそれだけ物に捉はれ物に支配されつつあるのである。物に夢中になるのである。之れ

[144] 山田乙三（1881-1965）大将 1944年7月～関東軍総司令官、シベリア抑留を経て1956年6月、帰国（『日本陸海軍総合事典』p.166）。

に依り自己の公正なる判断、公平なる出所進退を誤らしむるに至る虞れが大である。

十一月二十七日

ドーソンの仏人の旧式別荘に落ちつく。海岸より数十米を距るに過ぎない。濤声は絶えず耳を刺戟する。予の部屋に在る姿見に依り予の最近の肥満状態は到底受傷前に及ばざることを自覚し淋しき感を生じた。上田兵器部長、金原軍医部長、緒方兵器部長[145]と同宿である。

本日は海防の連絡所、小林大佐に会ひに行く。石山旅館で昼食し神戸旅館の女主人とも会って嬉しかった。支那軍憲兵隊の軍紀厳正なる話を聞き嬉しかった。又、支那軍将校中、心ある者は東洋に於ては日本、西洋に於ては独逸が矢張り優秀であると認める者がある。支那軍人の兵卒中時々我々に敬礼するものがある。何応欽[146]総司令が最近河内に来た時、普墺戦争後の独逸の墺太利に対する態度が敗戦国として取扱はなかった為墺太利を感激せしめ、爾後の普仏戦争に大なる利を得たるのみならず独逸統一を容易ならしめたのを引用し、日本に対する中国の態度は普墺戦争に於ける独逸の如くなるべしと訓示した由。蒋介石の精神も茲に在りと万軍長等は日本将校に説明した由。

支那軍は家族を携行してゐる者が段々増して来た。海防の憲兵隊長の如き第二夫人と子供迄連れて来てゐる由。又、現地に於て華僑の娘を盛んに漁り、之れには華僑が泣いてゐるとの話だ。

ドーソンに来て田原中佐や小林参謀の話を聞くに、兵の将校に対する尊敬心が減少し指揮官が統制に困る現状の由。之は全部の傾向でなく部隊に依り差異ありと。凡そ斯くの如き現象の原因は九割迄上に立つものの慎しみのない事が元である。上に立つ者さへ慎しみがあり率先下と苦楽を共にするならば日本軍隊は崩れる事はない。

三十年の　礎石や空し　年暮るる

以上海防邦人引上を聞き感ありて記す。

十一月二十八日

最近接せざりし内地のニュースを聞き傷心の事多し。一人一ヶ月の最低生活費五百円とか。本庄将軍[147]の自刃。東久邇宮家の皇族籍御返上、皇室財産中五億円の凍結等。日本は何処へ行く？の感深し。

本日終日上田少将にお供して各宿営地を視察す。黒川部長を長とする漁労班の収穫最も人を喜

---

[145] 正しくは経理部長。

[146] 何応欽（1890-1987） 中華民国の軍人。1909年、日本の振武学校に留学。1911年に辛亥革命が起こると帰国して上海で活動したが、第二革命が失敗すると日本での学習継続のため再び日本に戻った。1914年12月、陸軍士官学校に入学し、1916年に卒業して帰国した。1945年8月15日、中国戦区最高統帥として日本の降伏を受諾した（『民国人物伝　第八巻』p.206-216、『日本陸海軍総合事典』p.683）。

[147] 本庄繁（1876-1945） 大将　1945年11月、自決（『日本陸海軍総合事典』p.143）。

ろこばす。取り立ての肴にて御馳走になる。コレラ患者数甚し。司令部にも五名の死亡者を出せり。

十一月二十九日

安田司政官、心臓麻痺にて死亡。告別式参加。

仏人の対日感情は不可。勿論当然の事ながら我軍に借す家屋を態々中止し、米軍に藉す様な例もあり。茲に至りては安南人は我と親し。

人に用ひられざるは矢張り角があるとか我儘とか従順性がないとか何か人に嫌られる欠点を有す。予の当番、谷口上等兵の如き人に可愛がらる性質を有す。所謂用ひらるる型なり。矢張りその人の美点長所なるべしと云へ、斯くの如き人に用ひらるる人は骨抜きかと云へば左に非ず。同じ一言にても或る人は人に採用せられ或る人は人に排斥せらる。口上の才、人徳…等の有無大小に依るなり。

数旬振りにニュースを聞く。東條大将の一千万円事件、近衛公の二千万円使用事件等、斯くの如き事を攻撃する者こそ人格の劣等なるを表明す。人心攻撃も斯くの如き点を攻撃する方の人が却って人格を疑はる。日本は今、日本人相互の排斥を行ふべき秋なりや。例の斉藤義雄代議士の如き米国の手先の感あり。日本共産党首領が元将校二十一名に暗殺を狙はれ米軍に保護願を為せし事こそ笑止なれ。

十一月三十日

上田兵器部長のお話。新京の補給廠長時代に部下の軍属等が俸給の前借りしたり酒色で問題を起して取締に困った。何にして此の非違を防遇せんかと悩んだが結局書道を普及することにした。其の結果は俸給の前借等はなくなったのみならず夜遊びの習慣なども絶無となって非常に効果を収めた。又、個人的に書道の熟達に依り事務能力の向上やら書記資格の向上等利益を利たるものは少くなかった。結論として思ったよりも書道は偉大なる力があることを知り、自らも此の時から書道に親しみ尚持続してゐるとの事である。上田閣下から借した吉田苞竹の書道読本の中に僧丈草が門人の発心せるものを警めた句「蚊帳を出て又障子あり夏の月」があって、向上は決して平坦容易でなく幾多の難関を突破するの勇猛心を要することを知った。

昨今の毎日の日課は午前六時起床、六時半朝食、七時より十一時迄勤労作業、正午昼食、十四より十六時迄勤労作業、十八時半夕食、二十一時消灯。予は屯田兵の姿も斯くやあらんと想像してゐる。追々と帰還輸送が具体化して来る。将兵の楽しみは之れのみである。恐らくは明年八、九月の頃引上げられるのではあるまいか。

栄養のよいと云ふ事は病気の恢復率も速かになるもので、当地へ来て魚類や卵(タマゴ)を盛に食べる関係か、予の神経切断の恢復が目立つ様であるし肥満も目立つ様である。贅沢と栄養良好とは区別あ

る事を考へねばならぬ。粗衣粗食は健康人の云ふ事である。

十二月

十二月一日

海防の南側の橋梁のたもとに内藤准尉等数名支那軍と同宿してゐるので、支那軍に一面の挨拶の為本日思ひつきに赴くことになった。二十五才の支那軍の中隊長に会って好意を以て迎へられた。夕食の御馳走になったが突然の訪問としては仲々馳走であった。中隊附将校は四名、兵と同宿してゐた。中隊長は日本刀を帯び日本軍から接収したカーキ色の良好な毛布三枚を所持し、将校は日本の航空靴を全員はいてゐた。予が金をやらうとしても仲々受取らない。そんな心配はいらぬ。朋友の間柄であるとて辞退した。その代り拳銃がないか、自転車が欲しいと云ふ注文があった。中隊附将校で彼の同期生が居るが仲々性が悪いと内藤准尉が云ってゐた。支那人も各種各様だ。

自動車の通行が六つかしくなって本日中に「ドーソン」に帰り得ず、已むなく海防連絡所に一夜お世話になる事にした。夏服夏襦袢では夜分寒いこと夥しい。海防も支那兵が充満し支那町に転落した。越盟の少年団が越盟歌を高唱しながら市内をデモンステレーションする有為転変は世の常と云ひ乍ら変れば変るものだ。金原軍医部長と同道であった。

十二月二日

午前中寒くて夏装束の予は震へ通しであった。支那憲兵隊の検査が午前中終って予等の自動車は漸く海防を出発する事になったが、惜しむべし昨日の中隊長の居る所でひっかかり憲兵隊の通行証明書では埒あかず警備責任の第二十二師の許可証を要すとて一悶着を起したが、予が面識なるを以て中隊長と団本部との交渉の結果、本日は通行を特に許す今後は規則通りにやれと云ふ事になった。支那軍は上直系統の命令でも最近の上官の命令でないと仲々動かぬ。此の点一面頑固さと堅実さとがある。金原軍医部長の駐独の経験に依れば日本人の勘の良さが独逸人にはない。碁に於て独逸人は数理的に万事解決しやうとするが日本人の訓練された勘には及ばない由。日本人の勘を今後益々発達せしめ列強と太刀打しなければなるまい。

最近の世相の変遷を見て順境の時は慎しみ逆境の時は操守を堅固にするの必要を特に感ずる。処世の要道はこれであらう。軍人生活を回想しつくづく之を感ずる。世相は波動を以て進む。凡そ物の進展は波動的に行はれないものはない。動と反動との連鎖がなければ進み得ないのである。だから波動に一喜一憂するにたらない。予の死ぬ迄に更に新軍の建設に依り軍人を頼母しく感ずる時機の到来せんことを祈り且実現を信ずるものである。

十二月三日

曇天続きにて稍寒気を覚ゆ。午前耕地作業に従事す。

鍬取りて　故国を忍ぶ　暮の秋

人と土と　親み深み　年暮るる

鍬振ふ　呼吸は同じ　剣の術

天地恒常　世路変遷

因果有法　人心波動

大愛の発する所些末の問題は自ら解消す。司令部内各部班の摩擦、階級尊重観念の消磨、上官に対する不服従等、杞憂する者あるも大愛の慈光に照されば自ら解消すべき問題なり。夕食後上田、緒方、金原各部長と例の如く雑談す。談偶々農家の副業に及ぶ。最も有望なるものは蜜蜂、兎、鯉、菌の培養等なりき。鯉は一匹二十万箇の卵を有し内ケゴとなるもの三千五百位。之を匙に二杯位一段の水田に入るれば秋頃五寸位に生長するなりと。

予の偽はらざる所懐に依れば、戦争中は米国は恐るべき敵なるも憎き敵とは思はざりき。然るに終戦後の彼の対日施策が余りにも憎悪と怨恨に満ちたる非合理なるものなるを以て憎悪心を激発せり。恐らく日本国民の多くが予と同様の所感を有するならん。

十二月四日

茲数日は雨天と曇天続きなり。本日のニュースにて日本一流の思想家、政治家、実業家は米軍に逮捕せらる。米軍に逮捕せられざる日本人は寧ろ日本人としての資格に乏しきものの如し。唯米軍は少壮有為の人物に未だ手を伸ばさず。日本復興は寧ろ此の少壮者に在るに非ずや。老成者を虐ぐるは国民一般の憤激を増し実質的に米軍の為有利ならざるべし。日本の若き者よ先輩の遺志を忘るる勿れ。

安南人は男子に比し女子が非常に働く。安南女がよく働き且男性的なる日本の男子と意気投合する所以も茲に在り。即ち安南女より見れば安南の男子は不甲斐なく日本男子は頼母しく思はるるなるべし。

金原軍医部長より有益なる参考事項を聞く。即ち独逸にては将校の適性に大なる関心を払らひ毎年各階級に応じ将校の適性検査を為すなり。適性検査は単なる智能検査のみに非ずして血液等根本的資質を調査し地位職務に適合せざる者をオミットするなり。又適性と職務との調和に注意し日本の如く階級に応じ職務を配当するが如きことなし。例へば国防省の医務局長は某少将が任じ軍医学校長は某軍医大将が任ぜらるる類なり。職に応じ階級を附するに非ずして服務年限に応じ階級を附与するなり。日本将校は此の適性主義を無視し、又将官の身体的検査を閑却す。例へば花柳病の血液を有し発狂せざる迄も非常識行為を為す将官は日本に多きに拘らず之を閑却しあり。斯くの

如き疾病ある人は大決心大経綸に於て合理的判断を誤ること多し。今次大戦に於ても将帥として兎や角云はれたる人は血液検査を受くべき資格ある人なりしなり。

今次大東亜戦に於て将帥として真価を発揚したる人に今村均大将あり。将軍は真に神の如き性格の人とて訪ふ人は皆感心せり。之に反し高等司令部の幕僚は多く顰蹙すべきものなりき。南方軍総司令部の如き特に然り。彼等は嘗て下級の軍以下に讃められたることなく、下級の軍司令部と喧嘩すること多かりき。支那派遣軍総司令部の事務の取り方は南方軍総司令部に比し些か上等なりし事を断言す。其の事務を取ること下僚に対し親切にして且、先を見るの明あり。且、処断機敏なり。

十二月五日

軍司令官閣下「ドーソン」着。例の看護婦問題には閉口の至りだ。此の時機に於ては、己れを持すること厳なる外統制力はなくなる。或る意味に於て日本の苦境は特に上層指導階級に自粛と反省を与へてゐる。正しい日本人になる事は上層指導階級に特に必要である。

十二月七日

現地自活や職業教育の具体化で各部長参謀色々と協議する。案のない議論は実がない。何か素案でも持って協議することが建設の早道だ。たとへ反対されても反対意見が具体化して現はれて来る。結局案を以て会議に臨むことは具体化実行化の捷径だ。

十二月七日の夜、芳枝が重病の夢を見た。事実でなければよい。夢は何処迄信じてよいかわからない。ニューギニヤの第十八軍では九〇％の死者を出したとの事だ。ニューギニヤ程今度の大戦で苦戦したものはなからう。

大東亜戦も本日を以て丸四年になる。何と感慨無量の事であらう。植物の栽培に於ていぢめつけると子孫を残さんとする原理に依り立派な実を結ぶと云ふが、国家に於て此の原理が適用されるなれば日本の将来も悲観すべきでない。帝政ロシアの没落は露国の為不孝であったが、最近のソ連の勃興は露国がいぢめつけられた結果とも見え、植物栽培の原則と一致する様である。独逸の敗戦と勃興も同様である。但し現在の日本は爾後の生長が出来ない程いぢめつけられてゐる。このいぢめ方の程度と日本国民の耐忍力こそ国家再建の決定権を握ってゐる。皇室と国土と国民があったなれば即ち植物の生命の核心に等しいものが健全であったなれば再び芽を出し実のる時期も必ずあらう。

十二月八日

天下の為大慈悲を行ふことが予の終生の願望である。之れを取り去れば予には生存の意義がなくなる。予に接する者にして暖かき感じを抱かないものがあれば、それは予の念願の強烈でない証拠

である。予の大慈悲の念願は発散して暖か味を以て四周を光被してゐるのである。予を事業家とか精神家とするは共に予を知る言でない。予は救世の道人である。仁者である。予が仕事が早いと云ふ特色があるとせば、そは性急の為ではない。一刻も早く世の為人の為に図らなければ我慢が出来ないからである。之も慈悲心の発露である。予の方針は右の通りであるが之が実現には拠点—立脚地—を要する。目下の悩みは如何なる拠点を得て之を為すかである。予の如き恒産があるわけでない。如何にして当座を生活して行くかが差し方りの問題となる。考へれば何となく淋しくなる。

十二月九日

海防の連絡部長小林方明大佐、船舶部隊小山中佐来る。小山中佐はガダルカナル最後の撤退作戦に於て部隊の乗船を運営したる人なるが、ガダルカナルの作戦に於ては梅干しが贅沢品であるか否らざるかが問題となった。何となれば極度に補給品を圧縮減少するの必要を認めたからである。彼地に於ては梅干一箇は副食品として五日乃至七日間を支へたと云ふから梅干の価値も偉大だ。そんな気持で居るならば今頃食料不足など声が高いが随分尚余裕のある話である。船舶部隊の様な危険な仕事に従事する部隊でガダルカナルの作戦の様な九死一生の危険圏に在っては、最後の引上げに殿軍とならざるを得ないから分が悪いわけである。従って口実を設けて早く撤退しやうとする。茲に軍紀問題を生ずる。今度の大陸の撤兵に於ても船舶部隊が殿(シンガ)りとなるから空気が険悪になる。此の険悪な空気を押へることが隊長として苦心の種だと云ふ。国軍全般的見地に於て考へて見る必要があらう。兵器部の後藤中尉は召集将校で本年五十一才、炭鉱社長其外幾つもの会社の重役をしてゐる人であるが、軍隊を目して情がないと云ってゐる。威圧主義で温情主義でないと云ってゐる。

小磯将軍[148]が現役を退った後の所感にも、現役軍人（陸軍を指す）は一旦退職した軍人を捨てて顧みない、此の点では寧ろ一般社会人の方が遥かに人間味があると云はれたと。陸軍には確か組織的の反面機械的に失し人情のつながりが少い所があるらしい。戒めねばならぬ。之は一面世帯が大きく転任等が頻繁で、他の一会社一銀行と云ふ様な精神的脈絡がないからであらう。

榊原参謀に就て予が感心したのは準備と云ふ事に手早く且周到だと云ふ事だ。人間の事に直面しての処断と云ふものは左迄能力上差のあるわけでない。併し準備に対する態度と云ふものは人に依り随分と差等があるもので、物の成否も此の準備に負ふ事が多いから、成功者と不成者との差異も茲から出ることが多い。随って榊原参謀の如きは事業の成功型と云ふ事が出来やう。準備に熱心周密である。型に努めて居る様に心掛けねばなるまい。直観型の人間は準備周到と云ふ段になると欠陥が多く、組織型の人間は之に反す。日本人は準備と云ふ点に寧ろ欠陥が多く米、英、独人は

[148] 小磯国昭（1880-1950）大将　1942年5月～1944年7月まで朝鮮総督、その後1945年4月まで首相、1948年11月、A級戦犯として終身刑判決、1950年、巣鴨収容所で病死（『日本陸海軍総合事典』p.63）。

之れに反する傾向がある。

小林参謀が海防連絡処長として対支折衝上の経験を語る内有益な事があった。それは工作と称し物をやったり御馳走をしても、彼等支那要人は華僑よりも之を受け、結局御馳走や品物は飽きあきしてゐる。矢張り今後持続的に彼等の信頼を得るには当方の誠意より外はない。此方のゴマカシの申請書は許可に時間を要し甚しきは不許可となる。之に反し条理の通った事は彼等の許可も早い。此方の真面目なる仕事、彼等の注文の誠意ある実行は彼等の好感を博し信頼を増す。期する処は交渉も真実である」[ママ]と。以上は曽国藩の李鴻章に対する外交上の訓言と符節を合し感銘を覚えた。支那人も一皮剥けば日本人と同じ様になる。世界各国の風俗習慣は違ふ。併し此の一皮を剥けば人情に変りもなく真理は永久に真理として認めらるるのである。日本の対米折衝も真実にして日本人の魂の叫びを以てする事が必要である。阿諛も術策も陰謀も共に不可である。

山下大将[149]がマニラで絞首の死刑を宣告された時、恭しく起立して裁判長以下に法廷に於ける裁判は終始公平であった事を感謝し従容刑に服したので痛く米人を感激せしめたと世界の各ニュースは報じてゐる。日本人の真価を発揮され、又、山下大将の最期を飾るものとして尊敬に堪へない次第である。

人は三井財閥などと悪口を云ふかも知れぬが、三井の組織事業の経営法は日本実業界に於て最も出色した有能なるものである。詳しい事は知らぬが印度支那だけに就て見るに、日本より進出せる数多の商社の中でも三井が一番総ての点に於て出色してゐる様に見受けられる。其の福利施設に就ても大したものだ。一例を挙げんに、河内の日本人中、軍官民を通じ一番上手な料理人（日本人）を持ってゐるのも三井だ。「ドーソン」には「コンクリート」製の立派な別荘を持ってゐる。其の位置と云ひ建築と云ひ優秀だ。社員の趣味涵養の為膨大な書籍（謡曲の書など大冊なもの）を交易物資の中に織り込んで送って来る。目下「カンエン」に日本人居留民が収容されてゐるが、三井に関する限り各人の毎月の雑費五〇〇円位は社で持ってゐる。斯くの如き福利方面だけを見ても遠く他の商社が及ばない。その豊かな財力は人材を吸収する所以であり人材を吸収する所事業の能率も向上する所以だ。特に歴史があり訓練がある。優秀ならざるを得ないではないか。三井の形を壊して此の良能美質を絶えしむることは国家的にも損失と云はなければならぬ。

敵米英は日本刀を日本軍国主義の象徴と云ひ乍ら其の精巧には舌を巻いて感心し垂涎措く能はざるものがある。彼等の日本刀を珍重がることは予等の想像以上である。日本刀は世界的の美術品となってゐる。彼等は宝石と同様に取扱って表面は日本軍国主義の象徴として日本から之を剥奪せんとしてゐる。特に日本刀に彫刻してゐるものは彼等の最も欲するものだ。

---

[149] 山下奉文（1885-1946）大将　1944年9月、第14方面司令官、1945年12月、米軍法廷で死刑判決、1946年2月、ロスパニヨス（フィリピン）で刑死（絞首刑）（『日本陸海軍総合事典』p.165）。

十二月十日

予を目し「君は妥協性に富む人物だ。親和力を不思議に持ってゐる」とは兵器部長上田少将の本日の言だ。予に妥協性を持ってゐるとは些か憤慨せざるを得ぬ。予は決してそんな卑俗な根性はない。不和雷同派でもない。福島久作大佐の如き予を目してどうでもよい主義の人間だと云ったが如き予を理解せざるも甚しき言葉だ。予の真価を知らずして軽率皮相の非難も賛辞もして貰ひたくない。妥協性、調和性、親和力の如きは予には少壮時乏しき性質であったのだ。寧ろ予は独立独行孤立主義に近かったのだ。所が予が天下の為大慈悲を行はんとの大悲願を立てて以来、予は逐次社会の支持を受け人とも調和する風に向いて来たのだ。何となれば破壊否定は概して物を生かす所以でない。だから予には同意が多く不同意は少いのだ。之も事柄によりけりで八方美人では毛頭ない。予を批評するなら松平中佐が予が第二十軍参謀時代に云った様に「貴方は何か一つ持ってゐる。貴方の傍に寄ると何だか暖かく感じる」と云って貰ひたい。予の此の大慈悲を指摘したのは未だ佐伯参謀一人あるのみだ。さはあれ決心悲願は大事なものだ。身体に或種のエネルギーを発現し自己のみならず周囲に発散するからだ。侠客道に於て「男になりたい」と毎日誓願する理も成程とうなづけるのである。初一念の発する所金鉄も亦通ると云ふ語は或種の物理的理由を認める。

緒方経理部長曰く、支那軍人は自己の利益あって国家の利益と云ふ事を考へない。関銀券の使用も自己の利益の場合のみを打算するから其の価値は次第に逓落し、之が為中国の蒙る損害の幾何なるを知らず。日本軍人なれば誰でも之に反対の考へ即ち先づ国家財政を考へるであらう。支那は依然救はれぬと。上田兵器部長のお話しに、支那軍中若い層に革新分子があって従来の支那式では不可ない、日本と大いに提携せねばならぬと云ふ目醒めた人間が居るらしい。憲兵隊などはその部類の人間が多く賄賂などは殆んど取らない。憲兵隊に関する限り日本は反対で、最も比較的に一般軍人より俗悪者が多い。大陸からの内地帰還に方り米軍が日本軍の所持品を点検したるに、憲兵と海軍が多く一般陸兵の余りにも貧弱なのに一驚したと云ふ事だ。

夕食後、部長等の談話に日本管理の米国の方向に反発するのは却て先方の弾圧を食ひ策の得たるものに非ず。其の方向を逆用することが必要である。例へば個人主義を流行さすなら此の勢を利用して個人教育を盛んにすべしだ。従来の日本のやり方で学校教育に四ヶ年かかったのを二、三人の徒弟対先生間の個人教育要領に依れば一年で済んでしまふ。個人の個性を発揮したり天才を伸ばしたり、従来日本の一括主義を打破し質の能率的向上に努むべきだと云ふ意見が出た。又、将来の戦争は新しき型でなくてはならぬ。例へば細菌戦は現在余り行はれて居らぬが之を極度に発展せしめると戦争ならざる戦争が行はれ人の知らぬ間に一国家が死滅すると云ふ様な事が出来る。五年の後に病毒が発現して始めて効果が現はれるから謀略の原因が判らなくなると云ふのが金原大佐の所説だ。

緒方経理部長の話に欧米の官吏軍人の給養規則は極めて合理的だ。換言すれば個人主義的で

極めて打算的で寸分の隙がない。之れに反し日本の給養規則は一律的で大雑把で非合理で抜目が多い。家族制度を基調と云ふけれども之は云ひのがれで煩瑣を厭ふ言葉だ。例へば欧米の家族手当と云へば子供一人につき計算し、独身者と妻帯者とを区別し、妻帯者でも同棲か独立の二本立かに依り給与料を異にする精緻さだ。だから文句の云ひ様がない。日本の家族手当など最近数年間始めて行はれてゐるのであるが、子供三人以下と三人以上とて区割をつける。此の区切りは何にも基礎があるわけでなく計算を簡略にする為の思ひつきにすぎない。こんな処は未だ々々日本の規則は改善の余地が多いと云ふ（風説に陸軍省で原案を造った人は子供を三人持って居たからだと云ふ）。

従来陸軍の主流に位し将来を最も予約された純軍人系、例へば参謀の如き部類が今後の就職に於て最も難渋を感ずることは非合理だ。国家の為最も尽瘁した人が戦争犯罪人に問はれ、非国民として倶に供に皇土に齢の出来ざりし共産党員などが日本の国に幅を利かす矛盾した世の中だと思へば、或は一時的現象として己むを得ぬ所であるのかも知れぬが個人としては迷惑の至りだ。

十二月十一日

香川憲兵中尉と畑の草をむしりながら雑談する。嘗て吉田松陰先生が畑の仕事をしながら子弟を誘掖（ゆうえき）された気分も偲ばれ感慨に堪へなかった。香川憲兵中尉は特高課員として河内に於て越盟の検挙訊問に当ったのであったが、今次の終戦に伴ひ拘束越盟党員の解放を要することになったので留置所に行き、香川中尉は、終戦、日本の敗戦に伴ひ君等を解放す、随分気をつけて越南の為働いて呉れ、日本の真意も素より越南の幸福を齎すに在ったのだ、今迄取調べの際苦痛も与へた事もあったらうが此の点はお詫びする」[ママ]と云って入口の鍵を開いたが一人も外へ出る者はなく、反対に留置者達は香川中尉の手を取って留置所に引き入れ皆んなで香川中尉に取りすがり泣くのであった。香川中尉も自然泣けて来ると云ふ劇的場面を展開した。それから従来頑として口を割らなかった者も従来の不淡白を謝すると共に越盟党員として活動した一ブシジュウを白状する者もあった。香川中尉は安南人の可憐さを痛感したと云ふ。パクニンの親日安南娘の自殺も思ひ出され感慨をそへるものがある。従来如何なる拷問にも頑として口を開かなかった越盟婦人宣伝部長の某女が香川中尉と夕食を共にするに於て彼女は突然泣き出した。質問すると誠に相済まない、日本人に斯くの如き人間味の豊かな所があるとは知らなかった、従来妾の接触した日本人は悪質の者ばかりであり又日本人は悪い事ばかりすると聞かされ、自分も斯く信じて居たが今日始めて日本人の真実の良さがわかった、今から自分の越盟に関係した事を白状すると云って自己の潜行運動を白状した。それが憲兵隊が最初知った越盟の内容の主なる資料となったと云ふ。日本人と安南人は日本人と朝鮮人乃至支那人より以上に相互に同情的感情にあると云ってよい。日本は少くも安南人に悪印象を与へる行為はしてゐない。

予等参謀宿舎の新設定に伴ひ予は部長宿舎を出る事となった。各部長集まり予を歓待して下さった。石橋司政官も来り会した。石橋司政官は有名な遊び手であるが非常に女に持てる人柄だ。人品も良いが気分がカラリとして朗かだ。彼は女に持てるのも男に好かれるのも動物に好かれるのも結局は同一心理である。この人は悪い人でない。真実の人だと云ふ気が相手に起れば何でも好意を寄せるのは当然でないかと云ふ。

上田少将より予に対する注意があった。予の人との調和、人を親和せしむるは天才的な所があるが、仕事の積極性と明確なる意思表示は今一段進境を望むと云ふ事であった。仕事の積極性に就ては必ずしも上田少将の観察は当ってゐない。別に予は親和力を持ってゐるわけでもないが好意ある注意であったから記して置く。

十二月十二日

昨夜面白い夢を見た。昨夜の会食時の上田閣下との懇談が刺戟となったかも知れぬが、権藤正威氏と予との懸案の反発関係が綺麗に清算された事だ。予が赤心を吐露し権藤氏に対し過去の氏に対する予の感情の変遷を物語ったのに対し、権藤氏は最後に地面に手をつけて予に陳謝した。彼も喜び予も喜んだ。予は之を単なる夢とせず權藤氏の霊と予の霊との交流であると信じたい。権藤氏は独逸潜水艦に依り日本に帰還せんとしてアフリカにて行方不明になった。予は従来権藤氏に対し反感を有せしが、故に斯くの如き報を知ったとき内心は却て愉快に感じた事は申訳けない次第であるが偽りなき告白だ。彼の霊も今では故国に帰還したであらう。最早予は権藤氏とは旧来の反目関係を一掃し友人として霊交する事が出来る感情となった。最早予は権藤氏の悪口を云ふ必要はなくなった。之を「霊の和解」と名づけたい。兎もあれ他人を攻める前に先づ自ら反省せなければ和解などは出来るものでない。人は公平を欲する天性があるが故に公平ならざれば和解調和はない。

十二月十三日

人間の美の中で一生懸命の姿と云ふものがあると思ふ。之は粉飾と云ふのでなくして一生懸命になった際の体内の或種のエネルギーが発散して人をして何となく頭を下げ、或は感動に打たれるのであらう。

森建技少佐は軍司令部に於て内外の信頼を博して居る。少佐の真実性は人を感動せしめ、少佐の技能が卓越して居るからである。階級は年齢の関係やら召集の関係上低いのは己むを得ないが、森居中尉等も人に信頼される一人であらう。終戦以後階級や職の威力を減じ、人間の持つ本来の価値が逐次発揮される様に感取されることは却って嬉しい事である。

参謀宿舎は移転した。田原中佐、神谷中佐、榊原参謀と予、四人が各室に別居し食事迄別個にし当番迄割拠主義であるのは不思議な現象だ。人間は何故斯くも我を張るものか。

森居中尉の話に依れば欧州の各王室は副業として時計修繕業を持たれてゐると云ふ。之は一朝没落の際に生計に困らぬ為だ。治乱興亡に経験深き欧州に於ては此の用意が訓練されてゐる。此の点はオボコ娘の様な日本人の省察を要するものと思ふ。貴金属や宝石類も富の蓄積として各家庭に持てば今次の大変動等に際会した際、之が教育費や生活維持費となる。斯くの如き非常の場合の準備は各自の心掛として必要である。

米国は日本軍隊を潰滅せしめ日本軍人を虐げつつあるけれども、日本国民は軍部の力強さを憧憬回想する時機がやがて来るものと思ふ。大正七年頃の軍部排斥時代と異なり今度は反対に心の中では軍部を慕ふ時が来るであらう。

真正の軍人ならんとし人一倍苦労し修養し又能力優秀にて軍の要職を占めたるものが此際最も失業の苦を嘗め、或は国家に最も忠ならんとしたる者が戦争犯罪人として罪を問はるる矛盾を如何せん。道徳上より云へば斯くの人々こそ最も救はるべきものでないか。

お互に語り手となって聞き手なき談合を見ることあり。是断じて紳士道に非ず。斯くの如き光景を見る時滑稽を感ず。斯くの如きことを為す内は未だ人間の修練は出来あらざるの証なり。

広く浅く趣味を求むる人と狭く深く之を求めざるを得ざる人あり。前者は物の始めに着手するに興味を有し後者は物の着手始めに難渋を感ず。

十二月十四日

司令官宿営地巡視に随行。漁労班黒川大佐を訪ふ。神谷参謀と昼食を御馳走になる。漁夫の如き特業者、特に生命を賭して仕事に従事するものには一種他の者の想像もつかざる職業堅気即ち仁義あり。此の点に注意せざれば取扱を反発す。

年の寄った人の言は味のあること多し。傾聴すべし。

人生は決して澄明体のものに非ず。此の現象を会得せざれば終始憤慨し煩悶し懊悩せざるべからず。渡世に於て「オホホノホ」「エヘヘノヘ」式に軽く受け流し軽く茶化する呼吸をも解せざるべからず。悉く深刻に考ふれば即座に悶絶せざるべからず。

戦術的攻勢を可とするや、戦略的随意退却を可とするやは大いに研究を要する場合あり。然れども戦略的随意退却を決心することは戦術的攻勢を行ふよりも難事なり。

予も此の代になって「岩國参謀」と人に云はれるより「高級参謀」と呼ばれる方が気持ちがよいのは何故であらうか。恐らく予のみならず凡そ高級参謀を経験した者は斉しく予と同様と感じを持つに違ひない。将官相互は決して「何々君」とは呼ばない。上級者が下級者を呼ぶ場合でも「閣下」の語を用ひて居るのは前者の場合と同様の心理からであらう。

人に対し辱しい事はつらい。併し良心に対し辱しい事は尚更つらいことである。蓋し良心に対しては常に監視を受けるに比し他人の監視は爾かく常続的ではないからである。

如何なる波瀾苦境に遭遇するも誠意と正道とを尽すことが予の畢生の念願である。恰も難航時の船が一途に羅針盤をたよりて方向を維持する様に。

若い間は「公憤」と称して興奮する傾向が強い。予など未だその傾向が多分にある。或る程度必要であると共に或る程度以上は益がない。

理性と感情と分離するが如きことは云ふべくして仲々出来難いものだ。「罪を憎んで人を憎まず」とか「人を信じて行ひを質す」と云ふ様な事は容易に出来ることでなく、寧ろ感情と理性とが一体化して化合物を造ることが自然なのだ。而も此の化合物―混血児は概して感情により近いものである。

十二月十五日

今日は土橋軍司令官よりひどく叱責された。私憤を公務に加味して酒の勢でどなられたと云ふのが予の見る所真相である。だから十四日の所感の様に之を受けるのに「エヘヘノヘ」「オホホノホ」と云ふ弾力性ある態度と如何なる場面に臨んでも誠意と正義とを踏むことを忘るるなと自戒したのである。信長は偉大であったが十中一、二はすぎた行為をすると云ふことが土橋将軍にも当てはまるであらう。

十二月十六日

昨日、佐藤参謀、河内より連絡に来る。河内の連絡所、三沢大佐の所はゴチャゴチャしてゐるに対し、海防の連絡所、小林大佐の所は融々和楽してゐる。長の性格徳性と云ふものは恐ろしい力を発揮するものだとつくづく感心する。嗚呼、笑ったりおこったり泣いたり悲しんだりするのが人生だ。身辺の喜怒愛楽に没頭して一生涯の大部分の精力を消尽するのが衆生の常だ。

十二月十六日[150]

森居中尉と話す。外交家の随筆中、日本にて有名且有益なるは陸奥宗光の蹇々録で、或る外交筋では戦国策と蹇々録と二つを座右に備ふれば他の参考書は不要とさへ称する者がある由。尚、石井菊次郎の外交余録は有益である由。石井氏と佐藤尚武氏の人格手腕は若き外交家の憧憬崇拝の的であると云ふ。外交家個人の著述ではない山座円次郎伝は極めて有益な外交参考書である由。石井氏の外交余録の中で曽国藩が李鴻章に訓へたと同様、誠実が外交の要訣であることを説いてゐる。即ち自分が兎に角誠意を以て当ったと云ふ交渉は自分の想像以上国家から感謝され授爵の栄に迄思ひがけなくも浴した。之れに反し、これは巧くやってやったと策謀的に出て成功したと思った事が一向に感謝されない。之は結局国家に有利ならざるか少くも大した功績とならないので

[150] 12月16日は2回書かれている。

あらう。故に矢張り小村寿太郎の云ふ如く、何事も誠意を基とし進むべきものであらう。予は茲で一つの疑問が生じた。それは慈悲（愛）仁、誠の関係である。孔子の云ふ仁は恐らく誠を指すもので、表から云へば誠であり裏から云へば仁である式に同じものを指すのであらう。唯、誠は中正に基いた心であり仁は愛が基調となった心である様に思はれる。慈悲とか愛に至っては情的であり動物的であり片寄った一方的の心の様である。然らば誠には愛がないかと云へばそれはある。誠は果実の核の様な中心点でありその近くに慈悲や愛が存在するのであらう。

森居中尉の話では白墨で字を書くことを練習すれば毛筆の字も巧くなると云ふ。

十二月十七日

日本を今後如何にするか。本質の美を忘れず脱皮するのが今だ。本質を忘れない為には天皇制の維持。「制」なんて云ふのは適切な言葉でない。天皇統治の国体道の維持が絶対であり、守るべき日本国の最後の生命線である。他の方面に於ては日本人の啓蒙である。日本人の啓蒙には苦難悲惨の現環境を切抜ける創造力の養成が其の一半であり他は外国の美点の積極的吸収に依る質の向上である。此の際、踏々たる外国侵攻勢力に対し歩々の小抵抗は却て流されてしまふ。最後の一線迄戦略的随意退却すべしである。

十二月十八日

急に寒くなった。高橋大尉が殊勝に夜話しに来た。若い者は前途に光明を持ってゐる。高橋大尉の如き弱冠二十五才で今後三年間学校で勉強してから社会に雄飛しやうとしてゐる。若い者の間では吾等の一生中何とかして米国に一泡吹かして呉れるとゐきまいてゐる点は頼母しい。小学の児童以上、凡そ物心のついた人間には此の覚悟があるものと信ずる。年を取った人が若い者に親しむのは精神的モルモンの注射であり精神的若返へりである。

十二月十九日

兵庫県帰還者を予の首唱で初会同した。他県に抜んでたのは予の着想の結果だ。三十八名の多勢には驚かされた。吉井大尉から将来の農業に関し有益な示唆を与へられた。創意工夫する所、人生常に打開の道がある。豈個人の職業のみならんや。日本の苦難も此の創造力と勤勉性に依り必ずや切り抜けられるであらう。吉井大尉の家は但馬の篤農家らしいが、二、三創意工夫の例話を紹介したに依ると大尉の兄は農学校卒業後帰宅し頑固な父の反対を説き伏せ茄子などの温床を造った所、好評を博し二段ばかりの温床に拡張し一年中の生計費に相当する収役を収めたと。又、近所の妙見山の山上に在る二十軒ばかりの茶店が大正末期の思想界の混乱にて生計の道が断たるるや、都会地方の日本料理に使ふ絹莢豆を作り市場に出した処、大当りで此の茶屋は忽ち豊裕に

なった。蚕の飼ひ方でも従来のやり方に改良を加ふれば随分人手が省けるものだと云ふ。余り専門的になるから蚕の飼育法の創意工夫は省略するが、吉井家では一番種は大都市の買入人に二番種は地方の小商人に売り三番種は家で母御が之れでハタを織ると云ふ。それで吉井家の衣類は一切が絹だと云ふ。兄が県庁の役人をしてゐるが上司に対する歳暮の贈物は母の手製の絹織物一反で、他の人が百円や二百円の贈り物する以上に非常に珍重がられると云ふ。さもありなん。凡そ農家の副業をして損をすることはないと云ふ。或る兵の話に、麦を刈ってから水田に耕す間が十日位ある。此の暇を狙って大根種を蒔き十日間に出た小さい芽を取って都会へ売り出し相当の収役を得ると云ふ。斯くの如きは全く慧抜な着眼に負ふものだ。上田閣下のお話しに愛知県の安城附近は日本のデンマークと云はれる程農業が発達してゐる。そこの農学校と実科女学校の子弟の養成が預って力があると云はれてゐる。そこの実科女学校は純然たる農村の女子の養成に徹底してゐる。此の主婦の教育が安城をして今日の農業的模範地区にしたる大なる原因であると云はれる。日本今後の教育も此種環境に膚接する実学でなければならぬ。

漁労班長黒川大佐も四十時間台風の為漂流されて九死一生でやっと本日午后帰還されたが、打撲傷を受けられて臥床するのやむなきに至った。我々の口辺に登る塩乾魚其他の魚も斯くの如き生命を的の結果の収穫と思へば勿体なしと感ぜざるを得ぬ。米でも野菜でも粒々辛苦の結晶だ。有り難し々々と思へ。人間に至っては更に々々貴重なる存在なる故にかりそめにも人格を無視する様な軽率があってはならぬ。

金原軍医部長の言に依れば、片目は注意力を増加す。その反面気象が鋭くなる傾向ありと。

十二月二十日

三国閣下来らる。伊藤参謀随行。予の宿舎にて会食。田原中佐列席。

報道部の炭焼を見学す。思ったより簡単に出来るものだ。一般の農家にこんな方法を何故普及しなかったか。炭焼業者をして失業せしめるからかしら。土竈を造り煙突を設け薪を密室に配列し青草を以て隙をふさぎ上に土を盛り火をつけ終れば竈の入口を塞ぎ小穴とする。十七時間位燻べると云ふ。予も帰農したら必ず実行するであらう。

こんな方法は是非日本の農家に普及したいものだ。予の郷里など農村は創意工夫や研究心が足らぬと思ふ。炭焼位は誰かが知って居ればよい筈だ。

十二月二十一日

人生は擾々(じょうじょう)だ。終戦以後、大和民族の一大覚醒を要すべき秋に拘らず、日常生活は不相変人間の欲望やら一喜一憂に支配されてゐる。真に挙国一致とか団結の実を発揮するのは非常の場合の一時的現象で、大東亜戦の途上に於てさへ国内にも外征軍にも色々感情や利害に立脚した問題が

涌出したものである。河内連絡処長、三沢大佐の更迭問題も概ね此の類だ。人間の個性は変化するものでない。環境に依り性癖迄一変せしめる様な人は余程豪い人だ。

十二月二十二日

厚生省の厚生の字の起源は書経の左の句より採れるものなる由。金原軍医部長の説明なり。

正徳以率下制用以阜財厚生以養民三省和者所謂善政也

土橋司令官は客を大切にせらるる点学ぶべきなり。三国将軍の来らるるや其の居室の整備を点検せられ毛布の少き点を発見し自己の毛布を之に増加し机や椅子の配置を変更せらるる等細心の配慮を為されたり。

本夜塗山地区の演芸会あり。斯くの如きことも陣中生活に潤ひを持たすものなり。

十二月二十三日

「ドーソン」地区に支那側進駐し来り、善後処理の為大童になる。支那軍の連絡悪しき一例として同一宿舎に居る団副官と師副官とが日本軍に対する交渉を一致せずして別個に行ひ、其の言ふ事も支那側状況がまちまちだ。

現在日本軍の中には種々雑多の社会的地位職業者が居って、軍隊なる統制力の下に一丸となり階級相当の仕事をしてゐる。補充兵の一等兵の中には銀行の支店長あり大学教授あり警部ありで、之が一等兵として将校当番などしてゐる。支店長の茶汲みなど面白い。こんな社会的地均し作用は軍隊に非ざれば絶対に行はれないものだ。軍隊が解散すればこんな美点が失はれる。日本国民を上下左右に連繋し一丸とする作用は軍隊の大なる功績であったのだ。

十二月二十四日

三沢大佐、河内より来る。トリックは誰か知らん。人間凡百の摩擦は意思の疎通の不良なるより来る。意思の疎通は会ふ事、見る事、語ることが必要にして離るる事が不可である。二十四時迄会談す。

十二月二十五日

三沢大佐、内地先遣の参謀となり万事解決の感あり。予も全く大安堵す。

軍参謀長代理として現在は予が軍人生活最後の華やかなる時代なり。一朝内地に上陸せんか急転直下、其の日の生活もあやしくなるなり。恩給法停止、退職賜金停止等々一般軍人を何故斯く虐ぐるや。前途に希望なく、唯其の日其の日を責任に追はれて暮すのみ。昭和二十年正に逝かんとす。悪しき年、憎むべき年、予に取りても日本国に取りても兇はしき年よ。早く去るべし。

十二月二十六日

犬童副官より興味ある情報を得た。それは本月の三日、河内に於て官邸の当番が町を通過中、或る日本語の上手な安南人が呼び止めた。その方へ向くと家の陰へ呼び寄せた。すると一人のガッチリした日本人が居た。黒い眼鏡にカーキ色の国民服を着てゐた。その日本人が岩國参謀は居るかと問うた。当番は予が既に「ドーソン」に出発せるを知らず「居られます」と答へたら、宜しく云って呉れ、自分は名古屋の幼年学校で岩國と一緒だったと答へた。当番は「お名前は」と問ふと、■■[151]の「辻」と云ふものだと答へた。当番は犬童副官に語り、犬童副官は土橋司令官に語り、後其の町を翌日も心当りを歩いて見たが遂に辻には会はなかった由。辻も英軍の捜索の目をかすめ北部印度支那地区迄来たのであらう。予は本日之を聞いて残念に思ってゐる。何とか個人として彼と連絡したい。

予の提案で塗山地区部隊の県人会の結成が具体化するに至った。予の着意で軍司令部に時計修繕工が作業を始めた。予の着意で家庭必携が具体化せんとしてゐる。予も人の気のつかない所に気のつく特徴がある点を自ら認めてゐる。

皇軍は解隊しつつある。伝統と組織と之より胚胎する威力が失はれることは何と云ってもなげかはしい。

十二月二十七日

支那人は印度支那に於ては華僑にも安南人にも愛憎をつかれてゐる。「ドーソン」に於て市場で日本兵と支那兵と物を買ふと、安南人は日本兵に物を安くし支那兵には法外の価で売りつける。支那兵は金を払はぬわけではなく、官金に関する限り湯水の如く使ふけれども、一向安南人に人気を博さない。日本兵には豚肉の骨を抜いて正味の貫(メ)方で売る安南人は、支那兵には故意に骨を含んだ目方で売ると云ふ。「ドーソン」の町で買出に行った支那兵は荷物搬送の度人力車を傭はんとして呼び掛けるけれども、通行する人力車夫は見向きもしないで行き過ぎてしまふと云ふ。小幡少佐の話に依れば華僑が支那軍をひどく嫌ってゐると云ふ。支那軍中には真に悪辣なのが居って、華僑や安南人をいぢめたり其の顰蹙を買ふから支那軍全般の人気が悪くなってしまふ。之れに反し華僑も安南人も支那軍と比較して日本軍の良さがはっきりと認識されたらしい。家を借りても支那軍は決して家賃など払ひはせぬのに日本軍は必ず之を払ふ。此の信用が日本軍の人気を良くするのである。戦敗れても日本軍は決して華僑や安南人に軽蔑されずに却て見直されてゐると云ってよい。「ドーソン」でも支那軍が這入って来たので物価が登って来たが、対日本軍に関する限り従来と商取引に変化がない。予は信用の価値を今更の如く痛感する。而して此の信用は正直と誠実のみが贏ち得るものであると信ずる。督察処と云ふものが重慶政府の直轄と云ふが内実悪の固りの様なも

[151] この2字は文字がインクで塗りつぶされており、判読不能。

のである。彼等の任務は漢奸狩りであるが、如何にして華僑から金品を巻きあげるかに没頭終始してゐるらしい。小幡少佐や須賀少佐等に日本と関係があったと称し在北越の大物の華僑の名を揚げ日本軍と関係のあったことを強引に承服せしめんとする。而も事実は曲げられないから小幡少佐や須賀少佐等がそんな関係がなかったと云ふと先方の心傷を害する。そして取調べに時を移す。全く日本人には堪へられない。小幡少佐は今回督察処の取調べを受けた程不愉快な事はない。支那人の悪しさが骨味にこたへたと云ふ。之れでは支那はどうしても救はれないと云ふ。正に然り。取調べを比較して米軍は簡明直截の事務的鮮さがあると云ふ。

十二月二十八日

上田少将と夕刻軍司令官官邸を訪ふ。実は上田将軍のみ夕食を共にする予定の所、予は割入りしたのである。之も上田少将の企画に予も同意した所である。然るに報告が終って、予の夕食は軍司令官が慾せざる故、上田少将にも夕食を断ると云ひ出された。参謀が居ると参謀が看護婦を嫌ふからそんな人間と一緒に飯を食ふ事は不愉快であると云ふ。すったもんだで兎に角看護婦同席で上田少将と予と軍司令官、四人で食事することになった。そのきっかけに軍司令官は例の看護婦問題で悪評を買ってゐるのは幕僚等が悪評を黙認してゐるからだと難詰された。その巨魁が予であると云ふ様な言い方であった。軍司令官の言葉で云へば軍司令官と看護婦との醜関係を「消極的肯定」を参謀がしてゐると云はる。誰が烏の雌雄を知らんやだ。幕僚が好んで悪評する理由がないではないか。各部隊将兵の淘々たる軍司令官に関するデマを如何に防止するかを潜に苦心してゐたのだ。極言すれば予等を責むるのは「盗人猛々し」の感さへなしとせない。予も色々風評の一端を紹介して置いた。問題はない。理非曲直は何れの側に在りやは分明だ。分明すぎる事を問題するに当らない。予は虚心平気である。上田少将も予と軍司令官の仲に立って斡旋之れ努められる事を感謝するが、予は上の人の前に上の人の意を向へる様な言辞を為す事を嫌忌する。

十二月二十九日

午前、上田少将、緒方経理部長と共に七粁離れた農畜班を視察する。五日前、田原中佐以下三十名が分派したもので安南人の地主から三十町歩を借り受けた所である。安南人の地主の生活を瞥見して興味深かった。三十町歩と云ふ面積はこんなものかと判った。田隅本家が三十町歩持ってゐるので興味深く広さを眺めた。安南人の地主の住宅は支那人の家屋と仏蘭西式が折衷だ。掛軸の漢字や仏壇は東洋的であり、煉瓦造りの家屋の外部は仏蘭西式である。安南人は田植は女がするものであるとの習慣を持つ。日本兵が田植すると驚く、それで植初めだけは安南の女にやらしたと云ふ。

午後、予の栽培した菜畑に水を呉れてやる。大地は正直なものだ。肥料のある所の菜は育ちが

早く水気のある所は芽の出方が早い。自然は正直であることをつくづく感じる。人間のみ虚偽が多い。故に農民は正直素朴であるに反し、商人は駆引虚偽が多いのは環境の然らしむる所と感じた。予の如きはどうしても商売は出来ない人間だ。土に親しみを覚ゆる人間だ。

最近の所感に人間は如何なる美言善言を云っても実行之に伴はなければ却て反動的に人から反感を持たれる。之れに反し言はずとも行ひ正しく実行さへして居れば周囲の人は代弁者となって其の徳、其の主義を伝染敷衍するものである。之は人間の心理作用と云ふこともあらうが、有言不実行の徳は心から其の言になりきってゐないから至誠の霊波念波が通ぜぬに反し、不言実行者は心からなりきってゐるから自然念波霊波が人を感受せしむるのであらう。

十二月三十日

当地に進駐した支那軍の人気の悪い事無類だ。安南人が二人殺されたと云ひ、安南人は支那人に不売同盟を結成したと云ふ。市場は閉鎖されたので表向日本軍の購買も不可能になった。然し田舎の安南人に買ふ事を頼むと心よく奔走して呉れる由。

午前中、上田少将が地区を巡察されたので予も同行した。黒川部長の漁労班で昼食の御馳走になる。生きた海老の刺身はいかの刺味[ママ]以上に美味なものだ。又精力がつくものと見え本夜は暖かくて寧ろ熱すぎた。

森居中尉の骨味を惜しまず働くのには敬服を禁じ得ない。あの様にすれば人から尊敬を受けぬ事はない。

夕食参謀部将校の会食があり予も列席した。

十二月三十一日

本年は何と云ふ災厄の歳であらう。愛する日本が致命的の運命に転落した。悲憤筆舌に尽され難い。予の一身上に於ても大災厄であった。七月以来、予は夢の様な生活をしてゐる。精神的にも肉体的にも生涯に画期を与へた。而も幸福ならざる隔期を与へた。

予は今後、如何にして社会国家に奉仕すべきやに就て考へてゐる。考へながら昭和二十年終末の夢路を辿った。

1946年（昭和21年）

一月

昭和二十一年一月一日

予は四十四才の正月を迎へた。田原中佐より贈られた佐藤信淵の経済要録を読み正月より更生の第一歩に入るに決心した。予は先づ田舎に帰った場合、如何に生活するかを研究することにした。予は「更生の栞」なる手記を造ることにした。露西亜帝国の滅亡の際の帝政軍人の末路に比較すれば、我等日本軍人は未だ々々恵まれた環境に在ることを思はねばならぬ。過去を夢と流せば気分もすがすがし。

四十年（ヨトトセ）を　夢と流して　今朝の春　（元旦）

過去二十有七年の軍人生活に鍛錬した心身は無駄ではない。予は本年より五ヶ年計画にて一身一家の創業経営に志した。

再生の　旅路に立つや　今朝の春

一月二日

農と漁とを比較する機会を得た。予は農村出身であるが矢張り漁よりも農を取りたい。経済的に

云へば漁は遥かに農に勝る。一攫千金の儲けがある。勇壮進取の点に於て漁は農に勝る。併し道徳的に考ふれば漁は農に及ばない。漁には慈しみ育てる万物化育の精神が培かはれ難い。投機的であって着実性がない。かかる意味に於て矢張り人間の練成には農を元とする。

午前、ケンアンの小林集成大隊を訪ふた。混成第三十四旅団の善積大尉が来たので、予は介添役で自動車で同行したわけだ。ケンアンには緒方大隊[152]と小林大隊との二つがあるが、敬礼の厳正確実な事に一驚を喫した。士官学校のそれと異ならない。終戦以後斯くの如き軍隊を見た事は始めてだ。矢張り長たるものの指導如何に依る。日本の軍隊の素質は磨かざる玉である。磨くのは上長の責任である。磨きさへすれば立派な玉になるのだ。支那軍などは玉でないから磨いても程度がある。日本人は自重自尊しなければならぬ。一隊の軍紀風紀の振粛は長の責任だ。緒方大尉は二十七、八才の青年将校であるが大隊長として令名のある人である。

午后軍司令部主催でドーソン地区の相撲大会があった。立派な体格の持主ばかりの将兵である。予はフトこんな身心の立派な将兵を今度の戦争で如何に多くを失ったかを悲しまずには居られなかった。ニューギニヤでは九割の兵員が消耗したと云ふ。然も結果は此の通り悲惨なのだ。人生の悲惨は之れより大なるはない。

一月三日

末広巌太郎氏の法窓閑話を読む。一つ非常に感心したのは矛盾の価値と云ふ項であった。世の中には矛盾は避けられぬ現象だ。此の避けられぬ矛盾を人間の協力に依り或る平衡点、調節点を見出す所に面白味があるのだ。本日野球の試合あり。今年の正月程出征以来落着いた給養のよい正月はない。何と云ふ皮肉であらう。

一月四日

勅諭奉読式あり。　~~辻政信、河内にてあり別紙の如き書翰を送り来る。純情熱情の士だ。~~

榊原参謀、河内より帰る。三沢大佐の更迭にからんで酒井参謀が色々気を廻してゐると云ふ。人と言ふものは離れると結局意思疏通を害するに至る。離れることはよくない。

人生矛盾多し。此の矛盾を打開するには努力が必要だ。ただ努力が克く実を結ぶものだ。希はくば努力を放棄する勿れ。努力を放棄すれば万事しまいだ。

理想と現実とは常に相反発する。之の平均点を求める所に人間の努力の貴さがあるのだ。

龍田川　無理に渡れば　紅葉は散るし
渡らにゃ聞こえぬ　鹿の声

渡辺章老将軍は此の歌の意味を予に説明して何事にも努力せよと云ふ事だと云はれた。

[152] 歩兵第83連隊第3大隊、大隊長は緒方広業大尉（緒方 p. 519等）。

大阪府中河内郡盾津町□□□□□　□□□□□

辻　千歳

石川県江沼郡□□□□□

辻　　弘

玄武洞駅ヨリ十分行程　山ノ上ノ寺院　曹洞宗管長ノ出身寺

予と辻政信との河内に於ける邂合は当時の日記の諸々に記載したるも秘密に属することはワザと記載を省略した。余りにも秘密に属することが多かったからだ。此の日記が人に見られる事を遅(おそ)れた為だ。辻の事を上杉師とか某氏とかで記載して居る。（昭和二十四年八月二十七日記す）

一月六日

国体の変革に関する外国放送多し。漂然たり。日本最大の国難は此の一点に在り。

本日漁労班に招待せらる。

軍司令官閣下と予と部隊との関係愈々困難となる。唯正義と誠意とのみ。難関打開の方途ありと信ず。

気に入らぬ　風もあらうに　柳哉

右は理に於て知りながらも実行は仲々六つかしいものなり。

予と当番兵谷村兵長との間は相信相愛の情誼に依りて結合しあり。入浴すれば肩流しから肩の按摩は勿論、毎晩の顔面、肩のマッサージ、其他如何にも予をいたはる親切心発露し、此の人が此の身体で軍人を止めらるるが気の毒のものなりとの同情が溢るるを看取し感謝に堪へざるなり。上級の現役軍人などに対して、下官が此際谷村兵長の如き同情心親切心を以て接するに至らんことを欲むなり。「斯くの如き立派なる人が職を失ひ生活に窮する立場に置かれるとは何とお気の毒であらう」との同情心を部下が持つに至らんことを欲むなり。現在国軍の中一部に此の気風あるべきも大部は未だ其処迄行かざるならん。之れには上官の下官に対する配慮親切心が一半の原因を造るならん。さて予も反省せざるべからざる事あり。嘗て上野隆三郎中尉は、予の中尉時代、予を評して君は人からつつかれると針鼠の如く棘を立てて固くなるとの批評を下せり。今にして思ふ。此の観察は適評にてありし。今に至る迄予は此の弊抜けず。上長より小言を云はれたる時、反発する痕跡を留めあるなり。気に入らぬ風もあらうに柳哉迄予は未だゆとりが出来ざる小人物なることを内省せざるを得ず。正義観念とゆとりとの調和は今後予の修養上の懸案にてあるなり。

一月七日

昨日、漁労班の会食の所感に、過去の国軍の欠陥をのみ剔抜しさては人心攻撃に陥る傾向あり。予は之を嘆く。現在吾等の話題の中心は悪口を云ふ事、過去に捉はるる事に非ずして、如何に今後各人は更生の道を辿らざるべからざるか、如何にせば日本の復興は出来るか、如何にせば相互扶助の目的を達するや、現在如何にせば職業輔導の目的を達するや等々ならざるべからず。余りに感情がすさび自己の反省を先にせずして他の欠点を拾ふ如き状況に在るを甚だしく遺憾に思ふなり。大慈悲心を振起するの要、今日より急なるはなし。

田原中佐と話す。中佐曰く、血液と霊とは相通づ。古来血液に精神特徴を宿す語あるは真なり。血液の体中に欠乏又は血の環境を停止するや霊は身体より脱出する事をノモンハンの体験にて知れりと。母親と子との関係は血液的に最も近し。故に霊の交媒亦最も切実なり。宇宙精神は誠にして此の誠を宗教家は神と称し仏と称しあるも一にして多、多にして一なり。誠の一元に帰一し且無限に岐る。人間誠なる時は神となり仏となる。之神仏が宿ると同様なり。田原中佐、或る信仰家の子息がノモンハンに戦死せるを知り其の仏前に参らんとす。其の信仰家は田原中佐の背後に観音ありと称し、田原中佐を跪拝せり。此の信仰家は仏は観音なりと思ひありしなり。神に通づるもの是神通力を生ずるは当然なり。予言も奇蹟も可能なる事も当然なり。神通力なく予言の出来ざる宗教者は宗教屋にして宗教家と称し難しと田原中佐は説く。至誠なる時は図星をあてるなり。話は霊波に転じ、予の見解と一致せり。最近電気通信界にては電波の探究として一度発信せる電波は消滅するものに非ずして宇宙の何処かに偏満しありて、之れに感受する時は再電の要なしとの研究問題あり。之れは霊の存在の探究と軌を一にす。人の霊は現在に於て最も人間が感受し易く去るもの日に疎(ウト)し[と]なす。然れども霊波は宇宙に必ず存在し消滅することなし。霊波探究の波長が洽適なれば必ず時間を超越して其の霊波を感受することを得るなり。物質の理と精神の理と逐次加速度的に近づきつつあり。二十一世紀に於ては之が一致するならんとの田原中佐の説にて予も同感なり。斯くて精神と物質は二にして一、一にして二となるなり。人間至誠となる時は透視可能なりと田原中佐は称し、ノモンハン戦死前の宮城の幻覚等自己の体験を説く。至誠になる方便として無我の必要を説く。而して無我になる前に精神の統一を要す。之が為禅に如くはなしとなす。斯くて田原中佐は予に禅を進む。田原中佐の奥様は屢々田原中佐の近況行状を内地より図星をさし、田原中佐も閉口したる事ある由。人間無心の境になれば図星がきくなり。「何となくわかる」「何となくそんな気配がする」と云ふ事は人生に少なからず。之は霊の交媒、霊波の感受の結果ならん。

田原中佐はノモンハンに於て九死一生を得、後一ヶ年半程疵の治療に要せしものの如く、死生観霊に関する研究も此の間に為されたるものの如く、予に君の負傷恢復時機が早きに失したり。今少しく苦しみが長ければ更に人間の向上に資せし所大なりしならんと。然り。生死をさ迷ふ期間が予は田原中佐に比し余りに瞬間的にしてアッケなかりしなり。故に死生を究むる程の余裕なく再び俗人

に帰れり。

一月八日

敗戦の原因が論議されるが自分達の悪い事を反省せずして他人の欠陥を指摘する風が見えるのは遺憾だ。斯くては日本国内の結束を紊る結果となる。敵は勿論日本の内部を撹乱せんとして凡てを軍国主義侵略主義に帰せんとする。然るに之に同調せずば自己の存在が出来ぬから心ならずも軍閥の悪口でも云はねばならぬ。日本の国内事情である。何となさけない事か。

公職追放令は日本の社会的大動揺を招いてゐるらしい。

一月九日

米国の日本管理方策は結局我が天皇制（制と云ふ事は余りにも法制的で同意し難いが假りに之を用ふる）を崩さんとするに在るが、直接的では摩擦と反発が多く日本国民の憾みを買ふから、自然に大木がついえる様に間接的包囲政策の要領を用ひてゐる。植物の「根廻り」と云ふ方式を採用してゐること疑ひない。彼の天皇制打倒に関する遠謀深慮である。日本国民は相次ぐ不例のヒット的驚愕政策に依り自己の生存に汲々として国体護守の責任方策を練る余裕のない様にして置いて、気のついた時は既に遅し。大木の根廻りが出来て大木が倒れる様な現象に陥るのでないかと深憂する次第である。彼等米人は此の大望を抱くが故に此の急所に触れる質問には常に曖昧な返事をして来た事が油断のならぬ点である。予が大声叱呼し最大の国難来を告ぐる所以である。軍司令官が予を呼んで、官邸に終戦以来保存せられし軍の機密費を返却された。予の所信では将帥が軍の機密費を預ることが既に将徳をけがすものと思ってゐるから、軍司令官が斯く返却された事は当然と考へたのである。之れで常態に復した位に思ってゐる。

一月十日

日本徒手官兵管理所長代理張少佐がドーソン地区を視察しに来たので、カンエンに於ける接待不備に依る彼の感情を和らげる為最大限のサービスをした。世が世なればとの感が深い。日本軍の生活状態、中国軍に不当に圧迫されあらざるや。中国側の命令通り日本軍が集結してゐるかどうかが視察の目的であると云ったが、視察の結果は自己の威厳を示し一場の訓示により精神教育をして御馳走にありついて贈物を受け取ったと云ふに過ぎなかった。日本軍の視察者であればもっと具体的につっこんで見たり聞いたりするだらうが、支那人はそんな事はしなかった。感情一つで報告をよくしたり悪くしたりするらしい。別に支那軍人の真価を高めた事はなかった。但し彼の説明で日本軍の戦争中の俘虜は極力優待したと云ふ事、日本の工業力の勃興と土地の狭小、支那の未開発地の広大なるを結び合せ、経済的合作は政治力に依り解決が不可能でなかった、必ずしも武力

を用ひるの要がなかった、此の武力を用ひた所に日本の失敗があると語った。

交渉は足に在り親しみは足に在りと云ふが事実だ。特別に仲の悪い間柄でない限り、接触を保つ程自然相手の発散するエネルギーを感受して中和的のものとなる。之が即ち融和的現象である。接触を密にすることが何よりだ。

一月十三日

緒方経理部長のお話。支那軍より副食物代雑費を受け取る時、支那側の当事者は必ず天引して私服を肥やす。先般十一月分の費用として一億円（関金）を受け取ったが、当事者は一億円の受け取りに経理部長の印を押さしめ実際は七千万円より支払はない。支那人と云ふものは之が例となってゐるらしい。支那の強大は決して一朝一夕では出来ぬ。道徳的方面の改革なくして形の上に於て如何に形を変へても駄目である。

経験が多い程注意が細かくなる故に年配者の老婆心は傾聴利用すべし。老婆心とは穿ちたる語なり。

一月十四日

喫煙は経済上相当な負担を生ずるものである。当地に於ける十二月の将校以上支給品総額（日用品加給品を含む）は一人につき三十円五十六銭なるに対し、煙草代は十六円で実に其の過半を占めてゐる。又、軍司令部憲兵隊を合し八七六名中喫煙せざるものは9％で五本以内（一日）の喫煙者は4％である。六六五名と云ふ総員に対する八〇％に近いものは十本以上の愛煙家である。禁煙政策は国家的にも家庭的にも経済上相当な問題である。

夜、予の宿舎で汁粉を振舞ひ参謀部の船越少尉にも来て貰ったが、船越少尉から有益な話があった。少尉は岡山市の軍需会社の課長職を勤めてゐるらしいが、職工の掌握は会社内の模範になってゐるらしい。其の方法は慈しみの心を以て職工に接するに在る。そして家庭を握ることが要訣である。職工が病気すれば家庭に見舞に行けば細君は感激する。吉凶禍福を共にすれば職工の家庭も世間体がよい。父母肉親の葬式の際などは同課の職工を参列させたり、課長職工組長が受け付けをしたりする。時には課長が小夜食を出してやる。そんな人情味が職工を感激させる。凡そ人間たる以上、十人が十人共金や権威でのみ動くものでない。金や権威は勿論人を動かす一の動因には違ひないが、大部分の人を動かす最大動因は人情である。社長や専務が放埒な慎しみのない生活をして居ては職工に時局だから働けと云ったとて職工が働くわけでもない。月給や賞与だけをやっても働くわけでない。矢張り職工の心を心とする社長で始めて心から職工を働かし得るものである」と云ふ話で成程と感心して聞いた。

一月十五日

予の上官に仕へる性癖は上官の指示が先づ国軍の為裨益するか正しきかを批判したる後、其の正当な範囲に於て上官の意図の達成に努力する主義である。併し上田少将の様な性癖は先づ上官の意図の具現を如何にするかを考へ、後之が正しきか正しからざるかを考へる主義であるらしい。前者は往々上官の意図に忠実ならざるが如き結果を招来し、後者の如きは動々もすれば御無理御尤も式に流るる傾向なきを得ない。此の点に於て土橋軍司令官に仕へ、予と上田少将とが往々行く道を異にすることを生じ感じたわけであるが、予は上田将軍の軍司令官の御意図御意図と一も二も仰っしゃるのを何となく不快を感じつつも自ら上官に仕ふる点に於て上田少将程忠実でないことを省みざるを得ないのである。併し乍ら軍司令官の側近に補佐する参謀長、或は主人に対する主婦の立場に在る人は予の如き主義を採るを正当とし、陪臣とか部隊長に対する下級指揮官等の実行の衝に当る者は上田少将の如き主義でなければなるまい。

一月十六日

河内連絡の為、十時ドーソンを出発する。要件は某連隊長の更迭問題と所長交代問題、戦犯者世話問題である。海防の小林大佐に聞いたが、支那人に対する何等の理由のない工作費や工作物資の投入は利目がない。義理人情の加味され機会に投合したものは小量でも有効である。例へば支那側の連絡員が海防の日本連絡所に自転車で来て会談中、自転車を取られた。それでそれは気の毒であり日本側に責任があると云ふので千二百円で一時間以内に自転車一台を購入して送ったら非常に喜んだ。一万円の品を何の由来もなく儀礼的に送るより効果のあるものであると。

此の点に就いて河内に来た上杉師[153]の話に彼は支那人との用に一度も工作物資や金を与へた事はない。虚言を吐かない事とおべっかを云はない事、即ち魂と誠意を以て事に当って成功してゐると称してゐる。

海防を十四時出発し河内に着き連絡所に泊った。上杉師と久し振りに話した。上杉の着想と赤誠には感服の外はない。

一月十七日

上杉師辻政信の話に支那人は八割迄は日本人より遥かに悪い。二割は民族意識に燃え立派なのが居る。支那は決して一朝一夕に改善されないとの意見だ。

上杉師辻政信の私心のない事、行状の正しい事、捨身の胆力と過去の各種の経験は稀世の人物である事を再認識して感服の外はない。彼に比較すれば予も二流以下の人間だ。我々の過去の何

[153]「昭和二十四年八月二十七日記す」（1946年1月4日の追記）にあるように、これは辻政信のこと。これ以降も「上杉師」「上杉」「某」「某氏」とあるのは、辻政信のこと。所々、これらの語を消して、「辻」あるいは「辻政信」と書き入れてある。後日（1949年8月27日であろうか？）、書き入れたものであると思われる。

事も物にならなく徹底しないのは捨身の勇がないからであらう。中途半端なるが故に頭角を抜んずる事も出来ないのだ。物理学の槓杆の作用の様に或る程度以上行けば非常に働きを現はし得るも、或る程度以下では力を要する割合に働きを現はし得ないと同様、不徹底の所に不成果の原因がある。

上杉師辻政信の意見は先づ日支米の攻守同盟を結びソ連と対抗する事だ。外交と軍事とは秘密であり独裁的であり内政は世論民意尊重主義がよいとの石原氏の説を支持してゐる。戦争の発生は先づソ連を破り大陸に於ける日本の失勢を恢復することにある。日米戦争はその次であるとは予も同様なるも、感情的に米国と攻守同盟を結ぶ様な事は予には出来なかった。併し外交政策としては確かに斯くせなば日本の恢復力は遅いに違ひない。

予の今後に於ける君国に対する御奉公の道も上杉師と会ふ事に依り具体化した。上杉師が七回の負傷、百二十一回の死生の巷を切り抜け、予が三回の死生の巷を切り抜け河内に於て邂逅した事も天意であらうと上杉師が語った。予が終生の大至誠大分別を発揮するのも今後一ヶ月か二ヶ月に在る事を自覚せざるを得ない。予は従来与へられた任務を忠実に実行するに過ぎなかったが、今や新国家胎動の黎明期に於て予に課せられた天意を潔く享受し全力を尽さねばなるまい。

一月十八日

午前、西沢自動車隊を訪問し、午后は上杉師と話した。

板垣大将[154]は談笑の裡に下僚にヒントを示し此のヒントに依り下僚が案を立てて来た時、よい所に気がついたと下僚の手柄をたたへる。此の功を下に譲る徳性、大度量、私生活で物を惜しまぬ事が将帥の資質である。

部下参謀の戦死を聞いて眠られず眼を赤くしてゐる時、その参謀が生還して将軍に悦した劇的シーン、ここに於ける将軍の部下に対する慈しみと思ひやりが万人を悦服せしむる原動力だ。植田将軍[155]も亦修養と天性に依り統帥の大徳を備へてゐる。ノモンハン事件の時派遣された関東軍参謀が新京に凱旋し軍司令官に申告すると、今夜はお前の労を犒(ねぎら)ひたいが家族も待ってゐる事だらうから夕食をお前の家へ送って置いたと語られた。帰宅して見ると卓子に山盛りの御馳走があり、細君は何でそんなに御馳走が来たのかわからずに不思議な顔をしてゐる。この理由を参謀が説明すると細君が泣き出したと云ふ。以上の如き大愛の精神が東洋将帥の徳であり、且東洋の将帥為政者は身を持すること厳で慎しみ深い。此の徳がなければ東洋の将帥と為政者にはならない。板垣や石原将軍や植田将軍は此の点で立派な資格をもってゐる。

---

[154] 板垣征四郎（1885-1948） 大将 1938年6月～1939年8月まで陸相、1945年4月、第7方面軍司令官、1948年12月、A級戦犯として刑死（『日本陸海軍総合事典』p.20）。

[155] 植田謙吉（1875-1962） 大将 1936年3月～1939年9月まで関東軍司令官兼駐満大使、1939年12月、予備役（『日本陸海軍総合事典』p.26）。

一月十九日－二十二日

河内出張間の予の活動は筆舌に尽し難い。上杉と予との邂逅は天意であらう。

上杉辻の泰に於ける華僑工作の方法を問へば、別段金を使ったり謀略を企んだりしたのでない。日常生活が余りにも正しく支那人ボーイに対する肉親の情味は逐次支那人の友達に伝はり、斯くて青年や有力なる人が上杉の所へ遊びに来る様になり、話の上、上杉の思想に共鳴し出した。工作にも一時の権変[ママ]を用ひるものと上杉式人格の反映主義を用ふるものとの二あるべきも、後者を理想とする事は当然である。上杉は工作に金を使った事はない。「諛らはず偽はらず」と云ふ信念も実行して相手に信用を持する故に金を用ふる必要なしと云ふ。上杉辻は云ふ。先づ脚下側近より感化し得ずして人を指導する能力ありと思ふ乍れ。上杉辻は又云ふ。節慾は争闘心を養ふ。上杉辻が酒と煙草とを終戦以後止めた後のエネルギーは恐るべきものがあると云ふ。ヒットラーの禁欲主義も大望があったからであらう。嗜好や慾を恵にすれば人間は放心的無気力になってしまふ。

満州に於ける三千の匪賊の帰順を取扱った上杉の経験に依れば、人を信ずるなら徹底的に信じねばならぬ。匪賊が集った時、お前達は永年父母妻子に分れ山野で苦労した、今晩は銃器を携行してよいから早く家庭に帰り父母妻子をいたはれ、日本軍はお前達の十分の一の兵力が居るだけだから■■■するなら今晩がよいぞ、乃公を殺すのもよからう。併し真に戦を止めたいものは明日の朝何時に此の広場に集合せよとて解散を命じた。上杉は此の匪賊町（三道溝）[ママ]に単身匪賊説得に行ったのであった。匪賊の頭目は頭右を以て迎へた。翌日の朝は三千人が一人残らず集り武器は耳を揃へて提出した。爾後此の匪首は山野を駈け廻り半歳の間に二万の匪賊の帰順を見、兵力を用ひずして鎮定を果した由。

上杉辻の「赤心を人の腹中に推す」主義は彼の生涯に何回も行はれ、之れに依り死地を脱出した事が数回ある。

上杉の云ふには自我の強い人、押しの強い人には最初より原案を示してぶつかるな、御意見は如何でせうとかどうしたら云ひでせうかと問ひかけ相手の自主性を満足せしめる事だと。上杉辻仲々近頃は世故に長けて来た。

二十一日朝出発。楠見大尉の遺骨を奉じドーソンに帰還す。渡場で安南人や吾等の車は支那軍や支那軍人を載せた華僑の車に追ひ越され四時間の死節時を費した。安南人が支那人に反感を持つことは当然だ。併し之は日本軍も過去に相当やった事を告白せざるを得ない。二十一日夜、懸案事項を軍司令官に報告し、感激すべき命令を戴いて翌二十二日朝出発、トラックにて河内に引返した。感激すべき命令とは次の通りである。

岩國参謀に与ふる命令　　一月二十一日

一、貴君は当分の間河内連絡所に滞在し専ら対戦犯容疑者工作に従事すべし

二、工作に必要なる人員物資等にこだはらざるを要す

三、三沢大佐と十分協力すべし

軍司令官

之は土橋司令官の命令とは考へなかった。神の声である。予は斯くならん事を車中南無妙法蓮華経の題目を繰り返して祈ったのであるが、此の命令に接した時之は神の声であり新日本再建の黎明が訪れたと直感せざるを得ない。嗚呼知る人ぞ知る。後年此の記事を呼んで感慨無量の時機が来るであらう。

支那軍の中で一番感心するのは其の憲兵制度だ。支那の憲兵は素質が支那軍中随一だ。憲兵の上等兵と大尉とが同格位で上等兵は大抵十六才より二十才迄の美目秀麗[ママ]の人間だ。学力も学校教育があって上等だ。下士官になるには憲兵学校四年の修養を要し憲兵少尉任官には学校生活八年を要すと云ふ。彼等は国軍の範、国民の師を以て任じてゐる。支那の様な軍隊こそ憲兵でもしっかりせしめてゐないと危険である。日本軍の憲兵は之に反し素質的に非難が多い。

一月二十四日

工作のスタートを切った。気が疲れて神経が昂奮して睡眠も十分に行かない。仲々気の張るものだ。

勅諭を拝誦したり、亦[ママ]宗の妙号を唱へたりする事は身体に充電する様に霊気を増すものだ。戦犯容疑者の救済工作などとしてダブルスパイなどを使って見るとこちらの正しい心の必要を感ずる。明鏡止水の心境を必要とする。虚偽や不正行為の怒涛の中で方向と位置を誤らぬ為には身に霊気を充実して悪魔を払ひのけねばならぬ。それには矢張り前記の充電作用が必要となるのである。

左記の者の支那軍に逃亡せる旨上杉より聞きたり。

歩兵第八十五連隊　軍曹　□□□□

群馬県勢多郡□□□□□□□　□　□□□□

上杉辻の言に依れば工作費は之を全然認めざるに非ず。金二分人情八分の割りにて使へば可なりと。至言である。上杉流は卒先垂範先づ周囲を感化し更に他に及ぼすに在る。言ふ事行ふ事が正しき故、上杉の説に上下を問はず追随せざるを得ぬので皆改まる。上杉が去った後、又よりが戻る事は人間の弱点上己むを得ない所がある。

上杉辻の話に、人は命を投げ出す場合は一生にそう沢山あるわけでない。普通は豪くならうとか人の評判を気にする心を取除けば凡そ恐ろしき人はなくなる。

上杉辻曰く、日本を窮地に陥れたるは軍隊の罪よりも指導者の罪と云ふべし。指導者が方向を間違へたるなり。個人生活の清く正しからざるは現在迄の日本指導階級の欠陥なり。維新当時より日

清戦争当時迄は維新の血の洗礼に依り指導者の精神を浄められたるも、大正昭和の御代となりて指導者は私生活がけがれ（生死の巷に洗練せられざる故）、遂に国民の信用を得ざるに至れりと。彼の言は一面の真理あり。国家非常時に於ては躬行の正しき指導者に非ざれば衆心を把握すること困難なり。

某の指摘する人材は、三十七期以下五十期迄にて識見に於て大度に於て津野田（50）[156]に匹敵するものなく、線の太さに於ては朝枝（45）[157]又津野田に匹敵す。此の二人を握れば天下の事成るべしと。又五十期以下の心理を掴みあるものは内山（50期）なりと。

物を秘匿するは最も重要ならざる処に明らさまに置く事が其の一なりと。人は何げなく思へばなり。

一月二十五日

土杉辻曰く新時代の指導者の選定は人格を第一とすべし。能力を第一とすべからず。蓋し能力の不足は人が補ひ呉れるも、人格の欠陥は人を以て補ひ得ざればなりと。過去に於て人間価値の選定を此の趣旨を転倒せるが故に誤れり。指導者に於て特に選定は斯くならざるべからずと。某辻の言に依れば、天、マックアーサーを降して日本を改革せしむ」[ママ]と。蓋し日本本来の汗垢は日本人自体にては完全徹底的洗條は不可能なり。依って敵国外患に依る一大徹底的手術を加へしめられたるなりと。即ち最大の欠陥たる上層階級の腐敗を剔抉芟除せんとするなり。

飽衣暖食は飽満感を与へ人をして争闘心、向上心、奮発心を消磨せしむ。人をして活気あらしむるには或る程度の欠乏感を与へしむることなり。

一月二十七日－三十日

「ドーソン」を往復す。戦犯問題、鉄道連隊長更迭問題、河内連絡所長更迭問題なり。

二十九日の朝方なりき、予は郷里に帰りたる夢を見たり。予は汽車行にて鎮守の森の附近を通過し徒歩にて我家に向ふ。多くの村民の中を潜る如く通過し我家の前の道を歩む。予の母は多数の人々に擁せられて門口に西を面して予を迎ふ。母の着物は黒味を帯びたり。予は駆け寄る如く母に接近し只今帰りましたと叫びつつ母の手を握れば夢は忽然として醒む。時に午前六時なりき。予は何となく泣きじゃくりたり。何の為の涙か。予は印度支那に来りて未だ涙を催せし事を知らざるに、今の朝は何故ぞ泣けて泣けて致し方なき感興なりき。予の母は必ずや予の帰還を神かけて待つならん。但し健全なりや。本朝の夢は吉か凶か。記して後日の参考とせん。

某辻政信曰く日本人の素質には絶対信頼を持つ。要は指導法の如何に依るのみ。

---

[156] 津野田知重（1917-1987）少佐 1944年6月、大本営参謀、1945年3月、免官。陸軍士官学校50期、陸軍大学校56期（『日本陸海軍総合事典』pp.103，600）。

[157] 朝枝繁春（1912-2000）中佐 1945年1月、大本営参謀、1945年8月、満州出張・ソ連軍に抑留、1949年8月、復員。陸軍士官学校45期、陸軍大学校52期（『日本陸海軍総合事典』pp.8，593）。

某辻政信の如き、予等百人の集合体の力にても達成出来難きものを持つ故に、如何にしても生存せしめざるべからず。

日本陸軍の戦術は一元論で失敗した。一方的理屈で押し切った所に欠陥がある。佐藤清勝氏の「人間哲学」なる本を森居中尉より借りて啓発せられ成程と感じた事である。

某氏が何をやっても最優秀の成績を収める原因を尋ねた。結論は真剣味に在る。彼は何をやるにも真剣勝負の積りでやってゐるからだ。

一月三十一日

予も最近は人の嫌ふ忠言を行はざるべからざる数次の経験を嘗めた。久保田中佐に対する忠言の如き、河内連絡所長の更迭に伴ふ経緯の如き然り。此の間に感じたる事は人間は常住不変の性行を持ってゐるわけでなく変化するものである。だから悪い事ばかり善い事ばかりをするものでない。然るに人の評価は一方に固着し易い。丁度白紙に墨書する様に一旦試筆すれば固着して動かない。人心や性行は絶えず変動してゐる。茲に評価と実際との開きがあるのだ。だから人を評価する時にはきめつけることは適当でない。斯く斯くの傾向を多分に持ってゐると云ふだけで常に彼は斯く斯くだとは云へない。久保田中佐に対する司令官の忠言の如きも殆んど軍人たるの資格なしと云った様な語で、之は必ずしも久保田中佐の全人格或は常住的性行ではあるまい。之も佐藤清勝博士の著書の如く人間性行の二元的変化を知れば思ひ到ることが出来る。

二月

二月一日

悟道達観の士[158]より話を聞く事は最近の快心事だ。戦場往来の古兵の達観せる識見、悟りは仏者的の悟りにも勝り、膝を打ってうなづける事である。

曰く物事を処理する前には先づ己れを捨てる事である。此の捨てるのは求めんが為に捨てるのではない。真に無になるのである。人々の多くは救はれん為に捨てることが出来ない。又少し進歩した人間でも救はれん為に捨てる。だから救はれることが出来ないのである。真に捨てる。救はれんとする欲を絶して捨てる。この時結果に於て救はれるのだ。之は体験に依り証明される。自己の為にする時は自己のものにならないのだ。この「コツ」を呑み込んだら世の中の暮し方は決して六つかしいものではない。一例を以て示さん。

色々上官に仕へた。或る上官は自己の乾分を造らんとして可愛がる。特に有能にして気迫のある人間を特別に愛護する。この偏頗ある故に上官は部下から見くびられる。之に反し一視同仁に部下に接し救はんとする心がない。それ故に万人が喜んで彼の為に働かんとするのである。

人と接触する場合、赤裸ですることである。相手には欠陥もある。弱点もある。之を遠慮なくこき下ろすと共に自己の欠陥をもはっきり認める。此の公正赤裸々の態度が人を牽きつけるのである。

謀略戦、秘密戦に任ずる者は道義力の常人以上強烈なるを要すること予の体験である。常人は一般に監視されて且平凡正常なる行為を為す故、道徳観念が低調でも大過はない。併し秘密戦に於ては個人の独断行為単独行為が主なる故、個人の信用に期待せざるを得ない。即ち道義力の如何が決定的であるのみならず誘惑が非常に多い。金、女、酒を機縁とする仕事が多いから精神教育が決定的意義を有する。中野学校の教育の如き精神教育を最大重点とすべきものであったが事実は如何。

今次日本の作戦の不首尾なりし原因の有力なる一に幕僚の不勉強と云ふものがあることは見逃せない。某氏[辻]の如き軍高級参謀であり乍ら第一線の大隊長の性格、甚しきは中隊長の性格能力迄知って作戦を指導した。作戦の成否の影に幕僚の勉強不勉強が如実に反映する。実行の監督もせず第一線の実情をも確めずして命令を出し放したり実情に疎い命令を出す弊が多い。のみならず幕僚は酒色に耽溺し研究不十分なる策案を出し、或は時機に投合せざる処置を為すことが多い。紅燈緑酒の間の作業では名案も真剣味の案も出来る理由がないではないか。日清戦争当時迄は維新当時或は建軍の辛苦を受けついだ熱誠の軍人苦労軍人が帷幕の機務に参画した。昭和大正時代は学校出の秀才で苦労を知らず死線も越えないで机上で軍隊を弄んだ感が深い。

[158] 傍線の横に辻政信と記されている。

現在の日本指導者は庶民の心を体験して把握したものでない。軍隊指揮官の最高級の人でも実戦の鍛錬を経たものでない。此の点に於て日本の指導階級は質的に理想的のものでなかった。スターリンや蒋介石等は此の点に於て苦労人であり体験者である。新日本の建設に於ける指導者のみ理想的体験者であり得ると云へよう。日本軍隊のみは日露戦争時代よりも遥かに強くなってゐることは今度の戦争にて如実に証明された。

二月二日

~~某氏~~辻政信の為し難きを為す実行力の偉大さに驚嘆す。其の方法は己れに勝つに在り。己れを捨てるに在り。斯くて自己自ら範を示し弱点を造らざるが故に他人に強き事を要求し得るなり。根本は己れに勝つに在り。更に己れを捨つるに在り。世の実行力を齟害する原因を尋ねるに強き事を云ひ得ざるに在り。其の強き事を云ひ得ざる原因は①他人に反駁さるるに在り、②又良心に恥づるに在り。③他人の反発を押し切り得ざるに在り。③以外は自己の弱点に包蔵す。故に弱点を造らざること第一なり。弱点を造らざることは平素に関係するし共に又率先難に当るの気概に関係す。他人の反駁を押し切り得ざる原因は自己の名を惜しむことに起因し又舐犢(しとく)の愛に起因す。結果は自己に立脚する故なり。故に自己を捨てなば之も解決す。之を総合して自己に克ち自己を捨つるの志操あらば実行力を生ずるなり。

二月四日

予は今にして軍人勅諭や勅語の有り難み重要さを痛感してゐる。と云ふのは勿体ない話であるが、現在、予の仕事は正邪の渦の中に立って此の鑑別を誤らない為には自分の心を明鏡の明るさ清さを持たなければならぬ事を痛感する。此の心の清浄さを与へるものは軍人勅諭であり勅語であるからである。今から社会の濁流に棹さす場合には過去の軍人生活にて養成された正しさが予の唯一の資本となるであらう。某氏は、軍人は正しき判断の下に各種専門家の意見を採用する度量の大きい長所があるから、他の何れの社会の統率者よりもより大きく発達することが出来ると語ってゐる。

予は終戦を契機とし支那朝鮮と日本と融合一体化するの気構を要すると信じてゐる。斯くて形は日本は少なくなったが、先づ無形的に支那と大同することが出来、次で有形的にも一体化するの域に達し初めて日本再建の意義を全うし得るであらうと思ふ。大東亜戦終了迄は日本は占領地のみの日本と考へてゐたが、今後は先づ朝鮮支那と大同する事、是が新日本建設の指標である。

凡そ成果を挙げるには某時期を画し其の事に専念することが不磨の鉄則である。此の事は周知の事柄ながら益々切実に感ぜさせられる。

二月六日

楊管理処長に対し地区指揮官就任の挨拶を為す。儀礼的にて別段の事なし。三沢大佐、酒井中佐、佐藤少佐、三好少佐と予の部屋にて会食。

四十代以後の男女にして誤りありとせばそれは女色に関すること八割と云ひて過言に非ざるべし。過去陸軍将星の失敗談中、女色に関するもの甚だ多し。戒むべし。慎しむべし。

河内在留邦人の引上問題に就て残留を希望する者の多くは現地人女との関係あるものなり。人生異性に関する問題は如何に根強きものか。逃亡兵の仏印地区に多きことも現地人女の日本兵を好愛するに依ること多し。所謂底を打明くれば人性異性問題に端を発せること極めて多し。

二月七日

人間哲学（佐藤清勝博士著）にて啓発せられて感ずるのは、人間界は二元主義で処理すべき事である。それ故に従来力に偏し或は情に偏するの適当でないことがよくわかった。此の一方にのみ偏する時、必ず誤りを生ずるものである。

人に勝る勉強なくして絶対に自己の意思を強要し得るものと思ふべからず。自案を通さんとせば水掛論とならざる為、一歩先制の利を占めざるべからず。研究の周到知見の広大之れなり。政治の最大要訣は方向を与へる事である。日本の為政者は方向を間違って勝つべき戦に負けてしまったと某氏[辻]は語った。方向を与ふるには見通しが利く事が必要だ。従って先見の明なき者は為政者としての資格はない。

二月八日

三沢大佐ドーソンに引上ぐ。中折帽を市中に求め人力車に乗り帰還中、鉄道の踏切に於てアンカップ[159]さる。同時[に]眼鏡をも落出したるが如し。本日は大損の日なり。動機が不純なりし為か。

人に信頼される要訣は自己を犠牲にして人を救ふの気持あることの一点に帰することを痛感す。戦犯問題に就て感深し。自己の命を衆の為投げ出すことが出来れば他の凡有(あらゆる)弱点をも償ふて余りがある。之れに反し他のいかなる美点ありとも長所ありとも、己れのみ助からんとして他を其の代償にする心微塵もあらば衆心離散す」[ママ]

今にして思ふ、土橋軍司令官の腹の中はそんなものだった（昭和二十四年八月二十七日記す）[160]

稼ぐに追付く貧乏なし」[ママ]と云ふが、某氏の如き奮闘そのものだ。戦場に勇敢なのは天性でなくて研究と努力とに依るものだ。弾丸の道を考へ敵情の変化を凝視し責任観念の下に行動する時、外形に勇敢なる行動として現はれる。自ら勇敢をてらうのでなくして努力の姿、責任の姿が勇敢に

[159] ăn cắp　ベトナム語で「窃盗」「盗み」の意味（野平宗弘氏のご教示による）。

[160]「今にして……」の一文は、余白に鉛筆で小さな文字で書かれている。

見えるのだ。戦場の勇敢さへ克己心の発露だと思へば人生努力や克己心で解決の出来ぬものはない。

某氏辻政信の談に、実業家に対し吾々の強味は金に買収されぬと云ふ一点である。若し此の節操を失へば彼等に手玉に取られてしまふと。貧窮時代の節操と云ふものは実に大切なものだ。繁栄時代となって強く正しくやらんとするも前身に於て弱点があったなれば正しく強くなるを得ない後ろ暗さがあるからである。金甌無缺(きんおうむけつ)の国体と同様、自己の過去の純潔さが将来強く正しくあり得る前提となるものであるから困窮時代は最も慎しまねばならぬ。既に此の一線に於て破戒行為があったなれば之が大なる疵となって将来の大成を妨げるものである。道義心が昂上して来ると一寸とした悪行為が非常の良心をとがめ大きな結果を招くものである。此の点は道義心の薄い者の想像も及ばぬ所である。よく信仰家が祟(タタ)りだとか云って、神罰をおそれたり一つの出来事を神罰にかこつけたがる気持を想像すべきである。

二月九日

権勢には先づ女色がつき纏ふ。次に利権がつき纏ふ。此の二者の誘惑にかからねば先づ大過なきを得べし。

統御と云ひ交際と云ひ何も六つかしき事はなし。要は人の為に計るの大愛の精神あらば解決し得べし。然るに自利と他利との矛盾抵梧(ていご)の分岐点に立てば人は自己を先に考ふる故、没我大愛の発揮は実行困難なること多し。自己の生命を懸ける場合に至りては特に然り。此の生命を抛っても他を救ふ事の出来る人は大聖であり大哲人であり覚者である。結局は己れを捨てる一点に帰す。之を解脱するかせぬかに依り凡庸俗人と聖者との振りわけが出来る。剣の極意も如何なる機能の極意も遂に茲に落ちつくものである。

二月十日

現在の任務職業に対し忠実熱心であることが最も早い進歩と成功の正しい道であることがつくづく判り、且実行する事の出来る様になったのは最近の事だ。陸大卒業時頃迄は此の悟りと実行が十分でなかった事を後悔する。

成果の優劣を能力の大小に帰し、準備に払ひし努力の大小に帰せざるは短見である。能力の大小は人間たる以上限度あり微々たるものである。併し準備に関する努力の大小に至っては際限のない程開きがあるものである。

二月十二日

人間の最も尊敬するのは私心のない事である。此の一点さへあれば他人は自己に出来難い事で

あるから尊敬する。相当の能力、地位ある人の修養せなくてはならぬのは此の徳目である。

商売をする時は掛け引と云ふものが入る。営利を考へれば嘘もつかねばならぬことが多い。農業には掛引もなく嘘もない。大自然を相手とするには唯信実であればよい。人に対し利益を求めんとするには、其の場其の場では掛け引きと嘘も必要になって来る。従って農業に従事する人は淳朴となり易く、商業に従事するものは機敏にして術策に長じ易くなることは自然である。環境は人を育つ。一箇の完成したる人間に於ては環境を克服する事が出来るが、練成甫育の過程に在るものは環境に支配馴致されることが多いから、人物の養成は自ら選ぶべき環境が判って来る。

某氏が人上官と喧嘩をしつつも常に人に捨てられず又屢々危地に遭遇して且危険を脱する所以を尋ねるに、矢張り人に感謝される多くの善行陰徳を胎して居ることを聞いて、~~成程~~天は善悪の酬ひを公平にするの感なきを得ない。

河内連絡所に今井通訳官と云ふ支那語の達人が居るが、其の支那語修得方法は支那人の家庭に一年間住みこみたるのみで支那人と何等変らぬ支那語の能力を有するに至った。語学の修得はどうしても行住坐臥環境を挙げて語学化するに在る。即ち~~其の~~語学修得に成りきる事が必要だ。換言すれば精神的には真剣味、形態的には一身をあげて渦中に投ずることだ。某氏の如き普通の会話の為には二ヶ月で十分であると云ふ。生活を語学化することだ。語学の修得を以て戦闘行為であり命の取りやりだとする真剣味があれば極めて短期間に修得の目的を達する。何事の修得に於ても「コツ」は茲に在る。居住坐臥其のものになりきることだ。

二月十三日

ジャラムの航空地区隊を視察したら、秦中尉の話に、航空地区隊では技術者四十名が支那側で働くことを希望して居たが現在は三名に減少してしまった。其の理由は中国空軍に接近して観察した所、彼等は陰惨でこんな社会で暮すことに不安を感ずる、彼等は自分等が暗い事をしてゐるから日本人も同じ様に暗い事をするものとして常に猜疑心を以て接するから不愉快で仕方がないのみならず、何時巻添へを食ふかも知れない。暗い影とはガソリンを売買したり自動車の部品を横領したりする。彼等の生活は実に醜悪だ。だから共同生活することが嫌になったと云ふに在る。

二月十六日

昨日は葉上校にゴネられ閉口した。理由は自分が日本軍からの工作を一手に受け持ってゐたのを、日本軍が方戦犯主任の要求に依り金條五十万円を交付し、他の委員から葉の力のない事を難詰され面子が立たぬと云ふに在る。葉の芝居なりや、真憤なりや明ならず。支那人は或程度以上は掴めぬものである。

本日、軍司令官出頭問題で戦犯調査委員会に行く。近頃に至って、予も稍々忙がしくなった。

富の観念に就て世人は誤ってゐる様である。と云ふのは自分の所持品を多くすることを以て富めりと考へてゐる。併し之は所持品の額しか富はないのである。自分そのものが富になる事に努力しない。それでは所有品がなくなれば富がなくなる事になる。然るに或種の人は自己そのものが富である。即ち其の人々は自己の能力と信用とに依り必要に応じ自ら富を求め之を頤使(いし)するのである。従って別段自分外に金や物を携帯蓄積しようとはしない。その代り自己を磨く事に熱心である。某氏の如き一回演説すると三百万円の金が立ち所に集ったと云ふ。此の調子で所謂鶴の一声で金でも物でも集め得るから不自由はしない。又生活方面に於ても社会の信用があり尊敬されるから衣食に苦しむことはない。~~予は~~真の富とはかくの如くあるべきである~~と思ふ~~。終戦後、我等日本人は持物を制限されて内地に帰らねばならぬ。在留邦人の如き日本に何の縁故も財産もない人がある。之等の人は携行品を制限される以上、忽ち帰還後路頭に迷ふものである。若し本人に社会の信用と能力とがある場合に限り生活苦より解放されるであらう。自己以外に富を造れる人は臍を噛むの苦痛を嘗めねばならない。以上の思想は子孫の為に美田を買はずその代り児孫を教育して置く~~思想~~主義と一致するものである。

二月十七日

~~某氏~~辻政信の談に、人と交渉する時先づ相手が如何なる型の人物であるかを見分けることが必要である。其の型とは物質型と精神型の二つに分かたる。物質型の人物には物質で以て接し、精神型の人物には情熱を以て接せねばならぬ。然らば此の型の類別を直観的に見分けるには彼の服装華美ならざるや、携帯品(時計、万年筆等)贅沢ならざるやを見れば大体に於て分明であると。

~~某氏~~辻交渉の要を述べて決して腹でおこってはならぬ。表面おこって見せても心は平静でなければならぬ。若し腹からおこれば交渉は当方の負けである。特に支那人の如くゆとりあり気永の者に対しては然りであると。交渉に方り金や物をかけることを以て対支那人交渉の要領の如く感じて居るむきもあるが然らず。支那人に対しても金を与へず金も取らず魂を以て接した人もある。之は交渉に方り「物をかける」と云ふ一般の俗習を破り自己の身体をかけたと云ひ得やう。支那人間では此種の人が珍しいだけにそれだけ尊敬されてゐる。

蒋委員長は私生活の極めて正しい人である。酒も飲まず、煙草も喫せず、妾も置かぬ人であると云ふ。彼の今日の成功は黄甫[埔]軍官学校長時代[161]の子弟教育の賜であると云ふ。軍官学校の校長として寝食を生徒と共にし全人格を傾倒して長年月職務に没頭した。之に依り魂を捧げる部下が出来た。蒋の幕下に数名の俊秀なる頭脳トラストが居るさうである。万事此等の人が画策するさうである。

[161] 黄埔軍官学校は中国の広州黄埔に設立された国民党の軍幹部養成のための学校で、1924年6月に開校した。蒋介石が初代校長を務め、国民革命軍の幹部を輩出した(西川 p.320)。

二月十八日

南方に三代暮す日本人は現地人の如く智能低下す。特に数理的能力に於て然りと。日本は先づ北より発展するは天意なるべし。

権力者に対し民衆は其の私生活を凝視してゐる。之は軍の指揮官でも政治家でも通用すべき原則である。私生活は権力者の試金石となるものである。慎むべし。懼るべし。

日本人は潔癖であるから支那の観察が極端に失し正鵠を得てゐない。例へば従来の支那通は支那は阿片と賄賂と女の社会なりと悪く見てゐる。支那軍の勇敢なのを見た日本軍人中には最近の支那は到底既往の支那でなく、革命以後面目を一新してゐると善く見てゐる。併し支那は幅が広い。善悪を併呑する大いさ濁り味がある。宜しくスケールを大にして潔癖に偏して観ぬ容易[ママ]が必要である。

因果応報は一朝一夕に来るものではないが、必ず時機到れば総決算するものである。だから陰徳あれば陽報ありとすることは社会現象上にも事実である。唯物理的現象の如く鮮明でない。要素が複雑であり多元的なるだけ不鮮明であるが、結果に於ては事実として現はれるものである。

俎上に乗れる魚は殺さず逃げんとする魚は却て追いかけて取らんとする心理は窮者の利用すべき原則なり。身を捨ててこそ浮ぶ瀬もありとする一刀流の極意に相通ず。求めんが為の努力は効果を奏せず。与へんが為の努力が却て我方の得る処となるは人間界の特異現象にして物質界の現象と異なる所以なり。人間界は意思を異にする物の相対的作用なり。物質界は一の意思を以て動く一方的作用なり。因果応報の端的鮮明なるとならざるの理も茲に在るか。

二月十九日

今日は妻の誕生日に当る。妻で思ひ出すが、将来国軍が建設された時は将校夫人の規範と云ふものを造って一定の埒外に脱線せぬ様に指導せねばならぬ。妻で夫が失敗した例も決して少くない。官吏にも其の夫人の守るべき規範的のものがなくてはならぬ。官吏服務規則の如き妻が一半を履行せねばならぬ。にも拘らず妻の誘導は余りにも自由に失する。夫不在間妻の行為が自由であるだけ逕庭（けいてい）［へだたり］を生じ易い。

安南人は日本人に比し明朗性がない。彼等には大笑（ワライ）と云ふものがない。日本人には余興とか騒ぎ立てる場合がある。安南人は微笑はあっても愉快に騒ぐと云ふ事を見ない。彼等の過去はそれだけ虐ひたげられた痕跡を持ってゐる。日本の子供にはオドケと云ふ愉快さがあった（今はどうか知らぬが）。安南人の子供にはそんなユーモアがあると思へぬ。

自分が不幸だなどと思ふ前に、陰徳が足らなかったのでないか努力が足らなかったのでないか有能でないからでないかと反省省察を加ふべきである。幸福なる人と不孝なる人と其の過去の業績を比較した時に、釈然として自得するものがあらう。不孝なる人にして此の反省がないのは結局自惚

れてゐるからである。比較するものがない時は人は此の欠陥に陥り易い。

指導者は勉強しなければ不可ない。勉強する人と勉強せざる人と何れを指導者とすべきかは自ら分明である。某氏の如き其の勉強家たる点に於て寔に感歎の外はない。

夢で何を見るかを調査すれば本人の居常支配してゐる思想感情を知悉判知し得べし。

二月二十二日

中国側の日本軍人軍属取締厳重となる。

最近予の所感「軍服を脱したる後の予の態度は飽く迄人格に於て他に秀づることを心掛くべし。技能を以て今更地方人に競争は出来ず。恃む処は自己の魂と人格のみ」此の点に於て従来の軍人生活時代に比し層一層の克己修養を要することを痛感す。

二月二十三日

工作の体験に依れば結局嘘言はつけぬものなり。嘘をつけば辻妻を合はす為に次から次へと嘘言を捏造せざるを得ず。遂につまらぬ事から辻妻が会はず相手につっこまれ破綻を生じ易きのみならず人は嘘言をつきて平常心を保つ事は容易ならぬものなり。正直は無策なるも結局は最も強力無難なるものとなるなり。

二月二十四日

榊原参謀帰る。緒方経理部長と金策の案をねる。

自ら疾(ヤマ)しい時は気になるものなり。之を隠さんとして気になるものなり。やましからざれば決して気にせざるなり。気にする所にやましき点を疑ひ得るなり。

戦犯問題も愈々大詰となる。

捨身五分惜身五分を以てする喧嘩は必ず破る。上司に対し特に然り。捨身十分なれば喧嘩は勝てる公算多し。此の腹きまらざる以上喧嘩すべからず。

二月二十五日

河内地区在留法人の引上げに関連し外交機関（大使府）の邦人に対する威力の少きに嘆ず。矢張り軍の力を借らざるべからず。今後警察力が帝国の力となるべきも国民は往時に於ける軍の威力を憧憬し来らんこと必せり。

戦地で自分の子供の筆跡を見るとたまらなく愛着を感ずる。之が死んだ小供の筆跡であったら猶更そうであらうと思はれる。予の洗面具の裏に貞彦の字で拙ない数字の書いてあるのを見て堪まらなく感じた。

愈々某氏［辻］の〇〇行が実現することになった。

二月二十六日

人生行為は二元である故必ず表裏正奇の二手段を忘れてはならない。吾等の過去は余り一手段のみに拘泥しなかったか。予は云ふ。善人の行為は一手段しか実行し得ない人を云ふ。大乗的見地に於て自己を殺し他の手段も断行し得る人、例へば一殺多生の如きか。真に善人の域を一歩超越したる聖の範疇である。楠正成公の如き決して単なる善人でなかった事は、其の手段に於て正奇両道を遺憾なく用ひられ「救済」の成果を収められた事でわかる。

精神力の大なるものは精神力の小なるものを圧倒す。決心の鞏固なるものは決心の薄弱なるものを圧倒す。度胆（ギモ）を抜くと云ふは此の理を応用するものに外ならず。茲に一例を引かんか「さあ乃公を殺すか殺さぬか、お前の勝手にせよ。」と相手に啖呵を切れば相手は真に殺す意思が予め確定しあらざる以上、決して殺し得るものに非ず。決心の動揺せる時に機先を制して当方の決心を示せば、相手は我に屈従するなり。「殺すなら殺せ」と云ったら相手は屈従して殺し得ざる心理となるなり。此の呼吸を解し得たるものは解脱の域に達しあるものなり。

二月二十七日

維新史や明治の政治史を読む時、昭和の日本の政治が一部少壮軍人に牛耳られてゐた事の功罪が明瞭になる。即ち調子のよい時は調子がよいが、大体の方向とか止まるべき限度とか大所高所に立つ政治の玄人技能に至っては、矢張り元老重臣が中心に立ってやってゐたなれば誤りが少なかったと云へよう。満州事変以後、軍部の政治的勢力が増大した事は今日の不孝を招いた原因でもあると共に、支那事変前に於ける日本の飛躍的発展の原動因でもあった。軍部は政治史上功罪両つながら残したと云へよう。茲に素人流の新鮮味と危げがあった。

国際情勢の変転は迅速にして極まりないものである。第一次欧州大戦直後は世界の永久平和が到来したと鳴物入りで宣伝され、之を信じて躍らされたものが相当多かった。軍縮問題も非常にやかましくなってゐた。併し今度の大戦直後の雰囲気は丸で違ふ。平和来と云ふ様な表面的にもなごやかな空気は湧いて来ない。東亜に於ては満州問題を中心に支那と蘇連は全面的衝突の雰囲気にある。米蘇の関係は均衡上小康を得あるも本質的に虚々実々の秘術を尽して争ってゐる様子である。此のまま平和が来るものとは思はれない。寧ろ戦争の継続と云った方が妥当であらう。此の意味に於て日本の国際的地位も決して不動のものでない。茲五年も立てば国際的に一大変化が起るものと覚悟しなければならない。日本と支那とが提携して先づ蘇連に、次で米国に当らなければならない事は火を見るより明かだ。米国は中蘇の確執に対し冷淡である。此の点が支那の米国にあきたらない点だ。利用すべき時は支那を利用し、利用する必要のなくなった時は何時でも支那を捨

てる。自己の利益の為に支那を利用するのが矢張り米国の根本の腹だったと云ふ事が、最近支那人間に漸次広く認識されつつある。米国は決して永遠の支那の味方ではないのだ。国際関係の如き皆然りだ。蘇連と支那との関係の如き最も其の顕著なる実例である。併し乍ら平和が永続するより波瀾の多い方が日本の復活には策が多く有利なる環境と云はなければなるまい。日本人を活気あらしむるには『戦争は依然継続してゐる』と云ふ言葉だ。

二月二十八日

「持つが故の苦しみ」を体験した。本来無一物なれば何の苦労もないのだ。唯持つが故に其の仕末に浮身をやつす苦心が生じてゐる。無い者は無いと云って苦しみ、有る者は有ると云って苦しむが、持たぬ者が楽することのある事を持たぬ者は覚らないで、常に持つ者のみの幸福を羨むが之は間違ひだ。

支那との交渉は真に慢々的だ。此の辛棒なくしては交渉は成立し難い。

三月

三月一日

○［辻］の出発は又復遅れた。之が支那式と云ふものだ。

新聞記者の操縦のコツに就て、某辻政信氏の言に依れば矢張り先制である。即ち記者は秘密特ダネを握らうとしてゐる。彼等の三を要求する所を一だけ示せば彼等は一を種にして三ある様に想像を逞しうしたり、新聞記者の勘で批判を加へたりして結局はこちらが受身になる。之に反し彼等の要求する一に対し三をブチ蒔いて示して彼等に秘密保持の責任を持たして仕舞ふ。そうすると彼等は困ると共に責任を感ずるのである。のみならず其の公開した人に非常な魅力を感ずるのである。赤心を腹中に置かれた如く畏敬の念を生ずるのである。事実は陰さうとしても陰しきれない。而し一般に之を陰さうとし新聞記者は之をスッパ抜かうとして対立競争するのが世の状態である。その逆手で成功したのが某氏である。

演説の要訣は聴者と講演者とが一体融合するに在る。然るに筆記物を朗読する主義は雰囲気に合さず、木に竹を次ぎたる如きギゴチなさを生ずる。之を解決する方法は云はんとする要旨のみを箇條書にして置いて後は講演席に於ける聴者の性質、性別、感情、雰囲気、を呑み込んで状況に合する如く我意思を敷衍して行くのである。茲に熱を生じ聴者をして感激せしめ得るのである。

自らが自己の意図を印刷普及するが如きは宣伝屋の悪評を招き易い。若し部下とか他人が其の人の意図を印刷普及するに至れば其の人の徳望は大したものである。

正しい事さへして居ればどんな破目に立至っても何等臆する事はない。自由の振舞を為し得る時に正しい事をする事だ。然るに人間は自分勝手に振舞ひ出来る時に不正を敢へてし苦境に立ってから此の不正の報ひを受け益々困窮するものだ。

三月三日

今日は、討司令部に於て予が爆撃を受けたる一週年紀念日なので、討司令部跡へ大畑少尉と三谷兵長の戦死の跡を弔らひに行った。花を持って当番谷村兵長を伴って行った。爆撃の跡は取片づけられずにそのままになってゐるので当時の惨状が忍ばれる。花を捧げて死者の冥福を祈った。壁に撒き散らされた大小無数の弾痕を見て、予が助かったのが奇蹟的であり如何に偶然であるかがわかる。一米も違った場所に居るとか○・一秒前後でも居る場所が変ってゐたら大畑少尉や三谷兵長と同様の運命に陥った事は確実である。三谷兵長の如き全く予の為に身代りになって仆れたものだ。予は如何にして彼の遺族を慰め得るかが今後の問題で責任を痛感する。何れにせよ大いなる力に操られてゐる様で、人間の運命禍福と云ふものは或る程度以上どうにも人力で出来ないも

のがあることを痛感する。人間の努力理智以外の分野がある事を感ぜざるを得なかった。さて過去一年間に於ける予の変り方も大であり、世想の変遷も偉大である。予は生き甲斐があったか、それは今後予に課せられた問題の如何に関係する。唯、予は決して理由なくして生かして貰ってゐるのでなく大いなる力の導きに従って、今後大なる任務を遂行せんが為に生きてゐるのである。

最早予等の年配では内省とか精神修養の時機ではなく、一挙手一投足を社会の為、人の為、実利実益を発揮すべき時機に達した。挺身国難に殉ずべき時機である。自己完成は既に出来挙がったものでなくてはならぬ。

三月八日

組の仕事と云ふものは実によいものだ。最近此の事実を痛感してゐる。

谷川博士来る。学術の研究は頭脳に非ず。真面目の誠意の如何が解決すと語れり。

三月九日

人間は自己本位の本能強烈なるが故に、之に調節を加へん為犠牲的道徳を必要とし、此の犠牲的道念を道徳上最上位に置く傾向あり。故に己れを薄くし人を厚くする主義は必ず社会の尊敬を受くる最大の捷径なり。

㊀㊀辻政信出発す。

三月十八日

近頃は心を砕く分野が広く落ちついて日誌も認め兼ねる。

㊀㊀辻政信去り、十四日には酒井参謀去り、十七日には佐藤参謀も去った。予は戦場の収容隊長格だ。

内地帰還時機が支那総軍の配慮で急速に繰り上げられ、最初は三月二十日より出帆の予定であったが、若干緩和され三月二十六日より四月十日迄に引上出帆する事となった。支那軍の徴傭部隊解除の交渉、戦犯処理に関する打診交渉連絡等々、心の多岐多忙を極めてゐる。此の間に修得した点は組の仕事の有難味だ。換言すれば同志と共同の目標に向ひ働くことの有難味だ。軍の一般社会に比し仕事のしやすいのも、統制力に依り共同の目標に向ひ一糸乱れず行動し得る事だ。日本の今度の失敗は何としても友を持たずに孤立に陥った事にある。世界の強国の支援を得なかった事にある。如何に個人が有能でも一人では仕事が十分出来ないと同様、国家に於ても同志を多く持つこと深い同志を持つ事が何よりだ。仕事は一人では満足に出来ず苦労のみ多いに比し効果が挙らない事を、最近の予の境遇と予の過去の経験から対比して痛感する。友あり遠方より来る又楽しからずやと云ふ事は単に精神的愉悦のみならず、同志の共同動作する愉快さ気楽さをも意味する

であらう。

育兵団に不思議に予言の当る下士官が居って過去の大きな出来事をあてた経験があるのみならず、今度の我等の内地帰還、育兵団の海防転進等もピンピン的中せしめたさうである。それによると後向五年で米蘇開戦するさうである・・・・・・・・

目下悩みの種は、米軍飛行士の釈放問題にからむ討関係者対米軍屍体捜索隊長バッケー大尉との折衝にて、全く事態は暗礁に乗上げた。併し此間、米人の責務の遂行に旺盛なる熱意と努力、倦むことを知らぬエネルギー的の態度には天晴れと感嘆の外はない。食事を抜いて午前一時や二時になる迄六時間でも七時間でもぶっつづけで訊問する執拗さにはアングロサクソンの粘りを遺憾なく発揮してゐる。日本人なれば到底この様な執拗さを発揮し得ない。

予の嬉しみは人の喜ぶのを見ることだ。目下収容隊長に類し処理事項堆積し、心身を労すること大なるも、大慈悲心を発揮し人の為働くことを愉快に感じてゐる。

春日隊長[162]も数ヶ月以来予と共に生活し、専ら戦犯容疑者としての収容を待ってゐる心情察するに余りがある。春日大佐は警察官に比し憲兵が小数で成果を挙げる原因として、熱心即ち危険を懼れず挺進する事及迅速と教育の周到の三点に在る事を指摘してゐる。憲兵の実務教育として、戦場の状況を設けて心胆に奇策を練るに反し、警察には教育と云ふ事が閑却されてゐることを指摘してゐる。憲兵下士官は内地の警察署長に匹敵する技倆を持ったものである由、又、料理屋、病院、湯場は情報収集の有力なポストであると語った。特高警察には金が必要である。而も陸軍の諜報費も僅かであるから工作費を造らんとして憲兵自体苦心するものである由、不正事件も茲に胚胎し易い。厳重処分者の携行金品などは憲兵の収穫になるのであるが、黙ってゐると個人の私服に着用される危険がある由、料理屋の帳簿には警察に出すものと実際のものと二つある由、料理屋に拠点を持つ憲兵は此の実際の帳簿を見るから総てが判る由、憲兵にても思想とか労働とか共産党とか専門者を造らねば効果があがらぬ由、之は何事にも通づる原則であらう。憲兵は階級は昔の通り上等兵を六年もやらす主義がよいが、待遇はそれだけ考へねばならぬ。又、捜査方法は将校よりも下士官の方が成果を挙げる由、之は将校は人間的になり過ぎたり高く止って遠慮するからであらうと語らる。又、新聞記者操縦の要訣は会食をし盆と正月に金一封を送ると云ふやり方をすれば、普通の新聞記者を手馴づけする事が出来ると語らる。憲兵の如き特種権力を行使する者は素質の優秀なることが絶対要件である。単に敏腕と云ふので憲兵の要件が備はってゐるのではなく、寧ろ恒産があり人間的の品質の優秀さが必要であって、不法不当の権力行使を防ぎ得るのは能力方面よりも人柄的方面であると春日隊長は語らる。全然同感である。

[162] 1945年11月20日に記載のある憲兵隊長。1945年11月25日～1946年4月11日まで、ハノイ連絡所で中国軍督察署の取り調べをうけていた（大島 p.18）。

三月二十日

戦犯問題も混沌として埒あかぬ。原因は支那側内部の不統一に在る。予は対支交渉の結論として、支那は重大なこと困難な事は独自で解決し実行する能力がなく、結局は日本が之を決定し指導せねばならぬ事を知得した。将来、東亜大同の場合に於ても指導力は日本が握らねばうまく行くものでない。之は結局支那の救済にもなるのである。

河内には千兵の仏兵が三月十八日入場して来た。仏軍の日本逃亡兵を惧るる事想像外である。又、支那側は仏軍の強硬上陸を封止する為、日本軍に武装さすと云ふこけおどしをやった。日本軍は斯くの如く仏軍にも惧れられてゐる。吾等は日本軍の強さを外国の反響に依り知得した次第である。日本人が日本人を見ることは判ることもあるが、全体の価値は寧ろ斯くの如き第三者の方が至当に判定する。終戦以後日本軍の威力は決して減少してゐない。

安南も支那も一人では立って行けない。

予も死すべき命を拾って最近は多忙で些か御奉公してゐて生き甲斐のあった事を感謝してゐる。矢張り予も国家になくてならぬ人間であったかと今更感慨に堪へぬ。

三月二十一日

故郷の山川は如何。荒神山は如何。本田川は如何。年々水減するは何の徴ぞ。幼時頑童（がんどう）と優游（ゆうゆう）の地、今如何。我今印度支那河内連絡所の寝台に於て故郷を偲ぶなり。

三月二十二日

支那軍の仕事も一つ面白いと思ふのは、公文書を直接責任者に提出することが出来ることだ。例へば戦犯問題の処理に関する当方の要請書を、予が直接携行して蘆漢方面軍司令官に時談することが出来るなどは面白いと思ふ。日本なら一本の窓口と云ふ掟に従って書記から書記の手に渡る所だが、支那では責任者が責任者に渡すことが出来る。若し日本が之を学ぶなら、二通の書を造り一通は事務的手続を取らしめ一通は政治的折衝の際使用すると云ふ要領がよいと思ふ。どう考へても支那人は支那人だ。楊管理処長は従来廉潔正義派と目せられてゐたが、転任に際し遂に本性を現はし、自動車接取の問題、日本兵操縦手二名の携行問題、ガソリン一二〇ガロンの寄贈要求問題を惹起した。

三月二十三日

河内連絡所引上前に於て、将兵に対し予の述べんとする所懐。

「戦ひは継続されてゐる。又、今後継続されなければならないと云ふ事を強調したい。其の理由は次の通りである。第一次世界大戦直後の体験と今次第二次世界大戦の直後とを比較し、如何に

差異の多い事よ。第一次世界大戦直後に於ては世界恒久平和到来せりと口々単々欧歌されたものである。然るに第二次世界大戦直後の今日、斯かる空気は何処に求め得やうや。今直に世界全面的戦争にならうとは思はれぬが、近き将来の大戦争の原々は種々の形式に於て醸成されてゐる。史的に見れば現在は史上空前の大争闘時代であり大暗黒時代と云へやう。

翻って日本の復興に就ては、予は楽観するものである。何となれば国力失墜は国内の衰弱より来るものでなくして、外部の一時的衝撃に依るものである。内容は健全である。故に外圧さへ去ればもと通りになる事は六つかしい事ではない。此の外圧は国際情勢の変化に依り決して今後増大することはなく、寧ろ減少すべき運命のものである。蓋し東亜に於てはソ連に対する支那の争ひは避け難く、支那とソ連との争ひに於ては米国は支那を支援せざるを得ぬ。故にソ連に対し今後或る程度の米支提携が行はれるであらう。片やソ連、片や米支の均衡に於て日本を利用する方が優位を占むることは明瞭である。故に近き将来に於ては日本は両方から色目を使はるる立場に在るものと思ふ。此の点に於て最も正当の道を歩んでゐるのは支那である。支那の一本立が出来ぬことは自他共に認むる所である。故に支那は終戦以後日本を掴へんと努力してゐる。最も下手なのは米国である。之は米国の自力を信ずる自負心と日本を憎む感情の致す所であるが、寔に馬鹿な手を持ったものである。其の一の下手な手は日本人に米国を嫌はしてゐることである。其の他の下手な手があるが之には敢て之を省略する。米国・支那対「ソ」連の角逐に於て日本は先づ米国と支那とに好意を示すことが国力恢復上捷径である。かくて大陸に於ける地歩獲得は可能性を増すであらう。我々は感情上今直に米国と手を握ることを欲しない。併し感情を押へ国力獲得の一時的方法として米国と手を握らなければならない。斯くて我々の生きてゐる間にソ連を叩きつけて大陸に確乎たる地歩を占むることを努めねばならない。対米復讐戦はその後であって或は我々の生存中無理かも知れない故若い諸君にお願ひし、又我々の子孫に申し送らねばなるまい。米国を叩きつけたる時は即ち日本は世界を征覇の緒に着いたものである。我々は凡てを之を目標として行かねばならぬ。然しそれは今後の日本は凡て戦ひの準備であり継続である。戦ひは継続されなければならぬと云ふ理は此に存する。

我々は今仏印より撤退し上陸後軍を解散せんとしてゐる。併しそれは一時の癨変であって皇軍の生命の断絶とは考へない。例へば兵器の分解搬送する様なものであると信ずる。再び組み立ての必要も来るものと確信する。軍の解体は一面悲しむべきではあるが、又考へ様によっては一面幸なりとも云ひ得ない事はない。何となれば現在の国軍は口に皇軍と称するも余りに垢が多く堆りすぎてゐる。此の垢を大掃除する為の大分解は何時かの時は必要であったのだ。斯くて大掃除大分解の上再結合再組立の暁は、生気躍動名実共に真の皇軍を生むことを得るからである。茲に前途を思へば悲しむべきでなく希望の涌然として湧くを覚ゆるのである。各位死生を超越し戦場に馳駆し此の間に養ひ得たる魂と気力、体力、経験を大切に保存、更に欠陥を矯正して他日の用に備へね

ばならぬことを希ふものである」

三月二十四日

人は皆自分の仕事が一番大切であり自己の地位が一番重要であると思ひ易い。自分の仕事に熱中するのはよいが、其の価値が如何なる程度であるかと大局より観察を欠き易い。

日本憲兵も斯く評判が悪くては救済の道がない。四面楚歌とは此の事だ。外人の誰に聞いても憲兵を悪く云ふ。此の風評の反面には日本憲兵の悪い所も実際多かったであらう。併し任務以上に成果を挙げんとして無理をする所に人に迷惑を掛けた所も少くなかったであらう。但し何と云っても日本憲兵の素質が憲兵の職権につり会はなかった矛盾から生じたもので、罪を憲兵に着せるけれども当は国軍の人事の誤る所である。日本陸軍の中でも兵科的に憲兵は悪質と云ふ事になってゐる。

三月二十六日

予は苦境に陥り前途に不安を感じたる時、南無妙法蓮華経を唱へる事にしてゐるが、不思議に前途が有利に打開されて行く様に思へてならぬ。最近数個の事実が之を証明してゐる。但し事は一身一個の問題でなく国家的の問題である。

戦犯問題も大詰になった。急転直下的に局面は変化して来た。河内に於ける予の仕事も一は片づき一は正に片附かうとしてゐる。思へば此の三ヶ月は奮闘と画策の生活ではあった。国家再建の一頁に予の三ヶ月の生活が留めらるるを信じてゐる。

如何なる些事も三年最小限の継続に依り効果の稍見るべきものがあるに至るものである。予も計算術の三年の訓練に依り、些か観念が正確の度を増して来たのを自認するものである。

自他利害が共通した時に他と手を提へることは万人のよくする所である。自他利害の相反する時に他の利益を無視しても自己を生さんとすることは普通の人には亦六つかしい事である。自他利害の相反する時に自己の利益を無視しても他の利益を図ることはより以上為し難い事である。

三月二十七日

仏印駐屯二年半に垂(なんな)んとし、此間我が外務機関の仕事のやり方を観察する機会を得たが、一面在留邦人は外務機関に信頼せず軍に信頼する傾向が濃厚である。之は単に戦争中だと云ふ現象でもなく平和状態に於て世界各所に共通する現象である~~様に観察する~~らう。何故に然るか。原因は決して一にして足らずと思ふが、軍の方は国家的見地に事を処断するに対し外務機関は自己の事務の便宜を根本的基礎とするのが最大の原因であると予は観察~~してゐる~~する。~~欲く~~よく外務省は腹がないと在留邦人に云はれるのも外務機関が條約とか條規とかを楯にして国策と云ふ様な事を従にする為であらう。之に反し軍部は善も悪も悉く国策国威の振長を根本としてゐる。軍人程国家思想の

旺盛なものはない事は事実である。

陸軍生活の幕を閉じんとするに際し所感は尽きないが正しきものは最終の勝利者であると云ふ事を感ずる。結局は正しさが判って来る様になるものだ。正しき事と云ふものは場合に依り非常に迂遠なものである。併し総合的結果論よりすれば矢張り正しき事が最も安全にして且無駄がないことが判る。

日本でも東北の人は淳朴~~だと云ふ~~の定評があるが支那に於ても同様らしい。現在五十三軍が河内に居るが此の軍長副軍長参謀長は悉く東北人即ち満州出身だ。此の東北軍は張学良の軍隊であって満州事変の際日本軍に追はれ散々に痛められたものだ。爾後転々として支那事変大東亜戦には騰越龍陵で日本軍と闘ひ散々に叩かれた。それでも日本軍に対しては尊敬の念を持ってゐる。決して日本軍を憎む様な事はなく日本軍は強いと感心してゐる。親日よりも敬日である。九十三軍の河内で警備を担任してゐた時期に比較して、五十三軍が来てから明朗になったと云ってゐる。軍隊の訓練の熱意も五十三軍が遥かに九十三軍より熱心である。支那軍につきものの搾取は九十三軍に於て最も甚だしく、五十三軍には糾撫部隊と云ふものがあって搾取することはするが二千円とか五千円とか算盤が少さく総合しても大した額にならない。之に反し広西出身者で固めてゐる督察処等に至っては実に悪辣と云ふ語を附けるより適評がない。広東広西人等に比較すれば東北人北方人は義理固く質直である。五十三軍副軍長の居室に這入ると蒋委員長の額と張学良の額が並べて掲げてある由。又、副軍長は張学良の事を今でも副司令と称して居る。満州事変以来既に十五年もなってゐるのに旧主を慕ふ事右の如くである。

「人は北方　物は南方」の感を深くせざるを得ない。併し印度支那の安南婦人の情の細やかなのは感心である。現に或る日本人の収監された者を差入れする安南女性の真実味には皆心を持たれてゐる。榎本と云ふ逃亡憲兵が収監された。其の情婦であるダンサーの安南婦人は四十八回差入れし尚面会を続けてゐる由。日本人を安南人が好く事は理屈以上である」[ママ]

日本の将来の発展方法を考へるに、国内に於て高度の専門技術教育を行ひ此の人材を東亜の各方面に分布することである。安南でも支那でも喉から手が出る程之を欲してゐるが、今は連合国の手前遠慮してゐるに過ぎない。若し平和克復後に於ては羽が生えた様に日本技術者は売れるであらうことは必定である。

モルトケ[163]は戦略を救済の術と定義~~したやうである~~したが、現在予が河内連絡処長としてやってゐる仕事も見方に依れば救済の術であり仁術である。予の仕事は日本側の希望と支那側仏蘭西側の要求を如何に調和して解決するかに在る。人の欲することを叶へてやると云ふ事は仁術である。凡そ仁術を行ふの覚悟あれば労苦は苦とならず、人の為に尽す時に感ずる一種の楽しみと勇気が

[163] モルトケ（1800-1891）プロイセンの軍人、参謀総長。普墺戦争・独仏戦争を勝利に導き、ドイツ統一に貢献した。参謀本部を中核とする近代的、統一的な軍制度を整備した（西川 p.956）。

生じて来るもの~~である~~。予は如何なる職業を行ふに方っても此の心構へが必要であらうと思ふ。単に自己本位に立脚すれば馬鹿らしさを感じ疲労を感ずることが世の中に多い~~であらう~~。仁術を施す心構であれば行ふ所必ず人より感謝され又世に潤ひを生ずるものである。若し予にして自分の為を考へるならば今行ってゐる仕事は九割九分迄此の目的に副はない事ばかりであるから忽ち嫌怠を覚ゆる筈である。併し仁術と思へばこそ仕事が一つづつ片づく事を喜ばしく思ふに至るのである。逃亡兵など自分の得手勝手で逃亡して置いて、支那側に掴まって拘留所で苦しくなると恥も外聞も忘れ救って呉れ助けて呉れと哀願する。全く人間の部類に入れたくなくなってしまふ低級さである。人の道徳的価値の大小は自己の為にするか人の為にするかの大小如何に関すると云って過言でないであらう。

官吏軍人を清廉ならしむるには質の精選を試みるは勿論であるが、生活に後顧なからしめ品位を保ち得るだけの物質的保障を与ふることが必要であることを我が憲兵の行跡等に徴し痛感する。支那人は官吏でも軍人でも商売をしてゐる。寧ろ商売の手段の様に考へてゐる。真正の軍人は極めて少いであらう。殆ど皆商売気を持ってゐる。技術者の様な地味で儲けの少い職業は支那人の最も嫌ふ所である。生活が商売人と余りにも懸隔があるからである。而し国家社会の指導者は商人であってはならない。それ故に官吏軍人等国家社会の指導的地位に任ずる者の所遇に就ては国家は大いに考へねばならぬ。日本の過去に於ける所遇は良ろし過ぎたりと云ふ事は出来ぬであらう。それでも尚清廉の実績を収めたのは風教の致す賜であらう。

三月二十八日

予も一月以来支那側との折衝の第一線に出て最も不愉快なる戦犯問題の処理を買って出て、人情の機微と云ふ事にも認識を深め得る機会を得た。人間は自己本能上生命とか重大な生活の脅威と云ふ問題になると責任を回避したくなるものだ。此際自ら一身を犠牲にして責任を負ふ~~と云ふ事~~のは非常な覚悟を要するものであるだけ万人には為し難い事だ。人間の価値を発揮するのは実に此の一点に懸ってゐる。此の人の為し難い事を為す如く修練せねばならぬ。精神教育の真髄も茲に置かなければならない。それには慾を離るる事である。欲を離るるには身辺に繋累を造らぬ事が第一だ。南洲翁[164]の遺訓を最近繙き直して翁が操坦勁と云ふものに修養の手を下すに慾を離るる処第一なりと教示されてゐるのを思ひ出し独り合点自得した次第である。

三月二十九日

思ひ起せば予の両三回の死線突破に際し助かったのは、予一人の力でなく全く戦死した人が身代りになって助けて呉れたのである。例へば敵機に遭した時、同乗者の藤田軍曹が早くから敵機を発

[164] 西郷隆盛。

見し得ず奇襲攻撃を受けたら予の生命は完全になかった事は明瞭である。斯く観じ来れば予は一身の事のみ今後考へる事は甚だ当を得ないことであって、是非共予の身代りになって散った戦友の遺族等を助けねばならない。それには日本を明るくする必要がある。予の今後の働きは一身の栄達とか安全を求めてはならぬ。日本国の再建であり明朗化でなければならない。予の生涯は公的のものでなくてはならない。一身の為に痩身をやつす事に没頭してはならない所以を痛感する。

四月に入らんとする。満州東満の春が懐しい。国境を巡視せる時予が感じたる「岩間より　焔はけるや　山つつじ」の句を思ひだす。嗚呼人生の変化有為転換の甚しき事よ。

三月三十日

若い者は感受性が強いから一つの善い事一つの悪い事が強く響き全局を推して測らんとする傾向がある。感情も之に加はるものである。

最近知ったが現役将校に対し召集将校はよい感情を持ってゐない。特権者特異者扱ひをしてゐる。戦争の終る迄は仕方なしに共に働くが戦争後利害関係がなくなった場合には現役将校たりし者と共に行動することを欲しない。

国軍の正に解散せんとして感ずることは、情誼は団結の基礎であると云ふ真理の再認識である。無理があっても状況のよい場合は何とかして団結統制は維持し得るも、軍の解散と云ふ事実に直面すれば無理で結びついた団結は容易に崩壊する。環境の変化、状況の悲局期に於ても尚ほ団結を維持し得るものは、平素から正当合理的の結合であると共に内容的に情誼を以て結びついて居らねばならぬ。

前述の現役将校対召集将校の関係に於ても現役将校が正当合理的に召集将校以下を取扱って居ったか、情誼を以て接して居ったか、些も特権的寵児的自負心に駆って居なかったとか考ふれば常に然りとは云ひ得ない事もあったであらう。現役将校としては自覚に於て召集将校より優れて居らなければならない事は当然であるが、挙措に於て感情に於て慎しみを忘れる事はなかったか、公平と云ふ点に於て些かの遺憾がなかったと反省すれば思ひ当る節もあるのである。

「正しかれ　人間の至情を発揮せよ」とは国軍解散に際する辞である。

三月三十一日

海防に連絡に行く。日本軍は米仏支の間に於て好評を博し信頼を得てゐる。若し北清事変の様に第二次世界大戦に於て日本が連合国の一員であったら、日本軍は如何に列国の間に重きを為すであらうか。思へば残念の極みである。越北に於ては日本軍は終戦以後米仏英支の間に優秀さを今更の如く認識されてゐる。仏側の如き日本逃亡兵の存在を治安の癌としてゐる。僅か数百名の日本人を何故に斯く迄恐れるのであらうか。我等には諒解に苦しむ所である。それ程日本兵の強さが

彼等の脳髄を支配してゐるのだ。

須賀少佐、毛利大尉、黒木大尉と話す。予は思はず男泣きに泣いた。国家再建の予の熱情の溢れである。辻の発案した或る企図が駄目になった。彼等の反対を受けた為。[165]

日本人渡辺氏、土屋氏の釈放問題、逃亡兵の支那側拘留所から釈放問題で人間は自分の苦しみを除く為には火のつく様に他人に救助を求める。併し一旦安全の境遇に還れば前の恩を余り感じない。感じないわけでなくとも報恩する熱意は救助を求めた熱意と雲泥の差がある。之が人間性の弱点であらうか。浅間しき限りである。

[165]「辻の発案……受けた為」の文章は、鉛筆書き。後日（1949年8月27日であろうか？）、書き加えられたと考えられる。

四月

四月二日

予の接したる範囲に於ては、支那人は如何なる正義派忠直の士と称せらるる者も金を取らぬ者は一人もなかった。今迄金の事をおくびにも出さなかった人も日本軍引上の際に一儲けせんとせぬ者はなかった。何だか支那人の本質を掴った様な気がする。之は支那人の民族性や社会的習慣であって善悪の問題ではない。之と同じ様な現象を安南人に見出した。参謀部に一郎と名附けて兵隊さんが愛撫した利口な二十歳ばかりの安南青年が居った。将棋を覚え其の上達は目ざましいものであった。日本語も仲々上手になった。一般安南人の盗癖に比し彼れにはそんなものは微塵も見出せず確実であるから彼なら大丈夫と予の当番谷村兵長も保証するのであった。日本軍引上直前を機会に多くの安南ボーイは物を盗んで逃亡した。一郎のみは依然として忠実に働いてゐた。予は佐藤参謀の注文でトランクを買ふべく一郎を使った。谷村兵長に念を押した所、谷村は一郎は大丈夫ですと保証した。予はトランク代四百円と車賃十円を彼に手交したが、彼は遂に帰って来なかった。出発に際し他の安南ボーイから二十円の買物を頼まれたがこれも遂に帰して来ぬ。予は之は一郎の悪心からでないと思ってゐる。若し人間に道徳がなく単なる利害心のみであったら、一郎のやり方は日本軍撤退を控へ最も~~合理的な~~有利な方策であった~~事は明瞭だ~~。日本人の多くが斯くの如き場合に正直にするのは社会的習慣か家庭的躾の制縛に依るものだ。日本人でも斯くの如き場合、一応は一郎の様な気を起すであらうが社会的制縛に依り正直心を取り戻すであらう。故に一郎が悪いなどとは簡単に云へない。罪は社会風教の程度に帰因するものである。日本人は弱者を助け強者をくぢく様な一種の正義観義侠心があって、寧ろかかる場合には一郎などのやり方と反対に出るものである。支那人の如き態度にも反対のことが多い。道徳的に日本人は支那や安南人よりも優秀である。英国や米国はよくは知らぬが安南人や支那人の様な事はないに違ひない。併し彼等は義侠心と云ふ様な情意的なものよりも権利義務より生ずる理性的のものであらうと察する。

春日憲兵隊長の読書の所感に橋本佐内の詩中「人生の浮沈値三銭」と云ふ句があるのを知りすっかり共鳴したと渡された。実に面白い句ではないか。大悟徹底した句ではないか。之が二十六歳の青年の句と如何して思へるであらう。

四月三日

支那側は自己の内部の摩擦を日本側にて尻を拭はしめんとし、或は自己の当然の責務を日本側をして担任せしめやうとする~~含みが多い~~。管理処員の出張などは悉く日本側の自動車を利用し旅館の支払迄日本側に担任せしめる。軍政部管理処、方面軍間の日本軍所持品の接収を廻る利権漁り

の角逐は迸(ほとばし)りが日本軍に来て、結局表面は日本軍が悪かったと云ふ事で支那側各機関の面子を立てる有様だ。兵器部や経理部の悩みの種は此の支那側の不統一利権争いの渦中に投じて如何に局面を終拾するかに在る。日本軍はこんな事に頭を使ひたくないが彼等は自己の非を蔽はんとして日本軍を引出す。之れが為日本側は何回泣かされたるかは判らぬ。終戦以来如実に体験したのは支那内部の糜爛した救済し難き状態に在ることを知った事である。安南人には安南人の欠点があり、朝鮮人は台湾人よりも更に悪質で反日的である。東亜を救ふものは日本を置いて外にない。凡そ人道主義に徹底せんとするものは東亜に於ては日本を指導的立場に置くより良き方法はない事を悟るであらう。然るに現在は日本をいぢめつけてゐる故に米にせよ英にせよ仏にせよ蘇にせよ決して人道主義に叶ったものでない。日本人にも欠陥は多いが対比的に云ふと何と云っても東亜に於て傑出してゐる。敗戦を経験して日本が先づ東亜の指導的勢力となり、次に世界の指導的勢力とならなければ天道に叶はないわけを益々深く悟るものである。第二次世界大戦は各国の長短をさらけ出した。必ずしも戦争に勝った方がよいと云ふわけでなく負けた独逸や日本が優秀であったと云ふ事がよくわかった。

四月四日

過去三ヶ月の予の仕事は人間の弱点に対する尻拭ひであった。人間の特長とは慾であり慾は生命慾あり物質慾あり肉体的慾であった。

海防に連絡に行く。土橋司令官より最後に当り人間味を発揮すべき件を強調せらる。

赤穂義士が四十六名となり最初の三百名が斯く減少した理由が本時局に直面して身に沁みて判る。統制力が一朝にして断たれ人と人との結合のみになると同志と云ふものが沢山あり得べきものではない。権力で押へられ生活條件で縛られる関係上、統制下に行動してゐるものの一朝此の箍が緩めば各自の自由意志であり此の自由意志の下に生命を共にすると云ふ事は仲々の事であり、赤穂の遺臣が最初の復仇企図の十分の一に減じた事は成程と首肯の出来る事である。

軍の統制力を失はんとして各自の自我心が抬頭する際、一般社会の場合が段々と身に響いて来る。

張忠と云ふ海防及河内で商売を営む義侠心ある人は従来日本の逃亡兵を世話して来たが、日本軍引上げ後は若し困った日本兵は自分を尋ねて呉れる様出来るだけ世話するから自分を紹介して置いて呉れと申出て来た。此の人は自分は日本人の気持を失ひたくないと云ってゐた。

安南政庁の経済部秘書長呉(ゴ)と今井嘱託の通訳で会見した。予を日本に於て訪問せんとて予の住所を聞いた。将来安南の建設には日本人の絶大なる力を借りなければならないとは安南人共通の観念であるらしい。

台湾人は朝鮮人よりも遥かに日本人的であるのは日本統治久しき其の政策が良ろしかった為か。

日本人の統治期間が長かりし為か。

四月五日

河内地区に於て支那側に個人契約で行った自動車手十二名に軍司令官の告別の辞を伝達に行ったが、彼等一般の述ぶる所は却て此方を感激せしむる程殊勝なものであった。曰く我々は将来栄達を求めやうとするものでない。内地の家が無くなったのでない。内地に後顧の患なし。我々は此れを機会に日本人の真骨頂を支那人間に植えつけ牽いては日本の大陸に於ける有形無形の礎石を築かんとするものであると。国民党（越南）の連絡者、山口某[166]の予に語る所も軌を一にしてゐる。真の日本人の姿を見出す気持になって感激に堪へなかった。

楊管理処長は今井通訳官に左の如く語った。

予は黄埔軍官学校で八年間政治経済学の教師を勤め支那の政治哲学を研究した。日本人が支那人と接する点に於ては左の支那人の特徴を呑み込まなければ真の提携は今後共困難であらう。予が襄東会戦へ李宗仁[167]の指揮下に参加したのであったが、日本軍が攻撃して来て引下がった。支那軍は何故に勝ったかわからなかったが、結局何の故か知らず勝ったと信じた。今度の大戦で支那は八年の抗戦を続けた。此の間は矛盾錯誤を繰り返へし失敗を重ねつつも、兎に角戦争は終りを告げ支那は勝者の地位に就いた。さて顧みて支那は何故に勝てたかと自問して見ればわけがわからぬ。併し兎に角勝った。支那語に『馬々虎々（マーマーフーフー）』と云ふ俗語がある。意味はわけがわからぬがゴチャゴチャやってゐる間に兎に角何とかなると云ふ意であるが、支那人の思想の本質は茲に在る。前記の戦争に於て勝った原因を尋ぬれば結局『馬々虎々』の一言につきる。日本人は此の点を呑み込まねば支那人の心を掴へる事が出来ないのだ。日本人は確かに技術能力に秀で計画的でありキチンキチンと仕事を能率的に片附けて行く。支那人と此の点は全く対蹠的である。併し日本人の精神にはユトリと云ふものがなく張りつめた弓の様であって、一旦此の弓の弦が切れれば全くオジャンである。日本は六十年に亘り国力を営々と築きあげた。丁度弓の弦を張りしぼる様な格好であったが、一朝にして此の弦は切れ六十年の国力蓄積は台なしとなったではないか。茲に日本人の短所も存するのでなからうか。又、日本人は過去六十年は支那の侵略搾取を目標に営々と前進して来た。今に於て日本の再建は日本人の心を一杯支配してゐる。そして数年後には軍隊の再建を考

[166] 山口知己（智己と記載されているものもある）東亜経済調査局附属研究所（通称大川塾）第2期生。1941年8月～ハノイ総領事館（11月～仏領インドシナ大使府）に勤務。依願退職後、大南公司勤務。1943年末、徴兵され、1945年3月～安部隊所属、1945年8月15日、現地除隊。その後、ベトナムへの支援を要請するために中国南京政府に派遣された越南国民党員の使節に同行して南京へ。1946年11月帰国（梶谷 pp.29-34、山口 2000 pp.46-48）。手記に、以下のように岩國氏のことが述べられている。

「日本へ最後の引揚船が明日、ハイフォンから出るが君は帰国しないのか」と、北部ベトナム地区の終戦処理の責任者岩国大佐から須賀少佐同席して質問があり、私は残留希望を申し上げた。（中略）大佐殿は、日本人同志が左右の陣営にわかれて、将来、干戈を交えることのないよう努力してほしいと要望された。（山口 1983 p.27.）

[167] 李宗仁（1890-1969） 中国の軍人。広西派の指導者。1925年、広西全域を支配し、北伐期、国民革命軍第7軍軍長となり、日中戦争では、第5戦区司令長官であった（西川 p.1002）。

へてゐるではないか。併し従来の様な支那を利用して急速に武力的に発展する様な企みは支那との合作を永久に望み得ないであらう。真に日支の合作は日本の技術能力、平和産業、文化事業を支那に輸入することに依るべし。軍事の輸入ではいけない。又、矢を張る様な性急で支那人に対せられても支那人の共感を得ない事をよく御承知願ひたい・・・・

四月六日

宿舎の猿は日本兵には誰にもなつくが安南人には絶対になつかない。猿も日本人と安南人の区別が出来るらしい。日本の兵の動物を愛する事は素敵である。病犬を浴みさしたりして兎に角日本兵は人の好(ヨ)い所が多すぎる。日本兵の素質は何としても善良だ。

今度の引上げで一番悩まされたのは自動車徴傭部隊を支那側から引離すに在った。支那側軍政部は言を左右にするのみならず長期徴傭で頑張り一時はどうなるか愁念に堪へなかったが、兎に角解決を見た。此の長期徴傭案の原動力は自動車部隊指揮官の関中校であったが、彼は最近河内で結婚し、此の家屋は我が自動車部隊の宿舎の一部で結婚生活に必要な家の設備を自動車部隊に命じたのであった。自動車部隊は既に金もない事故、之を拒絶した所、公務で意地になりいぢめ通す様になった。之が一般支那人の共通型である。後日の話題として茲に記載して置く。楊管理処長のガソリン問題、自動車操縦手問題も此の類で、支那では上官は当然部下や自分の仕事関係の弱い者から搾取することが習慣になって之を異としないらしい。今日聞いた話であるが、関中校は私服を肥さんが為に日本軍で購入した四万円の受理証を十八万円にして呉れる様に申し掛けこれを承諾せねば帰さぬと嚇しつけてゐるさうである。事、茲に至れば滑稽である。

上官や親があまり厳格で叱りつけると又叱られると思ひ五間化したり嘘言をつくやうになる。甘えさし過ぎれば増長し身の為に悪いし厳格に過ぎると萎縮したり歪曲したりする。何事も緩厳宜しきに叶はねばならぬ。

真に腹に決心があるならば、さう口に出して説明や理由を述べて他人の承諾を得る態度は取らぬであらう。説明、釈明、理由、弁解は心の矛盾を掩はんとする手段に過ぎない~~であらう~~ことがある。以上、軍司令官の責任問題に関し土橋軍司令官の態度に予が心から同調し得ない所である。乃公は責任を廻避せぬと頻りに豪語する必要はない。真に責任を取る人は沈黙して実行し腹も切るのである。乃公は腹をきるぞきるぞと云ふ人に果して幾人腹をきり得た人があらう。軍司令官が一身に罪を買って出ても効果はないと称しつつ最後の時機（戦犯問題は大団円に近づき自己の戦犯容疑者でない事が明瞭になった時機）に予の一身に部下全部の罪を負はんとして出て来る事に矛盾がある。又、一月、二月頃は河内に顔を出す事を嫌ひ、蘆漢将軍が再び河内に来らざるべし今の内に会はれてはとの予の忠言に対し病気の故で体良く断られた土橋将軍が、今の時機に蘆漢が遠慮し謝絶するに拘らず追ひかけて河内に出て来る態度に非常な矛盾を感ずるのである。之を幕僚が予

の本心を察せずして、軍司令官は河内に出ず戦犯の責任を回避してゐると流布したと称し、予につめ寄るのである。どう見ても土橋将軍は将帥の器でない。而も曰く予の如き過去の仕事をした者に責任を回避した事は一度もないと称しつつ、三国将軍の説に依れば、軍事課の高級課員の時、責任を回避するとて追ひ出されたとある。可笑しき挿話としか思はれない。

~~四月六日の所感~~

結論に於て土橋将軍は腕の人であり才智の人ではあるが、徳操の人でなく将帥の器でなかったと云ふ事になる。国軍再建に於て最も注意すべきは人事であり此の外に之に勝る重要な事はない。予は又次の原則を発見した。曰く智慧は徳を造らぬ。併し徳は智慧を造ると。

四月七日

軍司令官、蘆漢将軍、殷副参謀長と会見、仏機間員と会見。

予は本日、左の所感を新にした。人間各個の努力が相互に衝突することなく妨害することなく一致する時機は何時の時代であらう。かくの如き天国時代、極楽時代が来るのであらうか。甲の国の努力は乙国の努力と衝突し少くも摩擦を生じ、甲の人の努力は乙の人の進まんとするのを妨害する結果となる。予の如き河内連絡所長の仕事をしながら甲の国との折衝する事柄は乙の国の不利なる事柄であり、同じ乙の国の為に甲の国に不利なる事を話さねばならぬことが屢々である。自ら進むべき方向は国策に沿ひ分明なるものの斯く二重人格を使はねばならぬ矛盾を感ずる。是は人類の悩みである。或は生物界一般の悩みかも知れない。共存共栄は一時的に方便的に行はれるに過ぎない。忽ち此の理想が崩れてしまふのが現状である。

精神精神と云って物質や金を軽視してはならぬ。戦争に於ける武力の価値の如く一般社会に於ては金力は力を発揮するものである。

越北地区の日本逃亡兵は乗船直前三百名を突破し全員の百分の一である。軍司令官は手段を尽して復帰を勧告するの手段を執られた。予もバヒ山、ホアビン、ウェンバイ［イエンバイ］に仏側の飛行機で復帰勧告状を蒔く事を仏側と約束したが、搭乗員の関係で実施せざる事になった。安南国民党員で且現在安南政庁経済部秘書呉某と会見、前安南総理大臣チャンシュンキ［チャン・チョン・キム］との会見等、予も職掌柄外交的政治的場面に立ったのも軍人最後の御奉公として生涯の記憶に留むべきものであらう。国民党の連絡者、山口某（大川周明塾卒業生）と七日夜会談したが仲々しっかりした所がある。国士の面影がある。人間は立場立場に於て主張が違ふ様になるだけである。個人として接触すれば皆情意に於て共感を招く事が多いとは最近各種の外人に接した時の所感である。

人生は悲劇の場面が喜劇の場面より遥に多い。特に現在の如き暗黒時代、争闘時代に生活し此の感を深くする。自己一人を清くせんが為（指弾を受けない為）、大衆の福祉を増進し得ない人は

勇気のない人であり且仁者ではない。仁者は身を殺して仁を為すと云ふではないか。此の際大衆の為所謂悪を為すことは悪と云ふべきであらうか。目的と手段との問題が頭を悩ます。目的が善で手段が非合法を取るべき場合悩む事柄である。但し此の非合法を認むる社会的規範は時に依り変動するものでなからうか。必ずしも千古不磨とは云へないであらうし事柄の程度如何にも関する事である。予は此の間に処し現在は戦争の継続であるとの見解に依り大胆に手段を行使する。或は平和的平時的観念を以てすれば予の如きは不道徳者であるかも知れない。併し予は断然平時的規範を乗り越す積りである。金を使はねば支那人に対する工作でない。又支那との工作には金が入ると云ふのが通念であるが此の通念を叩き壊さなければ真の日支提携は出来ないものと思ふ。金に依る友は一時的である。金を用ひないのが真実の友である。物質のみを以て人を動かす事は正道ではない。

山谷大尉の努力で、憲兵隊が梅原に埋葬した華僑や支那諜者屍体の発掘は二月以降紛糾を重ねてゐたが本日を以て事件は一応落着した。収容死体四十八体だと云ふ。途中、山谷大尉等は『ハドン』で日本の逃亡兵が安南人に変装して歩いてゐるのを見たが、一般安南人に比しインテリに見えキリッと締ってゐると云ふ。だから安南人の中に日本人が居っても発見され易いと云ふ。

四月九日

河内連絡所引上命令来る。支那側に挨拶に廻る。方面軍禹参謀長と始めて面会す。支那の将領の服装は日本に比し華美なり。金の時計、金の時計革を装する類なり。

四月十日

午后一時出発。安南バスにて海防に向ふ。管理処の劉なる者、吾等のバスに同車す。管理処のやり方は日本軍の視察は悉く車でも何でも日本持なり。河内の宿舎引継ぎの際も立会者が予に何か紀念品を呉れと云ふ。支那人のつまらぬのに附き合ふと最後迄不快なり。昨日、国民党海外部王参謀長に~~土杉~~辻政信宛の手紙を託す。~~土杉~~辻政信も三月十九日以来重慶にて活躍中なるが如し。

再び河内に来ることがあるか。予の生にして永ければあるべし。予が三回の死線を越えたる地、欲すると欲せざるとを問はず予が生涯に烙印を押されたり。

四月十一日

小林参謀の言に当地米軍輸送担任機関長ローラー中佐の能率発揮振りは日本人の反省すべき資料を与ふと。能く働き能く享楽すとは彼等についてつける言葉なり。中佐にて海防の米機関長の職に在るも身体を働かす事は一兵士と同様なり。煙草を喫してボーとして考へて居ると云ふ様な所は微塵もなし。話をするにも事務以外の事を云はず、計画を起案すれば直ちに自ら自動車を操縦し

之を伝達す。埠頭に於て立ち乍ら活躍し、昼食を立ち乍ら兵と同様のものを食ふ。日曜日となれば事務所に一人も居らず。此の辺の活動と休止との転換の鮮明なるは驚くべき程なり。支那人と正に米人は対蹠的の所あり。

逃亡者榎本憲兵軍曹の為に五万二千円、岩原一等兵の為に四万円を支出し救出に成功す。彼等救出者にそれだけの人間的資格ありやは疑問なり。十万円の金にて日本人の立派な人を幾人も救ひ得べし。矛盾を感じつつも致方もなく救出に従事す。

四月十三日[168]

軍人生活を終へんとするに方り、予には紀念すべき言葉を今日、田原中佐より聞いた。と云ふのは、予が河内の連絡所に勤務して予の良さが始めて判ったと皆異~~口同音に~~云ってゐるとの事だ。支那人に対しても正しく真(ま)ともにぶつかって行く点に、予の如く為し得る人は他にあるまいと云ふ賛辞だ。必ずしも当ってゐない所もあらうが、予としては面目を施した賛辞として子孫に伝へる言葉として茲に記載する。

予は予の使用した公金の使途は詳細之を明にした。此の点に於て他人の為す処を見ると随分ルーズなやり方でとても予には出来ないと思ふ事が多い。予の取り柄は正しさ純情さ~~の外は多くあるまい~~である。予が河内地区指揮官となって部隊や在留邦人の宿舎を巡視した時、菓子やら果物やら御馳走攻めに会ふので、地区会報の席にてかかるサービスを謝絶し又かかるサービスは吾人の立場上戒むべき旨を強調した所、一座粛然とした場面があった~~事を記憶する~~。又、予は将校下士官を集め陸軍の習慣たる上官の大名生活を指摘し、身辺の処理を幹部自ら行ひ兵の手を煩はさない事を要求し、且下官をいたはり情義的結合は現在軍を解かんとする際の軍秩維持上緊要なる点を明にした。連絡所最後の会食の席に於ける予の口演の要旨は三月二十三日の日誌に所載せる通りである。

又、予は連絡所の機密費が若干余った故に将校も下士官も兵も平等に行き渡る様に贈賄した。決して将校のみの会食費等に使はなかった。当然の事ながら下官の予に対する態度は乗船の今日に至るも変化はなく、却て益々尊敬を受けてゐる様に自負して居る。

戦犯容疑者の即時釈放者が万一最終船に乗り遅れる様な場合は、戦犯処理の責任者として予は彼等を引率して西貢に至り南方軍に投ずる決心を定め軍に打電すると共に此際の処置を研究したものだ。又、河内連絡所引上の直前、日本逃亡兵に対しホアビン、バビ、エンバイ[イエンバイ]に空中よりビラを投下する為仏軍の飛行機搭乗に関し積極的に申入れをしたら、仏側は大佐自ら搭乗される必要はなからうと遠慮したが、予は断乎自らビラを蒔く事を主張したのであった。前者の如き

[168] 4月13日をもって「南方作戦従事中の日記」は終わり、「日記－復員生活　第一号　自昭和二十一年四月十日－至昭和二十一年九月十五日」と名付けられた日記帳がこれに続いている。

国内問題や予の眼の治療上から相当重大なる決心であったが、幼年学校以来教育された軍人精神は断然予に印度支那残留を要求したのであった。併し之も実現せずとも済む状況になった。仏軍の飛行機に乗る事も大した事ではないが之も実現しなかった。凡そ命を的に身を捨てた時浮ぶ瀬もある様に、状況は命を捨てなくともよく身を捨てなくとも良い様に変転するものだとの事も認識するに至った。強すぎて此際当て嵌まらぬ語ながら、最悪に処する決心をすると状況はそれ程迄に至らずして案外楽に通せるものであるとの認識を得るに至った。

最近越南国民党の日本及中国に依存して反仏運動、独立運動を図らんとする気運が抬頭して来てゐるが、之は外国に依存し自ら挺身して難に当るの気迫なき為、先づ前途に望を嘱し得ないと見られる。丁度満州に於て予は大正十四、五年頃、所謂白系露人が日本の後援に依り反蘇運動を行はんとして日本に働きかけた事を思ひ出し、両者亡国民族の気迫の低調さは軌を一にするものと思ふ。自ら何事も身を挺して当るの気迫ありて始めて他の後援と共鳴と同情とを贏ち得るのであって、他人の褌で相撲を取る様な態度でどうして事が成功しやう。個人に於ても同様である。予は日蓮の『吾れ日本国の柱とならん』の覚悟に尊敬を払ふものである。日本の再建も各人が自ら挺身して衆を率ゐるの気迫なくては前途の成功を望み得ないであらう。

予は河内に於て米国製の万年筆を六百比弗で買ったが~~土杉~~辻政信から貰った日本のパイロット万年筆の方が遥かに良いのに心から嬉しくなった。米国の技術も恐るべきものでない。人間の努力如何に依り優劣は立ち所に転倒するものである。

四月十日[169]

河内連絡所引上バスに依り一行海防。爾後海防に於て疲れを医す。予の大役は終り安堵の胸をなぜおろす。

此の間、台湾人在住者の為、六ヶ月の生活費として四十万円を交付す。是軍司令官の英断なり。尚海防原住民の為、二十万円を交付す。将来発展の基礎を造る為の軍司令官の英断なり。

四月十六日

予の誕生日に於て埠頭に於て軍司令部の検査（所持品）を受く。乗船は二日より行はれ、三日以後逐次海防を出発す。リバテー型九隻と病院船一隻となり。戦犯問題行き悩みにて状況依然不明なり。

[169] 4月10日は「南方作戦従事中の日記」にも書かれているが、ここから、「日記－復員生活　第一号　自昭和二十一年四月十日－至昭和二十一年九月十五日」が始まる。

四月十八日

軍司令部乗船。四月二十日出発の筈。

四月十九日

米国飛行士問題の戦犯容疑者として三国師団長[170]、宍戸参謀長、春日大佐[171]下船せしめらる。

四月二十一日

憲兵戦犯容疑者一八九名下船せしめられ、最後に土橋軍司令官も戦犯容疑者として下船せしめらる。軍司令官も意外の感ありしも統帥の責任上進んで下船せらる 。

四月二十一日

我等の船は出帆す。上田久太郎少将と共に機関長室に同宿す。印度支那を去るに際し英霊に告別す。感無量と云ふ外言葉なし。

四月二十二―二十五日

海路静なり。時速一〇浬。

四月二十六日

将来の事を考へ支那語を勉強し始む。

四月二十八日

九州南端を通過す。我等の船は名古屋に向ふ。

四月二十九日

宮城遥拝。海やや荒れる。

船中職員の声は軍閥をのろふ社会的風潮大なり。東條さんの如き蘇我入鹿、湯気[ママ]の道鏡に比せらるべきものなりと称するを聞いて唖然たり。内地の新聞見るに堪へざる心地するも、一面米国の世論指導方針に則する己むを得ざる風潮なる事は識者之を知る。唯、衆口金を解［鑠］かす譬もあり。時日を経過する程に日本人の頭が軟化歪曲せらるるに非ざるかを惧る。船員の声より見る

[170] 1947年10月、広東法廷で終身刑判決。1949年2月、帰国。1952年8月、釈放（1945年2月15日参照。『日本陸海軍総合事典』p.152）。

[171] 1946年3月18日参照。この後、1947年12月、広東軍事法廷において懲役12年の判決。しかし、1948年4月、サイゴン軍事裁判で不在裁判の結果、死刑判決、プロコンドル島へ移管、抑留（大島 p.20）。

に内地の情勢は我等が印度支那に於て想像せし以上悪し。

四月三十日

正午名古屋港に入港。これより一時間前、伊勢神宮を遥拝す。始めて見る内地の風物、都市以外の内地の山川村落は旧態依然たり。名古屋港に人通り少きに驚く。被爆状況は船中より眺れば未だ的確ならず。船中に来る内地の連絡者親切を極め好感を誘致す。午后三時米軍の臨検あり。上陸は明日。本船何等異状なし。三沢大佐一行の先発者来あらず。

五月

五月一日

終日雨降り検疫（コレラ）の関係上、上陸一日遅る。逐次内地の人と面接す。栄養不良の兆を認めず。軍人に対する気分も想像以上好意を有しあり。警官の話などに依り新聞論調も米国の指導方針に則れるのみと軽く打け流す態度にて余り気にしあらず。

五月二日

午前七時より上陸す。終日かかる。午前中雨降る。支那派遣軍名古屋出張所に世話になる。上陸施設整ひあるに努力の跡を認む。復員者の援護支局にも好意ある取扱ひを受く。明日正午より帰還輸送にて忙し。

内地上陸第一歩の所感は、内地は思ったより明るしと思ふ事なり。人間は痩せもしあらず、特に女子の肥満には目を牽く。痩せたる安南婦人のみ眺めありし我目には内地女性の丸顔と大根足には意を強くせり。

又、帰還軍人に対する態度も極めて親切にて船員の云ひし如き傾向を認めず。「思ったより好かった」とは何人にも共通の所感なるべし。但し名古屋は特別帰還軍人には良好の由。名古屋の被爆損害状況は外出出来ぬ故に未詳。復員省支局の中西中佐、稲垣少佐に会ひ、日本酒スルメの饗応を受く。日本女性の親切が身に泌む。『米軍に対する評は思ったより悪くなし』の一語に尽くるが如し。

我等は残務整理者として福岡県二日市町支那派遣軍復員本部に至る事と決定。予は所持せる五十銭銀貨のお蔭にて数回電報を打つを得たり。予の着想の良好には我れながら認めざるを得ず。予の留守宅は福岡に在り。焼けて居らず。家族無事なるべしとの予想を有す。母は或は死亡せるに非ずや（本年正月頃）と想像す。

五月三日

復員式は米軍にて禁止せしめられたる為、名を解散式と称し同様の事を行ふ。十一時帰還列車乗車の為出発。荷物重し。全部にて二十貫近くあるならん。上田少将の大勢順応論と予の復仇論と船中にて闘争せし事を記憶す。

船中所感の断片

▹受身は徒労浪費多し。之に反し先見の明は能率を発揮す。（受験の所感）

▹何物をも即座に解決し得ず。唯時間のみ之を解決し得ること多し。時間は大なる審判官であり

絶対の解決者である。

▹大水筒と大風呂敷程便なるものなし。大は小を兼ぬ。然れども小は大を兼ねず。

▹此の軍隊の組織を生産に利用せば如何に偉大なる力を発揮し得ん。組織は力也。個々は微力也。

▹ 手を打てば　下女は答へる　魚はよる

鹿は驚く　猿沢の池　　（古歌）

（何事も立場立場で見方が異なる）

▹ 白露の　おのが姿を　そのままに

紅葉におけば　紅の露　　（古歌）

（環境に従って流転す。本質は同一の意）

五月三日［再］

名古屋港駅にて乗車。朝日新聞の歌謡手（女子）の歓迎の歌唱あり。何となく涙こぼるる。沿道手を挙て歓迎する老婆多し。予は熱田駅迄泣きつづけたり。ああ若し之が戦勝の凱旋なりせば如何。焼け出されたる人が我等に御苦労様と云ふ。何として涙なくして答へられやうか。日本人の本質は変ってゐないと直感した。米原にて当番谷村兵長とわかる。

参　考　文　献

・有馬学（2002）『日本の歴史第23巻 帝国の昭和』講談社。

・石井米雄ら編（1986）『東南アジアを知る事典』平凡社。

・岩國敬子発行、瀧本清也編（2001）『鯉城残雪──岩國辰彦遺稿集』（非売品）。

・臼井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣編（2001）『日本近現代人名辞典』吉川弘文館。

・大島親光 発行責任（1979）『南方軍第一憲兵隊史』南一憲会（非売品）。

・緒方廣業編（1983）『追想 歩兵第八十三聯隊』（非売品）。

・外務省外交史料館（1992）日本外交史辞典編纂委員会編『新版 日本外交史辞典』山川出版社。

・梶谷俊雄（2003）「追憶・追悼 山口同期生」、南方会『みんなみ』第32号 pp.29-35.

・黄美真・郝盛潮主編（1987）『中華民国史事件人物録』上海人民出版社 上海。

・合田濤（2005）「ラグライ 社会主義のもとでの先住民」、綾部恒雄監修、林行夫・合田濤編『講座 世界の先住民族 02 東南アジア』明石書店 pp.140-157.

・蔡徳金編、村田忠禧・楊晶・廖隆幹・劉傑共訳（1992）『周仏海日記 1937-1945』みすず書房。

・桜井由躬雄（1989）『ハノイの憂鬱』めこん。

・桜井由躬雄編（1991）『もっと知りたいベトナム』弘文堂。

・秦孝儀主編、中國國民黨中央委員會黨史委員會編（1982）『革命人物誌 第二十一集』中央文物供應社 臺北。

・立川京一（2018）「日本陸軍の仏印駐留に係る諸問題」、防衛研究所『戦史研究年報』第21号 pp.20-44。

・中国社会科学院近代史研究所（1981）『民国人物伝 第三巻』中華書局 北京。

・中国社会科学院近代史研究所（1996）『民国人物伝 第八巻』中華書局 北京。

・東亜研究所（1942）『印度支那地図地名索引』東亜研究所。

・東亜研究所（1942）『印度支那地図』東亜研究所。

・中野綾子（2018）「ベトナム社会科学院所蔵・旧フランス極東学院日本語資料調査「河内日本人会会員名簿」について」、リテラシー史研究会編『リテラシー史研究』第11号 pp.21-36.

・南洋経済研究所編（1943）『大南洋地名辞典 第四巻 泰國及仏領印度支那』丸善。

・西川正雄ら編（2001）『角川世界史事典』角川書店。

・秦郁彦・戦前期官僚制研究会（1981）『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会。

・秦郁彦編（1991）『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会。

・秦郁彦編（1998）『南方軍政の機構・幹部軍政官一覧』南方軍政史研究フォーラム（非売品）。
・早瀬晋三（2016）「日本占領・勢力下の東南アジアで発行された新聞」、早稲田大学アジア太平洋研究センター『アジア太平洋討究』No.27 pp.61-100.
・平野安巳刊行責任、藤掛寅七編集責任（1986）『軍旗のもとに 歩兵八十五聯隊史』(非売品)。
・プーミー・ヴォンヴィチット、平田豊訳（2010）『激動のラオス現代史を生きて――回想のわが生涯』めこん（Phoumi Vongvichit. 1987 *Khuamsongcham nai xivit khong hao Vientiane*［ラオス語］）。
・防衛庁防衛研修所戦史室（1969）『戦史叢書 イラワジ会戦――ビルマ防衛の破綻――』朝雲新聞社。
・防衛庁防衛研修所戦史室（1969）『戦史叢書 シッタン・明号作戦』朝雲新聞社。
・堀幸雄（1991）『右翼事典』三嶺書房株式会社。
・桃木至朗ら編（2008）『新版 東南アジアを知る事典』平凡社。
・八巻教造（2001）「プーミー・ラオス大統領代行との再会」、『偕行』2001年7月号、通巻607号 偕行社。
・山口智己（1983）「奇しき帰還」、南方会『みんなみ』第8号 pp.27-30.
・山口知己（2000）「卒業から復員まで」、南方会『みんなみ』第30号 pp.46-48.
・劉壽林・萬仁元・王玉文・孔慶泰編（1995）『民國職官年表』中華書局 北京。

・Duval. Eugene-Jean. (2009) *Aux sources officielles de la colonization française Vers la décolonization:1940-2009*. Tome I L'Harmattan.
・Marr. David G. (1995) *Vietnam 1945 –The Quest for Power–*. University of California Press.
・Tachikawa Kyoichi (2017) "Yasu-butai:The Covert Special Unit of the Japanese Army behind the coup de Force of March 9,1945" in Masaya Shiraishi, Nguyen Van Khanh & Bruce M. Lockhart (eds.), *Vietnam-Indochina-Japan Relations during the Second World War: Documents and Interpretation*s, Waseda University Institue of Asia-Pacific Studies, Tokyo.

索　引（五十音順）

【部隊名（日本軍・中国軍）】

〔日本軍の部隊名〕

- 安隊（特殊工作部隊）：43
- 皆藤連隊：42
- 小池部隊（モクチョウ道路構築隊）：67
- 支那派遣軍（日本軍の）：136, 176, 233
- ジャバ軍（第16軍のこと）：49
- 信（第38軍の通称）25, 30, 60, 66, 78, 86
- 泰駐屯軍：59
- 討〔討兵団〕（第21師団の通称）：20, 24, 25, 28, 41, 66, 77, 86, 213, 215
- 南方軍：17, 24, 30, 60, 61, 67, 75, 79, 87, 101, 121, 157, 165, 176, 229
  - » 総軍：17, 18, 19, 20, 27, 28, 30, 37, 40, 52, 55, 67, 109, 110, 121, 123, 156
  - » 威（南方軍の通称）：24
  - » 南方軍野鉄（野戦鉄道）：24
- 原〔原兵団〕（第22師団の通称）：28
- 光〔光兵団〕（第37師団の通称）：23, 24, 28, 41, 51, 66, 85, 86, 104
- 仏印駐屯軍：18, 19
- 丸山工兵部隊：70

- 第38軍：28
- 第21師団：27, 28, 35, 36, 37, 40, 41, 42, 47, 54, 56, 59, 63, 67, 77, 79, 103, 140, 148
- 第22師団：27, 29, 40, 41, 44, 46, 59, 76, 79, 80, 81, 92
- 第35師団：49
- 第37師団：27, 28, 30, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 46, 53, 59, 60, 61, 85, 87
- 第161師団：53
- 混成第34旅団：192
- 歩兵第39連隊：48, 84
- 歩兵第59連隊：66
- 歩兵第62連隊：72
- 歩兵第80連隊：97
- 歩兵第82連隊：35, 61
- 歩兵第85連隊：37, 73, 87, 200

〔中国軍の部隊名〕

- 支那軍：104, 105, 108, 109, 110, 111, 117, 120, 122, 124, 125, 126, 128, 132, 133, 135, 136, 137, 138, 140, 143, 144, 145, 146, 147, 152, 153, 154, 156, 159, 161, 163, 166, 169, 170, 171, 174, 179, 186, 187, 189, 192, 195, 196, 199, 200, 209, 214, 216, 219, 225
  - » 中国軍：120, 128, 195
- 第53軍（中国軍）：141, 219
- 第60軍（中国軍）：143, 166
- 第62軍（中国軍）：143
- 第93軍（中国軍）：141, 143, 219
- 第18師（中国軍）：140, 147

【人名・地名・その他】

〔あ〕

- 朝枝繁春（中佐）：201
- 浅川（兵長）：165
- 渥美（軍曹）：49
- 阿南惟幾（大将，陸軍大臣）：61, 63, 98, 122
- 有田八郎（外交官，外務大臣）：17, 18
- 安南国民軍：49, 50, 53, 68, 69

〔い〕

- 飯島（軍医少尉）：90, 91, 93, 95
- 硫黄島：26, 38, 41, 46
- 五十嵐（曹長）：67
- 池田純久（中将）：111
- 伊座敷（軍医中尉）：89, 104
- 石井菊次郎（外交官，外務大臣）：183
- 石川（大尉）：139
- 石田栄熊（中将）：39, 41
- 石田（中佐）：18, 20

- 石橋（司政官）：181
- 石山ホテル（石山旅館とも）：51, 53, 171
- 石原莞爾（中将）：81, 100, 105, 157, 198
- 板垣征四郎（大将）：198
- 一号策応作戦：28
- 一宮基（大佐，歩兵第83連隊長）：23, 26, 28, 64, 95, 103
- 伊藤知可士（第21師団参謀）：24, 42, 54, 185
- 稲家（大佐）：95, 103
- 稲田正純（中将）：18, 129
- 稲井（参謀）：22
- 稲井（大佐，連隊長）：40, 50
- 井上善高（少佐，第22師団参謀）：29, 30
- 今井（海軍中佐）：42, 57, 72, 73, 76
- 今井（通訳官）：207, 224, 225
- 今村均（大将）：157, 176
- 岩國辰彦（岩國大佐長男）：33, 45, 109, 120
- 犬童己来男（大尉，軍司令官の副官）：22, 92, 187
- 印度支那〔インドシナ〕：39, 42, 43, 62, 74, 77, 82, 83, 85, 87, 97, 111, 122, 123, 125, 126, 129, 152, 154, 157, 161, 164, 178, 187, 201, 216, 219, 230, 231, 232
  »「仏印」の項も参照
- インパール作戦：86

〔う〕
- ヴイ（地名）：26
- ヴィン（地名）：22, 23, 26, 27, 28
- ヴィンエン（地名）：26, 72
- 植木（大尉）：32, 34, 49
- 上杉［師］（辻政信のこと）：193, 197, 198, 199, 200, 201, 228, 230
  »「辻政信」の項も参照
- 植田謙吉（大将）：198
- 上田久太郎（少将，兵器部長）：15, 17, 72, 77, 95, 121, 170, 171, 172, 175, 179, 181, 185, 188, 189, 197, 231, 233
- 牛島満（中将，第32軍司令官）：82, 83, 85
- 内田厚生（大佐，南方軍特報部長）：18
- 梅原（地名，梅ヶ原とも）：25, 32, 67, 70, 228

〔え〕
- エーメ（フランス軍司令官）：16, 35, 39, 40
- 江川（大佐）：97

〔お〕
- 王正梅（中華民国政治家）：122
- 大越兼二（大佐）：44
- 大島（憲兵少佐）：54, 83
- 大庭小二郎（大佐）：106, 124
- 大庭二郎（中将）：124
- 大畑徳種（少尉）：30, 31, 32, 53, 213
- 緒方（経理部長）：17, 171, 175, 179, 188, 196, 210
- 岡田梅吉（歩兵第82連隊長）：25, 32
- 岡部（大尉）：139
- おかみ（神戸旅館の，女将・お神・女主人とも）：33, 34, 51, 62, 66, 76, 86, 103, 104, 106, 111, 171
- 小川（第21師団参謀長）：47
- 沖縄：46, 47, 48, 49, 50, 61, 62, 64, 65, 66, 73, 76, 78, 81, 82, 83, 85, 86, 87
  »「琉球」の項も参照
- 荻野（軍医大尉）：89, 90, 101, 104, 117, 159, 160, 164, 165
- 小田旅館：64
- 小野瀬（憲兵大尉）：121
- 小幡（少佐）：187, 188

〔か〕
- 開遠（地名）：104
- 外務省（日本の）：23, 218
- 何応欽（中華民国軍人）：171
- 香川（憲兵中尉）：180
- 華僑：17, 18, 68, 171, 178, 187, 188, 199, 228
- 葛西（衛生軍曹）：103
- 笠原（一等兵，岩國大佐の当番兵）：90, 93, 118
- 笠原幸雄（中将，第11軍司令官）：145
- 春日馨（憲兵中佐，南方軍第1憲兵隊長）：164, 215, 223, 231
- カスタン（フランス軍人）：16
- 金原（軍医部長）：171, 174, 175, 179, 185, 186
- 鎌倉（外交官，領事）：117

- 神谷憲三（中佐，第38軍参謀）：26, 32, 41, 42, 48, 56, 71, 72, 74, 181, 182
- 穐田弘志（大佐，第16方面軍参謀）：18
- 河村参郎（少将，第38軍参謀長）：27, 56, 62, 66, 72, 73, 74
- 閑院宮春仁王（少将）：101, 152
- カンエン（地名，「クァンエン」とも）：35, 111, 113, 114, 178, 195
- カンガイ（地名，現在のクアンガイ）：22
- 陥（中華民国軍人，中将）：124
- 広東（地名，中国の）：39, 139, 166, 219

〔き〕
- キニヨン（地名，現在のクイニョン）：21, 22
- 木原（司政長官）：77
- ギャラガ（米軍人，准将，蘆漢将軍顧問）：128

〔く〕
- 阮大学（グエン・タイ・ホク，ベトナム国民党党首）：78
- 久保田（中佐）：202
- 国富勇（少佐，第38軍参謀）：43, 44, 89, 155, 156, 157, 158, 161, 164, 169
- グランラック（地名，現在のホータイ）：30, 60, 89, 91
- クレール（フランス軍人）：16
- 黒川（獣医部長）：97, 171, 182, 185, 189
- クァンエン
  »「カンエン」の項を参照

〔け〕
- ケップ飛行場：28
- ケンアン（地名）：192

〔こ〕
- 小泉親彦（軍医中将）：113
- 小磯国昭（大将，総理大臣）：48, 177
- 幸道貞治（大佐，第38軍参謀長）：41, 42, 44, 46, 48, 55, 57, 60, 73
- 厚東隆雄（南方軍参謀）：19, 20
- 河野（連隊長）28
- 河野省介（副官）：71, 72, 73, 80
- 河野達一（外交官，サイゴン総領事）：17
- 神戸旅館（ハノイの）：26, 33, 34, 51, 62, 76, 86, 103, 104, 111, 171
  »「おかみ」の項も参照
- ゴーチエ（フランス行政官，総務長官）：44
- 国民政府（華僑の）：18
- 国民党（ベトナム国民党）：225, 227, 230
- コクリウ兵営：36
- 小西健雄（大佐，第18方面軍参謀）：18
- 小林方明（大佐，第38軍参謀）：87, 114, 116, 121, 124, 133, 137, 143, 144, 150, 152, 171, 177, 178, 183, 197, 228
- 小村寿太郎（外交官，外務大臣）：184
- 権藤正威（大佐）：181

〔さ〕
- 西郷隆盛：94, 154, 170
  »「南洲翁」の項も参照
- 西貢〔サイゴン〕：18, 19, 35, 43, 53, 56, 60, 65, 74, 85, 87, 90, 91, 92, 93, 95, 96, 121, 125, 128, 142, 149, 155, 156, 157, 158, 161, 167, 229
  » 西貢陣中新聞：85
  » 西貢放送：35
- 斎藤正鋭（少将）：112
- 佐伯語作（中佐，第38軍参謀）：42, 43, 179
- 酒井干城（第38軍参謀）：28, 30, 31, 32, 37, 66, 72, 73, 104, 105, 120, 135, 144, 152, 163, 166, 192, 205, 214
- 榊原正次（中佐，第38軍参謀）：41, 42, 70, 71, 72, 74, 76, 152, 177, 181, 192, 210
- 坂根（中佐）：72, 76
- 佐藤賢了（中将，第37師団長）：51, 52, 56
- 佐藤舜（第38軍司令部付司政官）：17
- 佐藤尚武（外交官，駐ソ大使）：17, 183
- 佐藤久弥（第38軍参謀）：78, 79, 89, 92, 94, 114, 116, 144, 152, 183, 205, 214, 223
- 佐藤弥太郎（少佐，第37軍参謀）：78
- 真田穣一郎（少将，第2総軍参謀副長）：52
- サムヌア（地名）：47, 67, 68, 69, 87
- 沢野（少佐）：73, 76, 79
- サンジュール（フランス軍人）：16

〔し〕
- 重原（参謀）：70

- 宍戸清次郎（中佐，第21師団参謀長）：20, 24, 25, 27, 32, 39, 44, 93, 103, 231
- 宍戸信夫（一等兵）：37, 42, 52, 53
- 鎮目（連隊長）：28, 29, 39, 42
- シタデル兵営（ハノイ）：35, 36, 37, 38, 39, 49, 50, 61
- 幣原喜重郎（外交官，外務大臣）：110, 132, 158
- 支那事変：28, 29, 48, 68, 86, 106, 107, 111, 116, 129, 133, 134, 148，211, 219
- 篠塚義男（中将）：119
- 柴山兼四郎（中将）145
- 謝（中華民国軍人，中佐）：105, 122
- ジャラム飛行場：51, 87, 134, 170, 207
- 重慶：39, 54, 68, 74, 118, 122, 187, 228
- 蒋介石：54, 107, 109, 137, 145, 167, 170, 171, 204, 208, 219
- 白石（法務部長）：72, 152, 163
- 昭南〔シンガポール〕：18, 61, 87, 103, 110, 117, 128, 138

〔す〕
- スエ（地名）：67, 70
- 杉本森雄（少佐）：59
- 椙山（中佐）：160
- 杉山元（元帥，陸軍大臣）：111
- 鈴木貫太郎（大将，総理大臣）：48, 77
- スユイ（地名）：25

〔せ〕
- 聖岬（地名，カプサンジャック，現在のブンタウ）：16, 17, 18
- 世良（司政長官）：170

〔そ〕
- 曽国藩：160, 178, 183
- 総督府官邸（ハノイの）：65, 79
- ソッパオ（地名）：67, 68, 69

〔た〕
- 泰〔タイ〕：59, 60, 63, 80, 82, 87, 161, 199
- タイアン（地名）：79
- 大東亜：39, 40, 46
  - » 大東亜共栄圏：21
  - » 大東亜戦：17, 18, 19, 23, 39, 41, 48, 94, 99, 100, 101, 106, 107, 109, 111, 112, 120, 138, 150, 154, 176, 185, 204, 219
- 高橋晃（中佐）：136
- 高橋（南方軍参謀）：24
- 瀧（軍医中尉）：90, 102, 104
- 竹内（准尉）：95
- タケク（地名）：146, 156
- 多田駿（大将）：81, 107
- ダップコー（地名，「タンプコー」とも，現在のダップコウ）：38, 39, 80
- 田中静一（大将）：119
- 田中鉄次郎（大佐）：48, 66
- 田中久一（中将）：113
- 谷村（兵長，当番兵）：193, 213, 223, 234
- 田原（中佐，報道部長）：72, 171, 181, 185, 188, 191, 194, 229
- タムダオ（地名）：72
- タンフォア（地名）：87

〔ち〕
- チホボ（地名）：25
- 長勇（中将）：83, 86
- 張学良（中華民国軍人，政治家）：219
- 張発圭（中華民国軍人）：166

〔つ〕
- ツードモ（地名）：21
- ツーラン（地名，現在のダナン）：22, 27, 76
- 塚本毅（外交官，総領事）：20, 77, 78
- 辻政信（第39軍参謀）：71, 138, 156, 160, 187, 192, 193, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 208, 211, 213, 214, 222, 228, 230
  - »「上杉［師］」の項も参照
- 土橋勇逸（中将，第38軍司令官）：14, 16, 17, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 41, 44, 46, 49, 52, 56, 62, 72, 74, 77, 79, 87, 106, 108, 109, 110, 118, 123, 124, 125, 128, 134, 145, 146, 148, 158, 183, 186, 187, 197, 200, 205, 224, 226, 227, 231
  - » 軍司令官：15, 16, 17, 19, 20, 21, 23, 24, 25, 41, 42, 44, 46, 49, 51, 53, 56, 62, 65, 66, 70, 72, 73, 74, 76, 77, 79, 89, 92, 101, 105, 108, 118, 123, 124, 125, 139, 146, 148, 158, 166, 168,

176, 183, 188 193, 195, 197, 199, 200, 205, 207, 225, 226, 227, 230, 231
- 都筑尚（中尉）：37, 42, 53
- 恒石重嗣（中佐）：20
- 津野田知重（少佐）：201

〔と〕
- 土肥原賢二（大将）：121
- 東條英機（大将，総理大臣）：18, 81, 110, 172, 231
- 同盟ニュース〔同盟通信〕：48, 62, 77, 82, 83, 102, 108, 112, 113, 116
- 道路作業：30, 48, 50, 54, 64, 65, 70
- ドーソン（地名）：114, 140, 167, 169, 170, 171, 174, 176, 178, 186, 187, 192, 195, 197, 199, 201, 205
- ドーメル橋（ハノイ）：36, 38, 39, 134
- ドクー（仏領インドシナ総督）：35
- 戸村盛雄（中佐，南方軍参謀）：37, 38, 40
- 虎御前（ハノイの日本人民間人）：51
- 東京〔トンキン〕（地方名）：39, 77, 109, 165
- ドンダン（地名）：36, 37, 38
- トン（地名）：25, 40, 50
- ドンベン（地名）：67

〔な〕
- 内藤（准尉）：31, 32, 33, 34, 38, 49, 51, 174
- 長岡（軍医部長）：15, 72
- 中川武雄（横浜正金銀行ハノイ支店長）：41
- 長沢旅館（ツーラン〔ダナン〕の）：27
- 仲田（工兵大尉）：146
- 中野学校：139, 140, 203
- 長野祐一郎（中将，第16軍司令官）：49, 51
- 中村（南方軍野鉄参謀）：24
- 中山源夫（少将，第12軍参謀長）：136, 137, 156
- ナムデン（地名）：63
- 滑川（中尉）：22
- 行木英也（大尉，歩兵第85連隊）：70
- 奈良橋一郎（外交官，総領事）：77
- 南洲翁（西郷隆盛のこと）：220
- 南方寮：66, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 84, 91, 93, 100, 102, 104, 106, 111, 113

〔に〕
- 新妻（軍医少佐）：159
- 西村熊雄（外交官，総領事）：77
- 日本ホテル（サイゴンの）：17, 18
- ニンビニ（地名）63

〔ぬ〕
- 沼田多稼蔵（中将，南方軍総参謀長）：155, 156, 158

〔ね〕
- ネオボ（地名）：67

〔の〕
- 野沢（主計大尉）：67
- 野地（大尉〔後に少佐〕）：32, 132, 143
- 能勢潤三（大佐，歩兵第85連隊長）：50, 52, 64, 65, 70, 73
- 野原博起（中佐）：59
- ノモンハン事件：194, 198

〔は〕
- 海防〔ハイフォン〕（地名）：42, 53, 76, 88, 111, 114, 141, 152, 171, 174, 177, 178, 183, 197, 215, 221, 224, 228, 230
- 保大〔バオダイ帝〕（阮朝第13代皇帝）：76, 158
- パクサン（地名）：47, 68
- パクニン（地名）：23, 27, 28, 30, 36, 38, 41, 49, 60, 164, 180
- ハコイ（地名）：37, 38
- 畑中健二（少佐）：109
- パッキー（米軍人，大尉）：126
- 服部武士（航空師団長）：66
- 河内〔ハノイ〕：21, 23, 24, 25, 27, 28, 30, 32, 34, 37, 38, 41, 42, 43, 47, 51, 53, 56, 59, 60, 66, 73, 74, 76, 77, 78, 86, 87, 88, 89, 92, 95, 96, 97, 103, 104, 105, 107, 108, 109, 111, 114, 117, 120, 126, 129, 135, 139, 141, 152, 158, 164, 167, 171, 178, 180, 183, 186, 187, 192, 193, 197, 198, 199, 201, 202, 205, 207, 210, 216, 218, 219, 224, 225, 226, 227, 228, 229, 230
- バヒ山（「バビ」とも，地名）：25, 227, 229
- 浜田平（中将，第18方面軍参謀副長）：119

- 林秀澄（憲兵中佐〔後に大佐〕）：13, 14, 17, 34, 41, 156.
- ハラロ（地名）：26
- バンメツオ（地名）：21
- バンボイ（地名）68, 69, 87

〔ひ〕
- 東久邇宮稔彦王（大将，総理大臣）：99, 131, 132, 171
- 肱岡（一等兵，岩國大佐の当番兵）：158, 161, 162
- ヒットラー：52, 54, 59, 199
- 比島〔フィリピン〕：16, 17, 18, 40
- 樋村（軍医中尉）：49, 54, 55, 61
- 憑祥（地名）：29
- 平賀（伍長）：87, 88, 90, 103, 104
- 平田正判（中将，第22師団長）：29, 42, 58, 62, 80, 81, 92, 145
- ビルマ：44, 60, 86
  - » ビルマ作戦：44
  - »「インパール作戦」の項も参照
- 広瀬（中佐，獣医部員）：97

〔ふ〕
- フーラントン（地名）：80
- 順化〔ふえ〕（地名）：28, 74, 143
  - »「ユエ」の項も参照
- 福島久作（大佐）：179
- 藤田（伍長）：87, 88, 90, 103, 220
- 仏印〔フランス領インドシナ〕：19, 21, 25, 29, 34, 40, 41, 44, 48, 49, 51, 60, 63, 74, 205, 217, 218
  - »「印度支那」の項も参照
  - »「北部仏印」の項も参照
- 仏印処理：19, 27, 30, 63
- プノンペン：20
- プチラック（地名）：60
- 仏軍〔フランス軍〕16, 35, 37, 40, 216, 229, 230
  - » 仏印軍：25, 37, 39, 43, 44, 57
- プレーク（地名）：21, 22
- ブロジャー（フランス軍人，大将）：39
- プロレア（フランス軍人，少将）：35
- フンエン（地名）：88, 89

〔へ〕
- 米軍〔アメリカ軍〕：30, 38, 39, 42, 43, 73, 83, 86, 104, 105, 107, 108, 110, 111, 112, 113, 115, 120, 121, 128, 132, 133, 135, 136, 137, 145, 153, 154, 156, 163, 172, 175, 178, 179, 188, 215, 228, 232, 233
- 越盟〔ベトミン〕：72, 77, 78, 83, 126, 128, 146, 152, 156, 174, 180
- ベンカット（地名）：21
- ベンツイ（地名）：22

〔ほ〕
- ボアサンジュー（フランス外交官）：56, 60
- ホアビン（地名）：25, 67, 227, 229
- 北部仏印：30, 65, 124
- 堀田（第22師団参謀長）：26, 27, 29, 44
- ポツダム声明〔ポツタム声明とも〕：99, 109, 122
- 本庄繁（大将）：113, 171

〔ま〕
- マウンドハッテン（英軍人，マウントバッテン伯）：110
- マ号（仏印武力処理の秘匿名）：34
- 増田（大佐）：96
- 町尻量基（中将，印度支那駐屯軍司令官）：21, 23, 34, 73
- マックアーサー〔マッカーサー〕：109, 112, 115, 118, 121, 147, 201
- マッケクニイ（英軍人，大佐）：130
- 松平（中佐）17, 179
- 松本俊一（外交官，仏領インドシナ大使府特命全権大使）：25, 51
- マデシチック映画館（ハノイ）：84
- 満州事変：43, 48, 106, 107, 112, 121, 133, 211, 219
- 満足彰（少佐）：14
- 万（中華民国軍人，中将）：166

〔み〕
- 三浦（主計大尉）：121
- 三木（看護婦）：90
- 三国直福（中将，第21師団長）：26, 32, 35, 36, 40, 42, 54, 56, 57, 63, 77, 89, 103, 125, 168, 185,

186, 227, 231
- 三沢（大佐）：192, 200, 205, 232
- 三谷信三（兵長）：31, 32, 53, 213
- 三井〔財閥〕：133, 161, 178
- 宮崎舜市（中佐）：136, 156
- 三好（第21師団参謀）：24, 37, 42, 105, 148, 151, 152, 165, 205

〔む〕
- 陸奥宗光：183

〔め〕
- 明機関：77
- 明号作戦：38, 39, 40, 43, 45, 46, 51, 64, 67, 69, 74, 134
- メトロポール（ハノイのホテル）：43, 49, 65

〔も〕
- モイ族：50
- モールメン（地名）：63
- モクチョウ（地名）：67, 69, 70
- 守屋精爾（中将）：119
- モルダン（フランス軍人，中将）：37, 40, 62
- 蒙自〔もんつー〕（地名）：104, 120

〔や〕
- 安田（司政官）：172
- 柳（大尉）：97
- 八巻教造（大尉，歩兵第85連隊）：68, 87
- 山下奉文（大将）：158, 178
- 山田乙三（大将）：170
- 山田国太郎（中将，第48師団長）：124
- 山本五十六（海軍元帥）：112
- 山本格男（中佐，第38軍参謀）：56, 71, 72, 73

〔ゆ〕
- 湯浅保則（渉外部嘱託）：24, 46, 53, 94, 97, 104, 158
- ユエ（地名）：22, 105
  »「順化」〔フエ〕の項も参照
- 尹（中華民国軍人，少将）：108

〔よ〕
- 余漢謀（中華民国軍人）：166
- 翼賛旅館（ハノイ）：36
- 横山老人：23, 51
- 吉井（大尉）：184, 185
- 吉村（大佐，鉄道連隊長）：78
- 吉村（第37師団参謀）：24, 27, 37
- 吉本貞一（大将）：113
- 米内光政（海軍大将）：158

〔ら〕
- ラオカイ（地名）：36, 37
- ラオス（地名）：67, 68, 69, 70, 75, 87
- ラバール〔ラバウル〕（地名）：157
- ラルシュック（フランス軍人）：16
- ラングン〔ラングーン〕：60, 61
- ランソン（地名）：28, 29, 30, 36, 37, 38, 39, 42, 43, 80, 81

〔り〕
- 陸大〔陸軍大学校〕：26, 33, 58, 74, 94, 119, 165, 206
- 李鴻章：129, 130, 160, 178, 183
- 龍雲（中華民国の政治家）：122
- 琉球：43, 44, 46, 52, 109
  »「沖縄」の項も参照

〔る〕
- ルソン島：16

〔ろ〕
- 蘆漢（中華民国軍人）：109, 118, 120, 122, 125, 216, 226, 227

〔わ〕
- 和田（大尉）：22
- 渡辺耐三（外交官，ハノイ領事）：17
- 渡辺章〔寿?〕（中将）：150, 192

編　者　紹　介

高崎禎夫

香川県出身。広島陸軍幼年学校48期、終戦時2年生。北海道大学経済学部（旧制）卒業。同大学院（旧制）に在学（5年間）。1971年〜1994年、広島大学教授。専門は経済統計学。広島大学名誉教授。

菊池陽子

東京外国語大学総合国際学研究院教授。専門はラオス近現代史。

IGAS

岩國大佐ハノイ日記　1944年12月29日〜1946年5月3日

2021年7月31日　初版発行
2021年9月15日　第2版発行

著　者：　岩國泰彦

編　者：　高崎禎夫・菊池陽子

発行所：　東京外国語大学　海外事情研究所
TUFS Institute for Global Area Studies
〒183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1
http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ifa/index.html

表紙装丁：　小田原澪

ISBN: 978-4-909866-01-1

本書を無断で複写・複製することを禁じます。

9784909866011
1923023000002
ISBN978-4-909866-01-1
C3023 ¥00000E

IGAS 東京外国語大学海外事情研究所

Rue du Blockhaus Nord	A	6	B	8	
Boulevard Bobillot	H	10	I	11	
Rue Boissière	H	9	H	9	
Rue Bonifacy	I	8	I	7	
Rue Borgnis Desbordes	G	9	G	7	
Rue Bourret	F	7	F	7	
Rue Bourrin	B	7	C	7	
Impasse Bourrin	C	7	C	7	
Rue Bovet	H	7	I	6	
Impasse Bovet	H	7	H	6	
Avenue Brière de l'Isle.	C	5	F	4	C
Av. Brière de l'Isle prolongée	F	4	G	4	
Rue des Briques	E	9	D	8	
Rue des Caisses	F	8	F	8	
Rue Calmette	K	11	K	10	
Rue des Cantonnais	E	8	E	8	
Rue Cao-Đắc-Minh	F	5	G	5	
Rue Capitaine Bruseeaux	F	7	G	7	
Rue Capitaine Labrousse	H	10	H	10	
Rue Capitaine Pouligo	I	11	K	11	
Boulevard Carnot	D	8	C	5	
Boulevard Carreau	I	10	G	6	
Avenue de la Cathédrale	F	8	G	8	D
Route de Cát-Linh	G	4	F	3	
Rue Chanceaulme	I	8	K	8	
Rue des Changeurs	E	9	E	9	
Cité Chân-Hưng	H	6	H	6	
Ruelle Châu-Long	C	6	C	6	
Rue du Chanvre	F	9	F	8	
Rue des Chapeaux	F	8	F	7	
Rue du Charbon	C	8	C	8	
Rue Ch. Coulier	E	5	F	5	
Rue Ch. Wiélé	K	9	K	8	
Rue Chapuis	L	9	L	8	
Rue Charron	J	9	L	9	
Rue de la Chaux	F	10	H	10	E
Passage de la Chaux	F	10	F	10	
Avenue Chavassieux	G	10	G	9	
Rue de la Citadelle	E	7	F	8	
Quai Clémenceau	C	9	F	10	
Rue de Colomb	G	7	H	6	